

---

# フラグメント・オブ・タイム

Izumo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フラグメント・オブ・タイム

### 【Nコード】

N2520E

### 【作者名】

I z u m o

### 【あらすじ】

人々の永きに渡る戦争を終え、安息の時間を得た世界、グラルス。そんな世界のとある村に住んでいる少年はある日、他世界の人間と名乗る青年に出会い、そこから運命は大きく変わっていくのだった。そして少年は、時を超越した力を得る代わりに交わした契約に従い、世界を変える旅に出る事となった。その先に、数多くの困難がある事を知らずに……。これは、少年達の旅を記録した運命の物語

## 第一話：逃げる者、導かれる者

どうしてあなたは戦い続けるのですか？

それが運命だから？

どうしてあなたはこの世界を守り続けるのですか？

この世界が愛おしいから？

守りたい人たちがいるから？

ではその世界が偽りであると告げられても

あなたは戦い、守り続けられますか？

もし、それでも続けると言うのなら

どうか最後まで足掻いてみて下さい。

どうせ結果は絶望なのですから……

耳障りなくらいに鳴り響く警報音。

それと同時に通路は赤く点滅している。

「……者が逃げたぞ！ 脱走だ！」

遠くからは男達の叫び声が聞こえる。  
それは命令と言う名の罵声だ。

「絶対に捕まえる！ なんとかしてもだ！」

俺はずっと走り続けていた。

一本道のような通路を、ずっと。

ただただ、後方から聞こえる男達の声から逃れるために。

「ッ！！ いたぞ！ 逃がすな！」

考える暇も与える事もなく、男達はしつこく追ってくる。  
その為、角を曲がり空いていた部屋にとっさに駆け込む。  
そして、急いでゲートをロックした。

「はあはあはあ……ふう」

壁にもたれて一呼吸。

……いつの間に俺は捕まっていたんだろう。

たしか研究所に侵入して……ッ！？

嫌な事に、思い出そうとすると頭痛がする。

思い出すなと誰かが言っているみたいな感じた。

「そんなことよりここから逃げるのが先か……」

呟き、未だに荒い息を整えながら何か無いかと辺りを見回すと、  
不思議な形をした影があった。

「……何だ？　これ……」

疑問はすぐに好奇心となり、立ち上がって近くのパネルを操作してみる。

パネルには試作型移動用航空機”アサルト”と映し出されていた。これはとんだ掘り出し物だな……。

「……逃げ込んだ場所で、戦闘機を見つけるなんて……」

瞬間、ゲートを壊そうとする轟音が、部屋中に響き渡った。

「これを使うしか方法がない、か」

言っている間にコックピットが開き、急いで飛び乗る。

身体にフィットするシートに身を沈め、目前にあるコンソールのスイッチを入れた。

すると画面に光が宿り、文字が浮かび上がる。

「アサルト、全システム起動中……全システムオールグリーン、発進準備完了」

よし、動く。

動かし方は……何となくわかる。コックピットが旧式の戦闘機とあまり変わらない感じがするからだ。

丁度右手の近くにあるスピードレバーを最大にし、足元のペダルを踏み込んで最大速で開いたゲートへと突っ込む。

そして、外に出た瞬間だ。

コンソールの画面が、ピーツという電子音を立てて文字を出した。

「時空壁突破機能作動」

何を言ってるのかわからなかった。

だが次の瞬間、意識が飛びそうなほどの目眩と、体が擦れるような感じがした。

「　　ッ!？」

いつまで続くのかわからないまま、強い衝撃と共に意識は飛んだ……。

たくさんの人々が住まうこの世界の名は”グラルス”

この世界ではかつて、世界中を巻き込んだ戦争があった。

それは、突然の惨劇が開戦の合図となり、されど武力の差が大きい戦争となった。

多くの命が失われ、多くの村や町が被害を受け、多くの自然が消費された。

そんな、悲しみだけを生んだ戦争が終結して平和が訪れてから数年が経った。

未だに戦争を忘れられない者達が活動していながらも平和を保っているこのグラルスの中で少し小さめにあたる”ミーン大陸”の端にある、小さな村”アルグ”

のどかな朝を迎えたこの村に大声が響き渡った。

「しまったああ！ 寝坊しちまったあ！！」

銀髪の少年、カイ・エディフィスは大急ぎで学校へ向かっている最中だった。

「おや、カイ。また遅刻かい？」

そんなカイに、中年の女性が話しかけた。

彼女は呆れたような表情でカイを見、両手を腰に当てた。

「あ、キリーおばさん。またってなんだよ。昨日は遅刻しなかったじゃん」

「昨日だけは、でしょ？ ほらほら、こんなおばさんと話してる暇があったら急ぐんだよ」

「あ、そうだった。それじゃ行ってくる」

そう言い残してカイは学校へと再び走り出す。

途中、何人もの村人が彼に声を掛けている姿が見える。

「ほんつと元気だけがとりえだねえ」

キリーは笑いながら家に入って行った。

カイは教室の方へ全力で向かい、勢いよくドアを開ける。

「ギリギリセーフ!!」

突然響いた大声に、教室内の全ての視線がカイに向けられる。  
全員の表情は、驚きだ。

「何がセーフだ、授業はとっくに始まっているのだぞ？」

教卓に立って腕を組み、ピンク色の長髪を揺らして、首だけを力  
イの方に向けた女性は、呆れた表情をしながら彼を睨み付けた。

「え？ シヴァ先生、冗談きついッスよ」

一息。

「……マジで？」

「大マジだ!!」

シヴァが一喝。

その一喝と同時に教室中に笑い声が響き渡った。

「さて、廊下に立っているか、今日一日寝ないで授業を受ける、ど  
つちがいい？ ちなみに後者を選んだ場合、寝た時の罰は今まで以  
上だ」

「ね、寝ません……」

「そうか、頑張れよ。それじゃ席につけ」



まだ笑い声が聞こえる中、カイはブツブツ言いながら席に着いた。すると、隣の席の少女が笑いながら彼に話し掛ける。

「災難だったね、ドンマイドンマイ」

「あのなあシルク、そういうのは余計なお世話っていうんだぞ？」

「あはは、それは失礼」

彼女、シルク・セシルは笑いながらふざけた様子で謝る。

「ま、寝ないように気をつけてね」

「当たり前だって。今回の罰はいつも以上だからなあ……」

「おい、そこ、いくら幼馴染みで仲がいいからといっても、私の授業を邪魔していいわけではないぞ？」

言いながらシヴァはチョークを投げ、カイの額にヒットさせる。

すると、教室中に拍手と笑い声が響き、対するカイは苦笑しながら額を撫でていた。

結局、時間がたつにつれてカイはうつろし始め、最後には机に突っ伏して寝てしまい、廊下にバケツ（水入り）を四個持ちながら立たされる事となった。

時刻は昼下がり。

カイ達の学校は少し早い放課後を迎えていた。

「さて君達、いい知らせだ。こんな小さな学校にも夏休みがあるそうだ。……つというわけで明日から夏休みだ。宿題は出さないが復習はしておくように！　では終わりだ」

全生徒から歓声上がり皆、急ぐようにして学校を飛び出して行った。

シルクは誰かを探すようにキョロキョロしていると、目先にカイを確認したため一直線に走る。

「カイー！　この後のご予定は？」

問い掛けられた事に気づいたカイは、後ろから来たシルクの方へと向く。

対するシルクは、ニヤニヤしながらカイの返事を待つ。

「特にないけど、何？　またいい所見つけたの？」

「正解ー、でも今回はいままで以上にすごいよ。森の動物達がいんな集まってる場所なんだよ、しかもいっぱいっ」

腕を円を描くようにして大きく回す。

「いっぱい、というのを表すように、だ。」

「へえ、面白そうだなあ……。それじゃ、行ってみるか」

「きつまりー、じゃ今すぐ行くよ、着いてきてね」

カイの同意により、二人は村を出て近くの森へ向かう事にした。

二人が向かった森の名は”ゼク”というが、地元の人々からは昔から”時の森”と呼ばれている。

入り口付近はよく村人が立ち寄るが、奥の方へは誰も行こうとしなかった。

その理由はモンスターが出るからである。

最近、全く姿を見せなかったモンスターが少しずつではあるが、森などに現れるようになったのだ。

そんな危険な場所へ、二人は進んでいるのだった。

「なあシルク、まだ着かないのかよ」

「もう少しだよ、たしかこの木を抜けると……あつた！」

シルクが抜けた先には……たくさんの動物達が集まる憩いの場だった。

その光景を見たカイは驚きを隠せないでいた。

「す、すげえ……たしかに今まで以上だ……」

ゆっくりと歩み寄って行くと動物達は人懐っこいのかカイ達に飛びつく。

「どう？　すごいでしょ？」

「ああ、すげえよ。あとは猫がいれば完璧だったんだけど……」  
「え？　何か言った？」

カイの呟きに反応したシルクは、小首を傾げて彼に問い掛けた。  
だが、カイは両手を振りながら、何でも無い何でも無い、と言った為、彼女は軽く言葉を返して動物達の方へと向き直す。  
そしてしばらくの間、二人は動物と戯れていた。

森がざわめきだす。

空には黒い雲が広がっていく。

それと同時に、動物達が一斉に止まった。

「あれ？　どうしたの？」

すると、その問いに答えるかのように動物達は森の奥へと走って行った。

「ど、どこ行くのー？　……どうしちゃったんだろ？」

「さあ？」

『えら………の……わ……ちびき……た………よ………』

「ん？　なにか言った？　シルク」

「え？　私は何も言っただけだよ？」

『と………の……らを……よみ………』

「まただ………こっちかな………」

そう呟くとカイは一人で森の奥へと進んで行った。

「え？　ちょ、ちょっとカイー、どこ行くのー？」

言いながらシルクがカイを追おうとした刹那、空からバケツをひっくり返したかのように大量の雨が降ってきた。

「ひゃ、い、いきなり降ってきた！？　ま、待ってよー」

シルクが追って行った先には見たことの無い洞窟があった。

「ここだ」

「こんな洞窟、あつたつけ？　あ、先に行かないでよー」

中に入ろうとするカイをシルクが追う。

洞窟の最深部に着いたのだろう、行き止まりだった。

「……結局、何も無いね」

言ってシルクが、帰ろう、と言葉を続けようとしたその時だった。急に強い光が射したかと思うと、目の前に小さな時計が落ちた。そして、声がする。

「……私が見え、私の声が聞こえる者よ。我を手にし、そして時が

来るまで持っている……』

「この声だ……」

それは、カイにしか聞こえない声。

「え？ 何？ 何が起きたの？」

戸惑うシルクとは違い、カイは冷静だった。

そして、言われた通りにその時計を手取る。

## 第二話：回り出す齒車

カイが手に取った時計は針が止まった少し大きめの懐中時計だった。

「……ねえカイ、どうしてそんなに冷静でいられるの？」

シルクが不思議そうに問い掛ける。

「驚きすぎて逆に冷静になっちまってるんだよっ」

「それ、意味わかんないよ……」

シルクは少し呆れた様子で溜息をつく。

そんな彼女を見たカイは苦笑しつつ、洞窟の外を見た。

「お、雨止んでるぞ。そろそろ出ようぜ」

そう言つと、走って出口へ向かう。

「あ、待ってよー。また置いてけぼりじゃーん」

その後を追うようにして、シルクは大声でカイの名を呼びながら走り出した。

そして、洞窟の外に出た時、雨はいつの間にか止んでおり、空は元通りの青空になっていた。

シルクは、葉と葉を伝って水の雫が落ちていくのを間近で見ながら、先に進んでいくカイの後を追う。

「快晴だねー、さっきまでの大雨が嘘みたいっ！」

シルクははしゃぎながら両手を振り回す。

「シルクが急にはしゃぎ出したって方が嘘みたいだよ……ん？」

ふと、カイは空に何かが見えるのに気付いた。

「……なあ、あれ何だと思う？」

「え？ どれどれ？」

カイが指を指した方向には黒い”何か”が落ちていくのが見えた。その黒い”何か”は、黒い煙を上げながら落ちていく。

「落ちたね。こりゃ見に行くしかないでしょ」

シルクはそう言うのと落ちた方向に向かって走っていく。

「今度は俺が置いてけぼり？ ……って、聞いて無いし……」

先に進んでいったシルクに文句を言いながらも、少し遅れてカイも走り出した。

邪魔な木々を退かしながら進む二人は、長い道のりを歩み、そして一つの広場のような場所にでた。

そこには”何か”が落ちており、周りの木は無残に倒れ、それがクッションの役割をしたのか、その”何か”は無事のようだった。

「鉄の塊だな」 「鉄の塊だね」

二人は同時に同じ言葉を発した。



「これが落ちたってことは飛んでたって事になるんだよね……？」  
「そうなるね……あれ？」

シルクの目には気になるものが映った。  
それは鉄の塊の中央辺り。

「中に誰かいるよ？ カイ、助けてあげたら？」  
「他人事のように言うなよっ」

呆れながらもカイは、割れたガラスのカバーを持ち上げようとした。  
た。

するとそのカバーは容易に開いた為、カイは中の人を慎重にひっぱりだした。

出てきたのは黒い短髪の青年だった。

その青年の服は身体に密着しているようで、身体のラインが綺麗に浮かび上がっている。

そしてそれを隠すかのように、ケースやポーチなどが所々に装着されていた。

それはまるで、闇にまぎれるためのように真っ黒だ。

だが、その服は少し破れており、腹部にケガをしたのか血で赤く染まっていた。

「……気絶しているだけだけど、ケガしてるな。キリーおばさんに診てもらおう」

「さすがに、見捨てる訳にはいかないしねっ！」

そう言うとカイは青年を背負い村へ向かった。

ケガをした青年を村まで運んだカイ達は、とりあえずキリーの家で休ませてもらう事にし、今は小さな部屋で青年の手当てをしていた。

「さ、ケガには包帯巻いておいたから、あとは目が覚めるまで寝かせておけばいいよ」

言ってキリーは腰に手を当て、微笑しながら部屋を出て行った。

「ありがとーございましたー」

シルクはニコニコしながら礼を言う。

その頃、カイはあの時計が気になっていた。  
ポケットに手を入れ時計があるのを確認し、力強く握る。  
この動作を何度も繰り返していた。

目を覚ます。

そこには、見慣れない天井があった。  
何故、ベッドで寝ていたのかわからない。  
だが、すぐに思い出す。

俺はあの施設から逃げている途中だった事を。

また、捕まった……のか？

内心でそう呟き、ならまた逃げなくてはと答えを出して一気に起き上がる。

だが目に映ったのは施設とは程遠い、小さな部屋だった。

起き上がった正面には小窓があり、部屋の隅には小さな棚が置かれている。

「あ、起きたね」

「お、起きた起きた」

声がしたほうを見ると、銀髪をかきながらホツとしている銀髪の少年とその隣に青髪の少女が、それぞれの椅子に座っていた。

「調子はどう？ ケガのほうはまだ痛む？」

少女が優しく微笑みながら問い掛けてきた。

「え、あ、大丈夫、だ」

正直、状況が全く掴めないが、戸惑いながら答える。

「……なあ、ここはどこなんだ？」

「ここはアルグだよ」

「小さい村だけどねえ」

即答した少女の答えに、少年が付け足す。

……だがその名に聞き覚えが無い。

とりあえず、俺の住んでいた村の事だけでも聞いてみる、か。

「…………じゃあセイルはここからどのくらいかかるんだ？ 有名な村だから聞いたことはあるだろ？」

「セイル？ どこだ、それ？」

……正直、問い掛けた時から嫌な予感がしていた。

だがその予感を、全力で否定した。

だから問い続ける。

「いや、あるはずだ。だってセイルはジードの中でも、有数の都市だから」

「まてまて、ジードなんて村も、地名も聞いたことねえぞ？」

俺の問いが終わる前に少年が答えた。

その答えを聞いた時、まるで、カチリツという音を立てたかのよう  
うに思考が止まる。

少年の言っている意味が理解できなかった。

「…………あれ？ ジード？」

だが少女は、その名に聞き覚えがあるようだった。

「ジードってたしか、神話にでてくる世界の名前じゃなかったっけ？  
前に先生が授業で教えてくれたし」

少女の答えに俺の頭の中は真っ白になった。

ジードが…………神話の世界？

「…………ふざ…………けるな……………」

怒りがこみ上げてくる。

いや、これは怒りなのだろうか……  
もし怒りだとしても、それは全く意味の無い怒りだ。

「ふざけるな！ 俺の過ごしてきたあの日々が、今俺の中にある記憶が全て神話の世界！？ じゃあつここに居る俺はいつたいたいなんなんだ！ どうしてその神話の世界の人間がここに居るんだ！！」

怒りに似た、絶望。

だが、ふと我に返ると、怒鳴ってしまった自分を悔やんだ。  
二人を見ると驚いているようだった。無理も無い、な。

「……………すまん、取り乱した。……………急に怒鳴って悪かったな」

「あ、あはは、いいよいいよ。それよりせつかく神話の　　つというか他世界の人と出会ったんだし自己紹介しない？」

「お前ノリノリだなあ……………他世界の人間だって所は疑わないのか？」

「いやいや、あそこまで必死に怒鳴っている姿みたら、どう考えても演技に見えないんだよお。だから、私はこの人を信じる！ 決めたよ？」

少女が言つと、少年は溜息をつき、仕方ないなあ……………と呟く。  
自己紹介か、悪くないな。

「……………ユウ・ウラハスだ」

「俺はカイ・エディフィスだ、よろしくな」

「私はシルク・セシルだよ、よかったらその世界のこと話してくれる？」

俺は少し考え、施設の事は話しておこうと思った。

「他世界人、か……………」

ユウの話を聞きながら、カイはそう呟き、考えた。

異世界人が来たもこの時計が関係してるのか、そしてこれからこの時計は何かを引き寄せるのか、と。

だが、その考えはすぐに現実のものとなってしまふ。

突然、村の外から爆発音が聞こえた。

「な、なににに！？ 何が起きたの！？」

最初に騒ぎ出したのはシルクだった。

「なんで爆発が！？」

もちろんカイも騒ぎ、窓へと近付いた。

その時、突然部屋のドアが開き、キリーが大慌てで入ってきた。

「キリーおばさん！ 外で何があったんですか？」

「皇国軍が突然、襲撃をしてきたんだよ！」

「……………！？ なんでまた村を襲ってるんだよ！ 戦争はとつくに終わってるに！！」

カイはその言葉に怒りをこめて叫ぶ。  
しばしの静寂の後、キリーが口を開いた。

「さっき村の近くの森に落ちた塊に乗っていた人を探しているらしい。近くに落ちたのならこの村で匿っているのではないかと考えここに来たそうだよ」

キリーは苦虫を噛み潰したような顔で言った。  
その探し人にすぐに気づいたユウは、ベッドから出て立ち上がる。

「…………それは俺だな。俺が出て行けば村は助かるんだな？」

部屋を出ようとするユウをキリーは引き止めた。

「ちょっと待つんだよ、これを持っていきな」

そう言うときリーは、壁に掛けてあった剣をユウに渡した。

「ありがとう」

礼を言った後、ユウは部屋を出る。

「俺も着いていくぞ」

「あ、私も」

まるでユウが呼んだかのように、二人も外へ出て行った。  
そんな彼らの後ろ姿を見てキリーは、やれやれと肩を竦めた。

「まったく、若いていいもんだねえ」

カイたちが外に出ると、ユウは会話を始めていた。

「お前達の目的は俺だろ？　なら早く俺を捕まえて村への攻撃を止めろ」

その一言に他のやつとは服が違う上官らしき男は、不適な笑みを浮かべながら口を開く。

「貴様があのわけのわからない物に乗っていたやつか？　こんな簡単に見つかるとは思わなかったよ……………では時計を渡してもらおうか」

「時計？」

ユウはその言葉に疑問を持つ。

「俺は時計なんて持つてないぞ？」

「とぼけても無駄だ！　空より墜落する者、災いの時計を持つ。これが予言の言葉だ！　……………さあわた　　んな！？」

男が驚き、目を見開く。

その視線の先には時計を持ったカイの姿があった。

「これのことか？」

カイは時計の鎖の部分を持ち、振子のように揺らす。



その時計は薄っすらと光っていた。

「……………時計が輝きし時、災いが起こる……………止めるには所持者を殺すのみ……………」

男がそう呟いた後、胸ポケットから何かを取り出した。  
その何かにユウは見覚えがあるのか、驚きの表情と共に叫ぶ。

「な！？ それは銃！ カイ、避ける！！」

ユウが止めようとするが、敵の兵がそれを邪魔する。

「ぐっ！！ 邪魔を」

「死ねええええ！！」

ユウの叫びもむなしく、男の叫び声と共に一発の銃声。  
その音と共に、カイは地面に倒れこんだ。  
地面が、少しずつ赤く染まっていく。

「え？ カイ…………？ カイイイイ！！」

シルクがカイの元に駆け寄る。

だがそれを止めるかのようにシルクの一步前の地面に銃弾が飛び、  
土が弾ける。

「それ以上近づくな、もし近づけば貴様も関係者として殺すことになる」

「嫌だよ！ 私はカイの友達であり幼馴染だもん。殺したければ殺せばいい」

シルクは叫びながら手を横に広げる。

「ならば…………死ね」

言つて男は、シルクに銃を向けた。

「ッー!!」

シルクは目を強く閉じる。

何も無い、無の世界。

その世界は痛みさえも感じないほどの無だった。

その世界の中心、いや真っ只中で、カイは浮いていた。

「…………俺は…………死んだのかな…………」

そう呟いた瞬間、視界に強い光が射した。

『これが我と契約を交わすのに必要な状況、そして条件は揃った』

その声は、カイが森の洞窟で聞いた声と同じだった。

『少年よ、生きたいか？』

問いに、カイは苦笑を返す。

「そりゃ生きたいけど、どうせ俺には何も出来ずまた死んでしまうよ。それならこのままのほうがいい」

『力を与える、と言ったらお前は生きようとするか？』

「……ちか……ら……？」

『そうだ、力だ、絶対の力』

「力……もし、もらえるのなら……俺は生きたい」

『それでこそ我に選ばれし者、さあ我の手を取るがよい』

カイは、空間に突然出て来た手を取る。

その瞬間、光に包まれた。

俺は無力だ。

今、この手に武器を握っているというのに何も出来ないでいる。

そして目の前で一つの命を助けることさえできなかった……

そしてまた一つ、命が奪われようとしている……

俺が、俺が何かやらなければ意味が無い！

そして身構えた瞬間、突然カイの体が光出した。

強すぎる光に俺は目を閉じた。

しばらくすると光は止み、目を開ける。

そしてその光景に自分の目を疑う。

そこには何事も無かったかのように、傷一つないカイが立ってい

た。

だがその左手はわずかな光を放ち、無数の紋章が刻み込まれている。

そしてその表情は、口が半開きにし目を薄めており、まるで別人のようだった。

「……………カイ……………なのか……………？」

「なっ！？ 貴様！確かに死んだはず！？ 何故無傷なのだ！？」

撃った男も状況が掴めていないらしく、パニックになっている。だがその手に持った銃は、再びカイに向けられた。

その瞬間、カイは素早く男の懐に入り、左腕を男に当てる。

その時、不意に悪寒が走った。

悪寒という方法で知らされたいやな予感、すぐに現実となって起きる。

カイの左腕が強く光り出したかと思うと、男の様子が急に変わった。

「な、なんだ！？                      ツッ！！！」

刹那、聞こえるのは、うがつ、とも、ぐがつ、とも聞こえる、この世の者とは思えないほどの断末魔のような叫び。

そして、それと同時に男の体はみるうちに年老いていった。

肌は皺しわを刻み、腕の筋肉は細くなっていく。

そして、最後にはミイラのようになり、崩れ落ちていく。

……………時間が止まったかのようにも思えた。

誰も恐怖と驚きのあまり、声が出ない。

その後、カイはゆっくりと左腕を上げる。

すると突然、上空に巨大な時計の羅針盤が浮かび上がった。

どこから見ても、真っ直ぐこちらを向いているかのような物だ。  
この時計、俺は見たことがある……..  
だが俺が見たのは針が止まり、所々見えなくなっている物だ。  
俺の世界、ジードで……..

### 第三話：人外の力

空に現れた羅針盤の針が、ゆっくりと動き出す。

そしてカイは、まるで役目を終えた人形のように、その場で倒れこんだ。

「！！ カイー！」

シルクが急いで駆け寄るが、俺はただ空を見上げていることしか出来なかった……

残った皇国軍は逃げ去ったが、倒れたカイはまだ目を覚ましていなかった。

そして村には、怒鳴り声が響き渡る。

「無茶だ！ お前達のような子供をそう簡単に旅に出させるわけにはいかん！」

村長と思われる老人はカイ達が村を出るのに反対していた。

村長は、皇国軍が襲撃をした事に対してはお咎め無しだったが、ユウがカイと共に村を出る話をする、大声で反対し出したのだ。

「そう言われても、皇国軍は明らかに俺やカイを狙っていた。もし、このままここに居座る事になると、また迷惑が掛かる」

「なんと言おうと駄目なものは　な、なんじゃ？」

村長が話を終える前に女性が一人、村長の肩を軽く叩き前に出る。

「……ならば私がついていこう。それなら文句はあるまい？　私はこう見えても剣士だ………なんなら試してみるか？」

その女性は、微笑を浮かべながら赤い瞳でユウを見た。  
そして、長いピンク色の髪を右手でさらりと掻き揚げ、その手を腰の鞘に収められた剣の柄に添え、ユウを挑発する。

「いいだろう、いくら女でも武器を持っている以上手加減はしない」

それを見たユウも、微笑を浮かべて剣の柄に手を添える。

「面白い、それでこそ男だ。では………いくぞ！！」

開始の合図と共に女性が剣を抜いた。

その剣は、彼女の半分の身長ほどあると思えるくらいの長剣だ。  
それを見たユウも、剣を抜いて走り出した。

つと、その時。

「ユウもシヴァも待ったあ！！」

大声を上げながら、シルクがキリーの家から飛び出して、二人の前に立ちはだかった。

そんな彼女に、シヴァ呼ばれた女性は左手を横に振る。

「そこをどけ、シルク。これは私とあの男との問題だ」

「カイが目を覚ましそうなもの！ …… って言ったらやめてくれる？」

その言葉を聞いた瞬間、シヴァは何事も無かったかのように長剣を鞘に収め、走った際に少し乱れたミント色のスーツを調える。すると、その状況がわかったのか、ユウも剣を鞘に収めた。

「さ、行くよ」

言ってシルクは、手招きをしながら家に入って行く。

「では村長、あの話はまたの機会に」

シヴァはそう言いながら、ユウが入るのを待ってからドアを閉めた。

「……………んっッ」

「あ、起きたよ」

カイは体を起こし、辺りを見回す。

その表情は、まだ状況がわからないような感じだ。

「あれ？ あいつらは？」



その問いにユウが答える。

「お前が殺した」

「あ、あれ？ 直球だなあ……………もう少し、前フリとか入れようよ」

ユウの言葉を聞いたカイは、左腕を見る。

「……………いつたいなんなんだ、あれは？」

ユウの疑問が籠った問いに、カイは少し間を空けて答える。

「……………あいつに撃たれた後、声がしたんだ。契約がなんとかつて。それに答えたら急に気が遠くなって……………」

何かを思い出すように左手で頭を掴んだ。

「そしてなぜか、あの力の事と契約の内容が頭の中に流れ込んできたんだ」

「……………あの力？ 契約？」

入り口近くで腕を組んでいたシヴァは、その言葉に興味を持ったのか、話に入ってきた。

「ああ、この左手の力……………この力は、触れた物質の時間を自由に変える事が出来るんだ。過去の姿にも、未来の姿にも」

「ええ！？ カイが難しい言葉を使い始めた！！」

「時間を変える、か。……………だからあの男はミイラのようになったってわけだな？」

シルクの言葉を見無視し、ユウは問いを続ける。

その問いにカイは、そう、と答えて話を続けた。

「だけど、その力にはリスクがある。人体に使用する場合、使用者の体力を消費しそして、対象者を死なせる場合は、大量に消費する事になる。……最後に、この契約を交わした際は使命に従うてのが絶対条件」

最後の一言に、シヴァは眉をピクリとさせ、組んでいた腕を解いた。

「で、その使命というやつは何なんだ？」

「……空に映っている時計は俺にだけ見える光を出しているんだ。その光が示す方向のどこかに時空の柱つてのがあるらしい。その柱を、この力で蘇らせる」

話が難しかったのか、シルクは今にもショートしそうだった。そして、その説明に疑問を持ったのか、ユウが問う。

「……その柱を蘇らせると、どうなるんだ？」

「それははからない。でも、これが契約だからやるしかない」

「フフフツ、その通りだな」

シヴァはカイの言葉に同感したのか、笑みを浮かべて頷く。

「面白そうじゃん。もちろん私もいくよ」

すると、手を高く上げてシルクも同意した。

「もちろん俺も同意だ」

「全員賛成ってことだね？ それじゃ準備が出来たら今夜出発だよ」

シルクの言葉に、カイは首を傾げて問い掛ける。

「どうして、今日出発？」

その問いに、シルクは人差し指を立てて左右に振った。

「チツチツチツ、甘いよカイ。またあいつらが来たらどうするの？  
これ以上この村に被害を出させるわけにはいかないでしょ？  
なら、少しでも前に進んで、鉢合わせを狙うんだよっ」

「ああ、そうか」

カイは納得したのか、何度も頷いた。

「では準備ができ次第、ここに集合だ」

シヴアの合図に皆が行動を始める。

雲一つなく、綺麗な満月が空に見える夜。  
村人が眠りについた頃、カイ達は行動を始めた。  
しかし、村の出口には人影があった。

「あれは……………村長!？」

この村の長である中老の男は、ずっと出口でカイ達が来るのを待っていたようだ。

「やはり行くのか」

「……………はい」

「ではこれを持って行くがいい。わしからの贈り物じゃ」

村長が差し出した袋をシヴァが受け取った。

その袋はズシリとした重みがあった為、彼女はおそろおそろ中を覗くと、沢山のお金が入っていた。

「村長、これは？」

「黙って持つて行け。そのかわり生きて帰ってくるんじゃないぞ？ 絶対じゃ」

そう言い残すと村長は村へ戻って行った。

そんな彼の後ろ姿を見ていたユウは、フツと鼻で笑ってシヴァを見た。

「……………不器用だが、いい人だな」

「当たり前だ、あの人は私が今まで会った人の中で一番いい人だ」

シヴァは当然のように言いながら、手を腰に当てて誇らしそうにした。

「さ、いこう。グズグズしてると夜が明けるぞ」

カイの掛け声を合図に皆が歩き出す。

そんな彼らを見下ろすかのように、満月は真上で煌々と大地を照

らし続けた。

#### 第四話：森の魔術師

朝日が昇り、夜が明ける。

動物達が、人間達が目を覚まして活動を始める時間だ。

その時間、カイ達は村から少し離れた所で野宿をしていた。

「んーっ！……はあ、よく寝たあ」

シルクは起き上がり、大きく背伸びする。

しばらくすると視界に人影が入っているのに気づく。

「あ、シヴァちゃんだ。おはよ」

「シルク、いくらここが学校じゃないからってちゃん付けはないだろ、ちゃん付けは……」

シヴァは呆れながらも、いつもと変わらぬシルクに少し安心したようだった。

「で、ナマケモノの男子共はまだ寝ているのか？」

「俺は起きているぞ」

「ひゃっ！ー！」

突然、まだ寝ていると思っていたユウが喋り出しシルクは飛び跳ねた。

「起きておったか。まったく気配がしなかったぞ」

それを聞いたユウはクククツと笑った。

「気配を消すのは俺の特技なんですね」  
「なんとも困った特技だな」

シヴァの苦笑いに合わせてシルクが笑う。  
その笑い声によってなのか、カイが目を覚ました。

「……………あれ？ もう朝？」

「当たり前だ、馬鹿者」

「え？ な、何々？ なんで怒ってるの？」  
「別に怒ってなどいない」

その会話を聞き、シルクとユウは大笑いした。  
その後、一行は朝食を終えて目的地へ歩き続けた。  
すると、森の入り口が見えてくる。

「もしかしてこの森に入るのか？」

ユウの問いにシヴァは地図を見ながら答える。

「その通りだ。しかし、森を抜けた先には皇国軍の拠点があるから  
注意する事だな」

「了解、そいじゃあレッツゴー！」

シルクは掛け声と共に森の中へと走って行った。

「元気がありすぎるのもどうかと……………」

三人同時にため息をつき、シルクの後を追った。

「大分霧が濃くなってきたなあ。皆、気をつけたほうがいいんじゃない？　ってあれ？」

「どうしたの　ってあれ？」

気づくと後ろには誰もおらず、カイとシルクの二人だけがそこにいた。

どうやら他の二人とはぐれてしまったようだ。

「マジかよ……………まあその内合流出来るだろ」

「そだね、じゃ行こっか」

マイペース過ぎる二人は前に向き直し、道に沿って歩き出す。しばらく歩くと小さな家が見えてきた。

シルクは迷わず中に入り、カイは後を追うようにして入る。そうして中に入ると中年の男が一人座っていた。

「おや、お客さんかい？　もしかして迷ったのかな？」

「えと、その通りです。実は、仲間とはぐれてしまって……………」

カイは頭を掻きながら答えた。

「それなら少しの間ここで休んでいるといいよ。この森に家はここだけだから、お仲間さん達とも会えるだろう」

男は笑いながら優しく言う。

そんな彼に、シルクは喜び混じりの驚きを見せた。



「いいんですか!？」

「もちろんさ、それより何か飲まないかい？」

男がそう言っ指を指した方向には、コップが二つ置かれたテーブルがあった。

まるで誰かが来るのを知っていたかのように。

二人はそのコップを何のためらいもなく受け取った。

「ふむ、霧が濃くなってきたな……………ん？」

シヴァが急に立ち止まった。

どうしたんだ……………って、ん？

俺も異変に気づき立ち止まる。

あるはずの二つの気配がない。逸れたのだろうか。

「なあ、あいつらいつの間に逸れたんだ？」

「私も今気付いた所だ。やけに突然すぎるな」

近くにいるのかと思い、辺りを見回すが、霧が濃いためよく見えない。

「とりあえず歩くしかないな」

そう言いながらシヴァは歩き出した。

それにあわせて俺も歩き出す。

しばらく歩くと少しずつ何かが見えてきた。  
どうやら家のようだ。

「……………どうする？」

一応確認してみる。

「もちろん入るさ。この霧だと、無理に動くとかえって危険だ」

予想通りの返事だった。

そして軽くノックをし、中に入った。

すると中には、中年の男が一人座っていた。

「おや、お客さんかい？　もしかして迷ったのかな？」

「ああ、それで仲間とはぐれてしまったのです。よろしかったらここで、しばらく休ませてもらってもいいですか？」

こいつは相手が他人だと、敬語になるのか？

「もちろんさ、なんせ滅多に人が来ないもので退屈していたんだよ」

言って男は笑った。

「それより、何か飲まないかい？」

男が指で示した先には、俺達が来るのを知っていたかのようにテーブルの上にコップが二つ置いてあった。

明らかに怪しい。

「かたじけない、では頂こう」

こいつは行動が早いな……………

まあ一口だけでも飲んでおこう。

思い、喉にそれを流した瞬間、シヴァが急に倒れ込んだ。  
それと同時に俺の視界が歪む。

「チョロいもんだな」

あの男の声。

その直後、部屋の空間が割れて他の二人の姿が現れた。  
もちろん倒れた状態で。

「ちく……………しょう……………」

意識が薄れていく……………

「さあ、野郎は売れねえから始末しとくか」

男が魔術の詠唱を始める。

その時、倒れていて動かないはずの体がピクリと動いた。

「んふふふつ、あはははははは—!!」

そして高々と笑い出す。

男はその姿を見て、驚きを隠せない。  
いや、隠せるわけがない。

「な、何故だ！？ 確かにあれを飲んだはずだ！」  
「ええ、たしかに飲んだわね。だから私が目を覚ましたのよ？」

そのありえない状況に男は戸惑うしかなかった。

「それにしても、やっと目を覚ます事が出来たと思ったのに、初見がアンタみたいな野郎だなんて最悪」

「わ、訳のわからない事ばかり言いやがって！ ……だが、その威勢もいつまで持つか？ 周りを見てみる！」

言われた通りに周りを見ると黒い光の玉が三方向に浮いていた。

「これが俺の最高の魔術だ！ ”スファイア”！」

男が叫ぶと黒い光の玉は大きく広がり、その者に襲い掛かる。  
そして直撃。

「どうだ、思い知ったか！ ……っ！？」  
「これが貴方の限界？ くだらないわね。弱すぎる」

その者は傷一つついていなかった。  
そして男に右手を向ける。

「特別サービスよ、本当の魔術という物を見せてアゲル」

そう言つと詠唱を始めた。

「この世に住まふ黒き闇よ、その力で我を妨げし者を暗黒へと引きずり込め」

その詠唱と共に、その者が右手で指した空間に少しずつ穴が開く。

「な、何だ！？ 体が……動かない！ ま、待ってくれ俺が悪かつた！ だから」

「言つたはずよ？ サービスだつて」

男の顔が青ざめる。

「さあ、貴方が好きな暗闇で好きなだけ楽しんできてね。」 ティキ

”

開いた空間から無数の手が伸び、男を掴むと一気に引きずり込む。

「嫌だ！ いやだああ……」

空間が閉じ、部屋に静寂が訪れる。

『……………の転移……………いそが……………ならない……………準備し……………起動……………ろ』

目が覚める。

あの施設での事を夢で見ていたようだ。  
だがまだ完全には思い出せないでいる。

そして気を失う前の事を思い出し素早く起き上がる。

あの男は……いない。

近くで倒れているのはカイ達だった。

いったいあの後、何があつたんだ……

同時刻。

森の出口付近の皇国軍拠点。

「ん？」

高台で見張りをしている兵士が何かを見つけた。

それは真っ直ぐこちらに向かってくる人影だった。

その人影は次第にはつきりと見える様になり、大きなロープで全身を覆い隠しているのがわかった。

そしてとうとう、拠点の入り口まで来た。

「おい貴様！ 堂々として来て、何のようだ！」

「……………さよなら、だ」

その者はそう呟くとロープを勢いよく剥ぐ。

現れたその姿は大剣を背中に担いだ男だった。  
その姿を見た一人の兵士が叫ぶ。

「か……」 鴉 ” だあああ！！！！」

その瞬間、鴉と呼ばれた男は剣を手に取り素早く動き、素早い動きで兵士を次々と斬っていった。

男が通った場所は血の海と化し、そこら中に死体が転がっている。そしてその男の表情は笑みで、殺しを楽しんでいるようだった……

……

## 第五話：囚われ少女

何かを飲まされて気を失ってから数分が経った後、先に目覚めたユウは、まだ気を失っている他の三人を起こし、早めにこの森を出よう、と提案した。

その提案に三人は同意し、出口へ向かって歩き出す。

その途中、カイはふと思った事をそのまま言葉にしてみた。

「それにしてもあのおっさん、どこに行っちゃったんだろうな？」

そんな疑問にシルクは笑いながら答える。

「急に怖くなったんじゃない？」

「こ、怖くなったってなんだよ……」

「くだらん話をしている場合ではないぞ。もうすぐ出口だ」

シヴァが指で示した場所は、木々が開いて出口のようになっていた。

「もう一度言うが、森の外には皇国軍の拠点、というより関所のような所があるから注意しろ。場合によっては戦闘になるかもしれない」

その言葉に他の三人は静かに頷き、シヴァとユウは腰に、カイは背中にある武器に手を添えてゆっくりと出口へと歩き出す。

しかし、森を抜けて目の前に広がったのは予想外の光景だった。

そこにあるはずの拠点は、ほぼ壊滅状態となっており、至る所に死体が転がっていた。



「な……なんで……こんな……」

その光景を見たシルクは手で口を覆い、ただ驚くしかなかった。

「いくら皇国軍だからって……これはひどい……」

「ひどい、か。だが忘れるな。私達もいずれはこの光景を作る原因となってしまうのだ。お前の力もな」

同情の言葉を口にしたカイに対してシヴァは少しキツメに言った。  
今後の事に備えて。

だがカイはその言葉に納得がいかないのか、シヴァの方を向く。

「その遠回しな言い方、それじゃまるで人殺しに慣れろって言うみたいじゃねーか！」

「慣れるとは言わない、心の準備をしておけとっているのだ」

「……二人とも、少し黙ってくれないか」

二人の言い争いをユウが止める。

そして、何か聞こえるのか耳を澄ませる。

『……す……けて……』

ユウの耳には、微かに声が聞こえた。

「何か聞こえなかったか？」

「え？ いや、何も聞こえないぞ？」

どうやらその声はユウにしか聞こえていないようだった。

『…………た……け……まっくら……から……』

その声は、次第にはっきりとユウの耳に聞こえてくる。  
そして、

『たすけて、真っ暗なここから出して……』  
「ッー!!」

ユウはその声のする方向を素早く向く。

「どうしたのだ？ 何かあるのか？」

シヴァはユウの行動に疑問を持ち、問う。

「…………こっちだ」

その問いに答えるかのように、ユウは急に走り出した。

ユウの突然の行動にカイ達は戸惑いつつも、急いで後を追う。

少し走ると、ユウがガレキを退かしている姿が見えた。

カイは一緒に作業を手伝い、全てのガレキを退かした場所には、  
地下に通じているような階段があった。

「ついてきてくれ」

一行はユウを先頭に、ゆっくりと下りて行くことにした。

少し行くと急に地面に足が着き、最下層に到着した合図となった。  
幸い、たいまつに火がついており、地下は少し明るくなっている。  
そして目の前には、異常な量の鎖で頑丈に閉ざされた扉が見える。

「もしかして、これを開けなきゃいけないの？」

シルクは難しい顔をしながら鎖を眺める。  
するとカイは左腕を出して、扉に近づく。

「俺の力なら開けられるかもしれない」

そう言った瞬間、カイの左腕が光り出し、あの禍々しい模様の腕が姿を現した。

カイはその手で頑丈な鎖を掴む。

すると、少しずつ鎖が錆びていき、最後には音を立てて崩れ落ちた。

「ほんと、凄い力だよねえ」

シルクはニコニコしながら言った。

「便利って言いたいんじゃないのか？」

そう呟いたユウに対してシルクはズビシツと人差し指を向ける。

「こらそこ、思ってもいないような事を言わない！」

「とりあえず中に入るぞ」

二人の会話を打ち切るかのように、シヴァが扉を開ける。

開いたその先には人が居る気配がする。

だが、この部屋には明かりが無い為、姿が見えない。

「どうする？ 入るか？」

シヴァの問いに皆少し迷うが、ユウは何も考えずにたいまつを一本持ち、奥へと進んだ。

たいまつの明かりによって照らされた部屋の奥には、水色をした長髪の少女が座っていた。

身長からして、八、九歳ぐらいだろうか。

そしてその子の表情には、恐れなどがなく、まるでユウがここに来るのを知っていたかのように冷静だった。

ユウはゆつくりとしゃがみ、少女の目線に合わせる。

「俺に助けを求めたのはお前か？」

その問いに少女は少しの間目を閉じ、その後ゆつくりと目を開ける。

「そう、私がユウ、貴方に助けを求めた。貴方達なら私をここから出してくれると思ったから」

「問題はそこだ。お前はどうかやって俺に助けを求めた？ 地下に閉じ込められていたのに。それに何故俺の名前を？」

「質問が多いよ……それに今は話せる事じゃない。それにしても、やっぱりあいつらは待ってるだけなんだね。これだから人間っていうのは　ッ……」

少女は言いながらカイ達の方をみて、驚く。

ユウはそれに気付き振り向くと、カイ達がこちらに向かって歩いてきていた。

そんな中、シルクは何故か怒っていた。

「まあ、駄目じゃんユウ、勝手に行っちゃ！　しかもたいまつを持っていつちゃうし！」

「別にいいじゃんか、代わりのたいまつはあったんだからさ」

それをカイが説得する。

それによりシルクは、まあいいけど、と言って機嫌を直した。  
ユウは苦笑いしながら謝り、少女の方へと向き直す。  
だが少女の表情は、何かに驚いたままだった。

「どうした？ 何に驚いている？」

その言葉で我に返ったのか、すぐに冷静な表情に戻った。

「ちわー！ 私はシルク・セシルだよ、よろしくね」

彼女は気軽に声をかけ、その後全員の自己紹介を代わりにした。  
少し間を空けて、少女は全員を見渡して口を開いた。

「……………私はミーネレナント・ユリウス・レヴェリート」  
「っ！？ ……ユリウス……………」

シヴァがそう呟く。

だが、その呟きは誰も聞いてなかったようだ。

「な、長い名前だねえ……………」

シルクはそう言いながら、指で名前の文字数を数える。

「ならば縮めてミーナはどうだ？」  
「ミーナ、か。それでいいか？」

シヴァが提案した名前でいいかをユウが少女に聞くと、コクリと小さく頷く。

「じゃあその名で決定だね。んじゃ改めて、よろしくねミーナ！」

そう言ってシルクはウィンクをした。

「だがこの後どうする？ 近くに村か何かあればそこで引き取ってもらって」

ユウが言い終える前に、ミーナは彼の服を引っ張った。

「私も一緒に行く」

その一言にユウは、危険だからやめておけ、と言うが、シヴァはそれを否定した。

「たしかに何も知らない赤の他人に預けるよりかは、この子を助けた私達と同行した方がいいのかもしれないな」

その言葉に説得力があったのか、ユウは仕方なく了承した。

「さて、ここに居続けるってのも何だから外に出よう」

カイの提案で皆は外へと向かった。

眩しい……

今まで暗い所にいたからだろう。

だが、ミーナはもつと眩しそうだった。

そう思いつつシヴァの方を向くと、これからの道のりを確かめるためか、地図を広げている。

「さて、この後の道のりだが、私達は今居る場所は森の出口だから………もう少し歩いてネリンへと向かう」

俺は地図を覗き込むようにして見ると、大体半日ぐらいの道のりだった。

「善は急げ、だね！ それじゃレッツゴー！」

シルクの掛け声で俺達はネリンへと向けて歩き出そうとした。だがミーナは座ったまま動こうとせず、ジッと俺を見ている。もしかして眩しさにやられたのか？

………それとも俺に話があるのか？

「すまんが先に行つててもらえないか？ ミーナが疲れているようだから少し休んだ後、俺が負ぶって何とか追いつけるようにする」  
「うんわかったよ。ミーナちゃんをよろしくね」

さすがシルクだ。

簡単に了承してもらえて助かった。

「それじゃまた後でな」

カイの言葉に片手を上げて答える。

「………さて、少し休むか」

俺とミーナはしばらくその場に座り、休憩をとる。  
その間、一言も会話がなく静寂が続いた。

「ねえ、そろそろ行こう？ おぶって」

そう言ってミーナは俺に向かって両手を伸ばしてくる。  
しかたない。俺はしゃがんで背を向ける。

そしてミーナは俺の背中に抱きつき、両手を首に回す。  
その後、立ち上がると、

「軽っ！！」

思った以上に軽かった。  
予想外だ。

「む！ 何か言った？」

聞こえたくせにわざとらしい奴だ。

「お前って意外と小さいんだな。そして軽い」  
「何〜??」

突然首に圧迫感。

どうやらミーナが俺の首を絞めているようだ。

「く……くる……しい……しぬ……しぬ……わかるか……た……おれが……  
わる………かった………」

そう言った瞬間、首が急に楽になり、俺は一気に空気を吸った。



「あ、危なかった……」

「せっかくもう一人の貴方に出てくるチャンスを与えたのに……」

ミーナはそう呟く。

ん？ もう一人の俺？

「それはどういう意味だ？」

だが返事の代わりに聞こえたのは安らかな寝息の音だった。  
見るとミーナは疲れたのか、眠ってしまった。

あんな暗闇に閉じ込められていたんだ、無理も無いか……

「おやすみ」

気付くと俺の口からは、自分でも予想外な言葉が出ていた。

その後、ミーナが起きないように早歩きで進み、なんとかカイ達  
に追いつく事が出来た。

## 第六話：不審な商人

しばらく歩くと、辺りは死体だらけの風景から、草原へと変わった。

先ほどまでいた皇国軍の拠点でミーナが同行する事になり、一行は目的地のネリンへと向かうがしばらくすると日が暮れた為、また野宿で一夜を過ごす事となった。

そして翌日。

一行はネリンを目指して、再び歩き出す。

その道中でシルクは遠くに動く何かを見つけた。

「ねえ皆、あれって何かな？」

シルクが指を指す方向には、確かに動く人らしき影が見える。それを確認したカイとシルクは、好奇心を抑えられずに、その人が誰かを知るために走りだす。

そして見えたその姿は、ボロ切れのロープを着た、紫色の髪の男が何もない所に向かって、釣り竿を必死に振っているようだった。

「あれはどう考えても関わらない方がいい雰囲気だよなあ……」

カイの言葉に全員が揃って頷く。

「とりあえず気付かれないように行くぞ……」

シヴァの注意を聞き、ゆっくりと通り過ぎようとする。

丁度後ろを通りかかった時、男の動きが止まった。

「客が来た気がするぜよ……」

そう言つて、男は後ろを振り向く。  
それと同時に全員がその場に立ち待った。

「おお！ やっぱり客が来てたっちゃ！」

「え？ いや、俺達はただの通りすがりの者ですよ。な？」

素早くカイが必死に言い訳をし、それに対して他の皆も頷く。

「はいはい、隠さない隠さない〜！ わっちに近寄る人は大抵が客だと相場はきまっているんぜよ〜」

そう言つと男はいそいそと荷物をあさり、何かの準備を始める。

「はあーい、準備完了でさあ」

その一言と共に男の前に並べられたのは見た事のある物から、初めて見る物まで、数多くの物だった。

どういつこと？、とシルクが問うと、男は何かを思い出したかのように、手をポンツと叩く。

「そういえばまだ何も言つてなかったっちゃ……わっちはネプチューン、自由気ままな商人さ。それじゃ、改めて自分の商品を見てくれい」

ネプチューンと名乗った男は、並べたある物を紹介しだす。

商人ということは、並んでいる物は彼の商品のようだ。

その後、シヴァは代表となつて全員の名を紹介した。

そして、咳払いをし、

「すまんが私達はネリンへと向かっている途中なのだ。よつてお前

の商品を見ている暇はない」

シヴァはすぐにも立ち去りたいような声で言った。  
その言葉にネプチューンはピクリとまゆを動かす。

「あんたら、ネリンへ行くのかな？ 何たる偶然、わっちも行くこう  
と思ってたんよ！」

そう言つとネプチューンは早々と荷物を片付け始める。

「嫌な予感がするぞ……」

ユウの言つ、嫌な予感とやは的中した。

ネプチューンは自分も着いて行くと言いつ出したのだ。

シヴァは反対したが、シルクが、楽しくなるからいいじゃん、と  
言つて、了承する事となった。

この一行の中で、リーダーのような存在は、シヴァではなくシル  
クなのかもしれない、とユウは内心で呟くのだった。

その後、ネプチューンが加わつた一行はネリンへと再び歩き出す。

太陽が傾いた頃、一行はようやく目的地であるネリンに到着した。  
”ネリン”とは、アルグのあるミーン大陸の西側に位置する大

な港町で、海をまたいだ先にあるカナン大陸へと行く事が出来る列車”アクアトレイン”のおかげで観光客が増え、発展した町である。

「では今話した通りの事を日が暮れる前に済ませてくれ。ちなみに集合は終わり次第ここに、だ。それでは解散」

シヴァの合図と共にカイ達は、二人一組でグループとなり、それぞれが違う方向へと散って行った。

その理由は、旅に必要な食料などをこの町であつめる、今夜泊まる宿を探す、明日の列車の時刻、及び切符の購入、を数時間で終わらせるためだ。

そしてカイとシルクは宿を探しに市街地へ、ユウとミーナは食料などを購入するために市場へ、シヴァとネプチューンは切符を入手するために駅へ、それぞれ向かった。

## 第六話・不審な商人（後書き）

ちなみに”わっち”というのは商人が使う一人称の事です。

## 第七話：日没までに

「すみませんが、もう部屋は空いていませんで、他を当たってください」

宿屋の主人が申し訳なさそうに頭を下げた。

「そんなあ、どうにかして空いてい」

「いいいえ、そんな頭を下げるほどではありませんよ。私達が遅かっただけなんで。それでは他を当たってみます」

シルクは片手を左右に振り

文句を言おうとしたカイの服を掴んで宿屋を出た。

二人が断られたのはこれで三回目だった。

「まったく……あの人に文句言っでどうするの。大体、遅くなったのはカイが悪いんじゃない。一度は泊まってみたいんだよ、って言うって高級ホテルに向かったやうし。それに予約制だったらしいから、結局無駄足。そしてそれで時間を無駄にしたせいで、他の宿屋は空いてないって事になっちゃったんだからね！」

彼女は怒りのこもった表情と声をカイにぶつける。

珍しく彼女は不機嫌な為、カイはただ黙っているしかなかった。

ちなみにこの町にある宿屋は、現地の人に聞いた所、全部で四軒。つまりは、次に行く宿屋が最後だった。

しばらく二人は会話をせずに次の宿屋を探しに向けて歩き出していた。

「……………えと、ごめん」

「え！？ う、うん、別にいいよ」

突然のカイの謝罪にシルクは少し戸惑うが、一応許す事にする。  
そのまま、ずっと歩いていると、目の前に大きな建物が立ちふさがった。

「ん？ 行き止まり？」

「そのようだね……………」

シルクは少々苦笑い。

すると、その大きな建物から突然、わぁっ！っという大きな歓声のような声が聞こえてきた。

「ひゃあ！ 何々！？」

「ここは……………」 闘技場 ” っ て書いてあるぞ」

闘技場。

そこは戦う者と、その戦いを見て金を賭け楽しむ者が集まる場所。  
その闘技場が町の端にあつたのだ。

「なんか空気が悪いよお、早く次の宿に行こう？」

シルクはそう言いながらカイの手を引っ張って、次の宿屋へと向かった。

シルクに引っ張られている途中、カイは内心で呟く。

ここなら今の自分の実力を確かめる事が出来るかもしれない、と。



夕刻になっても、まだにぎわっている市場。

そんな中、一つの店の前では激しい値切りあいが行われていた。

「もう少しだ！ もう少しでもいいから負けてくれ！」

「いやあーさすがにこれだけあって、もう少しするのはなあ……………」

ユウは、値切りについて店主と話している真つ最中だった。

「頼む、金の少ない旅人に対しての情けだと思って、な？」

ユウの止めの言葉に、店主は少し困った顔をした後、  
「わかったわかった、アンタだけ特別だよ」

そう言っただけで普通の値段よりも負けて売ってくれた。

「ありがとな！　なんで俺がこんな事……………」

店から少し離れた後、ユウは愚痴を呟いた。

だが、まだやる事がある為、次の店に向かって歩き出す。

ユウとミーナは食材などを買い集めるために、町一番の大きな市場へと来ていた。

そこには色々な店が並んでおり、客寄せのための活気ある声が響き渡っている。

そして、その声につられてやってくるのか、所々の店で人だかりが出来ている。

二人はその人だかりの中を掻い潜って、なんとか目的の物を買集める事ができた。

その後、人だかりから少しはなれた所まで行き、しばらく休憩する事にした。

「久々に疲れた……」

そう言ってユウは壁に寄りかかって一息つく。

「お前も疲れたろ？ 座らなくても って、どうした？」

ユウはミーナに問いかけるが、彼女は人だかりの中の一点を見つめたまま動かなかった。

その一点、つまりは視線の先、そこには肩車をしながら、楽しそうに笑う親子の姿があった。

親子か、っと彼は呟く。

そのまましばらくその親子の楽しそうな様子を眺めていると、ミーナがくるっと回ってユウの方を向く。

「ねえ、あれは何をやっているの？」

そう言いながら親子を指す。

「ん？ ああ、あれは肩車をしているんだ」

「かたぐるま…… 楽しそう……」

ミーナはそう呟き、目を輝かせる。

まるでユウに肩車をして欲しいかのように。

ユウは少し考えた後、意を決したかのように立ち上がる。

「わかったよ、肩車だな？」

そう言ってミーナを持ち上げて、肩の上に乗せた。

「うわぁ……高い……」

ミーナは先ほど以上に目を輝かせながら辺りを見回す。

「よし、このまま集合場所に向かうか」

ユウはミーナを肩に乗せたまま、集合場所へと歩き出した。

重い荷物も持たなくてはいけないうえ、歩くのが大変だったのは言うまでも無い。

多くの観光客や商人が集まる場所である駅に、シヴァとネプチューンは明日の列車の時刻を確認するために来ていた。

「人が多いな……おいネプチューン、はぐれないように　って何をやっておるのだ、アイツは」

見るとネプチューンは、観光客の女性に話しかけて口説いていた。

簡単に言えばナンパをしているのだ。

「　　ってなわけで、わっちと一緒に少しの時間だけでもいいのでお茶でもしやせんか？」

「ごめんなさい、檻褸<sup>ぼろ</sup>切れを着ている人とはちょっと……」

ネプチューン、あっけなく撃沈。

がっくりと地面に崩れるが、すぐにシヴァに無理矢理立たされる。

「残念だったな。だが自業自得だと思え。これを基に、やるべき事をやると言っ気持ちを持つのだな」

「き、厳しいっちゃ………はあ」

ネプチューンは深いため息を着いた後、いつの間にか遠のいているシヴァの元へと向かった。

丁度その時、シヴァは駅員を見つけ、話しかけるところだった。

「すまんが、明日の時刻表を見せてもらってもいいか？」

そう頼むと、駅員はすぐに了承し、時刻の書かれた手帳を見せてくれた。

少しの間、手帳を見ていると、駅員が申し訳なさそうに問いかけてくる。

「あの、もしかして初めての方でいらっしやいますか？」

その問いにシヴァが、ああそうだと答えると、駅員は少し困った表情をした。

「実は最近、色々なところで反皇国軍勢力によるテロなどが多発し

ているため、海上列車”アクアトレイン”は、その対策のやめに切符の値段をあげたのです」

シヴァにとって、いや、二人にとって初耳の情報だった。値段を上げたと言う事は、内部からの占領という可能性を考えての事なんだろう。

「それで、値段は？」

「お一人様、十万ラノンになります」

二人とも哑然とする。

ちなみにラノンとは、この世界のお金の単位。

それが十万も必要だと言うのだ。

あいにく所持金は村長に貰った分から今日、皆に買い物用として渡した金額を引いて、五万ラノン。

つまり、一人も乗れないと言う事だ。

「そうか、有力な情報をありがとう」

シヴァは礼を言って、駅を後にした。

「……まずい事になったぜよ、合計四十万ラノン必要とはねえ」

その言葉に、シヴァは疑問を持つ。

「計算を間違えてないか？ 合計は五十万ラノンだぞ？」

「んん？ わっちは商人ぜよ？ 切符ぐらい、自分の分は持つとるっちょ」

そう言いながらネプチューンは、ズボンのポケットから切符を取

り出してヒラヒラさせる。

すると突然強い風が吹き、切符がネプチューンの手から簡単に離れて海の方へと飛んでいった。

「あああああ！！！！ 待つちゃあああ！！！！」

ネプチューンは必死に追いかけるが、その頑張りも虚しく、切符は手の届かないところまで行ってしまった……

その後、また地面に崩れ落ちる。

その哀れさに、シヴァは無理矢理起こさないようにする。

しばらくすると、ネプチューンは自分の意思で立ち上がり、シヴァの元へとゆっくりと近づき、立ち止まる。

「すみません、やっぱり五十万でお願いしやす……」

「哀れだな」

シヴァは、先ほど思った事をそのまま言葉にした。

「しかたない、皆と話し合って今後の事を決めるとするか」

そう言って、二人は集合場所へと向かう事にした。

## 第八話：賭けられた戦い

日が暮れて、空はすっかり暗くなった為、一行は集合した後、宿へと向かった。

その後、全員が一つの部屋に集まり、明日の事について話し合うことにした。

「　という訳だ。あいにく私達には金がない。これがとんでもない足止めだ……」

隣の大陸に渡るための電車に乗るためには金が足りない、これは今のカイ達にとつては致命傷だった。

そんな中、カイは何かを思いついたかのように手をポンツと叩く。

「金がないのなら増やせばいいんだよ！」

その発言に、全員が疑問を持つ。

「カイ、とうとう頭がイッちゃった？」

「いやいや、そういうわけじゃないよ……この町には闘技場があるんだよ！　だからそこで俺が出て勝てばいいんだよ」

カイの提案に、ユウは軽くため息をつく。

「勝てばいいって、簡単に言うなよ。お前、実戦はした事はあるのか？」

「そこは心配いらない。カイは私が何度も特訓したからな。もちろん、実戦も踏まえてだ」

ユウの問いに、シヴァは自信満々の表情で答える。

「そうか……それは意外と楽しみだな」

そう言っつてユウはカイの方を向き、ニコツと笑った。

「お前の实力を見るのが楽しみになった。期待を背くようなマネはするなよ？」

その言葉にカイは親指を上立て、同じく笑みを浮かべた。

「当たり前だ！　っていうか、それより……」

言葉を途中で止め、何故かシルクと顔を見合わせて、二人が同時に笑みを浮かべ声を揃える。

「ユウが初めて笑った！！」

その瞬間、部屋中に笑い声が響き渡り、ユウは視線を逸らす。

「そう言えばそうだな、笑った顔は初めて見た」

シヴァも気付き、腕を組んで微笑む。

「おや？　ユウ、照れてるっちょ？」

視線を背けたユウに、ネプチューンが必死に顔を見ようとする。

「う、うるさい、見るな！　ってミーナ！　何でお前まで」



その騒動にいつの間にかミーナまで加わり、ユウが部屋中を逃げ回るといふ珍しい光景となった。  
そしてシルクまでもが、私もやる！っと言って加わる事になり、とても騒がしい夜になってしまったのは言つまでもない。

翌日。

一行は闘技場へと向かい、エントリーを済ませた。  
そして、後は順番が来るまで待合室で待機するだけとなる。  
その途中、カイは緊張のせいなのか妙に落ち着かない雰囲気。  
そんなカイの肩に、シヴァが軽く手を置いた。

「いいか、相手を私だと思って、稽古の時のようにやるんだ。だからこそ雑念は捨てる。わかったな？」

シヴァが送った言葉は、少ないアドバイス。  
だがカイにとって、その少しのアドバイスでも十分だった。

「ありがとうございます、先生！」

「お前、こういう時だけ先生と呼ぶのだな……まあいい、頑張れよ」

その言葉を言い終えた直後、スピーカーから出場要求が聞こえる。カイは闘技用の剣を手にして立ち上がり、開かれた扉へと向かう。通路のような所を抜けると、目の前には大きな円状のステージが広がっていた。

その周りを囲むようにして高い塀があり、その上には観客席がある。

観客達の中には、身を乗り出して歓声を上げている。

『さあて、次の挑戦者は！ カイイイエディフィイス！！』

突然耳に響いたのは、スピーカーを通して大音量で聞こえる司会者の声。

その声は、カイに再び緊張を与えてしまった。

『対する戦士は！ 自慢の巨大な肉体で戦う、カルロオオオスジェー！ー！』

紹介と共に反対側の扉から、巨大な身体に合わせて作つたかのような大斧を片手に持った、カルロスと呼ばれた大男が出てきた。

その姿を見たカイは、全身に鳥肌を立てていた。

やっべえ、ワクワクしてきた、と心の中で呟き、緊張を消し去ろうとする。

「頑張れー！ カイー！」

観客席からはシルクが、他の声に負けじと大声で叫ぶ。

その声を聞いたカイは片手をシルク達のいる方に上げる。

その時はもう、カイの中に緊張というものは残っていなかった。

『さあ、両者が出てきたので、ここで勝敗決定のルールを説明させていただきます。つと言つてもルールは簡単。どちらかがリタイア、または倒れたまま一定時間起き上がらなかった時点で試合終了です。それでは、スタートの合図をさせていただきます』

カイとカルロスは、スタートに備えて身構える。

『レディー……………ゴーオオ!!』

スタートと同時にカイは一気に走り出す。

そのまま剣を横に振り、先制攻撃を狙おうとする。だがその攻撃は、意図も簡単に防がれてしまった。

「甘いわあ!!」

カルロスは一喝と同時に、カイの攻撃を防いだ大斧で、剣ごとカイを振り払う。

カイはその衝撃を利用して、少し間合いをとる。

だが顔を上げた瞬間、カルロスの大斧が目の前に迫った。

それをバックステップでなんとか避けるが、その大斧はカイに休む間を与える事なく降り注ぐ。

その全てをカイは紙一重で避けながら後退する。

「どうした？ 逃げてばかりでは戦いにならんぞ!」

カルロスは挑発するが、それでもカイは避け続ける。

「あれは戦法の内か？」

「ほう、よくわかったなユウ。あれは私が教えた戦法だ。相手が自分より大きい場合、その身長差を補うために冷静になり、慎重に動きのパターンを読む」

シヴァの教えた戦法に、ユウは疑問を持つ。

「だがそれは一対一の時にしか使えないんじゃないのか？」

「その通りだ。まあ、この戦闘以外で使う事は滅多にないだろうな」

ユウは、やはりな、と呟いてカイの方へと向き直す。

「だいぶ読めてきた……攻撃がパターン化しつつある」

カイが避け続けた為、カルロスは油断したようだ。

それにより攻撃がパターン化しだしており、反撃のチャンスが生まれる。

「右……左……左、上……右……上、今だ！」

次の瞬間、カイは容易に相手の懐に入った。

「なに！？」

カウロスは突然の反撃に対応しようとするが、間に合わないまま、カいは脇腹に一撃を入れる。

「うーおお!? ……小賢しい!」

カルロスは横腹の痛みにも耐え、反撃を与えようとするが、その動きを読んでいたのか、カいはバックステップで回避した。

カルロスは避けられてしまった為、大斧が空を斬る。

後ろに下がった瞬間、足をバネのようにして一気に加速する。

そのまま、カルロスの横振りをジャンプで回避し、顔面を一蹴り。よるめいたカルロスに対し、カいは着地と同時に足を連撃。

それによりカルロスは勢いよく地面に倒れこむ。

その後、カいは大きく飛び上がり、落下の速度を利用してカルロスの腹部を一撃。

突如、疾風の如く繰り出されたカいの攻撃に、カルロスは為す術もなく、身動き一つしなくなった。

少し経つても動かない為、確認の為に審判が駆け寄る。

「……………気絶しています!」

『という事は……………ウィイナアア!! カイ選手ううう!!!!』

その判定と共に、観客達は大歓声をあげる。

『まさかの大逆転で、我が闘技場のランキング二位であるカルロスを負かしてしまったあ! これは驚きです!!』

その言葉を聞き、カいは驚いた。

「えええ!? ラ、ランキング二位? 聞いてねえよ……………」

そう弦きながら、疲れた身体を引きずるようになり、出口へと向かった。

## 第九話：可憐なチャンピオン

試合が終わり、カイは皆のいる観客席へと向かっていた。するとカイの目に、手を振りながら向かってくるシルクの姿が見えた。

それを確認したカイは返事の代わりに片手をあげる。そしてシルクは、やったね！、と言ってハイタッチをした。

「驚いたよ！ まさか二番目の人に勝っちゃうなんて！」

「俺も驚いたよ、まさか相手がそんなにすごい奴だったなんて……シルクからは何も　　っと、噂をすれば本人が来た」

丁度カイの視線、シルクの後ろにシルクの姿が見える。

「おい、どういう事だよ？　相手が二位のやつだなんて聞いてないぞ？」

「だが勝ったではないか。私はお前の強さを知っているからこそ、お前の対戦相手にアイツを選んだのだ」

「俺が……強い？」

カイの問いにシルクはゆっくりと頷き、そうだと答えた。その返答にカイは訳もなく、頭を掻く。そんなカイの肩を、ユウが一叩きした。

「上手く話を丸め込まれたな」

「ええ！？　それってどういう事だよ！？」

同時に皆が笑う。

その時、カイは不意に後ろから肩を軽く叩かれた。

「こんにちは、カイ君……でよかったかな？」

声を聞き、カイが振り向くと、そこには赤髪の女性が申し訳なさそうに立っていた。

彼女は身軽そうな服装を着ており、胸の辺りにはナイフが収められた革の鞘が、腰には剣が納められた鞘がある為、出場者だとわかる。

その姿を見たシヴァは一度首を傾げて、何かを思い出した。

「……貴女はもしか、チャンピオンではないか？」

そんな問いに、赤髪の女性にはこやかな笑顔を作る。

「その通り。私がチャンピオンのレミィ・エルマンだよ」

「ええ！？ キミがチャンピオン！？」

カイは大声を出して驚いた。

もちろん、他の皆も驚く。

「キミ、じゃないよ！ 私はこれでも成人！」

その答えを聞いたカイは、今以上に驚いた。

そんなカイの脇腹を、隣にいたシルクが思い切り殴る。

「失礼でしょ！ 謝りなさい」

「イツツ……えと、すみませんでした」

脇腹を押さえながら謝るカイに、レミィは同情するような表情を



した。

「まあいいんだけどね。っと、それより、さっきのカイ君の戦いを見ていて思ったんだけど、面白い動きをしたからつい見とれちゃってね。よかつたら私と一戦やつてみない？」

「え！？　よ、喜んでお受けいたします！！」

「カイが敬語を使った！？　天変地異の前触れ……………」

レミイからの誘いに、心から喜んだカイに、シルクは少し呆れた表情をしてシヴァ達の方を向き、両手を肩の高さまで上げてお手上げだと知らせた。

それを見たシヴァは腕を組んで笑い、ユウとネプチューン、ミーナは苦笑いをする。

「あ、それと、カイ君は自分の得意とする武器を使つてね？」

その言葉を聞いたシヴァは、ほう、と呟いて前に出た。

「何故その質問をした？」

「私の目は誤魔化せないよ？　カイ君の動きが明らかに普通の剣士とは違っていた。普通の剣ではない動きを……………どう？　あつてるでしょ？」

シヴァは少し考え込み、そして笑いながら答える。

「はっはっはっ、さすがはチャンピオンと言ったところか。カイ、お前じゃ敵わないかもしれないが全力でやる事だな」

「目が笑っていないぞ」

シヴァはユウの鋭い突っ込みを無視してカイの背中を数回叩き、

気合を入れさせる。

カイは、わかってるよ、と言ってシヴァから武器を受け取り、レミイと共にエントリーへと向かった。

ちなみにカイの有する武器とは、上下に対となった刃がついている剣、いわゆる諸刃の剣となるものだ。

その剣をカイはチラツと見て、喜びの笑みを浮かべた。

そして、やっと訓練してきた自分の武器が使える、と内心で呟いた。

また歓声が聞こえる。

だがその歓声は、先ほどの試合よりも大きく、活気があった。それもそのはず、今行われる試合は、突然現れて二位の選手を打ち破った者と、現・チャンピオンとの戦いだからだ。

『さあて、観客の皆さんも驚いたと思います！ 今回のマッチはなあんと

現・チャンピオンのレミイエルマンヴァアサス！！ カイエディフイス！！』

テンションの高い司会者による紹介を聞いた瞬間、観客達はより一層ヒートアップする。

その声を聞いた瞬間、頭が痛みだした。

「な、なんだ……？」

その痛みは少しずつ強くなっていく。

とりあえず外に出た方がいいのかもしれない……

「シヴァ、少し気分がわるいから外の空気を吸ってくる」

「そうか、あまり無茶はしない方がいいからな。そうした方がいい」  
「すまない」

俺はそう呟き、出口へ向かおうとする。

すると、ミーナが俺の服を掴んで引き止めた。

「どこに行くの？」

「気分が悪いから外の空気を吸ってくるだけだ。心配するな、すぐに戻る」

そう言ってミーナの頭を撫で、再び出口へと向かった。

「やっと対面、ね」

ミーナの呟きは、誰も聞き取る事はなかった……

## 第十話：蘇る記憶

二階の観客席から外へ出ると、そこにはバルコニーがあった。  
俺はバルコニーの柵にもたれかかり、吹き付ける風にあたる事に  
した。

そしてゆっくりと深呼吸する。

だが、痛みは治まるどころか、激しくなる一方だ。

「ぐっ！！」

突然襲いかかってきた、今までに無い痛み。

それと同時に、頭の中でさきほどの歓声に似た叫び声が聞こえる。  
だがその声は昨日今日聞いた声ではなく、もっと前に、この世界  
に來た時よりも前に聞いたような気がする。

そしてその叫び声とは別に、低音の太い声が聞こえる……いや、  
思い出してる。

『やっ』

この声は俺ではない。

『やっ』と見つけたぞ』

この声を聞いた場所は……

『彼女の器となれる物を！』

俺が逃げてきた施設だ。

『これで全てを取り戻せる、いや始められるのだ!』

そして俺は、ここへ来る前の、あの施設での事を全て思い出した

.....

鮮明に思い出された記憶。

それはまるで、頭の中で再生されるような感覚。

俺宛てに來た一つの依頼。

それは、指定された施設に侵入し、内部で行われている事を探るというもの。

その時の俺にはいつも通り、簡単な仕事だと思っていた。

だがその予想は軽々と外れてしまう。

内部に侵入し、しばらく進むと突然、警報音が鳴り響いた。

それと同時に数え切れないほどの戦闘員のような奴らが現れ、俺はすぐに捕まってしまった。

その後、目が覚めると、実験室のような場所で何かの上に両手両足を縛りつけられていた。

「.....はい、全てが順調なのでそろそろ”彼女”の準備を」

「ああ、頼む。慎重にな.....」

近くでは二人分の男の会話が聞こえる。

”彼女”とは何の事だろうか？

だが、意識がもうろうとしている為、声がかすれる。  
すると突然、身体中に激痛が走った。

その痛みで意識がハッキリとし、同時に俺の叫び声が響き渡る。

その時、俺の中に何かが入ってくるような感覚があった。  
暖かく、だが悲しいような感情と共に。

その後、意識が遠くなっていった………

『やっと思い出したようね』

突然聞こえた声。

辺りを見渡すが、誰も居ない。

「誰かいるのか？」

『見えるわけではないじゃない』

また聞こえる。

どうやらその声は頭の中に、直接話しかけているようだ。  
テレパシーか？

『そんなわけじゃない。私は貴方の中にいるのよ。精神の中に、  
ね』

「……は？」

意味が解らない……

もしそれが本当だとしても、信じられない。

だが言い切れる事でもない。

現に俺が声に出していない考えに対して、普通に会話をしているからだ。

『その通りよ、信じる事が出来た？』

「いや、まだだ……そもそもお前はいつ、どうやって俺の中に入っ  
た？」

『さっき思い出したと言っておいてそれは解らないのね………何  
かが入ってくる感覚がしたでしょ？ その時に入れられたのよ』

「驚いた………そんな事が出来るとは」

『そんな事の前に、私と話している時は声に出さない方がいいんじゃないの？』

そう言われて、やっと気付いた。

第三者から見ると、俺は独り言を言っているようにしか見えない  
からな……

とりあえず、お前の名前を覚えてくれないか？

『いいわよ。私はティファ・ローズ。一応、昔は名の知れた大魔導  
師だったのよ……ジードでね』

「何！？」

最後の一言に驚いた。

ジードは俺の住んでいた世界の名。

って事はお前も俺と同じジードの人間か？



『そういう事になるわね。でも、ジードで私の肉体が存在していたのは三十年ぐらい前だけ』

どういう意味だ？

『そのままの意味よ。私は肉体を失った後、精神体を捕らえられた。そしてその三十年後に貴方の精神内に同化、というより取り付けられた』

何故、俺なんだ？

『それは、貴方と私の魔力形式がほとんど同じだからよ』

魔力形式といえば、魔術を使う為に使われる魔力が溜められている部分の種類の事だ。

だがそれは人によって異なる形式をしている。

DNAとほぼ同じようなものだ。

でも、それはありえないんじゃないのか？

『その通りよ。魔力の形式が同じ、と言う事は双子でなければありえない』

だが、あいにく俺に双子はいない。

それにティファが三十年前に死んだと言っのなら、尚更ありえないだろう。

歳の差がありすぎる。

なら何故、魔力形式が同じなんだろうか？

わからない事ばかりだ。

それよりも先に、知っておきたい事がある。

『何を？』

俺とお前、入れ替わる事は出来てしまうのか？  
もし出来るのなら、先日森での一件に納得がいく。

『……出来るわ。でも、その為には両者の魔力を一時的に開放、簡単に言えば私と貴方が、互いに入れ替わる事を許可する必要がある。だけど、片方が気絶している時も出来るわ。もちろん、入れ替わるのは精神だけね、身体はそのままよ』

それはありがたいのかどうか、わからないな……  
じゃあ最後に、お前は生前、何をやっていたんだ？

『注文が多いわね……それはね、せ』

「ユウ、カイの試合が終わったよ」

ティファが言おうとした瞬間、背後から声が聞こえた。  
その声に驚きながらも振り向くと、入口にミーナが立っていた。

「わかった、すぐに行く」

すまんが、また後で話そう。

『わかったわ』

ティファは軽く答える。

その返事を聞いた後、俺はミーナが伸ばす手を仕方なく掴み、闘技場内へと向かった。

「そっいえばミーナ、さっき始めてカイの名を口に出したな」

「え？ うん、少しは慣れたって事かな。でも、まだあの人達とは普通に会話は出来ないよ……」

そう言いながら、ミーナは俯く。  
何か言っただけで、ほうがいいな。

「気にするな、これから慣れればいいんだから」

その一言に、ミーナは小さく頷いた。

「まだ、だめよ？　そこまで教えたら……まだ彼は知ってはいけ  
ないのだから」  
「え？　……そう、そういう訳ね。この世界にもいたのね、預言者  
が」

そしてティファは最後に、会えて嬉しいわ、と言った。  
聞こえるはずがないとわかっていても……

## 第十一話：試合後の安息

カイの試合が終了したのを聞きいたユウは、ミーナと共に皆のいる観客席へと向かった。

到着すると、そこにはチャンピオンのレミイの姿もあつた。

カイはユウが来た事に気付कि、片手を上げ、ういっと言った後、その手を頭にのせる。

「ごめん、負けちまつた。もう少しだつただけどなあ」

「っという事は、所持金はどうなるんだシヴァ？」

「先ほどの試合が十二倍で六十万ラノン。そしてこの試合で負けた為、半分の三十万ラノンしか手元に残らないというわけだ」

三十万ラノン。

その所持金の少なさはもちろん皆知っている。

カナン大陸へ渡る手段であるアクアトレインに全員が乗るための金額、五十万ラノンに全く届かないと言うわけだ。

「また足止め、だな」

「……えと、何が足止めなの？」

カイ達の会話が気になり、レミイは聞いてみる事にした。

その問いに代表としてシヴァが答える。

「私達は隣のカナン大陸へ行きたいのだが、あいにくアクアトレインに乗る事ができないのだ」

「え？ アクアトレインに乗りたいの？ 別にいいよ？ カイ君には楽しい試合をさせてもらったしね」

その言葉に皆は声を揃えて、はい？、と言った。

それは当然の反応だ。

その為、次の言葉にも同じ、いやそれ以上の反応をするだろう。

「言い忘れていたけど、私はここ、ネリンのアクアトレインのバビロニア皇国軍によるテロ対策用護衛部隊、レミィ・エルマン隊長よ

」

闘技場を出た後、レミィは、

「出発は明日になるから、宿でゆっくり休んでね」と言い残し、手続きの為、駅に行った。

その後、皆は言われた通り宿に向い

シルク、ユウ、ミーナ、ネプチューンの四人は、一つの部屋に集まっていた。

その宿は前日とは別の場所であり、ベッドが二つと小さなテーブルが一つという寂しい部屋だった。

その場所でシルクとネプチューンは、今日の出来事を話題にして話している最中だ。

「それにしても驚いたよ。まさかレミィさんが皇国軍の隊長だったなんて」

シルクは驚いた表情と共に、複雑な表情もしている。

「軍人さんには色んな人がいるって事ぜよ」

ネプチューンの言葉にシルクは、そんなもんだね、と言いながらベッドにダイブし、大きくバウンドする。

「ふぁー！ 久しぶりのベットだあ！ 今日のもう動きたくない。つてな訳で、おやすみー」

彼女は相当疲れていたのか、二つあるベッドの中心で両手両足を広げ、すぐに眠りについた。

それを見たユウは困った表情をする。

「そのベッドは二人分なんだが……まあいいか。別に俺が使っわけじゃない……　　そういえばカイとシヴァはどこに行ったんだ？」  
「あのお二人さんなら外で稽古中ぜよ。いくら互角に近かった言えど負けた事は事実だからな、って言ってたっちゃ」

そう言っただけネプチューンはその場に倒れこむようにして、眠りにつく事にした。

「何だ、皆寝たのか……」

気付くとミーナもシルクの隣で眠っていた。

つまり、この部屋の中で起きているのは俺だけだ。

「暇だな」

『貴方が暇なんだったら、身体を貸してもらってもいいかしら？  
お風呂に入りたいの』

何だ？ 頭の中に直接声が……  
って、ティファか。

『失礼ね。私以外に誰が、貴方の脳内に直接話しかけられるっての  
よ』

それもそうだな。

それで、なんで風呂に入りたいんだ？  
肉体はないから入る必要がないだろ？

『バカね、これだから男は……私はレディーよ？ 入る必要もなく  
ても入りたいの！ それに私は温泉好きなんだから』

わかったわかった、好きにしろ。

そのかわり、だ。

勝手な事はするなよ？

『……ふう〜ん、そんな事気にしているんだ？ 大丈夫、何もしな  
いわよ。ベイブちゃん』

ベイブ？

なんだ？ それ。どういう意味だ？

「細かい事は気にしないの。さあ、早くお風呂お風呂」

しかたない、聞かなかった事にしておくよ。  
どうせ考えても無駄だからな。

『いい心がけね、そういう人は好きよ』

心にもないような事を言うな。  
それより、早く入れ替われ。

『はいはい、それじゃあ魔力を少しでもいいから開放してみて』

わかった。

俺は力を解放するような感じで心を無にした。  
だんだんと、何も感じなくなってくる。  
そして少しずつ、意識が遠のいていく……



## 第十二話：魔術と禁術

少しずつだが、遠のいていた意識が戻ってきた。  
まだ慣れていないからなのか、頭がボーっとする。  
だがしばらくすると、俺は異変に気付いた。  
自分の身体が自分の意思で動かない……………

『どういう事だ？』

「どうやら無事に入れ替われたようね。うまく魔力の開放をしてくれて助かったわ、ありがとう」

入れ替わるとは、こういう事なのか……

『って、お前はなんで声に出して喋っているんだ？』  
「いいじゃない、別に。小声なんだし」

そういう問題じゃないと思うが……

「とりあえず、お風呂に向かうわよ」  
『……………わかった、もういい、好きにしろ』

それにしても不思議な感覚だ。

自分の意思とは関係なく、身体が勝手に動いているんだから  
『って、ちょっと待て！ そっちは女湯だー！』

「えー！ 私に男湯に入れって言うの？」  
『当たり前だ。俺の身体を使っているんだからな』

俺が女湯にいた、なんて事にはなってほしくない。

「わかったわよ、男湯にはいればいいんでしょ？」

ティファはブツブツ言いながら、隣の男湯へと入った。その後、脱衣所で無駄に急いで服を脱ごうとした。だが、中々うまく脱げず、苦戦しているようだ。

「何この服！ 脱ぎにくいわね！」

『しかたないだろ。ジードでやってた仕事では、こういう動きやすい服が一番いいんだよ。慣れればすぐに脱げる』

慣れたくないわよ、こんな服、と文句を言っていたが、コツを掴んだのか、すんなり脱いでいた。

そして服を脱ぎ捨てて、駆け足で浴場へと向かった。

浴場へと繋がる扉を開け放つと、そこに広がった光景は、綺麗に整理された桶やイスの山と輝いて見える蛇口、そして屋根がない為、露天風呂となっており、空を眺める事が出来る仕様となっていた。

だが、一部の露天風呂の上には雨避けの為か、小さめの屋根が儲けられている。

「へえ、客室はボロいけど、浴室は綺麗なのね！」

それは失礼だろう。

……まあ、確かにそうなんだがな。

ティファは先ほどと同じスピードで露天風呂へと向かい、飛び込むようにして入った。

「ふああ、暖かくて気持ちいい！ そして久しぶりのお風呂お  
」

『あ、暖かい……入れ替わっていても感覚は伝わるって事か？』

「当たり前じゃない、五感は全て共有よ。一心同体ってわけね。だ

から、大怪我とかはしないでよね？」

『努力する』

……………それにしても、先ほどから下の方の視野にちらつく何か  
気になる。

その違和感が何かを確かめるために下を見ると、俺にはない、  
いやこの世の全男性にないものがついていた。

『な、なな、なんで俺の身体にこんなものがついているんだ！？』

そう言いながら、慌てて視線を上に向ける。

「こんなものとは失礼ね……………それより、どうしたの？ そんなに慌  
てちゃって。もしかして、女性の胸をみたのは初めてだったの？」

『そういう意味じゃないが、突然見えるとそりゃ慌てるだろ！ そ  
れよりも、なんで俺の身体が女になっているんだよ！』

脱衣所では確かに男の、俺の身体だったのに……………

「ふふふ、びつくりしたでしょ？ これが、大魔導師たる、私の力  
よ。……………まあ、私が使う魔術は失われた禁術なんだけどね」

なんだけどね、って軽がるっていいものなのか？

『その禁術で、身体を変えたと？』

「そういう事……………でも、そう簡単には信じないでしょ？」

『当たり前だ。第一、魔術ってのは魔力を消費して火・水・氷・樹・  
雷・風・地・光・闇の内、一つを創造して攻撃、または身体の一時的  
補助をするものの事だ。存在している身体を別の姿に変えるなん  
て事、出来るわけがないだろう』

少なくとも、俺の知っている魔術はそうだ。

「その摂理は一般的な魔術の、でしょ？ 私の使っている魔術は禁術と呼ばれるくらいよ？ そんなもの、誰もが知っているわけないじゃない。ちなみに……」

言葉を途中で止め、ティファは自分の胸を掴んだ。

……たしかに掴まれている、という感覚はある。

「今、私が掴んでいる”コレ”は確かに存在している。偽物ではなく、本物。」

さて、ここで問題。この世に存在する命あるもの達の身体は元をたどると、何によって構成されているのかわかるかしら？」

『……数多の細胞とそれを支えている、つまりは細胞のエネルギー源となっている魔力によって、だったか？』

「正解。ちなみに、その魔力が普通の人よりも多い人は、魔術師としての素質があるのよ」

それぐらいは知っている。

「それじゃもし、その細胞を支えている魔力が生命体そのものの存在、身体の形状を保っているとしたら？」

『世界中の学者や哲学馬鹿が驚くだろうな。だがその前に、信じないと思うが』

ティファはその返答を聞き、ふふふつ、と笑った。

「その通りでしょうね。でも、そうじゃないと今のこの状況はどうやっても説明できないでしょ？ この魔術は、存在の形状を保って

いる魔力を一瞬分解して、記憶している魔力の形状に変換するの。  
それによって、身体が変わるのよ」

ティファは一度目を閉じ、ややあつてまた開ける。

「……でも、この魔術によって身体が変わる方法を知ったある人物は、これを禁術として、他の禁術と共に封じる事にした」

『その理由は、自然の摂理を簡単に覆すような事は、その人物にとって許しがたい事だったから、か？』

「よくわかったわね。……でも、その人物はミスを犯した。魔術に對しての興味が、人一倍強かった孫である、私に話してしまったから。その話を聞いた私は、好奇心でその封印を解き、禁術を手に入れた。その分、代償は大きかったけどね……」

そう言つてティファは、胸の中心、心臓のある辺りを軽く撫でる。  
俺は、その部分を見て驚いた。

そこには大きな傷跡が残っていたからだ。

この傷の事について聞こうとしたが、止めた。

俺が見たティファの表情には、曇りが見えていたからだ。

それと同時に、悲しい感情が俺の中に流れ込んでくる。

もしかしたら、禁術を手に入れた代償は、胸の傷の他にもあるの  
だろうか……

しばらくの間、俺とティファは黙り込んだ……

## 第十二話：魔術と禁術（後書き）

魔力とか魔術とか、何言ってるかわかんない  
という方がいるかもしれませんが

ようは魔法ですw

そう解釈していただけると助かります

ちなみに、魔術構成の説明などは、題材にしている物は一つもない  
のであしからず（？）

### 第十三話：罪により得たモノ

露天風呂の湯気によって出来た雫がポチャンっという音を立てて、水面に落ちる。

その音と共に、ティファはゆっくりと口を開く。  
それは、静寂の終わりだ。

「全てを失った。弟も、家族も、一族も、故郷も、全て……私が未熟だったから、好奇心で禁術に手を出し、膨大すぎる魔力を制御しきれず、暴走したの」

その声は、わずかに震えている。

無理をして言わなくてもいい、そんな言葉が脳内で生まれたが、口に出す事は出来なかった。

それはまるで、好奇心が俺の言葉を出そうという考えを邪魔しているようだ。

そして、ティファは話を続ける。

「その暴走によって一体の魔神を蘇らせてしまった。その魔神が私から全てを奪った。……それが許せなかった。魔神に対してではなく、弱い自分に対して」

傷跡のついた胸を撫で下ろす。

「だからこそ、私は強くあるために禁術を使って魔神を封印した。

……この胸の傷は、その時に出来たものよ」

『そうだったのか……それで、その魔神とうやはもう現れないのか？』

「現れないわ。魔神は私の中に取り込んだの。そのおかげで、私の

魔力は無限に近い量となった」

数多の犠牲と引き換えに手に入れる事になった力、か……

『……………よく悲しみを乗り越えられたな。何故だ？』

その問いに、ティファはクスツと笑った。

「それはヒ・ミ・ツ、よ」

『なんだよ、それ……………ここまで話したんだから、いいだろ？』

「また今度、機会があつたら」

刹那、入口の開く音がした。

見るとそこには、タオルを片手に持った全裸のカイが立っていた。

『まずいな……………』 「まずいわね……………」

あいつ、カイにとっては、男湯のつもりで入った風呂場に女性が入っていた、という事になる。

人生の日常でこれほどまでに驚く出来事はまずないだろう、たぶん。

「えと、あの、その……………」

カイは戸惑いながらも、少しずつ後ろへと下がっていく。

そして最後に、すみませんでした！、と叫び、風呂場を飛び出していった。

「逃げちゃったわね……………そんなに私の身体がよかったのかしら？」

『自惚れるなよ……………そんな事より、早く入れ替わるぞ！ カイや他



の客が来る前に、だ』

「ええ、まだ身体を洗ってな」

『また今度、風呂に入る機会をやるから!』

ティファは少し間を空けて、しぶしぶだが了承してくれた。

「それじゃ、また魔力を開放してみて」

俺は言われるがままに、魔力を少し開放する。  
すると、また意識が遠のいていく感覚がする。  
そのまま、眠ったような感覚に落ちていく……

カイはありえない状況に直面してしまった為、勢いよく扉を閉める。

彼はとてつもなく混乱していた。

だからこそ、声に出して自分に言い聞かせていた。

ここは男湯のはずだここは男湯のはずだここは男湯のはずだここは男湯のはずだ、と。

だが、そう言い聞かせている内に、一つの疑問が生まれる。

それと同時に、脱衣所を見渡す。

そして、見つけた。

カイのしている先、そこには脱ぎ捨てられたユウの服があった。

「……おかしいな？　ここにはユウの服があるのに、たしか風呂場にはいなかった……」

それを思い出した瞬間、カイは急いで風呂場へと引き返す。  
だが、先ほど女性がいた場所には……ユウがいた。

「あ、あれ？　ユウ、いつから居たんだ？」

その問いかけに、ユウは困った表情をした。

「いつからって……最初からいたぞ？　お前が入ってくるなり、叫んで出て行った時も」

「え？　……え？　マジ？」

カイの頭の中では大混乱を起こしているのか、何度も聞き返す。

「……ってことは……ユウが女性に見えたって事か？　……疲れているのかな、俺」

彼は、ユウに聞こえないようにそつと呟く。

その後、ユウはカイと交代するかのように、湯船を出た。

「え？　もう行くのか？」

「ああ、これ以上いたらのぼせそうだからな」

ユウは短めの返事をして、カイの横を通る。  
すれ違った時、カイの左腕を何気なく見た。

その左腕は、力を使っていないのにも関わらず、紋章のようなも

のが薄っすらと浮かんでいた。

「……………どうした？ 悲しそうな顔をして？」

ユウが呟いた言葉が、カイの耳に届いていた。

そして、ユウの方へと振り向くが、彼はもう風呂場を出ていた為、カイは首を傾げる。

「……………空耳かな」

そう言って、貸切状態の湯船に飛び込んだ。

## 第十四話：別れと出発

夏の朝、小鳥のさえずりが街中に響く。

そんな中、寝ていたシルクは暑苦しさで目を覚ました。

まだ眠気のある目をこすりながら立ち上がり、窓にかかったカーテンを思い切り開ける。

すると朝日の光が差し込み、シルクの顔を照らした。

「うお！？ 眩しっ！」

その眩しさに耐えながら窓を開けると、潮の匂いが混じった、涼しい風が入り込んでくる。

彼女の上半身はＴシャツ一枚だった為、冷たい風が露出している肌に直接当たり、とても気持ちがいい。

そのまま、んー！、と唸りながら両手を上げて、力いっぱい背伸びをする。

その両手を上げたまま、深呼吸を一回。

二回目はさきほどよりも大きく吸い込み、そのまま反転、カイ達が寝ている方へと向く。

そして、両手を筒状にして口元に構える。

「起きろおお！！ 朝だよおお！！」

彼女の大声は部屋中に響き渡り、眠っていた者は皆、勢いよく起き上がった。

「……え？ もう朝ですか？」

カイは少し寝ぼけながら問い掛けると、シルクは大きく頷く。

「嫌な目覚めだな……」

ユウは目を薄めたまま、彼女に対して文句を言った。

「はいそこ！ 文句言わない！ ……それともユウ、寝坊して置いて行かれないの？」

「俺は寝坊な ……何でもない」

今の彼女の言葉には、さすがのユウも齒向かえない……というか、言葉を返すのが面倒臭いようだった。

その後、カイが部屋を見渡すと、ある異変に気付く。

「あれ？ シヴァは何処に行った？」

つと、丁度その時、扉が思い切り開いた。

そして、そこにはパンの入ったカゴを持ったシヴァの姿があった。

「お前ら、喜べ！ 朝食を持ってきてやったぞ！ 投げるから上手く受け取れよ」

そう言っつて、パンを一つずつ投げる。

その全てがそれぞれの手元にうまく渡った。

「商人の目の前で食べ物で粗末にする教師つてのもどうかと思うっちゃ……」

「ふん、なら食うな。自分で買ってくるんだな」

シヴァはそう言いながら自分の分のパンを手に取り、持っていたカゴを床に置く。

ネプチューンは、それはそれで困るぜよ、と言ってパンを食べ始める。

「……シルクとシヴァは似た者同士だな……」

ユウは誰にも聞こえぬように、小さく呟いた。

太陽が真上に昇り、夏の強い日差しが街中に降り注ぐ。  
時刻は丁度、十二時。

この時間は、一行がレミイと馱で会う約束をした時間だ。  
しばらくするとカイが、遠くから走って来るレミイの姿を見つけた。

「やっと本人が来た！」

レミイは一行の前で止まると、手を合わせて謝罪の意を示す。

「待たせてごめんねー！ 手続きは無事に終わったよ。後は、このカードを駅員に見せるだけで乗れるから」

そう言ってレミイは、全員にブロンズのカードを配った。

そのカードは手のひらサイズの為、用意にポケットに入る。

「わざわざ手続きをしてもらい、感謝する。皆の代表として礼を言わせてもらっぞ」

シヴァは軽く頭を下げ、感謝の意を表した。

対するレミイは、気にしないでいいよお、と言って広げた手を左右に振る。

「それじゃ、最後まで見送ろうかな。ささ、ホームまで行こう」

そう言っただけレミイは先頭を歩きだし、他のみんなはその後ろをついていく形で、ホームへと向かった。

ホーム内。

そこには、長くて巨大な列車が入口を開けて停まっていた。

「で、でっけえな……」

カイは口を開けて、列車”アクアトレイン”を見上げている。

「中もつとすごいよ！ 乗客一グループごとに一部屋用意されていて、他にも娯楽施設、食堂、小型商店などの設備が整っているの」「すごすぎる……」

レミイの説明を聞き、ユウは吐息を一つ。

丁度その時、出発の合図である汽笛になる。

「ほらほら、早く乗らないと置いていかれちゃうよ」

そう言いながら、レミイは一步下がリ、手を振った。

一行は、それぞれ感謝と別れの言葉を言つて列車に乗り込む。

最後尾、カイも言い終えて乗り込もうとすると、レミイが呼び止めた。

「カイ君、また勝負してよね？」

その問いに、カイは親指をグツと出す。

「もちろんだ！ その時は、勝つてやるぜ！」

「望むところだよ！」

最後にカイは、それじゃ、と言って車内に入り込む。

それと同時に扉が閉まり、列車が動き出した。

その後、カイは振り向く事なく客室へと向かった。

ホーム内に列車が走る音が響く。



レミイは列車が見えなくなるまで手を振り、その後、本部へと帰ろうとした。

すると目の前に突然、白衣を着た白髪の男と、その両サイドに並んだ、ボディーガードと思われるガッチリとした体型の男二人が、通る道をさえぎるようにして現れた。

白衣の男の顔は酷くやせ細っており、目元には隈くまが出来ている。

「あつれえやー、遅かったねえ」

白衣の男はボディーガードの二人に、君たちのせいだよ、と言いつつながら脇腹を突いた。

それに対し、ボディーガードは無表情。

その後、白衣の男はレミイの方に向き直し、不気味な笑みを浮かべる。

「まあいいや、さて質問だよ？ レミイ・エルマン。……ユウ・ウラハスという名を知ってるかい？」

レミイはその言葉を聞いた瞬間、一步後ろに下がり、身構える。

「おんやあ？ ボクにそういう行動をするという事は、どうやら知っているようだね？ ……うん、それじゃ関係者として拘束できるねえ」

いかにも不気味な言動。

そして、言い終えると同時に指をパチンツと鳴らした。

すると、ボディーガードの二人がレミイに近づく。

「待つてよ！ 私はこの町のバビロニア皇国軍隊だよ」

「そんな事、関係ないね。ウラハスを知っているやつは皆、拘束し

て情報を聞き出す。相手がどんなお偉いさんでも関係ないんだ。ここはボクの世界じゃないし」

レミイの言葉をさえぎって言った白衣の男の言葉は、彼女には全く理解できなかった。

「自分の世界じゃないってどういう」

瞬間、ボディーガードの一人が、体型に似合わないような素早さで真横に着く。

その動きにレミイは対応できず、首筋を手刀で打たれて気絶してしまった。

そして、ゆっくりと倒れるレミイを、もう一人のボディーガードが担ぐ。

「はい、よくできました。さあ、帰ろうね」

白衣の男の上機嫌で不気味な声がホーム内に響く。

## 第十五話：初めての海上

我、見たのは未来。

黒き翼を持つ者により、世界は滅びゆく。

我、見たのは過去。

齒車が回りし時は、突然の出会いである。

そして、我等が見るは現在

大陸と大陸の間、海上すれすれに架かっている橋。

その上を走る列車”アクアトレイン”は、ゆつくりとカナン大陸へと向かっていた。

そんな中、ある客室の窓に貼り付くようにして、カイは外の景色を見ていた。

「すげえぜ！ 海だ海っ！！ すげえぜ！ 広いぜ！」

赤い半袖シャツと青いジーパン姿のカイは、まるで子供のようにはしゃいでいる為、隣りに座っている全身白で胸のあたりに黄色の

ラインが入っているフリルの付いた服を着たシルクは、溜息をつきながら彼の首筋を掴んで、思いつき引き張る。

「はいはい、すげえぜ！　つてのを二回も言わなくていいから、とりあえず騒ぐのをやめようね、カイ！」

「おわっ、な、何するんだよシルク！海を見たのは初めてなんだから、少しくらいはしゃいでもいいだろっ」

カイは、えりを掴んでいる手を離させようとするが、シルクのもう片方の手が、それを邪魔する。

「あまり暴れると、首をしめて落としちゃうよ」

シルクは笑顔でそう言うが、カイはその笑顔と言葉の違いに恐怖を感じ近くに座っている、身体にピッタリとフィットした黒色の服を着ているユウに助けを求める眼差しを送った。

だが彼は、自業自得だ、というような目でカイを見て、微笑する。

「……ねえ、ユウ。カイを助けなくてもいいの？」

ユウの膝の上に頭を置き、横になって、小さな水色のドレスに似た服と共に、水色の長髪を垂れ下げたミーナは、透き通ったような青い瞳で、彼を見上げる。

「自業自得だからな、気にするな」

そう言いながらユウは、ミーナの長い髪を撫でる。

すると彼女は、撫でられたからか、満足そうな笑みを浮かべた。

「……ユウはずいぶんとミーナに懐かれているな。羨ましいよ」

そう言ったのは、ユウの向かい側に座っている、ミント色のスーツのような服を着たシヴァだ。

彼女はピンク色の長髪を、組んだ腕に絡ませている。

「ようは受け入れ方だ。なんなら手を広げて読んでみたらどうだ？ シヴァ。今のコイツは、だいぶ皆に慣れていると思うしな」

「そ、そうか……？ そんな動物のように上手くいくのだろうか…

…。まあ、それなら、さあ、ミーナ。私の膝の上においでっ」

シヴァは組んでいた腕を広げ、笑顔でミーナを誘うポーズをとる。それを見たミーナは、ユウとシヴァの顔を交互に見て、再度ユウの顔を見て、首を傾げた。

彼はそれに答えるように頷くと、ミーナの表情はまた笑顔になり、シヴァの膝の上に移った。

「か、可愛い……… おお！ 髪を撫でるとやわらかい……

なんと！ 寝息を立てて眠っておるぞ！ か、可愛い過ぎる………！」

「お前……可愛いものを見ると、性格が変わるのか？」

少なくとも、ユウの内心では、シヴァの見方が変わったようだ。

「こっれは激写だっちゃ！ 写真に納めるぜよ！」

ユウの隣りにいた、ボロ切れのローブを羽織っているネプチューンは笑いながら、自分の荷物に手を突っ込み、小型のフィルムカメラを取り出した。

それをシヴァに向け、左上についている、シャッターを切るためのスイッチに指を添えて構える。

「はい、笑って笑って、って、ああああ！ わっちのカメラが真つ二つにいい！！ 何をするんじゃ！？」

「何をする……………だと？ 私の天使をお前ようなやつの濁声で、夢の世界から無理矢理引きずり出すような行為は許さんぞ……………？ 一度目は警告、二度目は制裁だ」

そう言っただけでシヴァは、カメラを真つ二つにした細剣を、ネプチューンの首筋に添える。

「こんなところで死にたくはないだろ？ ネプチューン」

シヴァの冷酷な赤い瞳を見たところ本気だという事を悟ったネプチューンは

、添えられた細剣で首筋を斬らないように、ゆっくりと頷いた。それを見た彼女は満足そうな表情をして、細剣を鞘に納める。その後、ネプチューンは急いで自分の首筋を触り、首が繋がっている事を確認して安堵した。

ユウはそれを見て、苦笑。

すると突然、シヴァは真剣な声で言った。

「さて、ミーナも寝たところだ。この列車が目的地に着くまで、まだ時間はある。……………ユウ、この世界について、そして皇国軍について教えてやろうか？」

「この世界について……………か。興味深い話だな。お前がよければ聞かせてもらいたい」

そう言っただけでシヴァは、いいだろう、と呟いて、窓側にいる二人の方を向く。

「お前らも　って、いつまでじゃあっているつもりだ？　……  
お前らも聞く必要があるだろ？　皇国軍について、だ」

「え？　………そういえば、シヴァちゃん、授業で皇国軍の事、全く教えてくれなかったもんね。　ほら、カイ。起きなさいって」

シルクは、おそらく落ちていると思われるカイの頬を連続ビンタした。

すると、うーん、とうなりながら、カイが目を覚ました。

「……あれ？　お花畑は？」

「よし、揃ったな」

シヴァはカイのボケを無視し、ミーナの髪を撫でながら、今までにない真剣な表情になる。

「まずは二十年前、世界を巻き込んだ報復戦争と呼ばれた惨劇についてだ」

## 第十六話：戦争という名の惨劇

アクアトレインが線路の上を走っている時に奏でられる、リズム感のある音が鮮明に聞こえるほど静まり返った客室で、シヴァは荷物から取り出した地図を開いた。

その後、これを見てくれ、と言って右上にある長い大陸に人差し指を添える。

「ここは私達がいたミーン大陸。そしてここから南西、遠く離れたところにアツカドという大陸がある。そこには大昔から、一つの国があるのだ。それこそ、私達が皇国軍とよんでいる者達の故郷、バビロンを首都としたバビロニア皇国だ。対して南東にあるのが二十年前までバビロニアと対立関係にあったテクノス王国のあるカルディエールという大陸だ」

ちなみに、と付け足してカルディエールを指で囲む。

「テクノスの兵士は、今やここで反皇国軍勢力”レジスタンス”として活動をしている。……テクノスは領地や兵力こそ多いものの、バビロニアの技術力には劣っていた為、二つの国は、条約によって中立状態となっていた。だがそれは、表向きであって実際は、いつ戦争が始まるかわからない、言わば冷戦状態となっていた。そんなある日、第百十三代目皇帝ギルガメシュ・ラヌ・ジ・バビロニアの娘であるシン・リグ・ジ・バビロニア姫が、テクノスとの友好を持つために執事であるシャマシュと数名の召使い、親衛隊を引き連れてカルディエール大陸のテクノスへと向かった」

シヴァが一度、言葉を止めた時にユウが問いかけた。



「……そのシン姫つてのは、父親であるギルガメシュに命令されて行ったのか？」

「いや、シン姫は平和を望んでいて、自らの意思でテクノス王国に向かったっちゃ」

問いに答えたのは、意外にもネプチューンだった。

それを聞いたユウは、わかった、続けてくれ、と言った為にシヴァは頷き、話を再開する。

「その後、何事も無くテクノスの国王アーガイル・ジィ・グランドポールとの交渉を終え、友好条約の締結を済ませたシン姫は、アーガイル国王が用意した別宅で、二日ほど休む事となった。理由は、本当に友好関係を持つ事を望んでいるか確かめるためだ。そして二日後の最終日、惨劇が起きた。別宅への、突然の襲撃だ。シン姫の親衛隊は襲撃によって真つ先に殺され、残った者達も一人残さず殺され、全滅した」

最後の一言に、ネプチューンを除く、全員が目を見開いて驚いた。

「ぜ、全滅って………やったのは誰なの!？」

カイの問いに、シヴァは視線を彼に向け、告げる。

テクノスだ、と。

「ッ!? 友好条約とやらを結んだばかりだったのに、なんで自分から違反するような事をするんだよ!？」

「その意図は誰も知らんだ。ともあれ、それがテクノスの仕業だとわかったギルガメシュは憤怒し、一気に世界を巻き込む戦争を起こした。言わば、開戦だな。対するテクノスは、開戦を待っていた

かのように、蓄えていた武力と兵力をすべて投入した。だが、バビロニアの技術力と軍事力は圧倒的なものだったのだ。その為、わずか八ヶ月で、テクノスの敗北で終戦した。噂によると、早期終戦のきっかけの一つは、テクノスの軍で五本の指に入るほどの強さをもった戦士の一人が多数の兵士と共に、バビロニア側に寝返ったからなのだそうだ。……ここまでで、何か質問は？」

呼びかけに、カイが、はい、と言って手を上げた。

「その寝返った戦士は、今はどうしているんだ？」

「うむ、カイは授業モードだな。関心、関心」

シヴァはそう言いながら、数回頷いた後、問いに答える。

「……その者は戦死した。どこで、どのようななどの詳細は誰も知らないそうだ」

そう言い終えたのと同時、今度はシルクが手を上げた。

「結局、アーガイル国王は何がしたかったんですか？」

「いい質問だ。終戦後にわかった事なんだがな。実は、アーガイル国王は開戦前に死んでいたのだよ」

その言葉に、再度全員が驚いた。

「ま、待て……それが本当なら、誰が軍を動かしていたんだ!？」

ユウの問いに、シヴァは首を左右に振った。

「今となつては、誰もわからんのだ。テクノスの王族や軍の最高権力者など、国に関わつた者達もまた、開戦前に死んでいたらしいからな」

「報復戦争は謎だらけなんだっちゃ……………」

ネプチューンの付け加えた言葉に、シヴァは、その通りだ、と同意して再度話を続ける。

「開戦が二十年前。終戦が十九年前だ。それからと言うもの、この世界はバビロニアが大半を領地として管理している」

「バビロニアは、アルグの時みたいに村を襲撃しているのか？」

ユウが聞いた事は、カイが拾つた時計を探していた皇国軍のような奴が、他にもいるのかという事だ。

だがその問いに、シヴァは難しい表情を作つた。

「…………ギルガメシュは、娘と同じであまり戦いを好まない人らしいからな。」

だが、いつの間にかギルガメシュは、そして世界は変わってしまったのかもしれない……………」

深刻そうに言つた言葉に、シルクは悲しそうな表情で言う。

「…………やっぱり、娘さんが殺されてしまったからなのかな……………可哀想だよ、シン姫って。平和を愛していたから、戦争が起きないように条約を結びに行ったのに、その相手の国に殺されて、そのせいで戦いを好まなかつたお父さんが変わってしまった……………」

その声は少し震えており、悲しみが込められていた。  
それを悟つたシヴァは、この子は本当に優しい子だと、内心そ

う思った。

すると、急にネプチューンが立ち上がった。

「すまん、ちょっと席を外すぜよ……」

そう言い残し、ネプチューンは客室を出て行った。

そして、この客室に残ったのは静寂だけだった……

## 第十六話：戦争という名の惨劇（後書き）

### バビロニア皇国

並びにギルガメシュなどの名前ですが

これはバビロニア神話を元に考えました

少し知っておけば、以外な何かがわかるかも、です

それでは次回もよろしくです

## 第十七話：陽気な少女

アクアトレインの最後部車両には屋根のないエリアがあり、列車の速度が遅い為、景色を眺めながら潮風にあたる事ができるという絶好のリラックス場所になっている。

俺は今、その場所で柵にもたれかかり、潮風に当たりながら俺の精神内にいるティファと会話していた。

『どこの世界でも、一度は戦争をしているのね。びっくりしたわ』

ジードは相手が人間じゃなかったらしいがな。

『そうなのよねえ……エニグマは人間と違って、プラントを潰さない限り、永遠にでてくるんだもの』

エニグマってのは、この世界ではモンスターと呼ばれている生物の事だ。

そのエニグマには数多くの種類があり、全てが異型の為、謎めいた者という意味でエニグマと名付けられた。

そして、そのエニグマと人類の生存を賭けた一大戦争は、文字通りエニグマ戦争と呼ばれた。

……って、お前は戦争経験者だったのか！？

『まあねえ、それでも大魔術師なんだから』

それは関係ないだろ……。

『……面白い事を教えてあげましょうか？』

面白い事？

俺はオウム返しに問い掛けた。

『そ、たった数十年の間に閉ざされた、ジードの歴史』

どういう事だ？

歴史って言っても、昔から人間とエニグマは戦っていて、その戦いに終止符を打つために戦争をしたんだろ？

『……やっぱり、戦前の歴史は後世に伝えられていないようね。それじゃ、話を』

「どーんっ！！」

「うおっ　ぐッ！？」

突然、背後から聞き覚えのある声と共に、力強く押されたような感覚。

それと同時に、腹部が柵に強打され、俺はその場にうずくまった。ティファも痛そうにうなっている為、痛みの共用は本当なんだなと思う。

それはともかく、後ろを振り向くと、そこには両手を前に出したポーズのまま止まっているミーナの姿があった。

「あれ？　……大丈夫？」

「だ、大丈夫じゃねえよ……。そんな驚かし方、誰から聞いたんだ？」

痛む腹部をさすりながら立ち上がり、聞いてみる。

「え？　シルクだよ？　ユウのところに行くのなら、こうやって驚かすといいんだよって言って、教えてくれたの」

あ、あいつは余計な事が好きなんだな……。

「それで、何の用だ？」

「ううん、ユウと一緒にいたかったただだよ」

その言葉に俺は、そうか、と呟いて海の方を向く。

『私に対しての口止めってわけね……』

どうした？

『なんでもないわよ。ただ、眠いから寝るわ』

ティファはそう言って、眠りについた。  
それと同時に、俺の腕をミーナが引く張る。

「ねえねえ、喉が渴いたから飲み物買ってよ」  
「は？」

俺は、一人で買ってこい、と言おうと思ったが、その言葉を飲み込み、代わりに微笑を作る。

「……わかったよ、行くか」

そう言って歩き出した為、ミーナは俺の後ろを追うようにして小走りですいてきた。

そして、後部車両の扉を抜けたその時、ミーナが、きゃっという声と共に転んだような音がした。

振り向くと、漆黒のローブを着込んだ男にぶつかって、案の定、



転んでいた。

「おいおい　すまん、ミーナが迷惑かけてしまっ

そう言つと、男は一度こちらを見て赤色の目で睨み付けてから、俺に背を向けて歩き出した。

「……感じの悪い奴だな……　ほらミーナ、掴まれ」  
「ありがとっ」

ミーナは苦笑しながら、俺が差し出した手に掴まって立ち上がる。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ。それより、早く行こっ」

「お、おい、そんなに引つ張るなっ！　ゆっくりだ、ゆっくり！」

結局、引つ張られたまま行く羽目となった。

「あ、アイスクリームもある！　これでもいいかな？」

ミーナはカウンターに置いてある、ショーケースの中に入ったアイスクリームの見本を指で示している。

「わかった、わかった。一つだけなら何でもいい」

「本当っ！？ それじゃあ……トリプルでイチゴ、チョコレート、メロンね」

俺は、了解と言って、言われたとおりの物をカウンターの向こうにいる店員に注文した。

その後、ややあつてチョコレートが差し出してきたのは、コーンの上に丸く模<sup>かたど</sup>られた三色のアイスが積み重ねられている物だ。

それを受け取った後、目を輝かせているミーナに手渡し、同時に店員に金を払っておく。

そして辺りを見渡すと、少し離れた窓際にプラスチックで出来たイスとテーブルがあつた為、彼女とそこに座る事にした。

後ろから、ごゆっくりどうぞーという店員の無駄に元気な声を聞きながら、イスに座る。

そして、俺の向かいに座ったミーナを見ると、まだ目を輝かせたまま、美味しそうにアイスを食べていた。

つとその時、背後かた妙な視線を感じる。  
それと同時に、悪寒がした。

すかさず後ろを向くと、そこには、  
「そんなところで何をやってるんだ？ シヴァ。それじゃまるで変質者だぞ」

小型のフラッシュ付フィルムカメラを持ったシヴァの姿があつた。

「見てわからんのか？ ミーナを撮っているのだ」

「……………」

人とは、きつかけによつては、ここまで変わってしまうもんなんだな……。

「…………一応聞いておくが、何でだ？」

「理由は簡単だ。私とお前の子だ、育成記録はつけておかないとな。それよりもほら、ミーナを見てみる。あの可愛らしい食べ方を、仕草を！」

「人聞きの悪い事言うんじゃないやねえっ！　鳥肌が立つっ！！」

そう言いながらミーナの方を見ると、小さい口から舌を出して一番上のイチゴ味のアイスをじっくりと舐め続け、途中ですばやく下の二つ、チョコレート味とメロン味を舐め、また一番上を……という流れを繰り返していた。

「な？　な？　可愛いだろ？」

「……あ、えーっと……とりあえず、その薄気味悪い笑顔でフラッシュを連射するのはやめろ。俺の目が色んな意味でおかしくなる」「うむ……しかたない、ここまでにしておくか」

「ああ、おとなしくそうして　って、言ったそばからまたフラッシュするな！」

「はっはっはっ、これで最後だ。……ちょっと残念だが」

シヴァは言った通りに残念そうな表情をしながら、カメラをスーッとポケットに閉った。

「……それで、本題は何だ？」

「む？　その言葉は、何を根拠にだしておるのだ？」

シヴァは口元に笑みを浮かべ、されどもとぼけた表情でいる。

「俺は仕事上、相手の表情を読む事が要求されるから、お前の笑みでバレバレだ。わざとだろ？」

「あっさりバレしてしまったか……。と、本題に入る前に一つ聞くが、お前の仕事とやらはなんなのだ？」

その質問に答えるか答えぬべきか迷ったが、結局、正直に答える事にした。

「……潜入、情報収集をオプションとした雇われ屋だ」

そう言うと、再度シヴァは微笑した。

「ふむ、だから初めて会った時、素早い動きが出来たのか……一度、本気でやりあってみたいものだな」

「断る。俺とお前がやりあったら、町を一つ消しそうだ」

俺は微笑を返す。

するとシヴァは、腹の底から笑い出した。

「はっはっはっ、冗談がうまいなあ。さて、お前が戦闘向きだという事がわかったからな。……率直に言うが、その剣はお前に合った剣ではないだろ？」

そう言っただ俺の腰につけてある鞘こやに納められた剣を指で示し、まあ私は一度も見えていないがな、と付け加えて口元に笑みを作った。俺は軽く頷くとシヴァは、よし、と言って頷く。

「ならば私について来い。いい場所を教えてやる」

シヴァはそう言いながら、最後の一口を食べ終えたミーナの口元をハンカチで拭いて彼女の手をとって歩き出した。

その後を、俺は頭を掻きながらついて行く。

## 第十八話：武器商店

所々に飾られたシャンデリアが少々揺れにより、一層綺麗な光を醸し出している車内の通路を、俺はシヴァの後ろについて歩いている。

先ほどまで一緒にいたミーナには、客室にいるカイ達に預けておいた。

あいつらならすぐに懐くだろう、と思っていると、急にシヴァが立ち止まった。

「……着いたぞ、ここだ」

気付くとそこには、今まで通って来た連結部分の扉とは少し違い”ここから先第二車両につき、関係者以外立ち入り禁止”という文字が大きく書かれていた。

「……お前、ここに書いてある文字が読めないのか？」

「早とちりするな、よく見ている」

そう言うときヴァは、乗車券であるブロンズのカードをスーツのポケットから取り出し、扉の右側にある機械に通した。

するとその機械は、ピーツという音を立て、同時に扉が左にスライドした。

「は！？……何で開いたんだ？」

「知りたければ自分のカードを見るんだな」

俺は言われた通りにカードを取り出す。

表には”アクアトレイン乗車用カード”という文字が彫られている

るが、裏を見ると”第二車両通行許可・武器商店使用許可”と彫られていた。

「……盲点だった……まさか裏にこんなものが……」

「何をぶつぶつ言っているのだ？ 早く入るぞ」

そう言い残してシヴァは中に入って行った為、俺も急いで中に入る。

入った通路は、今まで通って来た通路と違い殺風景で、大人二人が隣り合わせでやつと通れるくらいだ。

カードには”武器商店使用許可”と書いてあったが、通路には武器どころかガラクターつすら置いてなく、ただただ真っ直ぐな通路を進んで行くだけだった。

そして、そろそろ第一車両の扉に到着しそうになった為、何もないじゃねえかと言おうとしたその時、突然シヴァは左に曲がった。不思議に思い、シヴァが曲がった場所まで行くと、そこには二階に繋がる小さな階段があった。

その階段を、俺は迷わずに上る。

その後、上りきった先で見た光景は、第二車両全域を敷き詰めるようにして置かれた、大量の武器だった。

目の前に広がる光景にユウは少し驚きながらも、内心は喜んでいった。

だが口元に出来そうな笑みを我慢して辺りを見渡すと、狭そうな

カウンターにいる店主と思われる、白髪を無造作に伸ばした初老の男の姿と、その男と会話をしているシヴァの姿を見つけた。

「つまりは、試しに持ってみたり装着してみてもよいということだな？」

「ええ、でないとお客様の信用を得られないのですよ。よって、代金は後払いとなっていますが………万引きは駄目ですよ？」

「もちろん、それはわかっている。なあ、ユウ」

突然話を振られたユウは戸惑いながらも、あぁと答えた。

「それもそうですね。ヒヒヒッ」

二人の言葉を聞いた店主は不気味な声で笑った。

ユウはその笑い声を不快に思いながらも、カウンター前まで歩み寄る。

その行動に店主は、やはり笑みをこぼす。

彼はその笑みを無視し、問いかけた。

「……一つ聞く。ここは買い取りもやっているのか？」

「よくぞ聞いてくれました、そしてその通りでございます。さすがに、この店にある分だけでは商品の種類が足りませんからね。こちらでは武器はもちろんの事、あらゆる部品やジャンク、宝石、賢石などを買収りさせていただいております。ヒヒヒッ」

「そうか、それじゃこいつを買収り取ってくれるか？」

ユウはそう言って、腰の鞘に納められていた剣を抜き出してカウンターに置く。

その剣は刃渡りこそ標準の物だが、刀身はありえないくらいに鋭く、純金のように輝いており、たくさんの宝石がちりばめられてい

た。

それを見た店主は、驚いて目を見開く。

「こ、これはすごいすな！ 百万ラノンはくだらないですぞ！！

ですが、金額が金額ですので……」

「わかつている。その金額分、ここで購入すればいいんだろ？」

それを聞いた店主は安心したのか、吐息を一つ。

「良いお察し、ありがとうございます。こちらとしては、二十万ラノンまでなら買い取り金額としてお渡しする事ができます」

「そうか………それじゃ」

ユウは言葉を途中で止め、あらかじめ部屋から持って来ていた力バンをカウンターに置く。

そして中に手を入れ、黒い塊を取り出した。

ゴトツという重みのある音と共に置かれたそれを見て、店主は問う。

「それは………なんですか？」

「知りたいか？」

その言葉に、店主は数回頷く。

「これは拳銃”ガバメント”という物だ。先日、俺達のいた村を襲撃したやつらが持っていてな。まだ世に出回っていない、俺がたまたま知っていた物で、魔力によって構成されや弾丸を高速で打ち出す武器なんだ」

そう言った後、再度袋に手を入れる。



次に取り出したのは長細くて黒い塊と、それよりも少しばかり大きい、四つほどのボタンがついた長方形の箱だ。

ユウはまず、長細くて黒い塊を持ち上げて説明を始める。

「これは弾倉マガジンと呼ばれる、銃弾を入れておく物だ。これをガバメントに入れる事によって、銃弾を撃てる」

そして、と言って次に持ち上げたのは長方形の箱。

「これは”チャージャー”と言って、これに弾倉を差し込む事で、銃弾を補充できる。だが、銃弾を構成するための魔力は装着者の魔力を使う為、連続使用は魔術師の素質があるやつだけだ」

ユウは説明を終えた後、三つを店主の目の前にまとめて置く。

「これらを入れるためのホルスターを作ってほしい。ベルトに装着できるようにやつを」

「ちよつと待って下さい」

また別の物の説明を始めたユウを店主は一度止め、カウンターの下から、紙とペンを取り出した。

「お手数ですが、こちらに設計図を描いていただけませんか？」

問いにユウは頷き、ペンを取って描き始める。

その途中、彼の絵を見たシヴァは右手を顎に添えて呟く。

「なかなか上手いな。それに比べてカイの描く絵ときたら……」

ユウを見習って欲しいものだ、と言いながらため息をつく。

「…………できたぞ」

シヴァが呟いている間に、ユウは設計図を描き終え、店主に渡す。それを見た店主は興味深い表情をし、思わず笑みをこぼした。

「…………これはこれは、確かにこういう形だと綺麗に納まりますな……ふむ、久々に腕がなりますよ。ヒヒヒッ」

「それとだな、ここで売っている物の値はどれくらいだ？」

「ええつとですね……………この武器の多くは五年前、私の友人と共に極秘で発見した新素材”エターナル”によって永遠の命を与えられております。よって、銅や鉄で出来た物よりも軽くて使いやすく、折れる以外で武器が死ぬ事はありません。錆びる事なんてもつてのほかです。その為、信頼を得られるような物にするためにお金を失いますので、売値はナイフ一本でも大体一万、短剣サイズで二、三万、長剣サイズで五万、大剣サイズで六万ラノンほどです」

そして店主は最後に、もちろん他店では取り扱っていない素材ですと付け加えた。

それを聞いたユウは満足そうな表情で頷く。

「なら、このホルスターを五十万で最高の物に仕上げてくれ」

「五十万……………ですか？……………わかりました、任せて下さい。きつと貴方様が満足できるような物に仕上げて差し上げますよ。ヒヒヒッ」

「ああ、頼んだ」

ユウはそう言い残して、武器を見に行こうと後ろに向こうとすると、不意に店主が彼を呼び止めた。

「それとですね、この武器の話は当然、他言は  
「無用だ。というよりダメだ。……………こんな武器は、世の中に出回  
ってはいけない。せめて、この世界には……………」

最後の一言に、店主は首を傾げながらも、わかりましたと頷いて、  
ガバメントの寸法を取り始めた。

その反応に対してユウは安堵の吐息をし、再度後ろに向き、奥へ  
と向かおうとする。

すると、先ほどまでカウンター近くの棚を見ていたシヴァが彼の  
横に並んだ。

「……………あの剣は、どこで手に入れたのだ？」

その問いに、ユウはしばらく間を空けて答えた。

「……………アルグの村で、キリーって人に渡された。金に困った時に  
これ売って足しにな、って言ってな」

その答えに、シヴァは納得したのか、私の考えが外れてよかった  
と呟き、先ほど見ていた棚に戻って行った。

その後ユウは、彼女の方を振り向く事なく、近くに重ねてあった  
カゴを一つ手に取り、奥へと進んで行った。

薄暗い闇の中に。

## 第十九話：ソレは命を簡単に・・・

銃は卑怯だと、アイツは言った。

俺がいたジードという世界の、俺が住んでいた村で、毎日のように。

俺の世界では、銃が使われるようになる前まで、一般的に兵士は剣、弓などの近距離・中距離武器を使っていた。

剣や弓などは、訓練などの苦労を重ねて肉体と精神を鍛え上げ、その努力した分だけ力が発揮され、強さの源となる。

剣を振るうため、弓の弦を引くための筋力も求められる。

だが、銃はどうか。

引き金一つ引くだけで、簡単に命を奪ってしまふ。指一本で一つの命が消える。

だが、俺はその銃をこれから使っていこうとしている。  
もしアイツがそれを知ったら、何て言ってくるだろうな……………

『まず殴られるわね。その後、永久に牢屋行き』

突然、ティファが明るい声で話しかけてきた。

感覚はないが、右の肩に手を添えて。

…………… つかお前、言い方と内容が怖いくらいに違うぞ。

『過去の思い出に浸っているやつには、丁度いいのよ。それで、どんな武器を買うつもりなの？』

それを今探してるんだ…………… ん？

不意に、一つの武器が目に残る。

その武器を手に取り、刃を撫でる。

サイズは手の平よりも少し大きく、刃が弧を描くように曲がって

おり、フックのような形をしている。

そして、持ち手の部分の下には、分離したホルダーが付いており、ベルトに装着できるようになっている。

そして、そのホルダーを引くと持ち手の部分から、エターナルをしていると思われるチェーンが出て来た。

試しに刃を商品の棚に引っかけて、ホルダーを持ったまま後ろに下がり、長さを確かめてみる事にした。

するとチェーンは四、五メートルほど伸び、止まった。

『結構伸びるわね』

ティファの言葉に俺は、ああと答える。

これは俺があつちの世界で使っていた武器とほとんど同じタイプだ。

『へえ、こんなのをねえ……………』

俺の仕事には潜入もあつたからな。

そういう時は結構役立った。

その言葉に対してティファは、あらそうと素っ気無く返事をする。

俺はコイツが会話を終わらせたと知り、武器探しを再開する。

「……………いくらなんでもありすぎだろ……………」

一車両分のスペースを丸ごと使った商品の棚の中間辺りでフック型の武器を見つけた後、結構歩いたと思ったが、まだ行き止まりが見えないでいた。

その途中、俺はエターナル仕様のナイフを十本と、太ももあたりに巻く事が出来るナイフが各四本まで収納可能なケースを二つ、ナイフを一本だけ仕込ませる事が出来る靴を一足、長剣を一本、カゴに入れていた。

そして今、目に留まった緑色の髪留めを一つ手に取る。

『……その髪留めは何に使うの？』

ん？ これはミーナへのプレゼントだ。  
こういう物は、持っていて損はしないからな。

『まあ、それもそうなんだけど……こういう店には縁のなさそうな物なのに、商品として置いてあるのね』

同感だ………ん？

『どうしたの？ さっきと同じパターン使って』

ほっとけ。

それよりも、俺の視界に入ったのは小さな輝きを持った白色の賢石だった。

俺はそれを一つ、手に取る。

手の平に納まったそれは、指に包まれてもなお、光が染み出している。

『その石って、ジードにあった、思い出の意味を持った記憶石メモリーストーンに似てるわね？』

「ああ、こつちではどんな意味を持っているんだろうな……とりあえず、同じ意味である気がする」

そう呟きながら、同じ賢石を六個手に取り、合計七個をカゴに入れる。

『あれ？ 七個って事は……私の分も入っているの！？』

当たり前だ。

お前も……仲間の一人だからな。

『んもう、カツコつけちゃって〜かわいいんだからあ〜』

うるせえな、顔を指で突くな。

感覚はなくても何か嫌だ。

……とりあえず、そろそろ店主のところに戻るぞ。

そう心の中で呟き、カゴを持って来た道を引き返す事にした。行き止まりはまだ見えていなかった。

奥から戻って来たユウを待っていた店主は、彼が持っているカゴを見て微笑した。

それと同時に、カウンター下から電卓を取り出して会計準備をする。

「コレだけ頼む……いくらになりそうだ？」

「ほうほう、私目にとっては嬉しい量ですね……それでは会計を始めます」

そう言いつつ、指はすでに電卓を叩き始めていた。

「……ほう、これはこれは。お目が高いですな、賢石”イシユタル”をご購入とは……」

店主は嬉しそうな笑みを浮かべながら、ユウを見る。  
それを見たユウは苦笑。

「あ、ああ……意味があれだからな、えと……」

「意味は愛。そしてその名は愛の女神から取ったらしいです。所持者に限らない愛を与えられています」

「……少し違ったな……いや、別物じゃないだろ、少し似てる」

「……………？」

店主は、ユウの呟きが誰かと会話をしているように聞こえ、不思議そうな顔で首を傾げるが、すぐに笑みに変えてヒヒヒツと笑った。

「数からして、お仲間さん達へのプレゼントですね？」

「え？ ああ、旅の安全を祈ってな」

「そうですか……では、少々お安くさせていただきます。ヒヒヒツ」

再度不気味な笑い声を出した店主に、ユウは苦笑しながらも、ありがとつ、つと告げる。

そして、会計が長引くと思い、近くにいるシヴァの元へと向かった。



すると彼女は、ユウが来るのを待っていたかのように問いながら振り向く。

「なあ、ユウ。カイが持っている力の事、どう思う？ ……正直に答えてくれ」

カイの力とは、異形をした左手で触れたものの時間を変える事ができる、時を超越する力であり、この旅が始まったきっかけだ。

その問いにユウは、少し考えてから口を開く。

「……………時を司る、神の力……………ともいえるな。正直に、と言われても返答に困る。だが、あれほどの力だ。この旅の支障をきたす事態は必ず起きるな。あいつを殺そうとする者、あいつの力を奪おうとする者、全てだ。……………まあ、時を司るほどの力だ。その内、時空をも司る事ができるかもしれない。その為にも、あいつを守ってやる。自分の世界に帰る為、それにあいつ自身少々気に入っているしな」

最後の言葉は微笑で、シヴァの顔を見て言った。  
それに対してシヴァは、ありがとう、と言って目を伏せる。  
そんな彼女に、今度はユウが質問した。

「お前はどう思っているんだ？」

問いに、シヴァは苦笑。

「あいつは私の教え子だ。信じてやれなくてどうする？ ……あいつとシルクには親がいないのだ。だから昔は私が世話をしていたから、自分の子供のように思える」

「そう……………なのか。……………そうだな。なら、戦える俺達が少しでも

守ってやらないとな」

「はははは、カイは別にいいぞ？ あいつは私が鍛えたのだから、そう簡単には死なない。それよりも守るべきやつらは、シルクとミナーナだ」

その言葉にユウは、それもそうだなと言い、同時に二人は微笑した。

つとその時、店主は会計を終えて電卓をユウに向けて置く。

「……………ではこちら、先ほどのご依頼された商品を含めまして、合計八十万六千ラノンとなりましたので、買い取り金、百万ラノンからこれを引きまして……………私がお出しする金額は十九万四千ラノンとなりますが、よろしかったですか？」

「ああ、それで充分だ。……………それと、ガバメントのホルスターは完成したか？」

「ええ、もちろんですとも。設計図と、ほとんど瓜二つですよ。ヒヒッ」

店主は不気味な笑い声を出しながら、奥の部屋から箱を持って来た。

彼はそれをカウンターの上に置き、箱を開ける。

すると中には、縦に長い形で、大きい穴とやや小さい穴の二つがあり、大きな穴には拳銃”ガバメント”が、やや小さな穴にはチャージャーが入る仕様となっていた。

そして大きな穴の方には、ガバメントが落ちないようにストッパーがついている。

ユウはそれを手に取って裏を見ると、そこにはベルトに通すための隙間が出来ていた。

彼はそれを見て頷き、さっそくベルトに装着し始める。

「素材は、これまたエターナルを使用している為、軽くて頑丈という、最高の作品となっております。必ずや、良き装備品の一つとなるでしょう」

ユウは店主の説明を聞きながら、装着したホルスターを後ろに回し、ストッパーを外してガバメントを入れる。

その後、小さい方の穴にチャージャーを装着してマガジンをセツトする。

彼はそれが気に入ったのか、小さく頷いて店主の方を向く。

「ありがとう、いい出来だ」

「気に入って頂いて何よりですよ。ヒヒヒッ」

その後店主は表情を変えて、それとですねと言って話を続ける。

「あの弧を描いた武器”三日月”を選んだのは何故ですか？」

「三日月、というのか。……ああいう形の武器を昔、よく使っていたからだ。俺にとって、使い慣れた武器なんだよ」

「そうだったのですか……では最後に 貴方のお名前を教えてくださいませんか？」

その言葉にユウは少し考えた後、答える。

「……ユウ・ウラハスだ」

「ありがとうございます。では……私はブルザット・ローエンです。それでは、またどこかで出会える事を楽しみにしておりますよ」

そう言いながらブルザットは、ユウが購入した商品の入ったケースをカウンターの上に置く。

それはユウは手に取り、会えたらなと言いついて残してシヴァと共に階段を降りて行った。

そして、残ったブルザットは口元に笑みを作った。

「会えますよ……この私と、そして三日月と出会ってしまった以上ね。ヒヒヒッ」

他に誰一人としない薄暗い中、不気味な笑い声が響き渡る。

## 第二十話：二対一のトランプ対決

「さて、ユウがミーナちゃんを私達に預けていったんだけど……何をしようか？」

窓際で外を見ているミーナを見ながら、シルクは困ったような表情を作っていた。

その時、カイは何か思いついたのか右手を平たくしてポンツと叩く。

「そうだ、ネプチューンの荷物に面白そうな物がある気がする……」

カイはそう言いながら、ネプチューンの荷物を探り始めた。するとややあつて、彼は何かを見つけたのか表情が変わった。

「……おお！ いい物見つけたぜ！ トランプだ、トランプ！ コレで遊ぼうぜ」

そう言つてカイが取り出した物は、翼を抱き寄せるように縮めた天使が描かれた箱だ。

彼は早速、箱を開けて中の物を取り出す。

中から出てきた物は、色々な幻獣や神々と、隅に数字と模様が描かれたカードで、一番下にあつたジョーカーには白と黒の背景が中心を境に対照的になっていて、その間に人間が描かれている物だった。

まるで人の心を写しているように。

「……なんかタロットカードみたいだね」

「言われて見れば……まあ、数字があるからトランプだろ、たぶ

ん」

カイは苦笑しながら、カードをシャッフルし始める。  
そして彼は、その手を休めずにシルクに問う。

「……………で、何をするんだ？」

問いに、シルクは顎に手を当てて考える。

その後、そうだ！、と言って窓際にいるミーナを指でさした。

「ミーナちゃん！ズバリ、トランプで何かしたい事ある？」

その問いにミーナは、首を傾げつつも答える。

「ん……………ババ抜き！」

「よし、決まりだな　って、ああー！」

「ちょ、ちよっと、何思いつきりトランプをばら撒いているんだよ  
お！」

「ごめん、手が滑って…………と、とりあえず、自分の近くに落ちたカードを手当たり次第拾って。そのまま始めよう」

「む、無理矢理だね…………まあ、別にいいけど。いい具合に数字が被っているからね、ふふふ…………」

シルクは余裕そうに笑いながら同じ数字のカードを捨てているのに対し、彼女の隣りにいるミーナは、手持ちのカードと睨めっこしながら慎重にカードを捨てていた。

「…………よし、終わった。お前らは終わったか？」

「うん、私達も終わったよ　って、何でカイのカードはそんなに  
も多いんだよお！？」

「は、ははは……扇子みたいだろ………？」

思わず苦笑いしているカイのカードは十枚ほどで、カイが言った通り、扇状になるほどだった。

「ま、まあ、じゃんけんでもして順番を決めようよ。それじゃいくよ、最初は――」

「ぐー………つて、お前らなんでパー出してんだよ！」

「やったね、シルク！」

「あはは、その通りだね！」

シルクとミーナは、そう言いながら右手を上げてハイタッチし、室内に快音を響かせる。

「あ、あれ？　これって卑怯なんじゃ――」

「それじゃあ順番は、私がミーナのを、ミーナがカイのを、そしてカイが私のを取るっていうのでいいね？」

そう言ってシルクは、ミーナの手元で小さな扇状に展開されたカードから一枚引く。

「やった、揃ったあ」

シルクはその揃ったカードを捨てた。

それに続いてミーナも、カイのカードを一枚引いた。

「あ、私も揃った」

シルクに続き、ミーナまでもがカードを捨てる。そして、次はカイがシルクのカードを引く番だ。

すると彼女の扇状のカードから、一枚のカードが頭を出した。

もちろん、カイの方からは裏面しか見えない為、それが何かかわからない。

だが彼は、反射的にそのカードを引く。

その瞬間、シルクは口元に笑みを作った。

それもそのはず、彼が引いたカードはジョーカーだったからだ。

彼はそのジョーカーを見て苦笑し、すぐに後ろを向いてシャッフルし始める。

ミーナはその行動に、引いたカードが何なのかを悟ったのかシルクに近寄り、小声で話し始めた。

「……………カイって単純だね」

「その通りだよ、昔っからああなんだ。扱いやすくて仕方がないくらい」

言いながらシルクは、クスクスツと笑う。

そしてその後、何かを思いついたかのように、あっと言ってミーナの耳に手を添えて小声で何かを提案し始めた。

「……………っていうのでいい？」

その問いにミーナが小さく頷くと、シルクは再度口元に笑みを作る。

と、丁度その時、カイはシャッフルを終えたのか、彼女達の方に向き直した。

「よし、これで……………って、何お前らニヤニヤしてるんだ？」

「別に何でもないよお？　ねえ？」

「うん、何でもないよ」

「な、何かお前ら怖いぞ……………まあいいか。そえじゃ、再開だ！」



カイは苦笑しながらも、再開の合図を出し、シルクはミーナのカードを引いた。

するとその時、ミーナはふと入口の方を向いた。

彼女は小さな物音を聞いたのだ。

だが、そこには何もなく、聞こえたのは彼女だけだった。

その事に首を傾げつつも、彼女はカイのカードに手を伸ばす。

数分後、列車の汽笛と共にカイ達のいる客室内で歓喜の音が響いた。

「あつがりー、いつちばーん！」

言いながらシルクは、最後のカードを捨てた。

残ったのは、一枚のカードを持ったミーナと、二枚のカードを持ったカイだけだ。

そして、次はミーナがカイのカードを引く番だ。

つまりは、彼女がジョーカー以外を引く事によって、カイの負けは決定する。

そのため彼は、念入りに二枚をシャッフルしていた。

その後、微笑を浮かべながらミーナにカードを向ける。

すると彼女は、迷わずにカイから向かって右側のカードを掴んだ。その瞬間、カイの表情は見る見る内に変わり、焦りの表情になった。

「ほ、本当にそれでい」

「うん、これでいいよ」

「……………ミ、ミーナ、見逃してくれない？」

「え？ ……別にいいよ？」

「ほ、本当か！？ ありがとう！ キミは俺のてん」

「えいつ！ あがりー」

「ノオオオオオオツツ！！」

「……………作戦通りい……………」

シルクの作戦（？）にまんまとはめられてしまった事に気付かず、カイは頭を抱えながら部屋の中を転げまわった。

そんな彼を、シルクは哀れみの目で見ながらほくそ笑んでいた。

そして、そのカイを実際に騙したミーナは、腹を抱えて笑っていた。

その後シルクは、立ち上がってカイに向かって人差し指を向ける。

「さて、敗者であるカイは、私とミーナちゃんに何か買って来てね」

「ええ！？ 聞いてねえぞそんな」

「あ、私はアイスクリームね」

「おい、ちょ」

「私もアイスクリーム！ トリップルで、イチゴとチョコレートとメロン！」

カイに喋る隙を与える間もなくシルクとミーナが注文をした為、彼は啞然としつつ、ため息をついて立ち上がった。

その表情には、諦めが見える。

「……………わかったよ、行ってくる……………」

「さっすがカイ！ それじゃ、行つてらっしゃーい！」

それを聞いたカイは、再度ため息をつきながら部屋の入口へと向かう。

入口のドアはスライド式で、向かつて右側のスイッチを押す事によつて開く仕組みになっている。

ちなみに入る場合は、通路側から向かつて左側についている装置に乗車券を添える事によつて開く。

これは、もちろん他の者の侵入するのを防ぐための物である。

その為、部屋ごとに乗車券が異なっているのだ。

だが、そのシステムを知らず、部屋に入れないと嘆く人が多いらしい。

カイもその一人だった。そのカイは通路に出た後、左右を交互に見て首を傾げる。

「……………どっちに行けばいいんだ？」

頭上にクエスチョンマークが付くくらいに考えていると不意に、左に人が立っている事に気付く。

その人は黒いローブを着込んでおり、顔を見るからには男のようだ。

そして、不機嫌そうに紅い目でカイを睨んでいるようだ。

それもそのはず、カイは通路のど真ん中に立っていたからだ。

彼はその事に気付かず、男に問いかける。

「あ、あのー、ショップはどちらに行けばあるかわかりますか？」

問いに、男はしばらく無言のままでいたが、右手を垂直に上げて、カイから見て左の通路を人差し指でさした。

「……………あっちだ」

その声には少し怒りが込められていたが、同時に仕方なさも感じ取れた。

「あ、ありがとうございます」

カイはその声に怒りを感じたのか、少し戸惑いながらも礼を言つて、早足で男がさした方向へと向かった。

その時、男は去っていくカイを見ながら舌打ちをし、カイが向かった場所方とは逆の方向に歩き始めた。

## 第二十一話：新たな大陸を目前に

太陽は沈み、世界は暗闇に包まれながらも、月の放つわずかな光が世界を薄く照らしている。

その月を鏡のように映し出した海上を走る光の列、アクアトレインは二度目の汽笛を鳴らした。

この汽笛は、ミーン大陸とカナン大陸の間を三分の二まで走ったという合図だ。

その音を聞きながら、自分達の客室がある第六車両への歩みを続けていたユウとシヴァは現在、第四車両の中間あたりにいた。

「……なあ、ユウ」

途中、シヴァがユウを呼んだ。

すると彼は、ペースを弱めて彼女の横に並ぶ。

「すまない、一つ聞きたいのだが……あの拳銃とかいう武器、あれはお前の世界の武器か？」

「……ああ、そうだ」

「そう、か……思ったのだが、あの武器は便利と言っていいものだろうか」

シヴァは腕を組み、話を続ける。

「戦いに関しては強いだろう。あれを使えば、簡単に相手を殺す事が出来る。……だが、私は正直、あんな武器は許せないのだ。私達戦士は、訓練と経験で強くなれる。だが、銃は何だ？あんな物、引き金さえ引く事が出来れば、誰だって撃てるではないか……！」

「わかってる。だから俺は、いくら殺しの仕事であっても銃だけ

は使わなかった」

ユウは、だが……と呟きながら腰のホルスターに手を添える。

「正直、コレを使わなければ、この旅を生きて終わらす事が出来ない気がするんだ。……次の大陸から、何かとんでもない事が起きる気がするからな……」

それを聞いたシヴァはため息を一つし、組んでいた腕を崩して方を竦めた。

「何暗い話をしているんだろっな、私は。ここで話を変えようか。」

ミーナ異常なまでの可愛さについてなんだが」

「変わりすぎだっ。それに、もう少しで会えるんだから我慢しろよ」

そう言っユウは、いつの間にか第六車両の入口に到着していた事に驚きながらもスライド式のドアを手動で開けて、客室へと向かった。

「んっッ冷たくて美味しい、やっぱり夏はこれだね！」

シルクは、カイが買ってきてくれたアイスクリームを舐めながら歓声を上げていた。

そんな彼女を見て、カイは苦笑する。

「いくら夏だと言っても、車内はエンリルの賢石が設置されているおかげで寒いくらいなんだぜ？　なのに、よくそんな冷たい物を食べるな」

それを聞いたシルクは、アイスクリームを持っていない左手の人差し指を立てて左右に振った。

「チツチツチツ、甘いよカイ君。夏だからという実感を心の中で持ちながら

冷たくてあまーいアイスクリームを食べる。これほどまでに嬉しい事はないんだよ？　この世の女の子は、みんなそう思っているってねー、ミーナちゃん？」

問われたミーナは、アイスクリームを食べるのに必死なのか、声に出さずに、ただ頷いていた。

「そんなもんか？　それはシルク達だけだと思っただけ……イタタタタッ！　……………何で!？」

「そーんなデリカシーのない人には、私の指で十六連打だあ！　まいったか、このやろっつ」

そう言ってシルクは、勝ち誇ったような笑みを浮かべながら、再度アイスクリームを食べ始める。

そんな二人を見て、カイは額をさすりながら苦笑していた。するとその時、入口のドアが、何の前触れもなく開いた。

「　　なんだ？　また食ってるのか、ミーナ」

「ははは、よいではないか。可愛ければ全て良し、だ」

そんな会話をしながら入って来たのは、ユウとシヴァだった。

「あ、シヴァちゃんとユウユウだ！ おかえりー」

「ユ、ユウユウって……………」

「ユウユウ」

「ミーナまで……………」

その光景に皆が笑う中、ユウは苦笑し、同時にため息をついた。  
そんな中、シヴァは一つの疑問を持った。

「…………… そういえば、ネプチューンはどこに行ったのだ？」

その問いに、皆もネプチューンがいない事に気付く。

「どこに行ったんだ？ あいつ」

「こういう時は、名前を呼んでみればいいんだよ」

言ってシルクは、両手を筒状にして口元に添えた。

「ネプチューンっ！！」

「呼んだっちゃ？」

「ひゃああああっ！！」

シルクが名前を呼んだ瞬間、突然入口近くの天井が開いてネプチューンが顔を出した。

それに驚いた彼女は、反射的にカイにしがみつく。

「呼んだ本人が一番驚くなよ……………」



「だ、だって、突然天井が開いたんだもんっ！」

「……………少なくとも、驚いているのはお前だけじゃないぞ」

ユウの言葉に、皆が彼の方を向くと、涙目を浮かべながら、彼の脚にしがみついているミーナの姿があった。

「あ、あれ？ わっちのせい？」

ネプチューンの問いに、誰も答える事なく、シヴァはミーナの近くに歩み寄ってしゃがみ込み、両手を広げた。

「さあミーナ、私の胸に飛び込んで来い！ そんな硬い脚に掴まっているより、私のこの恵まれた胸に！」

シヴァの行動に、ミーナは少し戸惑いながらも、結局飛び込んだ。シヴァは、飛び込んで来たミーナを両手で抱き寄せ、頭を撫でる。

「か、可愛い……………」

「……………アホだな……………」 「……………アホだっちゃ……………」

同じコメントをしたユウとネプチューンは、互いに顔を見合わせ、同時にため息をした。

それを見たシルクとカイは、思わず口元を引きつらせて苦笑。

とその時、カイは何かを思い出したかのようにネプチューンを呼んだ。

「……………なあ、そういえばお前、何で天井に入ってたんだ？」

「おお！ よくぞ聞いてくれたぜよ！ 急に眠くなってきた時に、丁度全ての客室に二階が付いている事を思い出したんっちょ。だから、ここで寝ていたわけだよ」

その言葉に、カイとシルクは疑問を持った。

「……………あれ？ いつの間に入って来たの？」

「それは、おたくらがトランプで遊んでいた時ぜよ。すごい集中力だったっちゃ」

そう、笑いながら言うネプチューンとは違い、その言葉を聞いていたシヴァは、怒りのこもった表情でカイを睨んだ。

「……………カイ、お前は私の基礎訓練を受けて合格したのにも拘らず、こんな男の気配を察知する事も出来なかったのか？」  
「こ、こんなって……………」

シヴァはネプチューンの呟きを無視し、話を続ける。

「どうやら、再教育が必要のようだ……………カナン大陸に着いたら、完璧になるまで特訓だ！」

「そ、そんなあゝ」

カイはそう嘆きながら、崩れるように倒れた。

そんな彼を見て、その場にいた全員が大笑いした。

その時、アクアトレイン内に汽笛の音が響き渡る。

これは、カナン大陸に到着する合図だ。

その合図を聞いた皆は、降りる準備を始めた。

「……………そういえば、カナン大陸ってどんなところなんだ？」

カイの問いに、ネプチューンが進んで答える。

「カナン大陸は技術と商業に発展した町や都市が多いっちゃ。特に、このアクアトレインが向かっているカナン大陸の首都であるノアは、世界の賢石生産率を半分以上占めていて、産業が非常に盛んなため、わっちら商人にとって始まりの町なんだぜよ」  
「へえ……………面白そうな町だな！」

そう言ってカイは、荷物を持ち始める。

「呑気なやつだな、カイは」  
「それがカイの良い所じゃんっ！ 私達も呑気に行こうよっ」

そうシルクに言われながらも、ユウはため息一つして仕方ないような表情で立ち上がる。

そして一行は、アクアトレインがノアに到着するのを待つのであった。

## 第二十二話：不吉の存在

カイ達一行がアクアトレインを降りて駅から出た時には、すでに辺りは暗くなっており、月が真上に、そして時刻は深夜の一時を回っていた。

だが、駅の近くのやや大きな建物は、未だに煌々と明かりを灯していた。

そして一行は、その建物に向かって歩き出す。

その建物とは、アクアトレイン利用者が無料で宿泊する事ができる　とは言っても、乗車券の料金に含まれているのだが　観光客向けのホテルだ。

看板には”リラックスリゾート”と書かれており、入口近くにはヤシの木が一本だけ立てられていた。

シルクはその建物を見て、両手を挙げて感激していた。

その彼女の片手には、白色の賢石が握られている。

これは、アクアトレインの武器商店に行った際、ユウが全員に旅の安全を願って購入した、愛の意味を持つ賢石”イシュタル”だ。ユウはこれを、アクアトレインを降りた時に全員に配っていたのだ。

ちなみに、同時に購入した金色の髪留めは、渡す相手であるミーナの髪についており、光を僅かに反射させている。

その賢石”イシュタル”を、ネプチューンは上に投げて遊びながら笑みを浮かべていた。

「それにしても、わっちらは運がよかったぜよ」

「うん、確かに！　これはカイの手柄だもんね！　……………って、どうしたの？カイ」

シルクが問いかけた先にいるカイは、暗闇の空を見上げたまま動

かなかった。

彼の視線の先には、誰もが見える半透明の巨大な羅針盤が見えている。

その後ややあってから、彼はゆっくりと口を開いた。

「……………近い……………光が、近いよ……………！」

その言葉に、シヴァとシルク、ユウは驚いた。

「光って、もしかして羅針盤の光か！？」

ユウの問いに、カイは頷き、

「ネプチューン、この町の近くに昔からある遺跡か何かない？」

「遺跡？ 確かにあったぜ……………でもその前に、あの羅針盤とカイとの関係と、その光とやらを教えてほしいっちょ」

その頼みをシヴァが、わかったと答える。

「どうせなら、この旅の理由も教える。そのために、そろそろ宿に入るっ」

呼びかけに、その場にいた全員が同意し、一行は宿に入る事にした。

一行が入った宿”リラックスリゾート”は名前通りではなく、内部は至ってシンプルであり、廊下の電灯は時々消えており、客室内も二段ベッドが四個ほどしきつめられていて、小さい窓が入口と対象的な位置に一つだけあるという、まるで寮のような場所だった。

唯一便利なのは、風を起こして室内の温度を調節できる賢石”エンリル”が設置されており、全ての室内が、夏の暑さに負けないほどの涼しさを保っている事だ。

だが、三〇五号室のエンリルにはヒビが入っていて、風の調節が弱いらしい。

その客室を引き当ててしまった運の悪い者が、カイ達だった。

「うわぁ〜部屋が生温い〜二段ベッドのせいで跳ねられない〜」

シルクは窓側にある二段ベッドの下段で、文句を言いながら転げまわっていた。

そんなシルクに、カイは苦笑しながら近づく。

「おいおい、少しは女の子らしくしてよ……って、ああほら、スカートがはだけるって」

「だって暑いんだもあんなっ！」

「え？ それじゃあエンリル使えばいいじゃないか」

そう言ってカイは、自分のポケットから何かを取り出す。

「ほら、今後の事を考えてアクアトレインから一個取ってきたんだ」  
「わぁ！ さっすがカイ！ 頼りになるーっ」

言っでシルクは喜びながら、再度転げまわった。

そんな二人の会話を聞いていたユウは、心の中で、盗って来たの

間違いだろ………つと呟きながら、入口側にあるベッドの下段でミーナに膝枕をしてあげているシヴァの隣に座った。

そして、小声で、

「……あいつらつて、バカカップルなのか？」

「な、何だ、バカカップルとは……！？……馬鹿なカップルという意味か？」

聞き慣れない言葉を聞いたシヴァは少し戸惑いながらも、見事に正解を当てた。

「昔からあんな感じた。確かに周りからは馬鹿なカップルだと認識されているが、当の本人達は、幼馴染みだからと言い切っているんだ。……全く、お互い自分の気持ちに素直になればいいものを……」

それを聞いたユウは、それは教師としてのセリフでいいのか？という言葉を喉の奥で止めて代わりに、そうだなと答えた。

「あのお、羅針盤の話はまだかのお？」

不意に、シヴァの前に立って問うてきたのはネプチューンだった。彼は頭を掻きながら、申し訳なさそうな表情で再度問う。

「そろそろ話してくれてもいいつちよ？」

「うむ、そうだな。それでは話すでしょう」

そしてシヴァは、未だに騒いでいるカイとシルクを尻目に、ユウと共に今までの事を話し始めた。

アルグでの事、カイの左腕の事、ユウが別世界の人間である事、ミーナと出会った時の事、全てを………

同時刻。

カナン大陸首都、ノアの郊外にある森。

暗闇に飲み込まれた森には、今や夜の住民達が活動している。

コウモリ、狼、そしてモンスター。この暗闇こそ、彼らが自由に行動できるのだ。

そして彼らが睨んでいる先には、暗闇の中で唯一光る明かりがあった。

光は大きく、まるでその場所だけ昼のように感じられてしまうほどだ。

その光の中心には一人分の人影がある。

その人影は、漆黒のローブを羽織っており、鋭い目つきと真っ黒な短髪からして、どうやら男のようだ。

身長は一八〇センチを軽く超えており、背中にはその身長と同じ位の大剣が背負われていた。

彼は光を放っている賢石を片手に持ちながら、森の中を進んでいく。

その途中、突然彼の横に、輝く光が現れた。

その光は一瞬で収縮し、小さな人の形へと変わっていく。

そして光がなくなった時、現れたのは、背中に四枚の半透明な羽が生えた、臍だしルックが似合うフェアリーの少女だった。

彼女はニコニコしながら銀色の長髪を靡かせて、その場で一回転



する。

それと同時に、フリルが多数ついた服から光の粒子が散らばった。その粒子を見た男は、彼女をその紅色の目で睨みつける。

「……………ライト、その粉はもうやめろと言っただろ」

「ええ、いいじゃない、妖精ライト・ウィッチちゃんの、こんな登場の仕方は魅力的でしょ？」

ライト・ウィッチは、男の鋭い目を気にせずに、はらりと舞いながら彼の周りを飛び回る。

「そんなに堅苦しい態度なんかとってるとその内運が無くなって死んじゃうよ？ レイヴン」

レイヴン。不吉の鳥であるオオガラスの名を持つ男は、フンッと鼻で笑った。

「運など、俺には生まれた時から無尽蔵のようにある。だから、死ぬわけがないだろ」

その言葉にライトは、臭いセリフだねと言おうとしたが、レイヴンの顔が言い切ったという表情になっていた為、彼女は何も言わないようにした。

「……………何か来てるぞ……………」

突然の言葉にライトは、え？、と言って驚くが、言葉の意味に気が付き、辺りを見渡す。

だが、どこを見ても何も見えない。

「何がいるの？」

そう問いかけるライトを尻目に、レイヴンは一点を睨みつけた。  
そして、口元に笑みが生まれる。

「のウサギ  
……ヘアだ」

言った瞬間、レイヴンが睨みつけていた場所から、一人分の人影と賢石の光が反射して輝く刃が飛び出してきた。

だが、レイヴンはその動きを読んでいたのか、背負っていた大剣の柄つかを握り、前へと振り下ろして刃を防ぐ。

するとその人影は後ろに飛ばされた……が、宙返りで体勢を立て直し、上手く着地した。

それと同時に彼は、その人影の近くに手元の賢石を投げる。

投げられた賢石は、光を失わずに人影を照らし出す。

照らし出されたのは、白い半袖のコートを羽織っており、同じく白い短パンを穿いている女性だった。

だが普通の人間とは違い、頭に二本の長いウサギの耳が生えていた。

そして、両手の甲には四本ずつ、計八本の長い鉤爪かぎつめのような刃が装着されている。

その刃を彼女は一度見、その刃をレイヴンに向けて身構えて問う。

「……どうしてわかったの？」

「なんだ、ヘアじゃなくてラビかいットか。通りで人間の匂いが混じってたんだな」

「レイヴン、人の問いにはちゃんと答えてあげなよ……」

ライトは呆れ顔のため息を一つ。

「わ、私が飼われているって!? 馬鹿にしているの!」

「貴様こそ獣人ごときが人間に逆らおうっていうのか? お前ら獣人は報復戦争の時、人間に扱き使われていたそうだしな」

その言葉を聞いた獣人族の女性は、苦虫を噛み潰したような表情になる。

「それは過去の話よ……! 今の私達は、自分達で集落を作り、自分達だけの力で生きている、誇り高き獣人族。だからこそ、人間と協力するつもりはないのよ」

「過去……か。くだらんな、いくらお前らが過去の話だと言っても、歴史には、記録には、そして記憶には、お前達の辱めは残るんだよ。しかもその上、ラビットじゃなくヘアだってか?」

レイヴンは手に持っていた大剣を地面に突き刺し、

「それじゃあ、何で俺を狙った?」

「………時機に、こここの遺跡を目指して遣って来る者がいるの。その者の力は世界を、運命を変えられるほどの物だという言い伝えがある。だから私はその力を奪って、獣人族の歴史と運命を変えて」

「くだらねえし、長いんだよ。もつと短めに言え。獣人族のためにその力を持つ者が必要だとか何とかってな。………それで、俺にどんな関係が?」

レイヴンの言葉に怒りを覚えつつも、獣人族の女性は彼に人差し指を向ける。

「貴方には、不吉の色が見える。だからこそ、貴方をこの先に行かせるわけにはいかないのよ!」

その言葉を聞いたレイヴンは突然、声を高々と上げて笑い出した。

「ははははっ、不吉の色か、光栄だな！ 俺の名は不吉の意味を持つ、レイヴン。丁度いい、再調整したての大剣”クレイモア”の相手をしてもらっぞ！」

言ってレイヴンは、地面に突き刺していたクレイモアを抜き、獣人族の女性に向ける。

すると彼女は左足を前に、右足を後ろに下げ、両手の甲に装着されている鉤爪を胸の辺りに持っていていき、再度身構える。

「戦士の心得はあるようね。私の名はクレア・マルギス。獣人族の未来のために、貴方には死んでもらうわ！」

「何だよ心得って……まあいいが。とりあえず、お前は半殺しにされた後

カジノで一生バニーとして働かせてやる。それがお前の未来ってやつだ」

「レイヴンって、戦いになると急にお喋りさんになるね」

苦笑するライトを無視し、レイヴンは走り出す。

それと同時にクレアも走り出し、その後、金属音が暗闇の森中に響き渡った。

## 第二十三話：力を狙う者達

月が傾き始め、月明かりが斜めに射し込み始めた深夜三時頃。

ホテル”リラックス・リゾート”の裏手にある空き地には、芝生の上に置かれた一つの小さな光を灯した賢石と、その光が微妙に反射して二人分の人影があった。

一人はその場で正座をしており、もう一人は素早い動きで足音を立てず、長髪を靡かせながら走り回っていた。

つとその時、突然長髪の人影が正座をしている人影に向かって突進し出した。

すると、正座をしていた人影はすんでのところで素早く立ち上がり、バックステップでかわし、同時に金属音が響く。

片方は長い槍のような物を、もう片方は長剣のような物をそれぞれ持っており、それが何度もぶつかり合って、金属音が鳴り続ける。

「ふむ、これくらいだろうな」

長髪の人影はそう言いながらバックステップで離れ、光のある方へと向かう。

そして、光の源である賢石に手を触れる。

すると光はみるみるうちに広がり、二人分の人影を照らし出した。その後、賢石を再び地面に置いた女性、シヴァは、長剣を鞘に納めた後、ピンク色の長髪を束ねてポケットから取り出したゴムでポニーテールを作った。

そんな彼女を見たもう一人の人影、長い槍のような武器、諸刃の剣を三本分に分けた後、銀髪をかきながら不思議そうな表情をしている少年、カイは首を傾げて問う。

「…………あれ？ シヴァってポニーテールだったっけ？」

そう言いながら脚をさすっているカイに、シヴァは微笑しながら答える。

「ああ、シルクに勧められてな。こういうのも悪くないな、と思ったのだが…………変か？」

「…………ちよつと違和感があるけど…………似合ってるぜ！」

そう言つてカイは、笑顔と共に親指をグツと立てる。  
それを見たシヴァは、再度微笑した。

「そうか、ならこれからはこれにしてみ　　ッ！？」

瞬間、シヴァは何かの気配を感じ取ったのか表情が警戒に変わり、背後へと振り向く。

カイもその異変に気付き、彼女が見ている方向に身構える。

彼女はカイの行動に頷きながらも、足元にある賢石に手を触れ、光をより強くした。

すると、シヴァとカイの視線の先には、フリルが付いた白と黒だけの侍女服を着た侍女が立っていた。

彼女はスカートすその裾を両手でそつと持ち上げ、軽く会釈して口を開く。

「……………こんばんは、神の力を持つ者」

その一言に、二人は目を見開く。

「貴様、カイの力を知っているのか！？」

「用があるのは神の力を持つ者だけです。貴女には黙って頂きたい」

侍女の言葉にシヴァは舌打ちをした。

一方カイは、身構えるのをやめて冷静な表情になり侍女に問いかける。

「……………それで、俺に何の用なんだよ？」

「今回はご挨拶に来ました。この先、旅を続けるのならば、我がマスターが貴方を殺すと言っておられましたので」

「えー？ ……………でも、俺は旅を止めない。これは契約……………じゃなくて、約束だからだ」

短いが、決意が感じられるその言葉。

それを聞いた侍女は、目を伏せて小さく頷く。

「……………了解しました。マスターにはそう伝えておきます。それでは、またいつかお会いしましょう」

侍女はそう言うと、再度両手でスカートの裾をそつと持ち上げ軽く会釈。

それと同時に、彼女の周りに黄色の光が現れて渦を巻き、そして突然、フラッシュが起きた。

その光に、カイとシヴァは反射的に目を閉じる。

その後、目を開けた時にはもう侍女の姿は無くなっていた。

「な、なんだったのだ？ 今のは……………」

「お、俺、狙われているのかぁ……………」

賢石が放つ強い光に照らされたままの二人は、今起きた事を整理

するために  
ただ、立ち尽くしているだけだった。

暗闇に満ちた森の中で、突如火花が散る。

それは、金属音と共に現れて何度も続いた。

その火花を起こしているのは、大剣”クレイモア”を振るうレイヴンと、両手の甲に装着された長い鉤爪のような刃を振るうクレアだ。

クレアは、押してくるレイヴンのクレイモアを弾きながら、後方へと下がって避け続けていた。

そんな彼女を見たレイヴンは、口元に笑みを作る。

「どうした！ お前の覚悟ってやつはそんなもんか？ もしそうなら、よく獣人族のためだとほざけるなあ！」

言ってクレイモアを横に振る。

それをクレアは左足を前へ、右足を後ろに出し、身体を素早く落としてしゃがみ込む。

瞬間、彼女の頭上に生えているウサギの耳をクレイモアが掠った。

「うるさい！ 私は、獣人族のためなら命だって懸けられる！」



クレアは、クレイモアを振り切って隙が出来たレイヴンに向かって鉤爪を構えて飛び込む。

だが彼は、クレイモアを振った時の遠心力を利用して一回転し、右脚を浮かせてクレアの脇腹に回し蹴りを一撃入れる。

「命を懸けられるなあ！？ 勝手に一人で死んでろ！ 巻き込まれる俺は迷惑だ！」

空中にいる間に蹴りを入れられたクレアは、レイヴンが蹴った方向に、大きく飛ばされた。

そして木に激突し、同時にバキツという妙な音が彼女の耳元に届いた。

彼女は一瞬、骨が折れたのかと思ったが、それに匹敵する痛みがなかったため、木の枝が折れたのだと判断し、レイヴンのいる方向を睨みつける。

その後、飛び上がって木の上に乗る、木から木へと飛び移って、一気にレイヴンに向かって飛び出す。

クレアの眼中にあるレイヴンは、彼女に背を向けていた。

彼女はそれを好機とし、両手の甲の鉤爪を構える。

対するレイヴンは、クレアの気配を察知し、振り向く前に地面を蹴って前方へと飛ぶ。

「しつこい！ そんなにも力ってやつが欲しいのか！？」

クレアは不意を打ったつもりが、避けられた事に驚きながらも、着地と同時に両足をバネのようにして、レイヴンを追撃する。

「たった一度、たった一度会って力を奪う事さえできれば、私達の運命を思うがままに出来るから！！」

その言葉を聞いた瞬間、レイヴンの表情が変わった。  
怒りから笑みへと。

瞬間、レイヴンは身体をひるがえし、クレイモアを胸の辺りで構える。  
すると、飛び込んできたクレアの鉤爪と交わった。

それと同時にレイヴンは、クレイモアを力一杯振って彼女の鉤爪を弾き、再度彼女を吹き飛ばす。

その時の表情は、満面の笑み。

「気が変わった、その力とやらを持ったやつを一目見たくなった！」

レイヴンの笑みは、口元を頬の辺りまで吊り上げるほどだった。  
そして彼の目は、不気味に紅く光っていた……

レイヴンとクレアが火花を散らしながら戦っている中、少し離れた場所、光を灯した賢石の近くでライト・ウィッチは羽を羽ばたかせながら膝を上げ、顎を手のひらに乗せて暇そうにしていた。

「まったくレイヴンったら、もうちょっとレディーに優しくしなきゃいけないのにさっきから暴言ばかり……それにしてもすごいなあ、暗闇の中でお互いの居場所がわかるなんて」

そう言いながらライトは、火花が散っている場所をジッと見ていた。

「…………レイヴン、目が紅く光ってるよ……………コワイコワイ」と  
言ってライトは、ニシシツと笑っていたが、突然笑いのを止めて、  
耳を澄まし始めた。

「……………レイヴンが呼んでる……………」

ライトはそう呟くと、突然彼女の身体が光り出し、一瞬の閃光と共に姿を消した。

その後、その場に残ったのは煌々と光り続ける賢石だけだった。

レイヴンはクレイモアを振りながら、笑顔で攻め続けていた。  
対するクレアは防御が精一杯で、とても反撃できる状況ではなかった。  
った。

その時、彼女の中に生まれた感情は、焦り。  
だがその焦りは、集中力を鈍らせる事となってしまった。  
レイヴンは振り下ろしたクレイモアを軸にし、飛び蹴りを繰り返す。  
す。

それに対してクレアは判断を鈍らせ、バランスの悪い体勢のまま、  
その蹴りを防ぐ事に全力を注いってしまった。

結果、勢いが強い蹴りを防ぎきれず、鉤爪が弾かれる。

そのせいで両腕は右に、そして胴体を大きく晒す事となった。

レイヴンは、それを狙っていたのか、飛び蹴りの勢いを利用して、

クレイモアを振り下ろす。

常人では出来ないような動きに、彼女は対応しきれず、彼女の右腕にクレイモアが振り下ろされた。

「あああつ！！　くつ！」

痛みで上がった悲鳴を途中で無理矢理堪え、体勢を整えて上手く両足を地面につける。

それと同時に右腕を見て、まだ繋がっている事を確認。  
だが、まだいける！　というクレアの考えとは裏腹に、右腕の傷口からは、予想以上の血が噴き出した。

「　ッ！？　肉を半分も持っていかれたの！？」

そういつつも、身体を前へと出そうとする……が、気付くと右脚の太股をも斬られており、バランスを大きく崩した。

レイヴンはその隙を逃さずに飛び掛り、右手で彼女の頭を掴んで地面に身体ごと叩きつける。

そして右手を離し、瞬時にクレイモアを振り上げる。

「チェックメイトだ」

レイヴンのその表情には、まるで殺しを楽しむような笑みが、それを見たクレアの表情は、死を目前とした恐怖があった。

そして、クレイモアは振り下ろされる……

## 第二十四話：見えていた彼女

殺られるっ！

クレアはそう思って目を閉じたが、しばらく経っても痛みなど感じなかった。

彼女は疑問に思い、目を開ける。

すると、クレイモアの刃が目の前で止まっていた。

”死んでいない”

その事に彼女は安堵するが、すぐにその感情に対して後悔する。同時、鋭い目でレイヴンを睨みつける。

そして、奥歯をかみ締めながら、怒りのこもった声をぶつけた。

「……………どうして……………どうして殺さなかった！ 私は覚悟が出来ていたのに！！　なのに何故っ！！」

それを聞いたレイヴンは、フンツと鼻で笑い、微笑した。

「覚悟だと？　目を開けた時、ホツとしていた奴がよく言う」

「　　ッ！！！！」

その言葉に、クレアは頬を赤らめながら、苦虫を噛み潰したような表情をした。

それを見ていた、いつの間にかレイヴンの顔の横を飛んでいたライトは、クスクスツと笑った。

「　　さて、突然だがお前に利用価値が出来た。もちろん拒否権はない。……………ライト、始めてくれ」

レイヴンがそう言うと、ライトは洪々とクレアの目前まで飛んで

いった。

そして、クレアの目をジッと見る。

「……少しの間、私の玩具になってもらうよ……」

言った瞬間、ライトの背に生えている四枚の羽が光を放った。

それを見ていたクレアは、目が少しずつ虚ろになっていき、最後には気絶したかのように、その場で倒れ込んだ。

「……………これでよかったんだよね？」

「当たり前だ。どうせ、もう終わっていた命を俺が貰ったんだ。つまり、こいつをどうしようが俺の勝手という事だ」

「それでこの子を使って、力とかいうのを持っている人の实力を見るって事なんだね。……………襲わないの？　イタッ！」

笑いながら問いかけたライトの額に、レイヴンは呆れた表情でデコピンをかました。

「阿呆、こんな餓鬼相手にそんな馬鹿げた事なんかやるかっての」「そうかな？　ホラ、育つとこ育つて　イヤアッ！！　もう、もう言わないから、私の羽からその手を放して〜！」

レイヴンの指から離れようと、大声を上げながらもがくライトを見て彼は吐息を一つして、手を放した。

すると彼女は、レイヴンから少し離れたところまで行き、身体を翻して頬を膨らませながらレイヴンにビシッと人差し指を向ける。

「もうっ！　妖精の羽は繊細で敏感なんだよ！！　気安く触らないでよね！」

「わかった、わかった。繊細なんだな。敏感なんだな。　そんな

事より、早く戻るぞ。お前の視界をリンクするには、時間と魔力が必要なんだから」

「むむっ！ 軽く流されている気が……まあいいけど。ところで何が魔力だってえ？ レイヴンは魔力なんて、常人並みしか持つて無いじゃ〜ん？」

ライトは、先ほどまでの表情とは打って変わって笑顔で、うっしっしと笑い出した。

そんな彼女に向かってレイヴンは、舌打ちをしてから、ノアに繋がる道を歩き出した。

だが、ライトは懲りずに彼の周りを笑いながら飛び回る。

その後、この森の中に再度ライトの大声が響き渡った。

真っ暗な暗闇。何も無い世界。

俺はその世界で、まるで水の中にいるかのように浮いていた。やる事がない。

唯一あるのは、考える事、昔を思い出す事。

俺の、仕事の理由。

人という存在は、大半が卑怯なやつらで占められている。

そして、後に残っているのは、そんな卑怯なやつらに支配・奴隷・玩具という名の鎖に縛られているやつら。

だが一握りのやつらは、何にも縛られる事がなく平和に暮らしているのだ。

この三つが、人という存在だ。

少なくとも俺のいた世界、ジードではそうだった。

だから俺は、この基礎を壊すために殺し屋になった。

そしてその職業に就いたのと同時に、卑怯なやつらの本心を知った。

自分より下の者達の命は、まるで蟻を殺すかのように、簡単に切り捨てていたのにも関わらず、俺が武器を向けた瞬間、必死に命乞いをしてくる。

” 助けてくれ ”

” 死にたくない ”

” やめろ、俺は悪くない ”

” 俺なんか殺しても何の意味もないぞ ”

” 金ならいくらでもやる、だから家族だけは ”

その言葉の数々、俺にとっては全てが耳障りだった。

……………全てが？

時々ある、迷い。

それを振りほどくかのように、俺は殺してきた。

卑怯なやつらを。世界の、人という存在を表す基礎を無くす為に。

……………でもそれは、コウジツニシカスイナイ。

ダツテキミハ、ソノヒキョウナヤツラノカゾクヤ、カンケイシャ  
ヲモコロシタジャナイカ。

ツミナキモノヲコロシテ、セカイノヒーローキドリカイ？

デモ、ソレハチガウヨネ？ コロシタイダケダヨネ？



サア、アノトキノヨウニボクヲツカッテコロシテミセテヨ。  
キミノタイセツナヒトタチヲ、ソノテデ……

俺は目が覚めたのと同時に、勢いよく飛び起きた。

「がっ!!」

「うひゃあ!」

だがその瞬間、額を何かに思いっきり強打してしまった。

額をさすりながら状況確認をすると、俺が額をぶつけたのは、俺の寝ていた二段ベッドの下段の上、シルクが寝ているはずの上段のようだ。

「イツツツ……朝、なのか……?」

そう言いながら俺は、まだ痛む額をさすっていると、突然、視野に影が映った。

俺は驚きつつ、その影を見る。

「……何だ、シルクか……」

上の段から逆さになって顔を出しているシルクは、その状態のまま、頬を膨らます。

「何だ、シルクか……じゃないよ! 私が起きていたからよかったものの、もし寝ていたら安眠妨害だよ!」

「えと……すまん、怒らせるような事しちゃって」

そう言っただけ俺は軽く頭を下げると、シルクは急に表情を変えて、にへらつと笑った。

「別に怒ったわけじゃないよ？でも、謝罪の気持ちがあるのはいい事だよ。

って事で、今から朝食奢ってっ」

シルクはそう言いながら、上の段から降りてきた。

彼女は寝起きで薄いＴシャツ一枚と短パン姿の為、目のやり場に困ってしまった。

その為、少し視線を逸らしながらもベッドから降りる。

「それじゃ、行くぞ」

「オッケー！」

まだ他の皆が寝ている中、俺とシルクはそつと部屋を後にした。

壁が微妙に剥がれ始めている廊下を歩いている途中、壁にかかっていた時計に目をやると、時刻は午前七時を指していた。

……早いな、本当。

そう思っている最中に、気付くと俺の横を、シルクが軽快なステップで走り抜け、俺の前で止まった。

その表情は、口元をニヤニヤとさせて笑っていた。

何なんだ？ 一体。

とりあえず、ニヤニヤしている理由を聞こうとした時、向こうが先に口を開いた。

「……………ねえユウ、さっき私の胸元をエッチな目で見てたでしょ？」

「……………はあ！？」

『何ですって！？』

何言い出すんだ、コイツは！？

……………っというより、何でお前が叫んでいるんだ？ ティファ。

『叫ばずにはいられないわよ！ 貴方と私は一心同体、つまりは貴方が変態扱いされるといふ事は、私も変態扱いされているといふのと同じなのよ！ そんな状況を、私が見逃すわけじゃないじゃないっ』

へ、変態って…………

まあ、訳のわからん説明をありがとう。

「だって、ユウったら私の胸元チラチラ見ていたんだもん。その後は、ずっと視線を逸らしているし」

『そんなわけ無いでしょ！？ 確かに貴女の胸は少しは育っているかもしれないけど、ユウが見とれるほどの存在ではないわよっ』

……………俺は何て言えばいいんだ……………って、ん？

「フフフツ、わからないよ？ もしかしたらユウは思春期かもしれないし」

『それはないわね、何だってユウはもう十九だから……………あれ？』

何かおかしいぞ？

俺は、さっきから一度も喋っていないはず……………！？



『え、ええ、そうよ』

「よかったあ…………あの、私を弟子にしてください！」

## 第二十五話：大魔術師の魔術授業

目の前に立っているシルクを見ながら、俺の脳内では彼女が放った言葉が理解できず、今起きている状況も処理できずにいた。

そんな俺の代わりに、ティファが問う。

『……えと、私の弟子になりたいってのは、本気で言っているの？』

その問いに対してシルクは、満面の笑みで頷く。

それと同時に、ティファは大きくため息をついた。

『はあ、一体どうなっているのよ……貴女、いつから私が見えて声が聞こえるようになっていたの？』

「え」と……カイが闘技場に出場した日の夕方、宿屋でだったかな。ベッドの上で大の字になってうとうとしていたら、聞いた事のない声が聞こえたの。それで、薄目を開けてその声の方を見たら、ユウのすぐ横に、金髪の美人が浮いていたのが見えただよ」

……正直驚いた。

まさかこいつにティファが見えていたなんて……

そういえば、その頃はまだティファが目覚めて間もなかったはずだ。

俺は、ティファの姿が見えなかった。

最近になって、残像としてやっと存在が確認できて　　っ!?

ティファのいる場所を見て驚いた。

声に出さないのがやつとだが、驚いているのは表情に出た。

そのためか、シルクは俺の顔を上目遣いで不思議そうに見ていた。俺が驚いた理由。それは、ティファの姿がハッキリと見えていたのだ。

金髪の髪は腰の辺りまで伸びており、その髪が似合うほどのスレ  
ンダーな体系。

そして、その体系に合わされたような肩の出た真つ黒な服装。  
組んだ両腕には、先ほどシルクが言っていた紋章が描き込まれて  
おり、されど左腕の紋章は、右腕より多く、細かく描き込まれてい  
る。

俺がその紋章を見ているとティファは視線に気付いたのか、俺の  
方を向いた。

『どうしたの？ ユウ。もしかして、私が見える？』

問いの通りだ。

俺はお前が見える…………

そう、ティファにしか聞こえない言葉で言う。

言いながら俺は、ティファの顔を見た。

その目は、右が飲み込まれるような黒色で左が透き通った白色だ  
った。

いわゆる、オッドアイだ。

「……………何で、急に見えるようになったんだ……………」

とりあえず、今声に出せる言葉はこれくらいだ…………

そう言つとティファは、顎に手を当てて考え事を始めた。

『わからないわねえ……………まあ、この事はまた今度考えましょう。  
それよりも』

すぐに何かを思いついたのか、顎から手を離して俺の方を向く。

『ねえ、ユウ。ちょっと知りたい事があるから、彼女に触れてもら

えるかしら？」

言われて俺は、仕方なくシルクの腕を掴んだ。  
するとティファは突然、驚いたような表情をする。

『うそおっ！　すごい量の魔力を蓄えているじゃない！　こちらから私の弟子にスカウトしたいくらいだわ！！』

何か言い出したよ、コイツ……  
嫌な予感がする。

「やったー！　それじゃ、早速何か教えてよ、ししよー！」

俺の心配を他所に、大喜びするシルク。

『し、師匠……いい響き……うっとりするわ……』

両手を合わせて目を輝かせるティファ。  
こんなアホが俺の中に……

『ん？　どうしたのよ？　浮かない顔して』

「何でもない、気にするな」

『そう？　まあいいわ　それじゃ早速、外に出て魔術を一つ教えるわね。』

今回は、旅に必要不可欠な治療術よ』

「治療術って、掠り傷とか火傷とかを治す”ヒール”？」

それを聞いたティファは、微笑を浮かべながら人差し指を左右に振る。



『チツチツチツ、掠り傷なんて生温いわよ。私が伝授するのは、深い切り傷はもちろん、骨折や切断などの重傷をも治す事が出来る魔術”トウル”よ』

「……………え？ す、すごいじゃん！ それ！」

禁術じゃないのか？ それ、という言葉を喉の手前で止め、代わりの言葉を出す。

「……………で、今回も入れ替わるのか？」

『当たり前じゃない。そうじゃないと、シルクに魔術を教えられないでしょ？』

「……………入れ替わる……………？」

『まあ、その疑問は後にして、早く外に出ましょ』

その言葉を合図に、俺達は出口のあるロビーへと向かった。

無用心に鍵が開いていた扉を開けて外に出ると、夏の朝にしては珍しく、肌寒い空気が身体を伝って走り抜けていった。

「……………何か出そうな空気だねえ」

「確かに出そうね……………でも、その時は私が成仏させてあげるから大丈夫よ」

『何が大丈夫よ、だ！ 姿を変えろ、姿を！』

そう言いながら自分の身体……というよりティファの身体を指でさす。

精神はちゃんと入れ替わっているんだが、その他は俺、ユウのままという中途半端な状態になっていた。

「ええ、面倒なのよ」

『だからって、俺の姿でクネクネするな！ 早く変えろ！！』

「あはははっ！ ユウが二人いて、片方がクネクネしてるよー！ あはははははははっ！！」

シルクは俺……もとい、ティファを指でさしながら、腹を抱えて大笑いしていた。

こんな屈辱、初めてだ……

『とりあえず、変えろ！ 今すぐに！！』

「わかったわかった、わかったわよ。そう焦らないで」

充分焦るぞ……

そう思った瞬間、少しの間身体が光に包まれ、光が消えると俺の身体はティファの姿になった。

ティファは、金色の長髪を手で掻き揚げ、フンツと笑った。  
不気味だぞ……

一方、ティファの姿が変わる瞬間をみていたシルクは、驚くのと同時に歓声を上げた。

「すっごーい！ 姿が変わった！！ ……私より大きい……」

シルクは自分の胸に手を当てながら、ティファの胸を細目でジッと見始める。

いつまでも……ジッと……

.....長いつ！

『いいから早く始めろっ！ 時間が無くなるぞ』

「それもそうね。それじゃシルク、始めましょうか.....って、いつまで見てるのよ」

ティファの声が聞こえて、シルクは我に返ったのか、ほえ？、といいながら顔を上げた。

そして、すぐに頬を赤らめる。

「えー？ いや、あの、別にヤマシイ事を考えていたわけじゃないよ？ ただ、私よりも大きくていいなあって思って って、何言ってんだろ、私！..」

.....まだ旅を始めたばかりだが、コイツがここまで取り乱したところは初めて見た.....

などと思いつながら、溜息をついておく。

すると、丁度ティファも溜息をついていた。

「よくないわよ、こんな物。邪魔だし、肩凝るし.....っと、こんな話をしている場合じゃないわね。それじゃ、まずはトウルから教えるわね」

「はい、ししよー！ よろしく願いします！」

その返事に関心したのか、ティファは数回頷いて微笑した。

「いい返事ねえ、.....それじゃまず、魔術と契約よ。それと同じに、ちよつと高度なショートカットも教えるわね」

「け、契約？ ショートカット??」

どうやらシルクには聞きなれない単語だったようで、彼女は首を傾げていた。

「……って、俺も聞いた事ないぞ？」

「貴方に魔術はむ・え・ん・よ。契約っていうのは、簡単に言えば詠唱と魔力の流れを覚える事。それと魔力干渉具、通称”魔具”を捉える事ね。そしてショートカットは、一度詠唱すればしばらくの間、詠唱無しで魔術を発動出来るのよ」

そう言った瞬間、ティファの表情が曇り始めた。

「……もしかして貴方達、詠唱と魔力に干渉するって意味もわかってないの……？」

「し、知らない……」 『知らんな』

俺とシルクの返答を聞いた途端ティファは、やっぱりねという表情で大きくため息をついた。

「はあ……っていう事は、私が教えなくちゃいけないわけ……」

言ってティファは、吐息を一つしてから、仕方なさそうな表情をシルクに向ける。

「……まあ、簡単に言うとな、詠唱っていうのは体内の属性魔力と大気中の自然魔力を混ぜ合わせて、特定の術を生み出すための合言葉ね。そして、その魔力同士の混ぜ合わせを補助するのが魔力干渉具。通称”魔具”ね。一般的には杖や指輪、ペンダントを使っている人が多いわね。……確か、マフラーを使っている人もいたわ。まあ、とりあえずここまでではわかった？」

テンポの速い説明に少々混乱気味だが、頷いておく。  
俺と同じ間隔で頷いていたシルクはこの意味がわかっているんだ  
ろっか？

とりあえず、ティファの説明の続きを聞く事にした。

「……そして、ショートカットは一度詠唱した時に残留した魔力を、  
一時的に魔力が記憶するの。これによって、軽い合図や意志で同じ  
魔術を使えるようになるのよ。ちなみに、属性魔力っていうのは、  
人それぞれの生命を支えている魔力の種類を指しているの。ユウは  
雷、私はほぼ全て、シルクは闇ね。……これで全部よ、理解できた  
？」

ティファは口元に少し笑みを作り、首を傾げて問いかけてきた。

「……なあ、お前の、ジードの魔術はこっちでも適応してるのか  
？」

「あ、この世界の魔力でもジードの魔術は使えるのかって事ね？」

シルクに分かりやすいように言い直したのか。

「それが面白い事に、魔力が全く同じなのよねえ。だから、あつ  
ちの魔術も使い放題よ」

ティファはそう言いながら、誇らしげな表情をし、空中に円を描  
くようにして人差し指を揺らした。

そして、その指をビシッとシルクに向ける。

「それじゃ、シルク。さっそく事を始めるわよ？　まず最初は、貴  
女の魔具を決めないかね。……何がいい？」

問いに、シルクは少し考えた後、あつ！、と声を上げた。

その後に自分の左腕に付いている腕輪をティファに向ける。

その腕輪は赤色に輝いており、表面には波状の線が二本、交互に彫られており、開いた隙間には見た事のない文字が彫られていた。

何だ？ コレは？

それを見たティファは、俺と同じ事を思っていたのか、首を傾げて問う。

「……………何？ コレ」

「この腕輪は昔、カイが私の誕生日プレゼントとしてくれたの。これなら、大事に付けているから魔具としては最適かと思って」

「いいわねえ、ロマンチックだわ」

気色悪い事を言うなって…………

「それじゃ、その腕輪を外して両手でしっかりと握り締めてね」

シルクはティファの指示通りに腕輪を両手で握る。

するとティファは、右手の人差し指と中指を使って指を鳴らし、腕輪を握っているシルクの手の上に円を描くように人差し指を動かす、彼女の手自分の手を重ねた。

「生命と理を司りし魔の根源、我が触れし魔の器に汝の源を分け与え、創造せし力を与えたまえ。さすれば汝に眠りし魔の源を、無限の創造へと変える事を約束せん。故に、その効力を解き放て…………

”

ティファが詠唱を終えた瞬間、シルクの腕輪が紫色に輝き出し、俺はその眩しさに一瞬、目を閉じた。

そして目を開けた時、いつの間にか腕輪は彼女の左腕に戻ってい

た。

いつ、付け直したんだ？

……ん？

「さて、これで魔具は準備完了ね。次は本題である魔術を　と、言いたいところだけど、それはまた次回ね。どうやら、お客さんが来たみたいだし」

「え？　どう　っ!？」

声を出そうとしたシルクの口を、ティファは人差し指で止め、辺りを見渡す。

そこには、黒いローブを羽織った者、まるでアサシンのような者達が五人ほど、どこからともなく降りてきた。

それを見た俺は、微笑を浮かべる。

『……………いけそうか?』

「当たり前じゃない。私を誰だと思っているのよ」

ティファはそう言いながら笑みを作り、右手の指を鳴らした。それと同時に、アサシン達は勢いをつけて走り出す。

## 第二十六話：魔女の気まぐれ

それは一瞬の出来事だった。

ティファに襲い掛かったアサシン達は、空を切る音とともに吹き飛ばされていた。

そしてティファは、その金色に輝く髪を靡かせて微笑する。

「あら？ これで終わり？ …… って言う訳じゃなさそうね」

ティファが微笑を真顔に変えた瞬間、彼女の背後に新たな動きが出来る。

先ほど吹き飛ばされた者の内、一人が双剣を構えてティファを狙っていたのだ。

だが彼女は避ける事はせず、代わりに右の指を鳴らす。  
パチンツと響いた音と共に、彼女は素早く何かを呟いた。

「氷河の刃よ、混沌の中に眠る憤怒を鋭き槍に変え、全てを貫け  
”いくわよ？” サウザンドランス”」

それは、詠唱だ。

その詠唱を終えた刹那、ティファの頭上より少し上の空間に青色に輝く輪が現れ、中心から氷で出来た無数の槍が双剣を構えていた者を襲った。

降り注いだ槍は、アサシンが羽織っているローブを貫き、されど殺す気はないのか、腕と脚だけを狙っていた。

だが、いくら死なない場所を狙っても痛みはある。

そのため痛みに耐えられず、その者は悲鳴を上げた。

それを見たティファは、口元を吊り上げて笑う。



「あら？　これくらいで悲鳴を上げるなんて、情けないわね。フッ」

悪魔のように笑うティファを見た他の者達は、思わず一步下がった。

彼らが今感じた事は、恐怖だ。  
それを知ったティファは、彼らを見渡して再度笑う。

「あなた達、コレくらいで恐怖するなんて、見掛け倒しもいいところね？」

簡単、かつシンプルな挑発だ。  
だがアサシン達は、その挑発に怒りを感じ、恐怖を吹き飛ばして一斉に襲いかかる。

「た〜んじゅ〜んっ！」

ティファが言った通り、彼らは単純な挑発にかかり正面から走って来た。

その光景を見て、彼女はバックステップで間合いを保ち、指を鳴らして詠唱し始める。

「この大地に眠る死者の魂達、汝らの無念の怒り、今目覚めて、眠りを妨げる者に溜りし怒りをぶちまけよ」　「ケルトウ」

詠唱を終えるとティファは立ち止まり、地面を指でさす。

そして、指を上げて彼らをさし、再び指を鳴らした。

すると突然、地面から黒い塊が飛び出し、彼女を守るようにして浮かび出した。

一人のアサシンは突然すぎる出来事になすすべもなく、塊に飲み

込まれる。

それを見た他の者達は、急いで止まり、吹き飛ばしたはずの恐怖を再度蘇らせる事となった。

黒い塊、というよりかは、苦しい表情をした無数の顔が寄せ集まっているものだった。

その塊は、ティファの指に合わせて動き、現在は一点で蠢いている。

「な……………なんだよ、コレ……………」

黒い塊を見た者達は皆、そのおぞましい塊から少しでも離れようと、一歩ずつ後退し始める。

同じくシルクも、思わず一歩後ずさった。

一方ティファは不適な笑みを浮かべて指を動かし、一人のアサシンをさす。

瞬間、一点で蠢いていた黒い塊は、獲物を見つけた獣のように、そのアサシンを狙って飛び出す。

対する狙われたアサシンは、その動きに気付き避けようとするが、時すでに遅く、飲み込まれる事となった。

残ったのは二人。

だが、その二人はとくに戦意を喪失したのか、その場に座り込んでいた。

「フフフッ、まだ終わってないわよ……………」

再度、不適な笑み。

そして、その場にいる全員の背筋が凍るような表情。

両目の色が違うオッドアイによって、その目を見た者の恐怖をより一層、増幅させた。

「や……や……やめ……て……」

残っているアサシンの一人が、か弱く震えた声で訴える。  
どうやら、女性のようだ。

対するティファは、その言葉を聞いた瞬間、笑みを強めた。  
口元を頬のあたりまで吊り上げて。

「だあめっ！」

「ちよつと待つんやああ！！」

ティファが、アサシンの女性に指をさそうとしたその時、大声と共に緑に染まった着物姿の男が、アサシン達を守るようにして現れた。

「……？ 何よ、貴方」

突然現れた男に驚き、ティファは指を止めて問いかける。  
その瞬間、シルクがティファを思い切り殴った。

頬に強い衝撃。

それと同時に、頬がとてつもなく痛い。  
だが、今は痛がっている場合じゃない。

「　　ったあい！　何で殴れなんて言つたのよ！！」  
『お前を止めるには、殴ってもらうしかねえと思つたからだ！』  
「ワイの名はナギ・コーウェンや。よくもワイの部下に酷い事してくれたんなあ！」

口論になつた俺とティファを見て、シルクは思わず苦笑。

「だからって、レディーの顔を殴らせるなんて、貴方どうかしてるわよ！！」

『どうかしてるのはお前だ！　まだ実戦も知らないシルクの前で、  
オーバーキル  
1過剰殺人しやがって！！』

「ワイらの目的は神の力なんや！　アンタはその邪魔をしにきたんかいな！？」

何か、外野がうるせえ……………

「これからの事を考えると、実戦と鮮血を見て慣れておいた方がいいでしょうに！　何でそれがわからないの！？」

『お前、鮮血とか言ってるが、ほとんどのヤツを、あのわけのわからん塊に食わせるつもりだっただろ！』

「って、アンタら！　ワイを無視するなや！」

「うるさい！　タマネギ！！」　『うるせえ！　タマネギ！！』

俺とティファ、揃つて一喝。

もちろん、タマネ……………ナギには、俺の声が聞こえていない為、ティファの一喝で哑然としている。

それもそのはず、一生懸命喋っているのに無視されて、尚且つ訳のわからんあだ名をつけられたんだからな……………

そして唯一、俺の声も聞こえているシルクは、腹を抱えて笑っていた。

「あはははっ！ 似た者同士だっ！ あははははっ！！」

その言葉に俺は、何故か返す言葉が見つからなかった。

その時、話を変えようとしたのか、ティファは俺達だけに聞こえるように呟いた。

「……そう言えば、タマネギは何をしに来たのかしら？」

俺はその言葉に、ナギだっと言っておき、少し離れた場所<sup>うすくま</sup>で1蹲<sup>うすくま</sup>って生き残った二人の部下に慰められているナギを見る。  
すると突然、ティファが肩を落として溜息をついた。

「……わかったわ。シルク、ごめんなさいね、いきなり酷い物を見せて。

次はもつと優しくオーバーキルするわ」

『いや、優しく過剰殺人ってどんなんだよっ』

当たりはしないが、ティファに向かってビシッと右手で突っ込む。  
そんな俺達を、シルクはニコニコしながら見ていた。

「二人って、夫婦漫才してるみたいだねっ」

「どこがよっ！」 『どこがだよっ！』

二人揃って突っ込み。

どうやら、シルクの言っている夫婦漫才は、近いうちに結成するかもしれない……

夫婦ではないが。

『……あ、そういえばナギはどうした？』

「え？        あっ！    いなくなっている……！」

シルクが言った通り、ナギ達がいるはずの場所には何も残っていませんでした。

結局、アイツらの目的はわからず仕舞い。

唯一わかったのは、ティファが殺し好きという事だ……

『……そうだ、ティファ。あの塊に飲まれたヤツらはどうなるんだ？』

「え？    ケルトウを通じて私の餌になるのよ？    私だって、魔力が無限にあるわけじゃないからね」

やっぱりそうなるのか……

「まあ、どうしても言うのなら、ギリギリまで魔力を残して、どこかに捨てておくわ」

それはそれで酷いだろ。

「それじゃ、用が済んだんだし、シルクと朝食でも行ってきなさい。貴方のおごりで」

ティファはさっさと入れ替わって眠りたいと言いたげな表情をしていた為、俺はため息をついた後、わかったよ、と言いながら入れ替わる準備に入った。

そんな時、不意にシルクが微笑を浮かべながら問いかけてきた。

「……ねえ、師匠？    次はいつになるの？」

「え？ …… そうね…… 明日の朝ってのはどう？」

『おいおい、その流れだと、明日もシルクに朝食をおごってやらなきゃいけないのか？』

「うん、いいよ！ それじゃ早速、朝ご飯、朝ご飯」

「聞いてちやいねえよ、コイツら……」

そして俺は再度、不快なため息をついてからティファと入れ替わった。

『それじゃあ、お休み』

暢気なヤツだな、コイツは。

「ささ、早く行こつ！ ユウ」

対してシルクは、朝食がタダで食えるからか、やけに嬉しそうな表情で、俺の手を引っ張る。

「……男って、女に振り回される人生なのか……」

「ん？ 何か言った？」

俺の独り言が聞こえたのか、シルクは首を傾げて聞いて来た為、何でもないと言っておき、彼女に引かれたまま食堂へと向かった。

## 第二十七話：夏の朝

太陽が傾き程度で昇り、窓から斜めに光が差し込んでいる。

その光は、ベッドから落ちて窓際まで転がっていたカイの顔を照らし続けていた。

しばらくして、彼は眩しさと夏の暑さでゆっくりと目を開ける。

「……………んあ？ ……あさ…な……………」

彼はまだ完全に目が覚めていないからか、寝ぼけたような声を出しながら起き上がり、視線を時計に向けた。  
時刻は午前七時二十分。

「……………ああ……………はやおき…か……………」

そう呟き、大きく背伸びする。

そして、寝癖でボサボサになった銀髪を手で直しながら服を脱ぎ、旅の為に新しく購入した服を出し、着始めた。

その服とは、ネリンで密かに手に入れていた、革で出来たオレンジ色の表面に、黄緑と白のラインがそれぞれ入っている半袖とセツトで購入した灰色のジーンパンだ。

そしてこのジーンパンには、後ろの腰に位置する部分に、カイの武器である諸刃の剣を携帯用のために三分割してもその全てを差し込む事が出来る隙間が、仕様としてつけられていた。

ちなみに店主の話によると、コレは双剣士向けに作られた物だそうだ。

彼は早速その隙間に、分解した諸刃の剣を差し込んで満面の笑みを作った。

つと、その時、部屋を見渡したカイは、何か足りない事に気付く。



「…………あれ？ シルクとユウ、それにネプチューンがいない……」

そう呟いたカイの視線が向く方向にある二段ベッドの内、三つはシートが少々乱れている為、人が寝ていた形跡はあるがもぬけの殻だった。

一つは、彼の寝ていたベッドの上段。

そして残り二つは、彼の反対側にあるベッドの上下両段だ。

それを見たカイは、しばらくボートとしていたが、突然目を見開いた。

「早っ！ あいつら起きるの早っ！！」

「うるさいぞ！！」

刹那、カイの頭に枕が直撃した。

投げた主は、カイのベッドと同じ列、入口側の上段で寝ていたシヴァだった。

彼女はまだ眠そうな目を擦りながら、不機嫌な表情をカイに向ける。

「貴様、今は何時だと思っている？ 七時半だ。私は起きていてもかまわん時間だが、私の姫はまだ寝ている時間なのだ。……………言いたい事はわかるな？ わかったなら、さっさと寝るか出て行け」

「……………す、すみません……………」

寝起きだからなのか、またはカイが五月蠅かったからなのかはわからないが、とにかく不機嫌なシヴァに、カイは一言謝ってから早速で部屋を出た。

廊下に出ると、意外と室内よりも涼しく、彼はそれを心地よく感じながら、目的もないまま歩き出した。

そして、ロビーに差し掛かった時、カイはフロントの近く、待合用のイスに座っている、明らかに服装のおかしい人物を見つけた。その人物は、黒いボロ切れのローブを着ており、湯気が立っているコーヒークップを口につけて何度も傾げながら、どこことなく上の空になっていた。

カイは、その姿を遠目ながらも一目見て直感する。

あれはネプチューンだ、と。

彼はそう思いながら、その人物に近付くと、案の定それはネプチューンだった。

するとネプチューンは、カイが見ているのに気付いたのか、カップを口から離して左手を軽く振った。

それを見たカイは、苦笑しながら手を振り返す。

そして彼は、ネプチューンの隣に空いている席に座った。

「おはようだったちゃ、カイ。よくこんな時間に起きられたもんぜよ。昨日は寝るのが遅かったんのに」

「いやあ、何か暑くて目が覚めちゃってね。ネプチューンこそ早いじゃん。どうしてだ？」

カイが問うと、ネプチューンは俯いて手に持ったカップに目を落とした。

「……………ちよつち悪夢を見て、それで目が覚めたんぜよ。その悪夢があまりにもわつちたしくなかったから、コーヒーでも飲もうと思つて、今ここにいるんっちゃ」

言つて最後は笑い、カップを再度口元まで持つていき、一口飲む。

「……………んにしても、昨日、いや今日つか。どちらにしる、シヴァから聞いた話は今でも信じがたいぜよ……………」

ネプチューンが言う話というのは昨夜、シヴァ達が彼に教えた力イが持つ力の事だ。

触れた物質の時間を変える。確かにそんな人外な力を、簡単に信じられる者などそうそういないだろう。

ネプチューンも、その内の一人だ。

だが実は、彼は昨夜にその力を目の当たりをしていた。それでもやはり、彼は信じる事は出来ていなかった。

「……………ま、そんな事でいつまでも考え込んでいても無駄っちゃ。どうせ、信じようが信じまいが、またとんでもないもんを見せられる気がするんぜよ」

言つてネプチューンは、んくくつと笑つた。

「んくくつて……………もうちよつとマシな笑い方はないのか？」

「三十路のおっさんであるわつちには、この笑い方が定着してるんぜよ」

「定着つて……………つて、ええ！？ ネプチューンって三十路！？ ただのおっさんじゃなかー！」

ロビー全体に響く大声。

その声に驚き、ロビーにいた他のお客やフロントの受付係は、一斉にカイ達の方を向いた。

だが、すぐに興味を無くしたのか、個別の行動に戻る。

そんな中、ネプチューンは顔を引きつらせて苦笑しながら、ため息をついた。

「……………いくらおっさんでも、そんなに大声で叫ぶ必要はないつちよ……………わっちはこれでも商人ぜよ？ 年と共に積み重ねてきたキヤリアと情報収集能力は常人以上だつちや！」

ネプチューンは、そう言いながら誇らしげな表情をする。  
それを見たカイは微笑。

「すごいおっさんだなあ…………… あ、それじゃこの機会に、その情報収集能力を見込んで…………… 神話のジードについて教えて欲しいんだけど」

「神話のジード？ …………… ああ、それは古代神話”エニグマ”の舞台である世界の名前ぜよ。けど、どうして急にそれを聞くんつちや？ 確か、あんさんらの故郷があるミーン大陸の学校では、その話を授業として教えるのを義務化されているはずぜよ」

問いにカイは、苦笑しながら頭をかく。

「いや、その授業の時はよく寝ていて、全く覚えてないんだ…………… けど、ユウの元居た世界らしいから聞いてみようと思って」

「ユウの居た世界…………… そういえば、確かにそんな事言ってた気がするぜよ。…………… そうかあ…………… エニグマの……………」

エニグマ、という名が気になるのか、ネプチューンは小声でその

名を呟いていた。

対してカイは、その呟きが聞こえてなかったらしく、普通に話を進めようとした。

「それでさ、どんな話なんだ？ そのエニグマって神話は」

「うっはー！！」

「いдаあっつー！！！」

瞬間、カイの言葉が途切れ、代わりに威勢のいい声が響いた。

「めっずらしいじゃん、カイ！ 早起きなんて！ 何々？ 天変地異でも起きちゃう？」

その、元気が余りに余ったような声を出しているのはシルクだった。

彼女は、カイの背中に飛び掛った後、彼の背中に抱きついたまま、彼の頬に自分の頬をスリスリと擦りつけている。

そして、シルクが来た方向からは、銀色のホイルに包まれた大皿を平手で持ちながら歩いてくるユウの姿があった。

「ちょ、シルク！ やめ って、あ、ユウじゃん。もしかしてシルクと居たのか？」

「ああ、朝食をおごらされた」

微笑しながらも舌打ちをしたユウに、カイは微笑を返す。

その後すぐに、カイはユウが持っている物に気付く。

「あれ？ その皿には何が入っているんだ？」

「ん？ これか？」

ユウは銀色のホイルを少しめくる。

すると同時に、ガーリックの香ばしい匂いが上がり、中身は平たく伸ばされたパンの上にチキンやトマトソース、そしてたつぷりのチーズなどいろいろなトッピングをして焼かれたピザだった。

「俺達はまだ食べたからな。お前とネプチューン、そしてまだ部屋で寝ているかもしれない二人への朝食だ」

「ま……まじかよ………こんなうまそうな物をもらっていいのか……？」

カイの問いにユウは、もちろんだと答えてホイルを被せ直した。

「それじゃ、冷めない内に持っていこうよ！」

シルクの言葉を合図に、カイ達は真っ直ぐに客室へと向かった。

## 第二十八話：森の襲撃者

外は夏の日差しで暑くなっている中、とある客室では煌々と光を放ちながら冷気を出している賢石”エンリル”によって、快適な温度を保っていた。

その客室にある二段ベッドの上段でミント色のスーツ姿に着替え、ピンク色の長髪をゴムでポニーテールにしたシヴァはまだ、白く可愛らしいパジャマ姿であるミーナの後ろに座り、彼女の水色の長髪を櫛で梳かしていた。

「……………昨夜は夜更かしし過ぎたなあ……………おかげでまだ眠い……………それにしても可愛いなあ、ミーナは……………髪は綺麗で、パジャマ姿も、ああ、抱きしめたい」

「そういうシヴァも、ポニーテールにすると可愛いよ!」

「そうか? それは嬉しいな……………だが、やはりミーナが一番だ。私の娘にして、いや、姫として私が執事となるう……………」

今現在、この部屋にはシヴァへの突っ込み役であるユウが居ないため

シヴァはいつになく暴走していた。

「……………よし、整ったぞ。次は着替えだ。ほらミーナ、私がパジャマを脱がせてやるう」

「いいよシヴァ、自分でやるー」

ミーナはそう言って、一人でパジャマを脱ぎ始めた。

「ああ……………姫は一人で着替えが出来るほどまでに成長したのか……………嬉しい限りだ」

シヴァが嬉しそうな表情で頷いていたその時、突然入り口のドアが開いた。

「何だ、二人とも起きていたのか」

そう言いながら入って来たのはユウ達だった。

「あ、ユウユウだっ！」

ミーナは大声でそう言った後、上半身が裸のまま、上段ベッドの上段から飛び出す構えをした。

ユウは、彼女の構えを見て驚きながらも、避けると彼女が落ちる為、持っていた大皿をカイに向ける。

「カイ！ これをもつてろ！！ がっ！！！」

間一髪でユウは、大皿をカイに渡す事が出来たがその瞬間、ミーナがユウに飛び掛り、彼は無様な体勢で倒れ込んだ。

「おっはよう！ ユウユウ」

「おい、こら、その手を放せ！ そしてどけっ！ おい、ミーナ！  
！ …… は？」

突然、大声で叫んでいたユウの動きが止まった。

それもそのはず、彼の視線の先には怒りの表情を露あらわにしたシヴァの姿があったからだ。

彼女は、背後にオーラが見えるかのような殺気を放ち、ユウに長剣を突きつける。



「…………貴様、私の姫の裸体を無断で見た上にその身体に気安く触れるとは…………いい度胸だ。あの世で後悔するんだな……………」

「ま、待て！ ミーナの裸を見たのは、カイ達も同じだろ！」

「コイツらはギリギリで見えていない」

「だ、第一、ミーナは俺に一番懐いているだろ？ もし俺を殺したら、お前が姫とか呼んでるコイツを悲しませる事になるんだぞ？」

ユウが言った最後の一言にシヴァは、ほうと言って長剣を腰の鞘に収めた。

「それもそうだな。それに、ミーナは私とお前の大事な娘だからな。悲しませるわけにはいかん」

「…………お前、よくまあそんな真顔で、平然と第三者が聞いたら絶対勘違いする事を言えるんだよ……………」

「娘に対する愛以外の全てが冗談だ」

本当にどこまでが冗談なのかわからないシヴァの返答に、ユウは苦笑するしかなかった。

「…………ねえ、カイ。そのお皿には何が入っているの？」

上半身裸のまま、ユウの胸元に抱きついていたミーナは、カイの持っている大皿に興味を持ったのか、指をさして問いかける。

その問いにカイは微笑を作って、大皿に被せられたホイルをめくる。

「これは、さつきユウが買ってきてくれたピザだぜ」

「…………ピザ！？ やったあ！！」

「っ！？」

喜びの余り、笑顔で両手を大きく上げたミーナを見てカイは素早く後ろを向く。

それを見たユウは内心、カイ、ハプニングで女の胸を見てしまうというのがパターン化してるな……と、溜息混じりで呟いた。

そして彼は、ミーナの両脇に手を添えて持ち上げ、自分の上から退けた。

「とりあえず、お前は服を着ろ。シヴァ、手伝ってやってくれ」

「ああ！ ユウユウまで私を着替えられない子供扱いするぅ〜！」

言いながらミーナは頬を膨らませるが、ユウはそれを無視して、先ほどまで彼女が居た二段ベッドの上段に乗せる。

「もちろん、やらせてもらおう。それにしてもユウ。もしかしてお前は、朝っぱらから私達にピザという、カロリーの高い物を食べさせるつもりか？」

言いながらシヴァは、二段ベッドの上段に上り、ミーナの着替えを手伝い始める。

「いや、ここのピザはガーリックなどを使っているものの、生地などの素材には食物なんかを多く使っていて低カロリーだそうだ」  
「だから、この店で一番低カロリーでおいしいピザを買ってきたんだよ」

ユウの言葉に付け足して、シルクが微笑を浮かべながら言った。  
それを聞いたネプチューンは、いつの間にか口に入れようとしていたピザを止めて、大皿に戻した。

「……………わ、わっち、野菜は苦手だっちゃ……………」

そんなネプチューンを見てカイは、はははと笑いながら、手に持っていたピザを食べ終え、大皿をシヴァの居る場所まで運ぶ。

すると彼女は、運ばれてきたピザを一切れ手に取り、ありがうと言って、一口食べた。

その瞬間、彼女は眉をピクリと動かした。

「……これは美味しいな」

そう言つとシヴァは、手に持っていた一切れをあつという間に食べ終えた。

そして、もう一切れを手に取り、今度はミーナに与える。

「さて、準備は整ったな。今後の予定だが、とりあえずはネプチューンの言っていた、この町の近郊にある遺跡とやらを目指す事にする。それでいいか？」

その問いに全員が賛成し、シヴァは頷いてベッドから降りる。

「それじゃ、善は急げだな。        って、どうした？    ユウ。上の空になって」

カイが声を掛けるまでピクリとも動かず、ぼーっとしていたユウは彼の声で我に返り、眉にしわを寄せて目を細めた。

「……いや、何でもない……何でも……」

しかめた眉を緩め、苦笑。

そして吐息を一つし、ミーナがピザを食べ終えたのを確認してから、シヴァを見て頷く。

対するシヴァは頷き返し、合図する。

「よし、行くぞ」

ノアの郊外にある森。

そこは、朝日が昇っているのにもかかわらず、光がほとんど差し込む事なく、薄暗くなっている。

空気は湿っており、見た事のないような小さな虫が飛び交っている。

その理由は何十年、何百年もの間に成長を続けていた木々があるからだろう。

その証拠にほとんどの樹木が、雷でさえ倒す事も出来ないと思えるほど太く、まるでその森に入り込んだ者を威嚇しているかのよう

に、斜めに伸びている。

その樹木に近寄り、上を見上げているカイとシルクは、その大きさに思わず声を揃えて、すごいと歓声を上げていた。

そんな彼らを見てシヴァは、腕を組みながらため息をつく。

「全く、暢気なものだな。警戒心の欠片もないではないか」

だが、その言葉とは違って表情は微笑んでいた。

そんな彼らとは打って変わって、ユウは無表情に、されど目を細めて、三人とは少し後ろを歩いている。

するとネプチューンは彼の表情に気付いたのか、近寄って肩を軽く叩いた。

「どうしたっちゃ？ さっきから目え細めて無表情になって」

「……………いや……………ちよつとな…………… ツ！？」

ネプチューンが問うた後、突然ユウは目を見開き、カイのいる方向へと全力で走り出した。

刹那、カイの近くで火花が散り、同時に金属音が響いた。

「 おわっ！！ 」

その音の正体は、ユウが抜刀した長剣と、カイに奇襲をかけようとした者の鉤爪だった。

二人は少しの間、罅迫り合いをしていたが、ユウは長剣を横に倒し、相手の体勢を崩して回し蹴りで吹き飛ばす。

飛ばされた相手は、地面を滑るようにして転がっていき、樹木に当たり勢いが止まった。

その者は茶色の長髪の間から生えたウサギの耳が少し斬れており、頭からは出血していて顔を血が伝っていたが、全く気にかけていないような表情で立ち上がりとしている。

全く気にかけていない、というよりは、焦点が合わずどこを見ているのかわからない目と、つり上がった口元から察するに、正気ではないと思われる。

そして、羽織っている白いコートはボロボロで、微妙に肌蹴っている胸元が膨らんでいる事から、相手は女性のようなようだ。

よく見ると、右腕と右脚に傷口があり、酷く出血している。

だが、頭の出血と同じく、全く気にかけていない様子だ。

そんな彼女を見たユウ以外の者達は、ただただ驚いていた。

「あの人……すごいケガしてるよ………なんで、立とうとする事が出来るの？」

シルクの問いに、シヴァは腕を組みながら答える。

「獣人族だから……という理由かもしれないが、さすがにあれば出血し過ぎだ」

「ど、どうするんだ？　アイツ。あの様子だと、突破するのに結構時間がかかるぞ？」

と、その時だ。

ユウが、口元に笑みを作りながら、カイ達の前に出た。

その行動にシヴァが、どうした？、と問うと、ユウは彼女の方を振り返る。

その表情は、目を細めて口元を微妙につり上げて笑みを作っていた。

そして、手に持っていた長剣を鞘に収める。

「……こいつは俺にやらせろ。鈍った身体を動かすいい機会だ」

太もも辺りに巻き付けてある革で出来たカバーからナイフを抜き、両手に一本ずつ持つ。

「お、おい、さすがにそれは」

「カイ、俺はあっちの世界じゃあ殺し屋だったんだ。俺は、戦いが生きがいでもある。だが、こっちの世界に来てから一度も身体を動かしてない。だからだ、身体を鈍らせないためにも、ここは俺にやらせろ」

右手に持ったナイフの持ち方を変え、刃が後ろに向くようにして

構える。

「……………わかった。皆、行くぞ。たぶん、もう少しで目的地だ」  
「シヴァー！！」

カイは、シヴァの決定が気に入らず、彼女の方を向いて怒鳴った。  
だが、シヴァはそんな彼を冷静な表情で見る。

「カイ、私は無駄話をするつもりはない。こうしている間に、あの獣人が完全に意識を取り戻せば、私達は足止めを食らい、負傷者が増えてしまっだろう」

シヴァが指をさす方向には、頭の出血で意識が定まっていないのか、フラフラとしている獣人の姿がある。

「この森では、先ほどのお前のように奇襲を受けると、ミーナ達を守りきれない。だからこそ、ここはユウに足止めしてもらわなければならないのだ」

その言葉にカイは、苦虫を噛み潰したような表情になるが、それと同時にシヴァはミーナを背負い、全員が走り出す。

そして、シヴァがユウの横をすれ違う時、呟き程度で会話が交わされた。

「シヴァ、ミーナを頼んだ」  
「まかせておけ」

シヴァの返答を聞いて安心したのか、ユウは彼女達の後ろ姿を見送り、再び獣人の方を向く。

対する獣人はもう立ち直っており、ユウの後ろを走って行くカイ

達を追おうと身体を前に倒しながら走り出した。

そんな彼女を見たユウは、手に持ったナイフを構えて、再度口元に笑みを作る。

「……………そういえば、お前は俺の踊りを見ていなかったな……………なっ、バカにするなよ？」　　さ……………舞踏会の始まりだ……………」

言ってユウは地面を思い切り蹴り、走り出す。

獣人をユウに任せて、目的地である遺跡を目指し、木々が開けている道をひたすら走っているカイ達は急に森から抜けたかのような感覚に、思わず立ち止まった。

その場所は、まるで森とは別の場所であるかのように樹木は無く空が開けており、地面は草原のように草が生い茂っている。

そしてその奥、カイ達が出てきた道から一直線の先には、大きな岩で出来た絶壁と、その下に洞窟が出来ていた。

「……………あれ……………？　ここって……………」

唖然としているシルクは、この洞窟に見覚えがあった。

それは、同じく唖然としているカイも同じだった。

「……………ここは……………左腕の力を手に入れる原因になった懐中時計を手



に入れた場所と似ている……」

言いながらカイは驚きながらも、自分の左腕を見つめて、再び歩き出す。

ぽっかりと空いているその洞窟は、カイ達を招いているかのようだった。

## 第二十九話：ウサギの舞踏会

勢いをつけて走り出した俺は、身体を低くし、ナイフを前に構えて一気に間を詰める。

すると獣人は、手の甲に装着されている鉤爪を、俺から見て左側から勢いよく薙<sup>な</sup>ぐ。

余りにもシンプルな攻撃。

だがその一撃は、全力で走っている俺に対しては効果的な一撃。その為俺は、両手のナイフを左側に構えながら低く飛び上がる。身体を出来るだけ丸め、衝撃を受け流すように。

するとナイフは鉤爪を防ぎ、それと同時に脚を思い切り伸ばして、相手の顔面へと蹴りを入れる。

「がっ！」

全力で走った時に蹴りは、勢いが強い為、相手は堪える事が出来ずに吹き飛んだ。

『……………貴方、レディーにも容赦しないのね』

「戦いに性別は関係あるか？ 答えはノーだ。相手が女だから、子供だからと言って躊躇<sup>ためら</sup>うと自分が死ぬ。……………それに」

俺は獣人の方に目をやる。

相手は少しふらつきながらも再度立ち上がり、俺を目で捕捉した。先ほど蹴った顔面、と言うよりは鼻からは、夥<sup>おびただ</sup>しい量の血が出ているが、それを気にせずに飛び上がり、今度は樹木を伝ってこちらに向かってきた。

「……………あれはまるで、傀儡人形だ」

言って、俺は走り出す。

その途中、腰に装着されている、弧を描いたフック状の武器”三日月”を掴んで引っ張る。

すると、三日月の下部に付いているエタール仕様のチェーンが出た為、その中間あたりを掴み、勢いよく回して遠心力をつけて三メートルほど先、上に向けて投げる。

すると三日月は真っ直ぐ飛んで行き、樹木の太い枝に刃が食い込んだ。

それを軸にして高く飛び上がり、近くの樹木を蹴って、チェーンを掴みながら一気に間を詰める。

丁度その時、獣人が鉤爪を構えて攻撃態勢に入る。

それを好機とし、身体を一回転させてチェーンを思い切り引っ張り、三日月を枝から外して相手に振り投げる。

だが、その一撃を相手はありえない動き、身体をひねって軌道を変え、樹木の枝に飛び移り、軽々と三日月を避けた。

そして、飛び移った枝から飛び出し、素早く接近してきた。

俺は今、空中にいる。

あと少しで詰まる間合いの中、軌道を変えるためにチェーンを引いても、三日月は間に合わず、結局のところ避ける動作が取れない。その為、チェーンを放して両手のナイフを前方に身構えて防御に入る。

刹那、金属音が響き、高々と上がっていた自分の身体が背中から地面へと、急速に落下し始めた。

そしてその間にも、獣人は攻撃を止めず、両手の鉤爪で攻めてくる。

「がっ　しつこい！」

獣人にとる連撃をナイフで防ぎつつも少しずつ相手の腕に切傷を

与える。

それにより傷口から出た鮮血の雫が、腕を振る事によって飛び、小雨のように降りかかってくる。

だが、相手は痛みを感じていないのか、鉤爪を振る力と速度を弱める事なくむしろ、少しずつ強く、速くなって攻めてくる。

『ユウ！ もうすぐ地上よ！！』

永遠かと思われた落下は、ティファの言葉によって、終わりがすぐそこまで来ているのがわかった。

「わかっているんだがコイツ、体勢を立て直せるほど隙を全く見せねえ！ 浅い傷をつけられる隙は腐るほどあるって事は、自身を犠牲にして俺を地面に叩き付けるつもりだっ！」

そう言ってる間にも、地面に到達するという感覚が迫ってくる。

……… やっぱり、無傷で戦闘を終わらすなんて無理なんだな。

「………… ティファ、すまん」

『気にしないの、やっちゃいなさい』

その一言を聞いた瞬間、俺は右手のナイフを獣人に向かって投げ、素早く右手を後ろ腰に回す。

もちろん、相手は簡単にそれを弾き、がら空きになった俺の右半身を斬りにかかった。

「ぐっ！！」 『きゃあっ！！』

俺の右胸を抉ろうとした鉤爪は俺の服が盾となったが、刃の先が皮膚まで届き、浅い切傷となった。

それと同時に、後ろ腰に回していた右手で物を掴み、相手に向ける。

次の瞬間、森中に乾いた大きな音が二回響き渡った。

遺跡に入ったカイ達は、入り口から程遠くない位置で行き止まりに打つかっていた。

「ね？ わっちの言った通りだったぜよ。ここには何も無い、無駄足だったっちゃ」

ネプチューンは苦笑しながら肩を竦め、身体の向きを変えて出口へと向かおうとした。

だが、そんな彼の檻<sup>ぼろ</sup>切れロープを掴み、止める者が居た。

「……なぜよ？ ミーナ」

問いにミーナは答えようとせず、ただロープを掴み、水色の長い髪を揺らして首を左右に振っていた。

と、その時だ。

カイが左腕を出して力を、禍々しい腕を露にした瞬間、その腕が光り出し、同時に行き止まりであったはずの場所が光を放ち出した。

「……きれいな光……」

「カイ、大丈夫なのか？」

カイはシヴァの問いに答えず、左腕を高々と上げた。その動きに合わせて、光は徐々にその場にいた全員を包み込んでいった。

そこは無空間。

何も無い、何も感じない、何も聞こえない。

何かあるとすれば、先ほど光に包まれたカイ達の姿だけだ。

彼らは目を開けると、自分達のいる場所が変わっている事に驚いた。

「皆、ちゃんというのか！？」

代表役であるシヴァが、全員の安否を大声で確認する。

どうやら、彼女達は互いが見えていないようだ。

すると、全員分の声が彼女の元に届いた。そこにいるという認識。その瞬間、彼女の視界に突然全員が映り込んだ。

「んなつ！？」

「ええ！ 何で！？」

どうやら、シヴァ以外の者達の視界にも同じ事が起きたらしく、自分の視界に突然現れた事に驚いていた。

だが、その驚きは、すぐに別の事で薄れていく。

「あれ？ 何、あれ。ほら、カイの近く」

シルクが指で示す方向、カイが居る場所には、数多くの小さな光が集結し始めていた。

その光は、徐々に人の形になっていき、最後には光が弾けて女性の形となっていた。

白銀に輝く長い髪を靡<sup>なび</sup>かせ、まるで女神のような、純白の羽衣を着た姿で現れた彼女は、つばらな瞳を瞬かせてカイを見る。

「カイ、よくここまで来てくれました。一つ目の柱、蘇りは貴方の手で」

カイが契約時に聞いた強い声とは違い、優しくて包容力のある声、口調で言った後にそつと彼の左腕に触れる。

瞬間、再度彼の左腕は輝き出して今居る空間に色が、同時に多数のビジョンが映り出す。

「これは、時空に対する祝福の解放。ですが、この事に喜んでいる場合ではありません」

言って羽衣の女性は、世界地図が映し出されているビジョンを指で示す。

「地図で言うと南東にある大陸”カルディエール”に存在していた時空の柱が、何者かに破壊・消滅させられました」

「っ！？」

突然の言葉に、その場にいた全員が驚いた。  
そんな中、カイは口を開く。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。壊されたって事は、どうなっちゃうんだ!？」

「残り二つの解放と、一つ分に値する物による更生。それによって、契約通りに事は進みます。ですが……」

彼女の表情に、少しばかり曇りが見えた。

「一つの柱を失い、力が弱まった事によって、次の柱への導きが出来なくなってしまう……。その為、私自ら次の柱の場所にたどり着くための言葉を伝えます」

一度目を瞑り、吐息を一つ。

「人は人であるがために、人である事を忘れる……。この言葉を唱えた者に関係する場所の内、どれかに正解があります。これが、私から言える最大限の言葉です」

「……………??」

「ほう……………」

それを聞いたカイは、頭上にクエスチョンマークが出るほど首を傾げていたが、シヴァとネプチューンは気付いたのか、それぞれが一言呟いた。

その呟きに、羽衣の女性は頷いて微笑んだ。

すると、カイが何かを思い出したかのように、あっと声を上げた。

「そつえば、君の名前は何て言うんだ？」

「……………ナンナ、と言います」

その名を聞いた瞬間、ネプチューンの眉がピクリと動いた。



そして、顎に手を添えて考え込む。

「それでは、次の柱で会いましょう……………」

ナンナはそう言つて一歩下がる動作をし、次の瞬間、身体が光に包まれて小さな光に分散し、そして消えた。

その後、再度光が全員を包み込み、気付いた時には元いた遺跡の出口に戻っていた。

「人は人であるがために、人である事を忘れる……………」

最初に口を開いたシヴァは、心当たりがあるかのように呟いて腕を組む。

心当たりがあるのはネプチューンも同じらしく、ニヤニヤしながら彼女に近付いた。

「シヴァ、その言葉は知ってるつちよ？」

「当たり前だ。それくらいわからなければ教師と名乗っていない」

「え？ え？ 何？？ 何なの？？」

シヴァが言っている事が全くわからず、シルクは首を何度も傾げて問い、カイに至つては考える事を止めて、ただただ立ち尽くしていた。

「うむ、そういうばまだ教えてなかったな。…………その言葉はな、あの科学者が唱えた言葉だ」

「正確に言えば、イカレた科学者ぜよ」

「イカレた…………？」

シルクの問いに、シヴァは顎に手を当てて苦笑する。

「確かにイカレた科学者だな…… そいつの名はキース・ヨルムンガンド。戦時中、テクノス王国・国王アーガイル直属の極秘研究組織代表で、戦闘に特化した強化人間の生成をしていたのだ」

「もちろん、国王直々の指示だったらしいんやぜよ。実験には、数多くの罪無き民間人が犠牲になったつちよ」

「そんな…… 関係の無い人達まで……」

シルクは思わず両手で口を覆い、目を見開く。

「その過程で、キースはそう言ったんぜよ。人は人であるがために、人である事を忘れる。それは、実験をしている自分自身に、実験によって変わっていく被験者に、アーガイル国王本人に言った言葉とも言われているんぜよ」

「…… あっ！ って事はその人が関係しているテクノス王国がある場所に、次の柱があるって事だね？」

そう言うシルクにシヴァは、ふむつと言って口を開く。

「そのテクノス王国があるカルディエル大陸の柱は先ほど、ナンナとか言う女性が消滅したと言っていただろ？ だから、だ。……これは憶測なんだがな？ キースは終戦と同時に失踪し、今でも行方不明なんだ。そして、最後に目撃されたのが、私達のいるカナン大陸から北西に位置する”シユメール大陸”だそうだ」

「…… って事は、シユメールに行けば柱があるってわけだね！？ すっごーい！ あったまいいね、シヴァちゃん！」

「いや、私は一応教師なんだが……」

シヴァは思わず苦笑し、組んでいた腕を離す。  
と、その時、森にパァンツという乾いた、大きな音が響き渡った。

その音に全員が驚き、音のした方を向く。

「確か、あっちはユウが居た場所だよな？」

立ち尽くしていたカイは、いつの間にか元に戻っており、頭を掻きながら問う。

「どうやら、急いだ方がよさそうだな」

表情は冷静に、だが声はあせり気味になっているシヴァの言葉を合図に全員が、音のした方へと走り出した。

### 第三十話：決着と決別

森に響き渡った音。

それは今、俺が右手に握っている拳銃”ガバメント”の発砲音だ。地面に到達しそうになった時、右胸を犠牲にして腰のホルスターからガバメントを抜き取り、相手の両肩にそれぞれ撃ち込んだ。それにより、相手の動きが鈍った為、素早く蹴り飛ばし、何とか着地体勢に入ることが出来た。

「チッ！」

こういうのを危機一髪と言っのだろうか。

全身を地面に叩き付けられるという状況から、無傷で着地出来た事にホッとしつつガバメントをホルスターに収め、吹き飛ばした獣人を見る。

「……両肩に魔力の塊をぶち込めば、さすがに立てねえだろ……」  
「……いいえ、立ち上がるわよ……！」

一瞬、自分の目を疑いたくなる。

ティファの言うとおり、獣人は立ち上がった。

肩を撃ち抜いた事によって使えないはずの腕を使って……

「ね？ 立ち上がったでしょ？」

「おいおい……どうなってんだ、アイツは……」

「あんなになっても動ける……そして、この異様な感じ……やつ  
と思い出したわ、彼女は魔術に掛かっている。それも、とびつきり  
性質の悪い魔術にね」  
タチ

体勢を地面スレスレまで低くしながら走って来る相手に向かって、俺は無意識にホルスターからガバメントを抜き、引き金を引く。

『瞳の中に、魔導式の小さな文字が刻み込まれていたの。もちろん、両目ね』

チャージャーによって火と樹属性の魔力が集められ、構成された雷管が引き金を引いた際に弾かれる撃鉄ハンマーによって叩かれ、化学反応によって小さな爆発音を起こし、同じく魔力で構成された薬莢やっきょうから魔力を固めた銃弾が銃口から飛び出す。

同時に相手の腹部から、ビスツという生々しい音が聞こえ、出血する。

「それがあるとどうなるんだ!？」

火薬の爆発による反動で遊低スライドが前後し、空になった薬莢が、引き金の少し上にある穴、俳優口から飛び出した。

『さつき貴方が言った通り、魔術を掛けた術者の傀儡人形になっているのよ。脳を完全に支配されている状態ね。だから、どれだけ傷を与えても立っていられるってわけ。それに、一度掛けられると絶対に元に戻れないの。本人の意思に関係なく、脳を無理矢理支配するから解除した瞬間、脳は壊れて掛けられた本人は死ぬ。……でも、ちよつと引つかかる事があるの』

銃弾が直撃した獣人は、鮮血を銃創から吹き出しているが、その速度は落とさず、真っ直ぐに向かって来る。

『その魔術は、私のみが習得しているはずの禁術なのよ』  
「なんでお前のみって断言出来るんだ?」

相手にどんどん間合いを詰められる中、俺は全力で後退しながら、何度も引き金を引き、弾倉を空にする気で何発も撃ち込む。

『もし、その術者がジードの人間だとしたら、だけどね。禁術は、祖父が見つけた人間と魔力の概念を元にして考え出されたいわゆるオリジナル魔術なのよ。しかも、それが完成したのと同時に私が習得し、そして全てが吹き飛んだ。だから、禁術の内容は私と祖父だけで、祖父は死んだから最終的に私しか知らない事になる』

「って事は、こっちの世界でも似た様な事をした人間がいるか、またはジードの人間ってわけか」

『大雑把おおざっぱだけど、そうなるわね』

だが、どんなに撃ち込んでも一向に速度を落とす気配が無く、むしろ速度が上がっている感じた。

「……それほどの奴なら、世界間の移動法がわかるかもな……」

俺は口元に笑みを作り、ガバメントを再度ホルスターに戻す。そして、三日月を左手で掴み、左足を後ろに出して地面に滑らせ、後退する速度を落とし、前へと出る。

獣人はそれを好機と見たのか、更に速度を上げた。

同時、俺は地面に右足から滑り込んで相手の真下へ。

そして、その右足を軸にして身体を思い切りひねらせて、左足を相手の顔面に蹴り込む。

すると相手は、自分が全力で走った際の速度と、それを止める俺の一撃が途轍とてつもないダメージとなり、真上に浮き上がる。

「ふうっ……！」

すかさず左手で掴んでいた三日月を飛ばし、獣人の首に巻き付け、歯を食いしばって素早く起き上がり、同時にチェーンを引っ張り地面に叩きつける。

その後、腰の鞘から長剣を抜いて、相手の左脚に深く突き刺し、右脚には俺の左足を、左腕には太ももに巻き付けてあるケースから抜いたナイフを突き刺し、右腕には右手に同じくケースから抜いたナイフを持って突き刺し、そして首を左手で掴んで、完全に身動きをとれないようにし、自分の顔を相手の顔に近付ける。

「……確かに文字が見えるな……」

黒い瞳の中に、ピンク色の見た事ない文字が円になって敷き詰められている。

それを見て、俺は満面の笑みを作る。

「コイツを操ってるヤツ、よく聞け！ 必ずお前を見つけて、持つてる情報を一滴残らず搾り出してやる……！」

気付けば、笑いながら怒鳴っている俺がいた。

と、その時、後ろの茂みがざわめいて人の気配を感じ取れた。そして、振り向くとそこには、走って出てきたカイ達の姿があった。

カイとその後ろをついてきた者達は、茂みを飛び出した瞬間の光景に驚きながらもカイとシヴァは武器に手を添える。

するとユウは、何かを思い出したのか、カイに向かって大声を出す。

「カイ！ お前の力でコイツの時間を戻してくれ！！」

「え？ あ、ああ、わかった！」

カイは最初、戸惑ったが、すぐに走り出し、ユウが押さえ付けている獣人に左手を当てる。

瞬間、閃光と共にカイの左腕が光り出し、紋章が刻み込まれた禍々しい形の腕が姿を現した。

それと同時に、獣人の傷口が見る見るうちに塞がり始めた。

それを見たユウが、急いで左脚に突き刺していた長剣と、両腕に突き刺していたナイフを抜くと、刺さっていた箇所も傷口も塞がり、ユウとの戦闘で出来た傷は一つ残らず無くなった。

そして、ほとんど無表情だった顔は、少しずつ変わっていった。

だが、代わりに右腕と右脚の太ももに大きな傷口が出来始める。

傷の大きさからして、ユウがつけたものではない。

それを見たユウは、カイの背を叩いた。

「もういい、手を離せ」

「いや、まだ傷口が塞がってない！」

「いいんだ。この傷口が塞がるという事は、この傷をつけた奴をまだ知らない頃まで戻る事になる。そうなるに必要な情報が入らない」

ユウの言葉にカイは少し考え込むが、ユウは引きそうになかった為、仕方なく左手を離した。

その行動にユウは、ありがとうと呟き、獣人の頬を軽く叩く。すると彼女はゆっくりと目を開けた。



「……んっ、ぐっ、ゲホッゲホッ！　　な……アイツらは……ッ！？　な、何だ、お前ら！　一体何が起きて！」

目を覚ました獣人は、今の状況が全くわかっておらず、突然視界に入ったカイ達に驚き、警戒心を最大にしていた。

そんな彼女を見て、シヴァは組んでいた腕を下ろした。

「……まさか、カイの力で時間を変えらるというのは、存在その物の時間をも変えてしまうのか」

「やっぱりな。そんな気はしていたが、どうやらこの力は生易しいもんじゃないようだ」

ユウは苦笑しながら呟く。

すると、その会話を聞いていた獣人が、目を見開いてカイを見た。

「時間や力と聞いたけど……もしかして君が神の力の持ち主なの！？」

「神の……力？」

獣人はユウの疑問を無視し、話を続ける。

「その神の力、どうか私達一族のために使ってほしいの！　私達、獣人族の穢れた歴史を変えるため　ゴフッ、ゲホッゲホッ！」

咳が先ほどよりもひどく、そして口からは血が出ていた。

その事に気付いたシヴァが獣人の腹部を見ると、右の横腹が微妙に血で赤く滲み出していた。

同じくその事に気付いたカイは、悲しそうな表情で口を開く。

「……俺の力は、歴史を変えろという事は出来ないんだ。これは、ある人との約束を果たすための力。世界を救うための力なんだ」

「なら！ 私達も救ってよ！！ どうしてできないの！？」

「そう都合良く誰でも助けられるわけじゃないんだ。コイツの力は、人の運命を無理矢理捻じ曲げる悪魔の力でもある。そんな力を、神の力などと呼べるわけがないだろ？ ……それに、だ。過去の穢れとやらを消したいのならそれを忘れられるほどのすごい事をすればよかったんだよ。穢れ？ ああ、あつたな、そんなの。だけど、今はこれだけの事をしてるから別にいいじゃん、何て言われるようになる。そこまで頭が回るヤツが居なかった。ただそれだけだ」

カイの言葉に尚も食い付こうとした獣人に言ったユウの言葉を聞いて、彼女は絶望したようなされど納得したような表情になり、小さく溜息をついた。

「……そうね、そんな便利な力なんてあるわけが……よくよく考えたら、誇り高き獣人族が神にすぎるなんて、どうかしてたわ」

彼女は、はははっと乾いた声で笑った。  
そして一度目を伏せ、カイを見る。

「……ねえ、それじゃあ私の時間とやらを変える前、私に何があったのか教えてもらえる？」

「それは、俺が説明する。 と、その前に、お前の名を聞かせてくれないか？」

「人に名を聞く前に、自分から名乗るのが礼儀よ？」

彼女の問いにシヴァは、フツと鼻で笑った。  
それを聞いたユウは苦笑し、答える。

「……それもそうだな。俺はユウで、こっちはカイ。後ろにいるのは順に、シヴァ、ミーナ、シルク、ネプチューンだ」

ユウはそれぞれを指で示しながら教える。

「ありがとう。それじゃ、私はクレアよ。……で、聞かせてもらってもいい？」

弱々しい笑顔と共に問うクレアに、ユウは一度頷いて話を始める。

「……お前は、誰かに傀儡系の魔術を掛けられて、完全に脳を支配されていた。そして、突然襲撃してきたんだよ。おかげでこのザマだ」

言ってユウは、右胸の傷を見せる。

「それで、何とか取り押さえる事が出来た後、カイの力でお前を魔術に掛けられる前の時間に戻した。それで、今のお前だ」

「……そうだったの……」

クレアは、乾いた声を出して苦笑した。

「はははっ、無様よね。獣人族ともあろう私が、レイヴンとかいう男に負けて操られた上にまた負けた挙句、この傷……」

「レイヴン？ そいつがお前を？」

「そう、大剣を背中に担いで、それを隠すかのように、漆黒のローブを羽織っている男よ……確か隣に、四枚羽が生えた小さな妖精もいたわ……」

「レイヴン……大剣……漆黒のローブ……妖精……」

後ろの方でネプチューンは、記憶から掘り起こす為に、聞いた単語を復唱するが、すぐに首を左右に振った。

「……………そんなやつ情報は、今までにはないっちゃ。ま、後でノアで聞き込みでもしてみるんだけどね」

言ってネプチューンは微笑を浮かべる。

と、その時だ。

突然クレアが、咳をしながら吐血をした。

口を押さえた彼女の手には、大量の血が付いている。

それを見た彼女は苦笑しながら、ユウの方へと視線を向けた。

「……………ねえ、どうせ死ぬのなら、貴方達の誰かが私を殺してよ」

口元から血を流しながら言ったクレアを、カイは驚いた目で見た。

「な、何言ってるんだよ!? せっかく助かった命だぞ? そんな簡単に捨てるなよ!」

「……………貴方にはわからないでしょうね……………私は一族の命運を背負って、そして希望を糧<sup>かて</sup>にしてここまで来たの。その希望が絶望になつて、ここまでボロボロになったら、私は一族に見せる顔がないの」

それに、と呟き、

「失敗した今ではどの道、死しか残っていないの。同族に殺されるくらいなら、貴方達のような、敵って存在に殺された方が、私としても報われる形となるのよ……………」

「それでもまだ……………!」

拳を握り締めたカイを、ユウは左手で制して立ち上がり、腰のホルスターからガバメントを抜き取る。

そして、それをクレアの額に突き付けた。

「ありがとう……」

クレアがそう呟いた時、シヴァはミーナの目を手で覆った。

「ま、待ってくれ、ユウ！」

ガバメントを逸らそうと伸ばしたカイの手は間に合わず、ユウは引き金を引き、同時にパアッという音が響いた。

カイがガバメントに触れたのは、その後だった。

それにより、ガバメントはユウの手元から落ちる。

一方、銃弾が当たったと思われるクレアの額からは、血が流れ出した。

それを見たカイは目を見開き、奥歯を噛み締める。

「……………おい、ユウ……………」

刹那、カイはユウの胸倉を掴み、押し倒す。

「何で助けられる人を簡単に殺したんだよ！ ああ、あの傷なら、まだ助かってたかもしれないだろ！？」

その言葉を聞いたユウの表情が変わる。

それはまるで、プチンツという擬音が似合うほど怒りが露<sup>あらわ</sup>になった表情。

「……………何で殺した、だと……………？ お前は、あいつの言葉を聞いていなかったのか？ どうせ死ぬのならせめて、と言うヤツの願いを聞いてやろうとは思わないのか……………？」

その声は、なるべく冷静に怒りを押し殺していた。  
対するカイは、勢いを弱めずに大声で叫ぶ。

「いくら願いつても、それが命を無駄にするような事だったら話は別だ！ 助けられる者は、生きられる命は俺が全力で助ける！ 助けなきゃいけないもんだから！！」

言った瞬間カイは、ユウに蹴られて吹き飛んだ。

それを見たシルクは、彼に近付こうとしたが、シヴァに手で制されてしまう。

一方、押し倒されていたユウは、両手を軸にして起き上がる。  
そして、カイを思い切り睨み付けた。

「……よくもそんなふざけた事を簡単に言えるな！ 生きられる命は全力で助けるだ！？ 相手の願いを無視し、ねじ伏せて、自分の決意を言い訳にそいつの望まない事をするのは、ただの自己満足でしかねえんだよ！！」

その怒声は、森中に響き渡り、木の枝に乗っていた鳥達は一斉に飛び立つ。

「お前はこれから先、色んなヤツに命を狙われる、そんな状況だ。そんな中で、命だか何とか言っていると絶対に殺す事に対して躊躇する！ だからこそ、そういう考えをやめろと言いたいんだよ！！……それでもまだ、同じ事を言うのか？」

問いに、カイはゆっくりと立ち上がり、決意の瞳でユウを見る。

「そうだ。俺は、同じ事を言うよ」

その返事を聞いたユウはため息をついて、細目でカイと視線を合わせる。

「……………わかった。なら、俺はこれから別行動を取らせてもらう」

### 第三十一話：それぞれの思い

突然ユウが放った言葉に、その場にいたほとんどの者が驚いた。

「お、おいユウ、どうして急に！」

「お前のその中途半端な考えに付き合っていると、俺の殺し屋としての感覚に迷いが出てしまう気がするからだ。……………それに、自分の世界を知る方法が、すぐ近くにあるからな」

言いながらユウは、少し離れた場所で樹木にもたれ掛かっているネプチューンを見た。

対するネプチューンは、視線を合わせてきた彼に苦笑していた。

その後、ユウはカィに視線を戻す。

「……………次に会った時は、今以上に決意を固めている事を願っておく」

言ってユウは、額に血の跡をつけてピクリともしないクレアを背負い、出口に向かって歩き出した。

途中、シヴァとすれ違った際、ボソリと一言呟く。

「……………また、ミーナをよろしく頼む……………」

その言葉にシヴァは、フツと小さく笑い、呟き返した。  
まかせておけ、と。

それを聞いたユウは満足したのか、一度頷いた。

一方カィは、啞然としながらユウが去っていく後ろ姿を見ていた。  
手がピクリと動いているが、身体は全く動いておらず、まるで、  
止めようとしているが身体が動かない、そういった感じた。



すると突然、ネプチューンは向きを出口へと変え、右手を上げた。

「すまんが、わっちも行くわ。ユウからの御指名ぜよ」

言ってネプチューンは、小走りでユウの後を追って行った。

残ったカイ達は、二人を目で追うのをやめて、それぞれの方向に目をやった。

「……………何が……………間違っているんだよ……………」

カイは齒を噛み締めながらそう言って俯き、その姿を見たシルクは、彼に寄り添って肩を抱き合わせた。

「大丈夫、大丈夫だよ。私はカイの理解者になってあげるから……………」

そんな彼らを微笑ましくも悲しい表情で見ていたシヴァは、隣に居るミーナに視線を落とす。

「……………いいのか？ ミーナはユウについて行かなくて」

問いにミーナは、首を左右に振って答えた。

「うーうん、いい。また会えるって知ってるから」

言って満面の笑みをシヴァに向けた。

その笑顔を見たシヴァは、ミーナの頭に手を乗せて微笑んだ。そして、カイとシルクに視線を向ける。

「……………カイ、シルク。とりあえず、宿に戻ろう。このままここに居ても埒が明かない」

シヴァの提案に、二人は頷き、ノアへと続く道を歩み始めた。

闇が世界を覆いつくし、満月がその闇をわずかに照らす。

世界を覆うモノは自分だと言っているかのように。

まるで、永遠に続く人間同士の争いを思わせる。

その人間同士の争いで発せられる音の一部、金属音が静寂を決め込む空間に、何度も響き渡っていた。

それは、リラックス・リゾートの裏手の、月明かりが一面を照らし出している場所から発せられていた。

僅かに緑色が見える芝生の上を走っているのは、二人分の人影だ。  
決まったタイミングがなく、人影が近付く度に金属音が響く。

一人は、諸刃の剣を振るうカイ。

そしてもう一人は、長剣を慣れた動きで舞うように扱うシヴァだ。  
月明かりで僅かに見える表情は、一瞬の隙もないほど真剣だった。  
それは、両者共同じである。

二人は互いの攻撃を紙一重で避け、または防ぐなどして一步も譲らずに攻防していた。

「どうした？ 諸刃の特長を活かしきれてないぞ？」

されど、やはりシヴァの方が優勢なのだろうか、カイにアドバイスを言い続けるだけの余裕はあるようだ。

「ほら、右手の握りが甘い！これだと、バランスを崩して武器を落とす事になるぞ」

言ってシヴァは、諸刃の右側を長剣で弾く。

すると彼女の言った通り、カイはバランスを崩して弾かれた方向に傾き、大きな隙を作ってしまった。

それと同時に、彼女は瞬時にしゃがみ込み、今カイの軸となっている右脚に蹴り込む。

「崩れた時の反応も遅れているぞ！こついう時は足を浮かせ、身体を出来るだけ低くしながら両手を地面に着かせ、前転宙返りだ」

カイはその言葉を無視し、崩れた身体を肩から地面に着かせ、勢いをつけて前転し、立ち上がる。

だが、立ち上がった瞬間、シヴァは腰に添えてあった鞘を抜き取り、彼の横腹に叩き込んだ。

「ぐがあっつ！！」

「それ見たことか！只の前転では、移動距離が短い上に、相手の動きが全く見えず、致命的な一撃を貰う事になるのだ！！その分、宙返りは移動距離が長く

着地の際、瞬時に次の行動に移る事が出来るのだぞ！」

手に持った鞘を腰に添え直し、近くに落ちている両刃の剣を拾い上げ、横腹を押さえて倒れているカイの目の前の地面に突き立てる。

「さあ、これでお前は一度ならず二度も死んだぞ！基礎を使わな

いという事は、こういう結果に繋がるのだ！ そんなにもお前は戦闘で死にたいのか！？」

「わかつている！ わかつているよ！！ 俺だって、必死に……………」

カイは声を荒げて叫びながら、地面に突き立っている武器を手に取り、

そんな彼を見てシヴァは、考え事を必死にか？、と呆れた口調で言い、溜息をついた。

その後、長剣を鞘に収めて腕を組む。

「休憩だ。……………少し話をしよう。その場に座れ」

疲れて息を荒くしているカイは、しばらく構えを解かなかったが、息が整うにつれて冷静さを取り戻したのか武器を三つ折りにしてから、言われた通りに座る。

「……………お前が考えているのは、ユウの事だな？」

問いに、カイは少し間を置いて答えた。

「ああ、何でユウは別行動をとるなんて言っただろうかって……………それに、ユウが言った事も気になって考えてた」

「そうか、やはりそれだったか。なに、心配する事ではない。アイツはアイツなりに必死なのだ」

言葉とは裏腹に、表情が少しだが曇る。

「アイツはジードと呼ばれる異世界の人間だ。だが、そのジードとやらは、この世界で神話となっている」

組んでいた腕を解き、人差し指を立てて話を続ける。

「アイツは、この世界では存在しない、たった一人の架空の存在となっているのだ。お前も、今までの思い出や記憶が、架空の物なのかもしれないとなると

自分の存在理由がわからなくなるだろ？ だから、アイツは自分の存在理由を必死に探そうとしているのだ。その為に、お前の決意がない考えで自分自身が変わってしまう事を、元の世界の自分が無くなる事を恐れ、別行動をとるという結果に出たのだ」

言い終えて肩を竦め、私の想像だがなっと言葉を付け足した。  
それを聞いたカイは俯き、呟く。

「……………俺の考えが……………原因……………」

「別に、お前の考えが間違っているとは言っていないぞ？ 決意が中途半端なだけだ。だからアイツは、お前が決意を固めるまで、そして同時に自分の心を整理するために別行動を選んだのだろうな」

「……………何でわかるんだ？」

問いにシヴァは、フツと鼻で笑った。

「ユウについては想像だが、お前に関しては何年も教師をやっているから、自然とわかってしまうものなのだ。ちなみに、お前は偽善者だな。中途半端な偽善者だ」

「ぎ、偽善者って……………」

最後の言葉にカイは苦笑し、シヴァは笑みを作った。

そして、シヴァは組んでいた腕を解き、長剣の柄に手を添えた。

「……………さて、休憩は終わりだな。もう一本やっておくか？」

鞘から長剣を抜きながら問い掛けたシヴァにカイは立ち上がって頷いた。

もちろん！ という威勢のいい声で答えて。

そして、彼は三つ折りにした諸刃の剣を組み立てて構える。

「それでは……………いくぞっ！！」

シヴァの合図と共に、二人は勢いをつけて走り出す。

この後、しばらく金属音が響き続けた。

カイ達が泊まっているリラックス・リゾートから少し離れた場所にあるホテルの一室。

明かりが煌々と灯っているその部屋の壁際に置かれた、シングルベッドの外側に寄りかかって座っているユウは天井に視線を向け、考え事をしていた。

故に、この部屋には音はなく、静寂が部屋を包むこんでいる。だが、その静寂を打ち破るかのように、入口のドアが、ガチャリという音を立てて開いた。

このホテルの部屋はリラックス・リゾートと同じく、寝室と入口が同じ一室となっている為、誰が入ってきたのかは首を動かすだけ

でわかる。

その為にユウは、ドアが開くのと同時にその方向へを向いた。するとそこには、ミーナがいつもとが違う、無表情で立っていた。ただ一つ、無表情ではないと言えるのなら、目を細めて、全てを見透かすような瞳をしているところだけだろう。

だがユウは、そんな彼女を見ても驚かず、逆に笑みを漏らした。そして、ゆっくりと口を開く。

「……………久しぶりにそっちのお前を見たな。最初にみたのは初めて会った時だ」

ユウの言葉を聞きながら、ミーナはゆっくりと歩いて彼の元に近付く。

「そっちがお前の本当の姿か？ ……それと、お前は俺に、俺達に何か重大な事を隠しているだろ？」

その問いに答えるかのように、ミーナはユウの隣で立ち止まり、答える。

「本当の、という質問は半分正解で半分不正解。両方とも私、本当の私。……………それにしても、隠しているとはどういう意味？」

「その質問は、わかってて言うてるだろ？ まあいいが……………。最初に会った時と、アイツらと居る時の性格が違うってところもあるが、俺の中にいるヤツから重要な話を聞く時は、必ず邪魔をしてきた」

それに、と言いながら目を細めてミーナを睨む。

「今日の襲撃があった時、お前は全く驚いてなかった。まるで、襲

撃がある事を知っていたかのように、だ。……で、お前は何者だ？  
ジードの人間か？」

ユウがそう問い掛けた瞬間、ミーナはクスクスッと笑い出し、ベツドに上って座った。

そこは丁度、ユウの真後ろだ。

「誰なのかという質問には、まだミーネレナント・ユリウス・レヴェリート、ミーナとしか名乗れないわ。もちろん、私はこの世界の人間よ」

「そうか……結局、ジードに関しては直接調べる必要があるんだな。……それじゃもう一つ」

言ってユウは、後ろに居るミーナの方を身体ごと向く。

「カイの力の事、お前は何か知っているのか？」

問いにミーナは、ユウと目を合わせながら答える。

「……知らない、と言えば嘘になる。私は全てをこの目で見ているから。でも、それを今教える事は出来ないの……。でも、知っているからこそ、私はカイ達についていく。傍で、変わっていくあの腕を……。だから、私はユウについて行けない」

言ってミーナは四つん這いになって、そうかつと呟いたユウに近付く。

そして、彼の頬に手を添え、ゆっくりと顔を近付ける。

だが彼は、ミーナの顔を手で止め、苦笑しながら頬に添えられた手を退けた。

それが何を意味しているのか知っているミーナは、微笑しながら



少し離れる。

「止めるのはわかっていたわ。ユウは、ジードに大切な人が居るものね。一生を誓い合った人が」

「何でもお見通しなのか。………なら、俺が戻ってこようとしているのもわかってるんだろ？」

「ええ、わかっているわ。戻ってこようと、じゃなくて戻ってくるのね。

ただ………」

ユウに背を向けてベッドから降りたミーナは、くるりと半回転して彼の方を向く。

「カイは不思議な子よ………何度も、カイが言った言葉で、行動で見通せない事が起きる。だから、神と名乗る者は彼を選んだのね………」

「………」

そう言い残して、ミーナは出口へと向かった。

するとユウは、ミーナの小さな後ろ姿に視線を向け、聞こえるように呟いた。

「………次に会うまで、死ぬなよ………」

ミーナはドアを開けて廊下に出て閉める際、ユウに満面の笑みを向けた。

それを見たユウは微笑し、ベッドに上って眠る体勢をとった。

「………朝は任せたぞ、ティファ………」

呟き、ユウは仮眠をとるために目を瞑った。

そして再び、部屋の中に静寂が訪れる。  
夏の夜の涼しさが、部屋にゆっくりと入り込んでいった。

### 第三十二話：託される禁術

ユウとネプチューンの二人が別行動をとると言って別れてから一夜明けた。

現在の時刻は午前四時。小鳥達でさえ、まだ鳴き始めている時間だ。

それは、人間も同じだが、この時間にたった一人、シルクだけは目を覚まして部屋を出ていた。

彼女はまだ眠い目を擦りながら廊下を歩き、真っ直ぐにロビーへと向かっていた。

そして、外に通じるドアを開くと、やっぱり居た、っと声に出して言った。

彼女の視線の先には、大きく口を開けて欠伸あくびを出しているティファの姿があつた。

「やっぱりいたって……貴女を呼んだのは私よ？ ホント、聞こえるのが貴女だけでよかったわ」

「呼んでくれてすごく嬉しいよ！ これでやっと、皆の役に立てるからねっ」

元気よく言ったシルクを見て、ティファは微笑んだ。

そして、身体ひるがえを翻して顔だけをシルクに向ける。

「さ、始めるわよ」

シルクは、その動作で靡なびいた金色に輝く長髪に見とれながらも、大きく頷き、前回と同じ場所に向かうティファの後を追った。

今日の早朝は意外と涼しく、薄手のランニングTシャツで来てしまったシルクは小刻みに身体を震わせながらも、ティファの説明を食い入るように聞いていた。

「……っていう事の為に、昨日は魔具を作ったってところまではちゃんと覚えているわよね？……それで今回は、実際に魔具を通して魔術を使ってもらうわ」

人差し指を一本立ててウィンクし、にこやかな笑みを浮かべているティファにシルクは、はい！と大きな声で返事をした。

「いい返事ね。でもその前に、魔術を使う際は注意点があるの。それは、魔術の詠唱時と発動時は集中力を乱さない事。何故かというと、魔術の構成は術者の創造によって生まれるのよ。特に、トウルなどの治療術は、乱れると治療する相手を傷つける事になる。そこは、気をつけてね」

「……もしかして、相手が死ぬって事もある？」

「もちろんあるわ。でも、貴女は大丈夫だと思うの。私に似ていてどこか似ていないような感じがするから……さて、そろそろ始めようかしら？」

何かを懐かしむような表情を一瞬だけ見せたティファはされどすぐに笑顔となり、誤魔化しのように人差し指を宙に円を描くようにして回した。

だがシルクは、始めようと言われても何をすればいいのかわからず、首を傾げる。

「……まずはどうやるの？」

「とりあえずは、魔具に魔力を送るようにイメージするの。身体の奥底にある何かを流し込むような、そんな感じ」

その説明で、何となく分かったのか、早速シルクは目を瞑ってイメージを始めた。

ゆっくりと、身体の奥に溜まっているものを、体内を伝って腕輪に流し込むように……

「大分流し込んだと思ったら、次は詠唱よ。私の言う事をしっかりと聞いて、間違えないようにね。……」世界を覆う生命の源は流れを変え、我思つ者に注ぎ込み、死せる部位に生ける創造を与えよ”ね。そう言つた後に、トウルと言えはいいの」

言いながらティファは、腰に付けてある小さめの鞘から短剣を抜き、刃の部分を自分の手首に押し付けた。

「んっ！……これで、術の対象は出来たわね。さあ、言つた通りに詠唱してみて？」

「え！？で、でも！」

驚くシルクの視線の先、ティファの手首からは、鮮血が流れ始めていた。

だが彼女は、それを止めようとせず、ただただ微笑みながらシルクを見ていた。

「……早くしないと私、死んじゃうわよ？」

「あ、うんっ！……えと、世界を覆う生命の……あれ？えーっと、えーっと……！」

どうやらシルクは、ティファの命が自分の成功に掛かっているというプレッシャーによって、明らかに焦っていた。

だが、ティファの目と視線が合うと、自然と冷静になり、彼女の手首に手を近付けて再度詠唱を始めた。

「……」世界を覆う生命の源は流れを変え、我思う者に注ぎ込み、死せる部位に生ける創造を与えよ」

言い続けている途中、シルクの腕につけられている腕輪が青白く輝き出し、それを覆うようにして、星の形をした青い魔方陣が浮かび上がる。

「トウル」！！」

その声と共に、青い魔方陣がティファの手首にある傷口を包み、そして流れ出していた鮮血が止まり、傷口が完全に消えた。

それは、成功したという事だ。

「……うん、完璧ね。これで安心できるわ」

「よかったぁ…… って、え？ 安心？」

「そ、安心よ、安心。別に深く考える必要はないけど……まあ、ユウの代わりに言うておくわ。その魔術で皆をよろしくね」

言ってウインクをし、シルクの額を人差し指で軽く突いた。

「……それと、私からのお告げ。あの子、カイの心得みたいなものは少し変える必要があるわ、必ず。その時は、私の代わりに自分の思った事を言うておいてね。……あの力は、止められる時に止めないといけないから……」

「え？ それってどういう イタッ」

ティファの最後の言葉が気になり、問おうとしたシルクの額に、彼女はデコピンを一発当てて微笑んだ。

「人に聞くんじゃない、自分で考えないとだめよ？ …… それじゃあ、また会いましょっ」

そう言い残し、ティファは身体を翻して、リラックス・リゾートとは別の方向に歩き出した。

対するシルクは一瞬、呼び止めようとしたが、ティファが最後に言った言葉と、見せた表情が微笑みだった為、シルクは彼女の後ろ姿に微笑みを返した。

町の南東にある出口近くに位置している、旅人や商人が馬車を停めるために利用する馬小屋に入ったティファは身体を光で包み、姿と精神をユウと交換した。

そして、小屋の奥にある柱へと歩み寄る。

その柱には、右手だけ紐で縛り付けられた獣人族のクレアが彼を睨みつけながら座り込んでおり、その近くには、大皿に盛られたピザが置いてあった。

それを見たユウは、苦笑しながら口を開く。

「……なんだ、食ってないのか？ せっかく助かった命だ。無駄に

するな」

言いながらピザを一切れ手に取り、口に入れる。

「……何を企んでいるの？」

口に入れた部分を噛み切って残った部分を話した時、とろけたチーズが少し伸びて糸を引いた。

ユウはそれを目で追いながら、クレアの問いに答える。

「企み、とも言えるかもな。実は、お前に頼みがある」

「私に頼み？」

クレアはオウム返しに問い、より強くユウを睨む。

「ああ、頼みだ。……俺は、お前がいう神の力を持つカイ達とは別行動をとり、ネプチューンってやつと二人で、南東にあるカルディエールに向かう。だが、二人だけじゃあ心許無い。そのために、お前には俺の傭兵として同行してほしい」

その提案を聞いたクレアは、苦虫を噛み潰したような表情になった。

「……私は死ぬべきはずだったのよ。だけど、まだ生きている。残ったのは、ズタズタにされたプライドだけよ……！それに、獣人族の任務には失敗が許されていない。どの道、私は獣人族として故郷に帰る事が出来ないの。……居場所がないのに……生きている意味なんてないでしょ……？」

目を伏せて俯いたクレアとは対照的に、ユウは微笑する。



それがどうしたと言わんばかりの表情で。

「その掟についてはネプチューンから聞いた。それに、失敗した上に生きているとバレたら、暗部が殺しに来るともな。……だから、だ。頭に触れてみる」

「え？ 頭がどうし    っ!？」

クレアが問いと同時に手で頭に触れた瞬間、彼女は啞然とした。森で会った時と同様、本来なら長いウサギの耳があるはずなのだが、その耳は無く、代わりに短く白い猫耳が生えていた。

「な……なんで……耳が……」

猫耳を何度も触りながらクレアは、ハトが豆鉄砲を食らったような表情でユウを見た。

「ああ、何でも、魔術による一時的魔力分離によって細胞を粒子化し、構成を書き換えたとか何とか言ってた。まあ、俺にはよくわからんが……ネプチューンが言うには、獣人族には色んな耳があるらしいからな。一番目立つようなウサギの耳よりも、短めで目立ちにくく、隠す事が出来る猫の耳がいいと思ったらしい。後は服装と髪型、そして名前だな」

「ちょ、ちよつとまって！ どうしてそこまでしてくれるの!？」

私は貴方を殺そうと    ー

「殺そうとしたのはお前自身じゃねえだろ？ それに、俺はお前を雇うって言ってるんだ。それによって得る物、そして報酬として与えられる物はお前の居場所だ」

最後の言葉に、クレアは再度、啞然とした。

この人は、私が欲している物を与えようとしているのか？ と自

問自答をしながら。

「……………やっぱり俺、カイの考えに少し甘えてるなあ……………」

ユウは誰にも聞こえないように呟き、クレアの手を縛っている紐を解いた。

「あ、ありがとう……………」

この時、クレアは縛られていた部分を摩りながら考えていた。

……………この男に、協力するしか道はないのかもしれない、と。

そう決断し、その場で右膝を立てるようにしてしゃがみ込み、右腕を前に、左腕を後ろに回して、頭を下げた。

「私、獣人族の戦士クレア・マルギスは、貴方を主君とし、この命尽きるまで貴方の武器となり、片腕となります」

それは、獣人族独特の忠誠を表す誓いの儀だ。

それを知ってか知らずか、ユウは小さく頷いておき、その場に座り込む。

するとクレアは、何か思い出したのか、体勢を崩して座ってから彼に問い掛けた。

「そういえば、私は何で生きていたの？ 額に衝撃を感じた瞬間、意識が飛んで……………気がついたらここにいて、生きていた」

「ああ、あれは空砲だ。撃つ直前にマガジンを抜いて、魔力供給を遮断したから石で殴られたような衝撃しか出ない。だが、頭に直撃だったから、脳震盪を起こして意識が飛んだってわけだ」

その説明を聞いても、クレアは銃を知らない為、頭上にクエスチ

ヨンマークが浮かび上がるほど理解出来ていなかったが、とりあえずわかった事にし、数回頷く。

するとその時、小屋の入口が古い木材の擦れ合うギィツという音を立て、開いた。

二人はその音に反応して入口の方を向くと、そこには両腕に荷物を抱えて二人の元に歩いて来る、ネプチューンの姿があった。

「お？ クレアは目が覚めたってんか？ おはよーさん」

言いながらネプチューンは、右腕に抱えていた荷物、プラスチックで出来た四角いケースをクレアの前に置く。

「……何？ コレ？」

「疑問詞打つ前に開けて見るっちゃ」

クレアはネプチューンに言われた通りにケースを開けて見ると中には、色取り取りのワンピースのような洋服及びスカートが数着と、武器が一式揃っていた。

その服を見たクレアとユウは思わず溜息をついて苦笑。対するネプチューンは満面の笑みだ。

「……コ、コレを私に着ろって言うの……？」

「当たり前ぜよ。どうせ変わるのなら、見た目からも変わる必要があるっちゃ。武器も同様にね。それくらいしないと、暗部からは逃れる事は出来んよ？」

ネプチューンは自信満々の笑みで答えた為、クレアは渋々と服を取り出し、着替えを始めようとする。

それと同時に、ユウとネプチューンが揃って小屋の外に出た。その行動に安心したクレアは、服を脱ぎ始める。

朝の冷たい空気が肌に触れ、身体を少し震わせながら、早々とネプチューンが用意した服を着る。

### 第三十三話：それぞれの大陸へ

夏にしては珍しく涼しい朝の為、廊下に設置されている賢石”エンリル”は昨日まで見せていた光を灯しておらず、冷気も出していなかった。

だが、そんな事には全く気付かず嬉しそうな笑みで廊下を歩いているシルクは、真っ直ぐに自分の客室へと向かっていた。

そして中に入ると、いつの間にかカイは目を覚ましており、着替えも済ませていた。

その事に驚いたシルクは、思わず入口の上の壁に掛けてある時計を見る。

「……………まだ四時半だよ？」

「わかってる。何か、早めに目が覚めたんだ」

カイは頭を掻きながら、それよりっと言って話を続ける。

「朝早くからどこに行ってたんだよ？」

問いに、シルクは笑顔を作って答えた。

「ししょーのところだよ。それで、やっと皆の役に立てるようになったんだ！」

「し、ししょー?? ……ってか、皆の役にとってどういう意味なんだ？」

「治療の魔術を教えてもらったんだよ。どんなケガでも治せるすごいやつをねっ！」

嬉しそうに言うシルクを見てカイは、それはよかったなと言って

微笑した。

その返答に彼女は、両手を腰に当てて胸を突き出す。

「そうそう、よかったんだよ！　これからは私にも頼ってねっ。  
それで、カイの決心はついたの？」

カイは、急に話を変えたシルクに戸惑いつつも、一瞬曇らせた表情を無理に微笑へと変えた。

「……ああ、まとまったよ。俺は、森で言っていた考えを、助けなきゃいけない命は助けるつてのを出来るだけ貫き通したい。そして次にユウに会った時は、納得してもらえるようにしなくちゃな！」  
「うーん……つまりは、偽善を貫き通すんだねっ！」  
「シ、シルクもシヴァと同じ事言っただな………」

言ってカイはがっくりと肩を落として俯いた。

それを見たシルクは内心、呟く。

……この考えをししょーに頼まれた通り、いつか修正しなきゃいけないんだね、と。

そしてシルクは吐息を一つし、漏れた笑い声をそのまま、あははっとして出した。

それにつられて、カイも同じように笑い出し、二人の笑い声が部屋中に響き渡ったその時、二人の頭に枕が一つずつ直撃した。

それと同時に、シヴァの喝が響く。

「……二日連続で、姫の安眠を妨害するとは………しかも今度はシルクまでもが妨害するか！　貴様ら、一度死なないとわからないよっうだなー！」

言ってシヴァは音を立てずにベッドの上段から降り、手に持った鞘

から長剣を抜こうとした。

「わああ！　すみません！！　すみません！！！」

二人が声を揃えて頭を抱え込む。

するとシヴァは、二人の頭上に拳を落とした。

その後、ベッドの下段に座る。

「……まあ、時間が時間だ。今日は早めにここを出るぞ」

シヴァはそう言いながらベッドの上段に上り、ミーナを起こし始める。

その間、カイとシルクは何故拳で済んだのかわからず啞然としていた。

そんな二人を見たシヴァは、呆れた表情で言葉を掛ける。

「お前ら、早く出るぞと言っているのだから、準備をしろ。遅いと置いて行くぞ？」

その言葉に二人は、慌てて準備を始めた。

そんな中、シルクは服を脱ぎながらシヴァに問う。

「……そういえば、これからどうやって行くの？」

その問いに、ミーナのパジャマを脱がしていたシヴァは、ふむっと言って答える。

「ここからひたすら北西を目指すからな……とりあえずは馬車の確保だ。幸い金はあるのでな、こんな朝早くに頼んでも少し多めに出せば了承してくれるだろう」

シヴァは水色の小さなドレスをミーナに着せると彼女は、わふー  
っと言って両手を斜め上に挙げて、軽快にベッドの上段から降りた。  
そんな彼女を見てシルクは微笑みながら、フリルの付いた白い服  
を着る。

「そつえば、列車代と初日の宿泊代はタダになったんだつたね。  
それじゃあしばらくは、お金に困らなくて済むんだ！」

「その通りだ。それよりカイ、どうしてベッドの上で蹲ってい  
るのだ？」

言つたシヴァの視線の先、向かいのベッドの上で、カイは顔を隠  
すようにして蹲っていた。

だが、彼女の問い掛けに顔を上げると、どこかホツとしているよ  
うな表情で答える。

「いや、皆が着替え始めたから見ないように部屋を出ようと思つた  
んだけど、話を聞いておかないといけないから、とりあえずこつし  
た」

「あははは、別に見てもいいんじゃないっ？」

窓際に座つてニコニコしながら言つたミーナにカイは苦笑しながら、  
ベッドから降りて立ち上がる。

「さすがにそれは……なあ、シルク」

「いいんじゃないっ？」

「シルク……ミーナに合わせてくれるのは嬉しいが、お前がそんな  
事に賛成するとは……先生、悲しいぞ……」

言いながらシヴァは、ガツクリと肩を落とした。



それを見たシルクは慌てたフリをして、冗談だよって笑って見せる。

するとシヴァは目を見開いて喜び、長剣が収められている鞘を片手に、ベッドの上段から降りた。

その表情は、満面の笑みだ。

「まあ、私も冗談だ。さて、準備も整った事だからな、そろそろ行くか」

手に持った鞘を腰に挿し、ミーナに手を差し出す。すると彼女はその手を繋ぎ、シヴァの横に並んだ。

「ささ、急がないと朝一で馬車が手に入らないよっ！」

シルクは部屋の時計を指で示しながら皆に伝える。

時刻は、午前五時を過ぎたところ。

それを見たカイは、なら急ぐしかないぜ！　と言って、シルクと共に走って部屋を出て行った。

その二人を見て、シヴァはため息をつきながらも、ミーナと共に部屋を後にした。

小屋の外に出たユウとネプチューンは、明るくなり始めた空を見上げながら、小屋の壁に寄りかかっていた。

「……ネプチューン、昨日の夜はどこに行ってたんだ？」

突然の問いに、されどネプチューンは普通に答える。

「旧友のところだっちゃ。軽く情報集めと、一杯飲んできたんぜよ」

言いながら、んくくつと笑ったネプチューンは、懐ふとから、刻んだ葉を紙で丸められている煙草を取り出して、ついでにこれもやんねつと言いながら口に銜え、次に取り出したマッチで日を点ける。

そして、もう一本をユウに向けた。

するとユウは、それを手で制す。

「俺は吸わない。肺を壊して死ぬなんて無様なマネはしたくないからな」

「それは残念だっちゃ……」

言ってネプチューンは煙草を吸うと、先端が赤く焼けて灰だけが残った。

そして、煙草を口から離し、白い煙を吐く。

その煙は空へと舞い上がり、風によって掻き消された。

「……わっちも、聞きたい事があるんぜよ。　どしてわっちを選んだん？」

「……お前がカイに、俺の世界を元にした神話を教えようとした時、自分がもってる情報の多さを自慢げにしてたろ？　あの時、離れたところで聞いていたんだが、それに気付いたシルクが、お前らの会話を止めてしまったからな。だから機会を窺っていたんだが……」

「丁度いい時にあれだ」

「あんさんも人が悪いっちゃねえ。わっち、盗み聞きされてた事にショーックッ！」

顔をクワツと強張らせて叫んだネプチューンにユウは苦笑し、上を見上げる。

そしてネプチューンは再度、んくくつと笑って煙草を銜え、少し吸う。

と、その時だ。

小屋の扉がゆっくりと開き、中からクレアが出てきた。

その姿は、紅のワンピースを着、同じ紅に黒のチェックと白いラインが入った、膝あたりまでの長さがあるスカートを穿いており、長かった茶色い髪は短く、不器用に切られている。

「凄い変わりようぜよ。サイズは合ってたかな？」

「ええ、合っていたわ。それよりも、何で鉤爪じゃなくてこんな物なの？」

言いながらクレアは、スカートを捲り上げて太股辺りに装着されている革のケースから小さく、刃が少し曲がったダガーナイフを抜いた。

それを見たユウは、微笑して答える。

「お前ほどの身体能力を持ったヤツに、鉤爪なんて振る動作が大きい武器はミスマッチだ。いくら洗脳されていても、動きは全て対象の身体能力の限界までしか出せないそうだ。なのに鉤爪で隙がないくらいの振りが出来るのなら小振りのダガーナイフにすると無敵だろ？」

「ま、まあ、確かにそうだけど……………」

まだ、若干躊躇いの見えるクレアに対し、ユウは吐息をした後、一つの提案を出す。

「……なら、そこにある薪で試してみよう？」

そう言いながらユウが指でさし示す方向には、薪が山積みになって置かれていた。

冬の季節、暖炉に使うのだろうその薪を、ユウは一本だけ手に取り、構える。

「これを上に投げるから、お前は武器の流れに身を任せてこれを切り刻め。」

いいか？　いくぞ……」

言ってユウは、高々と薪を上投げた。

そしてそれが落ちてきた時、クレアは身構えて腕を素早く動かす。目に見えない速さでスナップを利かせつつ、ダガーを振るう。

そして、腕を止めた時には、果たして薪は粉々と言っていいほどに切り刻まれていた。

同時に、ユウの手から拍手の音が生まれる。

刻まれた薪が落ちていく光景を見て一番驚いていたのは、クレア本人だった。

彼女は、信じられないという表情で自分の手を見、次にユウを見る。

すると彼は頷き、口を開いた。

「……決まりだな。　よし、行くか」

それを合図にユウはバッグを担ぎ、ネプチューンを見る。するとネプチューンは、左手の親指をグッと立てて、銜えていた

煙草を右手で掴み、地面に落として踏み潰した。

「……そいじゃあ、まずは港に向かうっちゃ。そこから、南東にあるカルディエール大陸の王立図書館に向かうんぜよ。ま、最優先は船の確保だんな」

「とりあえず、長旅って事が分かった」

言って頷き、ユウはクレアの方を向く。

すると彼女は、とくにダガーナイフを収めており、準備万端の状態だった。

「それじゃあ、改めて、私はクレア・マルギス。今、この時から、私は貴方の傭兵として貴方達同行させてもわうわ。よろしく、ネプチューン。そして私の主君、ユウ……」

「ユウ・ウラハスだ。……にしても、名前は変えないんだな」

問いにクレアは、ええっと言って頷く。

「さすがに名前は変えたくないの……ごめんなさい」

「気にする事ないっちゃ。何とかなるってん！……さて、船を確保しに、港へと急ぐぜよー!!」

言ってネプチューンは歩き出し、ユウとクレアは微笑しながらその後について行った。

運命は、決まっていると言われている。

確かに、決まってはいるがしかし、変える事は出来ると信じられている。

今、それぞれの目的の為にそれぞれの道を行く彼らは、そう信じているかもしれない。

その頃から、歯車は軋み始めていた……

### 第三十三話：それぞれの大陸へ（後書き）

今回も、ご覧になっていただきありがとうございます！

ども、Izumomoです

今回で、第一章を終えた形となります

もう一つの作品よりも区切りが短い事になってしまいました  
がなんとか両方とも同じ話数で保っています

で、バトルシーンがあまりないという事になっていますが  
次章からは増えてしまう気がします

それでは、次話からは第二章となりますので

これからもよろしく願います

それでは、長々と失礼しました！

### 第三十四話：笑う科学者

廻るよ廻るよ、運命の齒車

それはいつ止まる？

足掻くよ足掻くよ、運命の者達

彼らは何処へ行く？

迫るよ迫るよ、絶望への足音

その音はいつ来る？

全ての答えは、終わりが集結する時に

町外れの郊外。

そのとある場所にある地下施設。

そこは空気が悪く、鼠が通路の天井にあるパイプの上を走り回り、天井には逆さになった蝙蝠コウモリが、壁の所々は蜘蛛の巣が掛かっている。

その施設の最深部とも言える場所。

金属で出来た機械などが敷き詰められた研究所の天井に設置されている蛍光灯は、四人の人影を照らしていた。



その内の三人は、中央にある巨大なガラス張りの水槽に背を向けるようにして並行となって立っており、真ん中に白衣を羽織った白髪の男と、両隣に一人ずつ体格のいい大男が立っている形だ。

そしてもう一人は、その三人に向かい合うようにして立っている小太りの男だ。

その小太りの男は、茶色のスーツを乱しながら、怒りの籠った形相で白髪の男を怒鳴っている。

「だから、お前は何故やれと言った事をやらずに、勝手な事をやっているんだ！」

その言葉を聞いた白髪の男は小首を傾げ、目元に隈くまの出来た不健康そうな表情で笑みを作った。

「何を言ってるんですかあ？ 僕は頼まれた事をちゃんとやりますよ？ 最強の兵士育成、それを今は彼女で行っているんですよ」

言いながら平手で示した先、男の後方にある水槽の中には、黄色の液に沈められ、全裸の身体に何箇所ものチューブを差し込まれた女性の姿があった。

彼女は赤髪を液で揺らしながら、無表情で眠っている。

「あれが、あれが最強の兵士育成だ！？ 笑わせるな！ 前回もそう言っただけの結果、逃げられてしまったではないか！！」

小太りの男は、拳を作った片手を斜め下に力一杯振った。

「キース、これ以上お前に対する研究費投資は無駄だとわかった！即刻、ここから立ち去れ！！」

言った男の額には、怒りで血管が浮き出していた。  
対するキースという名の白髪の男は、不機嫌そうな表情をし、眉を寄せた。

「あつれえ？　まるで全部の権利が自分にあるみたいな言い方じゃない？……昔、全員殺すはずだったテクノスのお偉いさんの中で唯一命乞いをしてきたキミを生かす代わりに、僕の研究に投資するって約束だったよねえ、ドライゼンさん？」

ドライゼンと呼ばれた小太りの男は、奥歯を噛み締めて再度怒鳴った。

「だが、その全てはワシの金だ！　ワシの言葉で全てが動く！！  
無能のお前に、権利があると思うな！？」

「無能？　くふふつ、僕が無能だって？　　ゼロ・ツー、僕は何だい？」

キースが問うた先、彼から見て右側にいる大男ゼロ・ツーは低く響く声で、はいつと答えた。

「我が親であり主人の貴方様の名は、天才科学者キース・ヨルムンガンド。この世界のテクノス王国で国王直属の極秘研究組織の代表となり、後に国王直下の將軍級および元老院議員である者数名を開戦の数日前に暗殺。そして報復戦争を開戦させ、ドライゼンと共にシユメール大陸の首都・キエンギの地下で研究を再開。そして今に至ります」

ゼロ・ツーは言い終えると一礼した。  
そんな彼を、キースは満面の笑みで見て拍手を送る。

「よく出来ましたあゝ。でも、一つ付け足しね？ 無能のドライゼン、と」

「了解。記憶回路の人物欄、ドライゼン・セグライの情報を上書きしておきます」

キースは笑顔のまま、優秀だなあと言って、横にいるゼロ・ツィを肘で突いた。

だが、ドライゼンの方に顔を向けた時は無表情だ。

「…………さて、ドライゼンさん？ キミのお金は自分で動かしているっているのを知れてよかったよあ。つまりは、もつと裏で動いている人は誰もいないって事。つまりはキミをどうにかすれば、僕は好きなだけ研究が出来るって事」

不気味な音程で喋るキースを見てドライゼンは、それがどうしたつと言おうとしているが、言葉が詰まって声が出ない。

その間にも、キースは言葉を続けている。

「つまりは僕が成功した方法を使えばいいって事。つまりはキミを操り人形にしちゃえばいいって事。くふふつ、ゼロ・ツィ、ゼロ・スリー？」

言ってキースが右手を頭の辺りまで上げ、指をパチンツと鳴らした。

その後は一瞬だ。

キースの両隣にいた大男は、いつの間にかドライゼンの腕を片方ずつ掴んでいた。

その状態にドライゼンは驚き、必死に逃れようとするがビクともしない。

「な、何の真似だ!？」

「何のマネ? それはカンタン。キミには特殊な細工をして、僕の言いなりになる操り人形になってもらうんだよお? ……それじゃあゼロ・ツー、ゼロ・スリー、ソレを術式室に連れて行ってあげてね。」

放った命令に、二人は声を揃えて、されどゼロ・スリーはゼロ・ツーよりも少し高い声で、了解つと言いながら、騒ぎ続けているドライゼンの腹部を殴って気絶させ、研究所を出て行った。

すると、その二人と擦れ違うように、一人の男が入ってくる。

その男を見たキースは、満面の笑みになった。

「これはこれはあ、依頼主さんじゃなくいですかあ」  
クライアント

「相変わらずだな、ヨルムンガンド」

そう言った男は、オールバックで固めて整えられた茶髪を片手で掻き揚げ、真っ黒なスーツについたホコリを掃いながら、キースの元へと歩み寄った。

するとキースは、スーツの男の腰に添えられている鞘を指でさす。

「キミも相変わらず、持って来ないでって言っている武器を持って来てるねえ……僕、こう見えて刃物が嫌いなんだあ」

「いつもメスを扱ってるヤツが何を言っている? メスに比べれば、私の刀など弱い物だ」

「あはー、痛いところ突かれちゃったなあ」

言いながら、恥ずかしそうに頭を掻くキースを無視し、スーツの男は彼の後ろにある水槽を見上げた。

その中に入っている赤髪の女性を見て、

「……………何をするつもりだ？」

問いに、キースはニヤリと笑い、答えた。

「最強の兵士育成だよ？ 前の被験体には逃げられちゃったからねえ」

でもつと言いながら、キースも水槽を見上げる。

「新しい被験体を手に入れたから、前回のデータを使って再開発しているんだ」

「最強の兵士育成、か。その兵士は、普通の兵士とはどう違うんだ？」

問われたキースは、水槽からスーツの男へと視線を移し、小首を傾げて人差し指を立てた。

「それじゃあ逆に問うけど、兵士にとって必要なのはなんだい？」

「……………強さ、判断力、忠誠心、冷静さ、勇猛さだ」

「要らないのは？」

「弱さ、恐怖心、反乱思考、無能だ」

言つとキースは満面の笑みでスーツの男に拍手を送った。

「全問せいかい！ ……………でも、もう一つ足りないよ？」

キースは口の端を吊り上げて、目を細めた。

「それはね 感情だ、人に対する感情。感情無き兵士は、それこそより命令を聞き、非道に、鬼畜になれる。……………僕はね、人であ

りたいから人を忘れているんだよ」

研究室内には、くふふつという不気味な笑い声が響き渡る。

四つの大陸に囲まれるようにして位置しているカナン大陸。

そこは、世界の商業の中心と言われ、ほとんどの町で産業が発達している。

だがそれでも、産業によって消費されていく資源の量よりも、増加する資源の量の方が多いというのが、この島の特徴でもある。

実際、この大陸には町が三つしかなく、大陸を占めているのはほとんどが草原や森などの自然なのだ。

その理由は昔、資源を一方的に消費したがために大地が枯れ果て、緑が一つ残らず消えてしまったため、産業グループの間で作られた掟”伐った木は二倍で増やせ”によって、木や花の苗などを植えたりにして自然を広げ、それを餌とする動物が増え、自然の摂理が戻ってきたからだ。

その為、今のカナン大陸には広大な草原と数多くの動物がいるというわけだ。

そんな草原を適度な幅で刈り、土を軽く掘り返してから均して作られた、町と町との間を繋ぐ街道を、馬二匹と馬車一台が通っていた。

二匹の馬の体格は大きく、背の鞍くらの両脇には、馬車に取り付けられている木材が鐙あぶみの代わりに繋がれており、それによって馬車が引かれている。

その二匹が噛んでいる轡くつわに付けられた手綱を、馬車の先頭に座っている中年の男が掴んでいた。

そして、彼の真後ろにある小窓からは、ピンク色の長髪をポニールにした、ミント色のスーツ姿の女性が顔を出していた。

「それで、夏休みを利用して世界中の町を見せる授業を？」

「はい、生徒達がどうしてもこの目で見て回りたいと煩わづいので、いい機会だと思ひまして。……それにしても、いい馬をお持ちですね？」

褒め言葉、とも言えるその言葉に、中年の男は前を向きながら笑みを作った。

「ありがとよ。ここ何十年この仕事をやって、コイツらを褒められたのは久しぶりじゃ」

中年の男はそのままの笑みで、ところでつと前置きをして振り向いた。

「お前さん達のミーン大陸では、バビロニア皇国はその名さえも伏せている教育方針らしいが……何故、わざわざそのバビロニア側の大陸にも向かうんじゃ？」

「……やはり知っていましたか。ですが、私にとってバビロニアは、この世界にある一つの国です。拒絶や差別心など、私にはありませんよ」

スーツ姿の女性が頷きながら言うと、中年の男は感心したように

再度笑った。

「それは嬉しいのお、わしはバビロニア生まれじゃからな！ 気に入った！ わしはネルガル・グランツじゃ。馬車を使いたい時は呼んでくれ、割引してやる」

「それはありがたいです！ ちなみに私はシヴァ。……では、私の教え子も紹介させていただきます」

言ってシヴァと名乗った女性は、同じ馬車に乗る者達の方、馬車の内部へと向く。

そこには、長椅子が向かい合っており、シヴァの方を向くようになっている椅子には、会話をしながら手遊びをしている二人が座っている。

楽しそうに笑っている、水色の長髪で髪と同じ色のドレスを着た小さな少女と、迷いながら苦笑している、白くフリルの付いた服を着ている青髪の少女だ。

シヴァはそんな二人を、水色の長髪の少女から順に指で示した。

「あちらがミーナ、そして隣がシルク。そしてあれが」

二人を示した指は次に窓の外を見ている、あれと呼ばれた銀髪の少年を示した。

「カイです。今回の旅も、彼の強い要望があつてこそなのです」

カイは一瞬、名前を呼ばれてキョトンとした表情で振り向くが、すぐに窓の外へと視線を戻した。

その表情は、窓の外の光景に感動しているような感じだ。

「……つまりは、彼のおかげでわしらは出会えたわけじゃな。感



謝せねばなあ」

言い終えたのと同様、正面に向き直したネルガルは、おっという声を出して再度シヴァに視線を戻す。

「そろそろ到着じゃ。　　ようこそ、二つの大陸に船が出る港町”アッシリア”へ。バビロニアとの交流が深いアッシリアは、お前さん達を歓迎するぞ」

言いながらネルガルが指で示す方向には、建造物の影がいくつも見えた。

その光景を、いつの間にか正面の小窓からシヴァを退けて顔を出していたカイは、歓声を上げていた。

それに続き、シルクとミーナもわずかな隙間から顔を出す。

上げるのは、カイと同じ歓声だ。

「お前ら、少しは落ち着いたらどうなのだ………」

後ろで呟いたシヴァはしかし、微笑を浮かべて吐息をついた。

### 第三十五話：分断

海の波が風を纏ながら、港へと叩き付けられる音が響く。

それに合わせるように、港に停められているいくつかの船は揺れ、されど一点の位置に留まっていた。

その船を見渡すようにしている短めの茶髪の女性は、頭に生えた獣人の証である白い猫耳を微動させながら、潮混じりの風で煽られている紅をベースにした黒のチェックと白いラインの入った、丈の長いスカートを手で押さえていた。

その、時々捲かれて露出する彼女の太股には、革で出来たベルトの付いたケースが巻かれており、膨らみのある部分の上部には武器の柄が見える。

だが、彼女はそれを気にせず、ただ船を見渡していた。

するとその女性の後ろ、造船ドックから一人の青年が扉を開けて出て来た。

「……………どうやら、船は賢石がないと動かないらしい。だから今、ネプチューンが知り合いの所まで取りに行った」

言いながら青年は、風で靡く黒髪を気にしながら、獣人の女性の隣に並んだ。

そんな彼を見た獣人の女性は、思わず苦笑する。

「風が冷たいけど、ユウは寒くないの？」

彼女の視線の先、ユウと呼ばれた青年が着ている服装は、身体にフィットした黒色のタイツのようで、その上にいくつもの装備が施されていた。

その中には、獣人の女性が太股に巻いているケースと同じ物が同

じ位置に巻かれており、四本のナイフが差し込まれてる。

ズボンのベルトにもケースが二つ装着されており、ナイフが一本ずつ差し込まれている。

腰の横には長剣が収められてる鞘と、反対側には銃とチャージャーが入ったホルスターが装着され、それぞれが黒光りしていた。

そしてそれらを隠すように、薄く赤いロングコートを羽織っていた。

「まあ、薄いように見えても、防寒性は高いから大丈夫だ」

「新しい服に着替えようと思った事は？ それじゃあまるで変態だし……………」

「へ、変態って……今のところは思っていない。コレが一番動きやすいからな」

ユウがそう言うのと獣人の女性は、ふんつと言って返し、海の方へと視線を向けた。

と、その時だ。

造船ドックの扉が先ほどと違って勢いよく開き、ぼろ檻襖切れたロブを羽織った男が出て来た。

「ユウ、クレア、お待たせっちゃー」

二人の名を呼びながら両手を大きく振っているその男は、右手に持っている青白い石をクレアと呼んだ獣人の女性に投げた。

それを受け取ったクレアは、軽く男を睨み付ける。

「ちょっと、投げないでよネプチューン！ ……それで、コレが船を動かす賢石？」

「そうぜよ。賢石”エア”っーその賢石は、水を司る物っちゃ。

水を噴出、吸収をする事が出来るから、噴水や船の動力などに使わ

れてるんぜよ」

答えながらネプチューンと呼ばれた男は、二人の下へと歩み寄った。

「にしても、賢石ってやつは便利だな。俺の世界には無かったぞ、そんな物」

「ユウの世界ってのは、ここに来る間に話してくれたジードって所よね？ 似たような物はあったの？」

クレアの問いにユウは、少し間を置いて答えた。

メモリーストーン

「……………記憶石だ。触れた者に、込められた記憶を見せたり、いい物では込められた者を実体化する事が出来る」

「それは今、持っているの？」

「ノーコメントだ」

ユウはそうキツパリと言って、クレアの方を向いて片手を出す。それに気づいた彼女はその手に、持っていた賢石を置いた。

「……………それじゃ、行くか。ネプチューンの友達とやらが気を変えな  
い内に」

「あ、わっちを信用してないんね!？」

驚いた表情で言うネプチューンを見無視し、ユウは歩き出した。

その後ろを、クレアが苦笑しながらついていく。

それからしばらくの間、ネプチューンの声だけが港に響き渡っていた。

港町”アッシリア”

ここは、北西に位置するシュメール大陸と、南西に位置するバビロニア皇国の首都・バビロンがあるアッカド大陸、その二つに船を出しているさほど大きくはない町だ。

この町では、現在午前七時を回っており、漁港の市場ではもう動きが始まっていた。

その為町中には、目覚まし時計のように活気のある声が響き渡っている。

そんな声が遠く聞こえる町に入口には、去って行く馬車の後ろ姿に大きく手を振るカイとシルクがいた。

また、その横には、馬車内で遊び疲れたのかシヴァに背負われて眠っているミーナの姿があった。

そして、馬車の姿が見えなくなり、手を振るのに疲れた二人は一息つき、揃ってシヴァの方を向いた。

「さて、アッシリアについたけど、どこに行くんだ？」

「もちろん船だ。先に食事と行きたい所だが、ネルガルさんの話によると、八時に大型の客船が出航するらしい。乗船券はギリギリまで買えるそうだから、焦らずに船まで向かい、その後に食事でもするでしょう」

「……………って事は、美味しい物が食べられるんだね！？ やったー！ー」

言いながらはしゃぐシルクは、シヴァの背に掴まって寝ていたミーナが起きた事に気づくと、優しく抱き下ろして彼女の手を引いて歩き出した。

と、その時だ。

シヴァだけが、ある殺気を感じ取った。

背筋がぞくりとする感覚。

その殺気は小さな一点に絞られ、されど強大だった。

その為シヴァは、とっさに長剣を抜き、瞬時にその位置へと身構えた。

刹那、大きな金属音が響くのと同時に、彼女の両隣の地面が一箇所ずつ砕けた。

「くっ！！」

シヴァは手に伝わってくる振動を力で押さえながら内心、コレがエターナルの強度か、頼もしいと呟き、急いで振り返ってシルクに資金の入った財布を投げ渡した。

「シルクはミーナと共にシユメール大陸・キエング行きの乗船券を買って来い！　そして、船の前で待っている！！　カイ、狙いはたぶんお前だ！　時期にあの夜に来た侍女も現れるかもしれぬから、裏路地に入って被害を最小限にしろ！！」

一息つき、殺気がした方向に身構え直す。

「私は仕掛けて来たヤツを仕留める。……………八時に船で会おう」

その言葉にカイとシルクは黙って頷き、カイは裏路地へ、シルクとミーナはパニックになっている市民の間を掻い潜って乗船券を買いに港に走った。

「……………さすが私の生徒だ……………」

呟きシヴァは口元に笑みを作り、全力で走り出した。  
同時、二度目の金属音が響く。

使用しない木箱や、それぞれの家の洗濯物などが多少の狭さがある裏路地に多くあり、その中をカイは走り続けていた。

時には木箱を蹴ってしまい転びそうになるが、何とか体勢を保って走る。

向かうべき場所は港。

彼はそれを知っていた為、途中の分かれ道では町の中心を目指すようにしていた。

その間、彼は一つの音を気にしていた。

背後、先ほどから追って来ている足音が一人分だ。

そのため彼は、後ろ腰の辺りに装着されている、三つに分解された諸刃の剣を組み立てて足を止めた。

そして身体を背後に翻し、身構える。

すると視線の先、カイが倒した木箱の上に、一人の侍女が立っていた。

その侍女は、主に白を強調した黒混じりの侍女服を着ており、乱れた白い短髪を直す事無く、スカートの裾を軽く持って会釈した。

「お久しぶりです、カイ・エディフィス。貴方とは二度目の出会いとなります。……マスターの忠告に反した為、これより交戦体勢に移行させて頂きます」

一息つき、侍女は両手で拳を作って身構える。

「この場合、私は自己の紹介をすべきと判断します。……私の名称はヘル。マスターのパートナーであり、召使いとなっています」

「あ、ああ、よろしく」

「マスターの言動パターンによるとこの場合”血の雨を降らせてやる”というべきとも、判断します。それでは」

瞬間、ヘルと名乗った侍女は、木箱を蹴って走り出した。

その動きに対応する為、カイは両刃の剣を斜めに構えて前へと走る。

すると同時、一つの金属音が響く。

「殺させて頂きます」

「意味わかんないって!!」

叫んだカイは、柄で堪えているヘルの拳を左へ流し、刃を相手の首に叩き込もうとした。

だが、それを一瞬で察知したヘルは、拳を振り切って姿勢を低くし、刃を回避した。

そして、振り切った拳は平手となって地面に着き、次に軸となり彼女の身体を浮かせた。

同時、彼女は浮いた脚をカイの腹部に打ち込む。

「ふっ!?!」



それによりカイは、息を全て吐き出しながら、ヘルが蹴った方向に従って吹き飛んだ。

普通の蹴りではありえないほどの距離を、だ。

そのまま、積み上げられた木箱へと豪快な音を立てて突っ込んだ。

「目標、軽傷。動作……確認」

「いつてえ！！ 何なんだよ、お前は！？」

そう叫びながら、崩れ砕けた木箱の中から出て来たカイは、諸刃の剣を放さないようにしっかりと握る。

対するヘルは、カイの武器を見、次に自分の拳を見た。

「…………… 目標の武装と自分の武装の比較により、不平等と判断。マスター護衛用シークレット回路を使用し、武装の追加と対等化を行います」

ヘルはそう呟いた後、両手を広げて掌を仰け反らせる。

すると彼女の手首の位置からは一本ずつ、細めの鋭い刃が飛び出した。

それを見たカイは驚きながらも苦笑。

「な、何でもありつていいいのかよ…………… だけど」

言って、カイは諸刃の剣を分解した。

そして、中心部分だけを腰に収め、残った刃の柄を左右の手に一本ずつ持つ。

その構えは双剣だ。

「諸刃の方は対多人数戦用だ。そしてこっちは、対個人戦用！」

構えた右の刃を前に、左を後ろに下げて身構える。  
続けて、真下にある木箱に足を添え、蹴った。

勢いをつけるために蹴った木箱は後ろに、木箱で加速したカイは  
一気に前に出て、ヘルとの距離を縮める。

そして、右の刃を水平に振った。

それは容易に流されるが、二撃目は左の刃では無く左脚だ。

思い切り振った左脚は、ヘルの右肘に直撃し、左側がわずかに空  
いた。

そこを狙ってカイは、左脚を振り切って、同時に左の刃を振ろう  
とした。

だが、その時だ。

ヘルの胴体が右腕と共に素早く反れ、予想外の角度まで曲がった。  
そして、カイの顔面に蹴りが入った。

胴体を反らした際に浮いた右脚が、だ。

「肉を蹴らせて!!」

だが、カイは蹴りを無視しつつそう叫んで左の刃を落とし、その  
ままヘルの右腕を掴む。

「骨をたぁーっ!!」

カイの左腕は、禍々しい姿を露あらわにして光っていた。

### 第三十六話：狙撃手

アッシリアの町に数多くある建造物の一箇所。

その屋上には一人分の人影があつた。

その人影は全身を不規則な色彩の迷彩服で包んでおり、ほふくたいせい匍匐体勢

で、長い杖のような狙撃銃の上部に装着されているスコープを覗き込み、ある一台の屋台を見ていた。

「マスター、定時報告です。現在、逃走中の目標を視認。距離が詰まり次第、交戦に入ります」

「わかつた、早めに殺せよ？ 仕事は長引くほど状況が悪化する。そう、悪化するんだ」

「ヤー、マイマスター」

その返事と共に、プツという音を立てたのは、フードを被っているその者の左耳の位置する場所に膨らみを作っている無線機だ。

そして、声からして男だろうその者の首には、”フェンリル・ヴァナルガンド”と名前の彫られたドッグタグが掛かっており、風で揺れて金属音を立てていた。

「……………動きがねえ……………」

呟きながらフェンリルは、内心焦っていた。

まさか狙撃の銃弾を剣で斬る、または弾くなんてな、と。

彼が見ている先、一台の屋台の裏には標的が一人いる……………はずだ。銃弾を長剣で斬るか弾くかをした者が。

その者は一度、屋台の裏に隠れて以来数十分、髪の毛一本でさえもフェンリルの視界に入っていない。

その事に疑問を抱きつつ、彼は引き金に掛かった指を放さないよ

うにしていた。

その時だ。フェンリルの耳に掛かっている無線機が、プツと音を立てて、次に声が来た。

『マスター。目標が停止し、武装を展開。交戦を開始します』

言われ、フェンリルは無言で頷いた。

すると、その頷きがわかったかのように無線機がまた、プツという音を立てた。

報告を聞いたフェンリルは、声の主の居場所へと目を向ける為に顔を上げた。

わかるはずもないが、だ。

だがその時、視野に妙な動きがあった。それは素早い動きだ。わずかに靡いていた、ピンク色の長髪が見えて、

「ッ!？」

その方向をフェンリルは、反射的に見た。

彼の居る屋上から左に十メートルほど離れた建造物の外側に取り付けられている螺旋階段を。

その螺旋階段には、一つの動きがあった。

ピンク色の髪が靡くほど素早く走って階段を上っている、ミント色のスーツ姿の女性である。

それは、銃弾を真つ二つにした後、先ほどまでフェンリルが見ていた屋台の裏に隠れているはずの者だ。

その本人が全く違う場所に、その上フェンリルに近付いていたのだ。

「何でアイツが!？ ……クソ!！」

フェンリルは焦りながらも、その方向に狙撃銃を構え、上部のス

コープを覗き込んで引き金に人差し指を添える。

狙うはまず胴体。

そこでふらつき、速度が緩んだ所をヘッドショット。

「ふうー……………」

息を少し抜き、同時に息を止めて集中する。

そして、引き金を絞った。

すると、ダアンツともパアンツとも聞こえる銃声が響いた。

だが、次の瞬間。

狙った女性は、手を添えていた長剣を抜き、またしても銃弾を斬ったのだ。

同時、スコープ越しに彼女と目が合った。

「ッ！ー！！」

とてつもない殺気。

それは離れていても、スコープ越しでも感じるほどだ。

「……………殺し屋の俺が、殺気で悪寒が走るとはなあ……………」

ヤバイ。

その言葉がフェンリルの頭の中で、警報のように連呼されていた。そして彼は、その言葉に従うようにして立ち上がり、狙撃銃に付いているスリングを肩に担ぎ、長髪の女性が居る方向とは逆に向かって走り出す。

その方向には高い展望台があり、壁は他の建造物と同じレンガで出来ている。

それを見ながら彼は、迷彩服のポケットから一つのスイッチを取り出した。

「退路はこの時の為に！　そう、この為にな！！」

言ってスイッチを押した瞬間、レンガの壁が爆発し、穴が空いた。フェンリルは爆風で迷彩服のフードが捲れ、白い短髪が露になったのを気にせずに、空いた穴へと飛び込んだ。

シヴァは走っていた。

彼女は先ほどの攻撃の後に、カイ達を逃がして屋台の裏に隠れた。そして少し間を空けた後、疾風とも言える速度で屋台から飛び出し、街中の路地をひたすら走っていた。

活気ある商売をしている人やそれを見ている人達の中を駆け抜け、時には大通りに出ながら、だ。

それは、次の攻撃を待っているからだ。

相手が屋上ほどの高さがある位置に居るのはわかっているが、特定は出来ていない。

その状況下で一番有効なのは、動き回る事。

「……………久しいな、この感覚は……………」

呟き、思わず苦笑。

その感覚とは、殺気を剥き出しにした事だ。それに対してシヴァは、これではいけないなと思った。

だが、それによつて相手の戦意を低下させられるのなら悪くは無  
いとも思つた。

そして辺りを見渡すと、視線の先には階段があつた。  
外側に取り付けられている、屋上へと上がる為の螺旋階段だ。  
それを見たシヴァは、一瞬で判断し、階段を上つた。  
素早く、されど人の目で視認出来る速度で駆け上がる。

「……………遠距離で金属、または鉛……………銃とはそういう物を出す武  
器なのか……………」

呟いたシヴァは、ある物を思い出していた。  
それは、ユウが持っていた銃の事だ。  
前に一度、アクアトレイン内でシヴァは、金属で出来た弾丸を見  
た事があつた。

その為、今回の攻撃は同じ”銃”だと推測していた。  
と、その時だ。

最初と同じ小さな一点の殺気を、シヴァは感じ取っていた。  
瞬間、彼女は長剣を抜いて、その方向に構える。  
すると、彼女の長剣に何かがあたり、階段に二つの金属音が鳴つ  
た。

「……………そこか……………」

呟いて視線を向けた先、十メートルほど離れた屋上に人影があつ  
た。

伏せながら、太陽光の反射をチラつかせているその人影は、慌て  
て立ち上がり、奥へと走つて行つた。

一方シヴァは、追うようにして加速した。  
逃がすものかっ呟きながら。

澄み切った青空の下、同じ青色を反射させている海上を、とある船が走っていた。

小さいとも大きいとも言えない白一色の船は、賢石”エア”によって海上を軽快に走り、水飛沫みずしぶきを上げていた。

その一つの船上には窓の付いた個室があり、操縦室となってる。そしてその部屋の床には、下へと続く階段があり、底部の空間が一つの部屋になっている作りだ。

その一室にある固定ベッドの上には紫髪の男、ネプチューンが両手を頭の後ろに回して仰向けになり、天井を見つめていた。

ただ無言のまま、だ。

だが次の瞬間、彼は勢いよく起き上がり、近くの壁にハンガーで掛けてある襟褸切れのローブを羽織って操縦室に出る階段を上り始めた。

その上った先には、二人の男女が居た。

羅針盤を気にしながら舵を取る青年ユウと、彼を見ながら固定されている長椅子に座っている女性クレアだ。

するとネプチューンはその二人を見て吐息をし、笑みを作った。

「いい雰囲気じゃないん!? わっちはお邪魔だったかな?」

陽気な口調で問うと、ユウは苦笑を漏らし、そして答えた。

「お前の、いつでもお気楽でいる性格に羨ましいと思えてきた。…」



……この状況下で、よく言えたもんだな」

「この状況下？ 一体何があったんよ？」

「貴方、それは本気で言ってるの？」

呆れながら言ったクレアは、操縦室の入口の方に顔だけ向けて、指をさした。

それを見たネプチューンは、小首を傾げつつも、入口へと向かう。そして、閉ざされているドアの上部にある丸い小窓を覗き込むとおおっと声を上げた。

彼の視線の先、船の後方には、五隻ほどの縦に長い小型船が一定の距離で付いて来ていた。

操縦室がむき出しになっている為、人数は容易に確認でき、一隻につき四人ほど乗っている。

そしてそれぞれが、半袖で頭にハチマキを巻いている筋肉質な男だ。

「んくくつ、まるで海賊だんなあ」

「その通りで海賊だろ。さつきすれ違った時には、ボウガンで矢を放ってきやがった」

「……あつれー？ エアをくれた奴だっちゃ」

ネプチューンの放った言葉に、ユウは反応するようにして彼の方を向いた。

「……お前、盗って来たのか？」

「人間きが悪いっちゃ！ わっちはちゃんと、親友であるわっちに譲ってくれって言ったんぜよ」

ただっと言って顎に手を当てる。

「借金が重なって金がとか何とか言ってたんから、少しあげたつちや。で、いいのかと聞かれたから、まだまだあるから大丈夫って言ったんよ？ それだけぜよ」

「……………いくら渡したんだ？」

「ん、二万ラノンくらいぜよ」

返答に、クレアがため息をついて肩をすくめた。

「借金が重なっている人に二万も渡して、その上まだあるって言われたら、彼らにとつては文字通り、鴨が葱背負って来るってわけね」「上手いっちゃ！」

歓声を上げたネプチューンを見て、クレアは再度ため息。

一方ユウは、そうかつと言って頷き、舵から手を放した。

「ネプチューン、操縦を頼む。俺はクレアと二手に分かれて後ろの船に乗り込み、潰してくる」

言いながらユウは、近くのテーブルに置いてあつた長剣の収められている鞘を腰に添え、ネプチューンのいるドアへと向かった。

それを見たクレアは、仕方ないわねつと呟きながら立ち上がり、ユウに並んだ。

そして、ドアを開け放つ。

ユウ達の視界に入った船上の男達は、突然現れた二人に驚きつつも、それぞれが武器を取り出して構えた。

「……カトラスが二にボウガンが二で一組。それが五組……行け  
そうか？」

ユウが問うた先、隣にいるクレアは頷きながら、太股に装着されているケースからダガーを二本取り出しており、準備は出来ている。彼女は、頭に生えている猫耳を微動させながら、向かって一番右の船を指で示す。

「私はあれからやるわ。ユウは左から、ね……………主に実力を見  
せられるいい機会ね……………」

「やる気満々だな……………よし、行くか」

その言葉を合図に、クレアは向かって右の、ユウは向かって左の船に向かって飛び出した。

腰を後ろに、両足を前に出していくの字の体勢で素早く乗り移る。

その速さには、船を操縦してる者には対応しきれず、容易に二人をそれぞれの船に乗せてしまう形となった。

だが、彼らはすぐに撃退するために武器を構える。

その動きを見たユウは、着地した甲板で立ち上がって口元に笑みを作った。

そして、その笑みを絶やさないうまま、身を低くして走り出した。

そんな彼に対して二人の海賊はボウガンを一斉に放つ。

一瞬で目下に迫った矢を、ユウは身を翻して回避。

同時に、太股に装着されているケースからナイフを二本抜き、左側のボウガンを持った一人に向かって放った。

そのナイフは真っ直ぐに飛び、ボウガンを持つ手と胸に刺さり、声を上げて体勢を崩す。

すると他の者達がその声に驚き、振り向いた。

ユウはその隙をついて、詰りつつある距離を左前にステップして

縮め、右足を力を入れて右側、ボウガンを持ったもう一人の方へと飛び上がった。

そして空中で身を回し、顔面に左足の回し蹴りを叩き込む。

蹴られた者は頭から倒れ、音を立てて海へと落ちた。

ユウはその方向に視線を向けず、着地した足元を見る。

……………二人目。

そう内心で呟き、短く息を吐く。

「コ、コノヤロウ!!」

刹那、ユウの前方、左右に立っていた二人が、彼に刃が逆反りになっている剣、カトラスを振り下ろした。

それに気付いたユウは、しゃがんだ体勢のまま前に飛び出し、次に両腕を船上につけて力を入れて飛び上がった。

大きく飛んだユウは、空中で素早く身を回して後方の二人の方を向き、太股のケースに入っているナイフに手を添えながら着地。

そして同時に、着地で曲がった脚を一気に伸ばして加速し、ナイフを抜き出して振り落としたカトラスを構え直そうとしている二人の間を駆け抜けた。

すると、その二人は目を見開いて固まり、次の瞬間、首の動脈が裂けて鮮血が勢いよく噴き出した。

その後、金属音を立てて落ちたカトラスと共に、二人は重音を立てて倒れた。

「……………三人目」

思わずそう呟いたユウは、苦笑を漏らしながら船の舵に触れた。それを左に回し、左側にいる船に激突させ、男に刺したナイフを素早く抜いて次の船に移った。

刹那、金属音が響き渡る。

### 第三十六話：狙撃手（後書き）

カトラス について

まあ、海賊が使うような剣です  
刀身が微妙に曲線を描いているような物で、海賊系漫画や映画などでしばしば見られると思います

### 第三十七話：異世界からの殺し屋

木箱が散乱している裏路地で、一つの声が響き渡った。

「掴んだあつ！！！」

その声の主はカイだ。

彼は禍々しい姿を露にした光り輝く左手で、身体を傾けているヘルの右腕を掴んでいた。

「目標の左腕での異様な発光を確認。危険と判断し、右腕をパージします」

ヘルがそう言った時だ。

カイが掴んでいた右腕の二の腕辺りから、空気の放出音が出たのと同時に隙間が出来、そして外れた。

「ッ！？」

驚いたカイはしかし、掴んだままの右腕を離さない。

と、その時、外れた右腕は錆びて腐食していき、崩れた。

それを見ながらバックスステップで後退しているヘルの外れた腕の根元、二の腕の断面には、皮膚の内側に数え切れない程のワイヤーや回線、そして中心には金属で出来た骨が見えた。

そしてその断面からは血ではなく、微かに色の付いた液体が微量に流れ出していた。

だがそれでも、彼女は無表情のままだった。  
まるで機械のように、だ。

「破損状況確認…… パージポイント以外、破損なし。 右腕損失状態での戦闘をシミュレートし、対応開始」

言ってヘルは、身体の右側を後方に退け、左腕の刃を前に構えた。その表情は変わらないの無表情。  
だが、口元はいつの間にか笑みになっていた。

「先ほどの発言、肉を蹴らせて骨を断つ、ですが、肉を蹴らせてではなく切らせてです。こういった間違いがあった場合、笑って差し上げるのが最善と判断します」

「う、うるさいな！ 俺流のアレンジだよ、アレンジ！」

「間違えてんじゃねーよ、馬鹿野郎」

「その棒読みが余計に俺を傷つけるー！！」

叫ぶカイは、両手で頭を抱えて身体を後方に反らせた。

ヘルは、そんな彼のリアクションを無視し、追伸つと呟いた。

「先程、目標の左手による、パージした右腕の破損状況、及び錆びによる腐食の異常な速さからして、神の力、独自名称”フラグメント”の情報と一致。現時点では、左腕だけに宿っていると判断し、同時に記録します」

「………… フラグ………… メント…………？」

ヘルが言った一つの名称。

それを聞いたカイは、落とした刃を拾い上げながら眉を寄せて復唱した。

だが、ヘルは何事もなかったかのように無表情に戻り、瞬きを一度してから身体を低くし、走り出した。

その速度は速く、空いていた間はすぐに詰まった。

そして、斜め下から刃をアップパーカットのように振った。

カイはそれを、急いで身体を反らして避け、二撃目の回し蹴りをバックステップで避けて距離を離す。

だが、ヘルは追撃を止めない。

彼女は着地と同時に地面を蹴り、再度カイとの距離を縮める。

そして振り下ろされる斬撃を、カイは刃で防ぎ弾いた。

それでもなお、斬撃は続く。

もはやそれは、片手の刃と脚による連撃だ。

その連撃を、カイは紙一重で防ぎ続ける。

二人は走って移動しながらも、攻防を続けた。

「目標、攻撃速度が微量に低下中。疲労によるものと判断します」

言ったヘルの攻撃速度は一定で変わらず、逆にカイの攻撃速度は彼女が言った通り、低下しつつあった。

「速度上昇によって、勝率上昇の可能性があると判断します」

そう告げると、ヘルは言葉の通り速度を一気に上げた。

だが、対するカイは不意に笑みを作った。

その笑みと共に、左手の刃を右手に持たせ、フラグメントと呼ばれた力を左腕に露にした。

左手は、真横に聳え立つ木の柱に添えられる。

その柱は他に三本、合計四本の柱で、上部にあるベランダを支えていた。

そしてベランダには、下から見える物として、プラスチックケースや金属の箱などが大量に置かれていた。

その真下に、カイはヘルを誘い込んでいたのだ。

「いよっしあー!!」



叫んだのと同時、カイの左腕は光を増し、木の柱とベランダが一瞬で腐り、置かれていた物と共に崩れ落ちた。

「!? センサーに想定外の異常を感知」

言いながらヘルは上を見、回避の為に速度を上げようとした……が、急に彼女は止まり、逆に後方へと戻された。

それに驚いた彼女は前を見る。

その視線の先には、伸ばした脚を縮めているカイの姿があった。

それは、蹴りでヘルを押し戻したという事だ。

刹那、崩れ落ちた物が彼女を覆うようにして落ちた。

轟音を立てて崩れた物を見て、カイは安堵の吐息をついた。そして、ヘルが出て来ない事を確認し、刃を後ろ腰に収めた。

「……ふう……な、何だったんだよ……コイツ……」

眩き、カイは走り出した。

集合地点である港に向かって。

時刻は、七時三十分を回っていた。

螺旋のような四角形状の階段を、フェンリルは狙撃銃を肩に担ぎながら上っていた。

その途中で彼は立ち止まり、壁際に置かれている、壁の色と同じ箱からのびている紐を引いた。

するとその箱は、ピツという音を立てて、一点から赤い光を放ち出した。

それを見たフェンリルは、よしと呟いて階段を上るのを再開する。

「……………これで、いつ通過したかわかるな……………」

呟き、速度を上げて最上階を目指した。  
と、その時だ。

下の階からフェンリルを追っていると思われる足音と、次に炸裂音と壁を連続して砕く音が聞こえた。

それを聞いた彼は、かかった！と内心で呟く。  
だが、最上階へと向かう足は止めない。

屋上に上がる理由は別にもあったからだ。

その目的があったから走り続けたのは、幸いだったのかもしれない。

次の瞬間、下の階から足音が再び聞こえ始めた。

その足音に彼は驚き、されど意識を上に向け、速度を上げる。

肩に担いでいるスリングを通して伝わる狙撃銃の重さに嫌気を感じながらも、段差の低い階段を一段飛ばしで駆け上がる。

そして見えた、屋上への入口である木の扉を蹴り開けた。

その先にある光景は、広いとも狭いとも言えず、屋根の付いていない展望台だ。

フェンリルはその展望室の端まで走り、下を見た。  
そこから見れば、展望室が地上から大分離れており、まるで下が  
奈落に通じているように見える。

「……………落ちたら即死。そう、即死だな……………」

微笑しながら呟き、部屋を中心あたりまで移動する。  
足音は近い。

それは、一瞬だった。

階段を駆け上がるシヴァの視界に入ったその箱は、ピーツという  
音と共に小さな爆発が箱の中で起き、同時に数千とも言える鉛の小  
玉が飛び出した。

その速度は、人の身体を穿つ威力があると彼女は判断し、疾風の  
如く走り、回避した。

「……………くだらぬ小細工を……………」

呟き、シヴァは先ほどまでと同じ速度まで落として再度、階段を  
駆け上がった。

そして、最上階の展望室への入口を通るとそこには、不規則な色  
彩の迷彩服で身を包んでいる、白髪の男が展望室の中心に立ってい

た。

彼は肩に、スリングを通した杖のような物を担いでいる。  
その杖の下部には引き金がついており、それを見たシヴァは、銃  
だなと判断した。

その為彼女は、長剣の柄に手を添えて銃に警戒しつつ、一步近付  
き問い掛けた。

「……………お前は何者だ？ ジードの人間か？」

それは賭けだ。

シヴァはこの世界、グラルスで銃を見たのはユウの持っていた銃  
が初めてだ。

そしてユウの世界、ジードでは当たり前のように銃が出回ってい  
ると聞いた。

もし、この銃を持った白髪の男がジードの人間だった場合、グラ  
ルスとジードを行き交う術を知っている事になる。

それは同時に、ユウがジードに帰る事の出来る術の有無を知る機  
会にもなるかもしれない。

そう考えたシヴァは、白髪の男の返答を待った。

すると白髪の男は笑みを作り、両手をズボンのポケットに突っ込  
んだ。

「……………まさか、ジードを知っているとはなあ……………確かに俺はジ  
ードの人間だ。そう、ジードの人間なんだが、誰からジードという  
名を聞いた？」

「教えるわけがないだろう っと言いたい所だが、こちらの問い  
に答えたのだ、私も問いに答えよう。……………ユウ・ウラハスという  
男からだ」

その名前を聞いた白髪の男は、微かに眉を微動させた。

「ユウ・ウラハスカ。やっぱりあれはユウ・ウラハスだったのか……。なら、話は早いな。俺はユウ・ウラハスと同じ殺し屋。そう、殺し屋だ」

「……………その殺し屋が、何故カイを狙う？」

「何故？ 何故と問うのか？」

言って白髪の男は、くくくつと笑いながら、右手をポケットから出して人差し指を立てる。

「理由はたった一つ、仕事だから。そう、仕事だから狙い、そして殺すんだ。      そのために、今は逃げないとなっ！！」

叫んだのと同時、白髪の男は肩に担いでいた銃を片手で構え、シヴァに向けて撃った。

その突然の射撃に対応する為、シヴァは手を添えていた長剣を抜刀する。

刹那、金属音が響いた。それは、銃弾を叩き切った音だ。

その後シヴァは、三分の間の間を一步で詰め、白髪の男に接近する。そして、続く二発目の銃弾も金属音と共に叩き切り、残り五歩分の間まで迫る。

「逃がすかあっ！！！」

「逃げるさっ！！！」

渦を飛ばしたシヴァから離れるように、白髪の男はバックステップで端の段差まで飛び乗った。

それと同時に、彼はポケットから出した左手に持っている長方形の物をシヴァに向けて投げつけた。

それは、投げた方向へと忠実に飛び、そして炸裂した。

起きたのは、キンツとも聞こえる異音と閃光の拡散だ。

異音と閃光はシヴァの聴覚と視覚を一時的に奪い、腕で顔を覆う形となった。

その隙を見た白髪の男は、狙撃銃を一発撃って、屋上から飛び降りた。

一方シヴァは、聴覚も視覚も無くとも殺気で銃弾に気付き、長剣で銃弾を叩き切った。

だが、シヴァの視覚が戻る事には、屋上に白髪の男の姿は無かった。

「……………逃げた、か……………」

呟いたシヴァは、展望室の端の方まで歩み寄り、下を見る。

だがそこから見えるのは、ここの異変に気付いたのかこちらを見上げている僅かな者と、まったく気付いていない大勢の者しか見えなかった。

それを確認したシヴァは、舌打ちをして長剣を収めた。

そして、展望室に設置されている時計を一度見て、入口に向かって走り出す。

それも疾風の如く、だ。

後に残ったのは、乱れた風だけだった。

その時、時計の針は七時三十五分を示していた。

### 第三十八話：一発の凶弾

港の空を、無数の鳥が飛び交っていた。

それは海猫だ。<sup>ウミネコ</sup>

その海猫達は、体が純白で灰黒色の翼を羽ばたかせながら、その猫に似た独特な鳴き声で合唱をしていた。

波に揺れる船上、海の上に架かっている棧橋、そして青い短髪の少女の肩の上で、だ。

「あ、シルクの肩に海猫が乗ってる！」

言ってシルクの肩を指でさしている少女ミーナは、楽しそうに笑っていた。

本来、その光景は珍しいつというよりかはあり得ない事だが、その海猫は平然とシルクの肩で鳴き続けていた。

「たまにあるんだよねえ……海猫だけじゃなくて、いろんな動物が寄って来るんだよ」

言いながら、肩の海猫に手を伸ばして、人差し指で頭を撫でた。

「……って、のんきにしている暇なんてないじゃん！ 今何時！？」

突然、大声を上げた為に逃げた海猫を無視し、シルクは問いながら辺りを見渡した。

そんな彼女を見てミーナは笑いつつも、シルクの服を軽く引いて、一箇所を指で示した。

「シルクー、あったよっ」

「え？ 何 ああ、時計！ …… 七時十五分かあ …… 八時までにだから、急がないと！」

ミーナの手を取ったシルクはそう言いながら、港にある大きな客船へと向かって早足で歩き出した。

そして、何の変哲も無い小さな小屋の前で、二人は立ち止まる。その小屋の上部には”券売所”と書かれた看板が付いており、その下部にはガラス張りの大きな出窓が付いていた。

出窓には小さめの穴と時刻表があり、ガラスの向こうにはカウンター越しに黒一色の制服を着た若い男が居た。

彼は券売所の前に立つ二人の少女を見てお客と判断し、自慢と思われる笑顔で二人に問い掛けた。

「二人とも、乗船券を買いに来たのかい？」

「そうだよ！ シュメール大陸・キエンギ行きの船の乗船券を買いに来たの」

返答に男は笑顔で頷き、カウンターの下からプラスチックでコーティングされた厚紙を取り出した。

見た所その紙は乗船券の購入案内らしく、上から順に特・五万ラノン、良・一万ラノン、普・五千ラノンと書かれている。

「この中から、部屋のタイプを選んでもらっていいかな？」

「ん…………… 四人部屋だとどれになるんですか？」

「それだと、良が四人部屋として丁度いいと思うよ？」

男の返答に、シルクは笑顔を返した。

「それじゃ、その乗船券を四枚ください！」

「はい、それだと…………… 四万ラノンになりますが、よろしかったで



すか？」

問われ、シルクは持っていた財布から四万ラノンを取り出し、出窓の下部にある小さな穴からガラスの向こう側に置いた。

それを受け取った男は、代わりに四枚の紙を同じ方法でガラスの向こう側に置く。

その紙には”シユメール大陸・キエング行き・良”と書かれていた。

シルクはそれを手に取ると、満面の笑みをガラスの向こうにいる男に向けた。

「ありがとう！」

そう言ったシルクに続いてミーナも、ありがとうと言って満面の笑みを向けた。

そして二人は、船の方へと走って行った。

シユメール大陸・キエング行きと書かれた看板を頼りに。

シユメール・キエング行きの船の出航時間が二十分を切った中、町中を駆け抜ける人影があった

その人影はシヴァだ。彼女は人々を上手く避けながら走り、真っ直ぐに港を目指していた。

その途中、彼女は見慣れた後ろ姿を見つけた。

「　　カイ！」

シヴァが名前を呼んだ者は、カイだった。

カイはシヴァの声に反応して後ろを振り向き、シヴァの姿を確認すると速度を少し落としてシヴァに並んだ。

「シヴァじゃなか！　終わったの？」

「いや、逃してしまった。…………お前はどつだったのだ？　頬に切り傷があるという事は、戦闘があつたと察するが」

問われたカイは苦笑を漏らし、頬の切り傷に触れながら答えた。

「シヴァの読み通り、侍女さんだったよ。…………機械のね」

「機械…………？」

「そう、機械」

言つてカイは左手で右の二の腕辺りを掴み、下に滑られた。

「ここがこんな風に外れたんだよ。斬られたとかそんなんじゃないで、綺麗に外れたんだ。んで、腕の中にはたくさんの線があつた」

「外れた、か…………たぶんそいつも、ジードの者だろうな。機械人間など、この世界で見た事が無い。それに、私が相手をした者は自分をジードの者だと言っていたからな。…………とは言つても、義手の可能性もあるのだが…………」

シヴァは言い終えると吐息を一つし、前を向いた。  
その視線の先に見えるのは港だ。

「……さて、港に着いた事だから、話の続きは船内でする事にしよう」

そう言ってからシヴァは、一気に速度を上げた。

その速さにカイは驚きつつも、辺りを見渡して時計を探した。

そして見つけた時計の針は、七時四十五分を示していた。

「……って、ギリギリかよ！」

叫んだカイは、シヴァに追いつく為、速度を上げる。

港はすぐそこまで近付いていた。

「本当に大丈夫ですか？ マスター」

心配そうに問い掛けた侍女、ヘルは、損失した右腕に応急処置を施してくれている白髪の男、フェンリルの顔を真っ直ぐ見ていた。

その視線と問い掛けをフェンリルは少々鬱陶うっとうしそうにしながらも、スピアをテープで貼り付けていた。

二人は港の灯台の上におり、近くには狙撃銃が置かれて、柵の間から銃身を出して先端の二脚で安定させてある。

その狙撃銃は、数十分前までフェンリルが持っていた物とは別の

物だ。

「…………俺の心配よりも自分の心配をしろ。実際、俺は無傷だが、お前の身体には多少のへこみがあるしな」

言われ、ヘルは申し訳なさそうな表情をするが、すぐに不思議そうな表情になった。

「ですが、私の役目は飽く迄<sup>まで</sup>マスターの護衛です。よって、自分の身の安全よりも、マスターの安全を最優先にすべきだとプログラムされています」

それに、と付け加えてへこみのある箇所を左の指で軽くなぞる。

「フレームのへこみは一度パージして内部から圧力を掛けて戻し、表皮細胞を貼り換えればいいだけだと判断します。…………私は破損した際、代えのスペアパーツがありますが、マスターにはスペアパーツなどありませんので、故に安全を最優先に」

「わかった。そう、わかったから、もうそれ以上言わなくていい」

フェンリルはそう言いながら、ヘルの口を右手で塞いだ。

その状況にヘルは数回瞬きをし、そして頷く。

それを見たフェンリルは微笑し、応急処置の続きを始めた。

「…………にしても、よくまあ簡単にパージしてくれたな。船の中で本格的に修理するぞ？　で、何で俺の掌<sup>てのひら</sup>を舐めるんだ？」

言ってフェンリルはヘルの口から右手を離すと、彼女は軽く会釈をした。

「手で口を塞がれて発言が出来なかった為、一番優しい方法で手を退かして欲しいという表現をさせていただきました。何かご不満でも？」

問いにフェンリルは、わかったわかったと曖昧な返答をしながら、ヘルの右腕の応急処置を済ませた。

そして、手探りで取った灰色の鞆に応急処置に使用した物を詰め込み、チャックを閉める。

それを邪魔にならないような位置に置き、彼は柵の隙間に挟んで置かれている狙撃銃の前で匍匐になり、狙撃体勢を取り始めた。

左手で銃の後部近くを持ってその人差し指を引き金に添え、右手は狙撃銃を支えるように銃床を掴み、上部のスコープを左目で覗き込む。

そこから見える光景は、港に停泊中の客船の後部が見え、それに向かつて鉄の栈橋が延びている形となっている。

それと同時に、隣に居るヘルは立ち上がり、フェンリルと同じ方向を見た。

「カイ・エディフィス、未だ現れず。されど、カイ・エディフィスの同行者二名が客船の甲板に確認出来ます。シユメール大陸・キエング行きに乗船するという情報は確実だと判断します」

「……………子供が二人、か。脅威レベルはゼロとしても大丈夫か？」

「ヤーっと、そう答えたのですが、青色の短髪の少女は未だに未知数。その上、シヴァという名の女性剣士には充分な注意が必要です」

言い終えたヘルは瞬きを数回し、視線をフェンリルの狙撃銃へと向けた。

「それでは、今回私が配置した狙撃銃の説明をさせていただきます。名

称はセミオートライフル” P S G - 1 ”、全長一二〇八ミリメートル、重量八・一キログラム。弾丸のサイズは七・六二ミリメートルとなっており、目標出現予測地点から約一キロメートル離れた現在地からでも、魔力の保護により重力・温度による影響を受けず、良い命中率を保つ事が出来ます。その上、弾丸の装填数は着脱式箱形マガジンを採用している為に二十発、連射によって性能をフルに出す事が出来ます」

「解説ありがとう、だ。で、タイミングよく目標が来たぞ」

フェンリルの視線の先、鉄の棧橋の入口付近には新たな人影が二人分あった。

戦闘を走っているのはシヴァ、そして後方に引き離されて走っているのはカイだ。

フェンリルはそのカイにスコープ越しで狙いを定める。

「……………罪背負いし者に罰の凶弾を。そして、永遠の安らぎを……………」

呟くフェンリルの左の人差し指は、ゆっくりと引き金を絞る。そして、大気を振るわせる銃声と同時に、銃弾が放たれた。

客船の甲板に立っていたシルクとミーナは、その光景を見た。

彼女らの視線の先、シヴァよりも遅れて走って来ていたカイの胸の辺りから、真っ赤な花が咲いたかのように鮮血が噴き出した。

そのすぐ後、彼女らの下に銃声が届いた。

その音に気付いたシヴァが振り向いた時、カイは事切れたかのように崩れ落ちていた。

「ッ！？ カイ！！」

叫び、カイに近付こうとするシヴァは、鞘から剣を抜刀した。しかし、その行動は間に合わず、二撃目が来る。

それは運よくカイから外れ、金属音と共に棧橋に当たった。

その音をシヴァは無視し、カイの背後に立って剣を構える。

怒りの籠った形相を、どこにいるかわからない者に向けて、だ。

そんな彼女の後ろ姿を見ながら、シルクは客船から降りてカイの下へと駆け寄った。

「カイ！！ しっかりして、カイ！！！」

「シルク、ここは危ない！ 早くカイを船内に運べ！！」

シルクは言われるがままにカイを背負い、客船へと歩みを始めた。そうしている間にも、カイの血は流れ続け、背負ったシルクの背に生暖かい液体を染み込ませる。

その温度を感じたシルクは、涙を必死に堪えながら、客船に乗り込む。

そして、続くシヴァも船へと急ぐ。

不思議と追撃は無く、その場所には吹き付ける強い風と、その風によって波紋を作る血溜まりが残るだけだった。

### 第三十九話：死を凌駕する生

背負っているカイの名前を呼びながら、シルク達は船内の廊下を走っていた。

その間、彼女らが通った軌跡には、点々と血が零れ落ちている。それを、ミーナを背負っているシヴァが低い体勢で走りながら、小さめの白いハンカチで拭き取っていた。

だが、そのハンカチも既に赤く染まっており、血を引き摺った跡が後方に残っていく。

それを見たシヴァは、後でまた拭けばよい、と内心で決め、シルクについていく。

角を一つ曲がり少し行くと、シルクは足を止め、一つの客室のドアを開けた。

そこは、シングルベッドが四つ置かれた、明るい雰囲気のある部屋だ。シルクはその内の一つのベッドにカイを寝かせ、上着を脱がす。

彼の胸元、そこには今でも血を流し続けている穴のような傷が見えた。

「まずい……………出血が致死量を超えているぞ！！」

「大丈夫、私に任せて！！」

シヴァを制したシルクは、瞳に溜まった涙を腕で拭う。

そして、右手をカイの傷口に近付け、目を瞑った。

「……………こういう時に、私が役に立たなきゃいけないから……………」

涙ぐんだ声で呟いたシルクは、ゆっくりと目を開けた。

そんな彼女をシヴァは、腕を組みながら心配そうな表情で見つめる。



ただ、頼んだぞ、と内心で呟く。

「……………」世界を覆う生命の源は流れを変え、我思う者に注ぎ込み、死せる部位に生ける創造を与えよ」

一言一言を思い出すようにして声にし、詠唱を行う。

「トウル”！！”」

刹那、シルクの右手が翳していた傷口を青い魔方陣が包み込み、見る見るうちに傷口が塞がっていった。

それだけでは無く、傷口の辺りに広がっていた血も消えていった。まるで、元から傷などなかったかのように。

それを見たシヴァは驚き、されどすぐに冷静となってシルクに問い掛けた。

「……………シルク、そのような魔術はいつ覚えた？」

問われたシルクは、眉一つ動かす事無く、手をカイの傷口に掲げ続けた。

そしてしばらくして、口が開かれる。

「……………ししょーに教えてもらったんだよ。ノアで出会ったししょーにね」

「ノアで、か。……………もしかすると、早朝に部屋を抜けていた頃か？」

「え！？ 気付いていたの！？」

驚きを見せたシルクに、シヴァは鼻で笑った。

「当たり前だ。私を誰だと思っている？」

「私はわからなかったよ？」

「いや、ミーナはぐっすり眠っているべきだから、気付かなくてもいいのだ」

言ってシヴァは、ミーナの頭を優しく撫でた。

そして、視線をカイに向ける。

彼の胸元にあったはずの傷口は完全に無くなっており、彼は静かな寝息を立てて眠っていた。

「……まあ、その者や魔術がどんな物であろうと、カイが助かった事に変わりはない。よくやったな、シルク」

シルクに優しく微笑みかけたシヴァは、内心に疑問を生んでいた。……何故、あれほど出血し致死量に達していたのにも関わらず、魔術で傷口を塞ぐだけで助かるのだろうか、と。

答えを出すのは簡単だ。

その魔術は強力であると考えればいい。

だが、逆に強力すぎるのだと、そうも思える。

短い詠唱で傷口を速く、その上何も無かったかのように塞ぎ消したからだ。

そもそも魔術というものは、その術が強力であればあるほど詠唱が長くなる物だ。

つまりは、シルクが覚えた魔術が通常とは違う魔術である可能性が出てくる……

「？ どうしたの？ シヴァ。難しい顔しちゃって」

突然声を掛けられ、顔を上げたシヴァは、自分が俯き眉を寄せていた事に気付いた。

その為彼女は、気にするな、と言って再度ミーナの頭を撫でた。そして、長剣の鞘を外してベッドに立て掛け、そのベッドに座った。

深い溜息と共に。

「……………何にせよ、後はカイが目覚めるのを待つだけだ。それまでゆっくりと疲れを取る事にしよう」

「えゝ、私はお腹空いたよぉ！」

「あはは、ミーナはさっきからお腹が鳴ってたもんね」

「そういえば、食事にする約束だったな。よし」

言って立ち上がったシヴァは、部屋の入口付近の壁に設置されている内線電話の受話器を取った。

「すまない、ルームサービスとやらを頼みたいのだが」

その言葉を聞いた瞬間、シルクとミーナは歓声を上げた。

飛び移ったのと同時に、俺のナイフが何かに防がれて鳴らした金属音が響く。

だが俺は、自分のナイフが防がれた事よりも、目の前の妙な殺気を持った背の高い黒髪の男が居た事に驚いた。

その男は紅色の目を俺に向け、口元に笑みを作っていた。

「やっと見つけたぞ、優男!!」

叫び、男は俺のナイフを防いでいる大剣を力一杯払った。  
同時に、男が羽織っているローブが大きく靡く。

「なっ!?!」

俺は大剣を払った勢いに飲まれ、船から落とされそうになる。  
だが、そう簡単に落ちるわけにはいかない。

その為俺は、飛ばされた先、船の後部にあるポールのような物に  
足を当て止まる。

そして曲がった膝を思い切り伸ばし跳躍して、男の隣に居る海賊  
の男を回し蹴りで吹き飛ばす。

するとソイツは、断末魔を上げる事無く海へと落ちていった。  
刹那、

「ユウ! そいつがレイヴンよ!!」

着地と同時に聞こえたのは、隣の船の甲板に立っているクレアの  
声だ。

その声を聞いた俺は、男の方を向く。

「へえ、お前レイヴンっていうのか……………」

「ほう、お前はユウっていう奴か……………」

一歩も動かずに武器を軽く構え、レイヴンとやらを睨むと目が合  
った。

『……………彼が、クレアを打ち負かした男ってわけね』

そのようだな……

一八〇センチを軽く超えた身長に、それを包み隠すように羽織ったローブは真っ黒だが、多少赤みが混じっている。

どうやら、血のようだ。

そして、その血が付く原因となったのだろう右手に持つ大剣は、身長と同じ程の長さだ。

『刃の表面幅はざっと、二〇センチといった所かしらね』

「……………丁度いい幅だ……………」

笑みを作って呟き、ナイフを左手に持ち帰る。

それと同時に、右側から一人の男がカトラスを振り上げて大声を上げながら走ってきた。

船上では、走れば距離がすぐに縮まる為、俺は右手をその男に向けて掲げる。

そしてその手で頭を掴み、振り下ろされたカトラスを左手のナイフで防ぎつつ、右手で力一杯男を投げ飛ばす。

続けて、投げ飛ばした動作をそのまま生かして時計回りに回転し、振り回した左手のナイフを男の首に突き刺す。

その瞬間、男の首から鮮血が噴き出した。

それを汚らわしく思いながら、突き刺したナイフを勢いのまま薙ぐ。

「がああっ！！！」

苦痛の断末魔が聞こえ、そして男はふらついて海に落ちた。

水を叩き付ける音が一瞬響き、すぐに消えた。

俺はそれに目を向ける事無く、レイヴンを見た。

その時見えた表情は、満面の笑みだ。

「…………面白い動きだな。気に入った、俺に斬られる」

言い終えた瞬間だ。

レイヴンは大剣を構えて、間合いを詰めに甲板を蹴った。

そして、大剣を薙ぐ。

それを上手く目で追い、俺はナイフを仕舞って飛び上がり、宙で一転しながらレイヴンの後ろへと回る。

着地した場所は、レイヴンが薙いで振り切った大剣の表面だ。

『この男、大分鍛えているわね。ユウが乗っても大剣が傾かないわよ』

これほどだと、一撃でも食らったら真つ二つだな。

口元に人差し指を添え、半目でレイヴンを見るティファに返答を返ししながら、大剣の上で両手を軸にし後転。

右の靴の爪先に展開させた刃を、相手の頭上に振り落とす。

入った。そう思える瞬間まで刃がレイヴンの頭に迫った刹那、勢いが止まった。

振り落とした右の足首は、レイヴンの左手に掴まれて勢いを失っていたのだ。

…………マズイ!!

右足が食われる、その言葉が本能の如く脳内に響いた。

その為、俺は掴まれた足に力を入れ、同時に大剣に着いている両手を使って相手の頭上へと浮き上がる。

それは、唯一の支えが掴まれている右足だけになるという事だ。

だが、そのまま勢いを殺さずに脚を曲げて背を仰け反らせ、逆さになって急降下しながら再度レイヴンを狙う。

すかさず抜いたナイフを両手に持って、だ。

そして、研ぎ澄まされた刃はレイヴンのローブを、衣服を突き破り皮膚に到達し、刺さった。

「ぐっ!!」

小さく、短くうなり声を上げたレイヴンは瞬間、右手を振り下ろして俺を甲板に叩き付けた。

同時、仰向けになった俺の視界に、振り下ろされようとしている大剣が映る。

『来るわよ!!』

と、ティファが叫ぶより速く、身体を翻して回避。

すると大剣は紙一重でそれ、甲板を叩き潰して穴を開けた。

その時、レイヴンには隙が出来た。

少なくとも、俺の視界からはそう見える。

その為俺は、腰から太ももにかけてしっかりと固定されている鞘から長剣を抜刀した。

そして、構えを取って走る。

と、その時だ。

一つの考えが、脳裏に浮かんだ。

………大剣を軽く振り回す者に、隙など簡単に出来る筈が無い…

…?

経験による、突然の判断。

それは、長剣を防御の構えに持っていく事。

するとそれは、正しい判断だったと思い知らされた。

先ほどまで甲板に空いた穴にはまっていた大剣は、いつの間にか目前まで振り上げられていた。

「なにがっ!!」

大剣は長剣に触れ、金属音と共に俺の構えを崩す。

そしてレイヴンは、俺の体勢が崩れている間に、大剣の軌道を変えた。

それはまるで、小枝を扱っているかのように軽々と、だ。

刹那、両の手首から先が、長剣と共に切断された。



#### 第四十話：身近な疑念

波に打たれて揺れを見せる船上。

そこで、二つの物が舞った。

一つは太陽の光を反射させながら宙を舞う長剣。

そしてもう一つは、ユウの量の手首から上の部分だ。

切断されたその手は、赤き血で軌跡を作りながら舞っている。

それを目で追っているユウに、新たな斬撃が入った。

彼の前にいるレイヴンが振り下ろした大剣による斬撃が、だ。

「ッ!？」

それは斜めにユウの正面を抉る<sup>えぐ</sup>ように下り、次の瞬間には一直線に鮮血が噴き出した。

だが、それだけでは終わらない。

軌道を変えた大剣は、更にユウを斬る。

「ははははっ！ 俺に宣戦布告しておきながら、その程度か!？」

両の腕を切断し、横腹を抉り、右脚を切断する。

「所詮は口だけの男なのか!？ お前はあ!!」

十分に胴体を斬った後、最後の支えである左脚を切断して本体を甲板にひれ伏させた。

「……………くだらねえな」

見下すような目と血だらけの冷たい表情をユウに落とし、そして

振り上げた大剣を彼の首に落とす。

話にならないな、と言おうとしたレイヴンは、不意に一つの事に気付いた。

周りに、他の船がないのだ。

「……………減速している……………」

呟いたレイヴンは反射的に船の後部にある動力源、賢石”エア”の装置がある方向を見る。

するとその方向からは、黒い煙が立ち込めていた。

「……………!!」

それを見たレイヴンは、素早く船の前方を見た。

その先には、もう追いつきそうにない程の位置に、二隻の船が確認出来た。

「満足したか？」

不意に、レイヴンに声を掛けたのは、彼の足元に転がっているユウの首だった。

その首に彼は、フンツ、と鼻で笑い答えた。

「本物のお前を斬るまで、満足できねえよ」

刹那、船は後部の動力源を中心として爆発した。  
その轟音は、大気に震えを、海に大きな波紋を与えた。

爆発の後、赤い炎を上げながら燃える船を彼方に見るユウはふと  
呟く。

「…………強かったな…………」

「感想言ってる暇があったら、早くネプチューンの船に戻るわよ」

不意にユウに話し掛けたのは、自分の武器についた血を拭っているクレアだ。

彼女はその武器、ダガーナイフを太股に装着されたケースに仕舞い、乱れた髪を掻き揚げた。

そして、船の先端に歩み寄って行くユウを追った彼女は、目を細めて彼に問い掛けた。

「…………で、何だったの？ あのもう一人の貴方は」

対するユウは、寄せてくるネプチューンの船を見ながら、見ていたのか、と呟いた。

その表情には、面倒臭さが見える。

だが、クレアはそんな事を気にせず、共にネプチューンの船に乗り移った彼に再度問う。

「何だったの？ って聞いているんだけど、もしかして答えられない事だった？」

「ん？ もしその質問が、なんぜか二人居たユウの事だったら、わっちも聞きたいぜよ」

船の中から出て来たネプチューンは、ユウの行く手を遮るように立った。

そして、後方にはクレアが立つ。

「お前もか………操縦は大丈夫なのか？」

「一直線型の自動操縦にしてあるから大丈夫だっちゃ」

早く聞きたい、と言わんばかりの表情をするネプチューンを見たユウは、呆れ交じりのため息をついて、観念したかのように肩を竦めた。

「……………わかった、話す。      あれは、港で話した記憶石<sup>メモリーストーン</sup>つてやつだ」

「やっぱり持っていたのね。で、それはまだあるの？」

「いや、今度こそもう無い。魔力を最大まで注入していたから、使用負荷で砕けた。……………今回使ったのは結構高価な物で、一定時間の間、使用者の姿を魔力で構成して出現させる物だ。ちなみにその出現する姿の再現率は、注入した魔力によって異なる」

「便利ねえ……………      って、いつの間に入れ替わっていたのよ!？」

驚き声で問うたクレアに、ユウは微笑を漏らしつつ答える。

「レイヴンが甲板に大剣を叩き込んで、全員の視線が俺から外れた時だ。記憶石で俺のコピーを展開した後、隣の船の手摺りに三日月を引っ掛けて飛び移った。その時は視覚妨害、簡単に言えば氷の魔術で光を反射し、見えないようにした」

「なんて都合のいい魔術……………やっぱり、主には適わないわね……………」

…」

深めの溜息をついたクレアを見てユウは、いや、と前置きをして言う。

「お前も中々だったぞ？ 三人を一瞬で制していたじゃないか」

「……………私の方を見る余裕があるんだから、やっぱりユウはすごいわよ」

「わっちとしてはお仲間として、強い二人が居るって事に感謝感謝ぜよ」

言ってネプチューンは、大口を開けて笑いながら船内に入ってしまった。

そんな彼の後ろ姿を見送る、残った二人は軽く微笑した。

「彼、本当に感謝しているのかしら？」

「さあな。たぶん、しているんじゃないか？」

ただ、と付け足して表情を苦笑に変える。

「その感謝がいつまで続くか、だがな」

部屋がある。

全体が茶色を主とした家具によって明るい雰囲気飾られ、四つのシングルベッドが部屋の隅に置かれている部屋だ。

その内、一つのベッドの上には二人分の人影があった。

一つは、タオルケットを腹部に掛けて、気持ちよさそうに眠っているミーナだ。

そしてもう一つは、眠っている彼女の隣に座って髪を優しく梳かしてあげているシヴァだ。

その向かいのベッドでは、シルクが腹部を摩りながら満足そうな笑みを浮かべていた。

「おいしかったぁー！ ルームサービスってのは、こんなにも美味しいもんだね！」

「いや、ルームサービスってのは料理を部屋に運ぶものだから、正確に言えばここの料理が、だな」

苦笑を交えながら言ったシヴァは、隅のベッドで未だに眠っているカイを一度見、そしてシルクへと視線を戻す。

その表情は、真剣そのものだ。

それを見たシルクは、摩る手を止めて背を伸ばし、姿勢を正した。するとシヴァは、急にすまない、と呟く。

「……………この旅を始める前から疑問に思っていた事なのだが……………空の羅針盤はいつからあったのだ？」

「え？」

思わぬ角度からの質問。

一文字で返事をしたシルクは間を置いて質問の意味を知り、答える。

「えと、村に襲撃があつた時だよ？ 旅に出る事を決めた前日」  
「……………そう、か……………意外と近いのだな……………」

一息つき、実はな、と前置きをして言う。

「その翌日、羅針盤についての話を聞いた時、ああそつといえあつたな、という不思議な感覚があつたのだ。まるで今まで視野に何か見えるが焦点が合わない為に気にならない感じだな。だが、話題に触れた瞬間初めて、いつからあるのだ？ という疑問が生まれるのだ」

「えっと、つまりは……………記憶の中では、昔からあつたかのような感じがするのに、いざ聞かれるとわからないってやつ？」

そうなるな、と頷いたシヴァは腕を組んで眉を寄せた。

「その事を含め、今回の襲撃も含め、カイの左腕を中心に色々不可解な事が多すぎるな……………一番疑問なのは、本当にジードという名の他世界があるのか、なのだが」

「……………って、え？ シヴァはジードを信じないの？」

「シルクは信じているようだが、他人からしてみれば他世界があるという事をそう簡単に信じられるわけがないという事になる。まあ、私はユウが持っている銃の技術をこの世界で一度も見た事がない。その上、今日の襲撃を仕掛けて来た者も銃を持っており、自分をジードの人間だと言っていたからな……………」

もつとも、と付け加えたシヴァは、苦笑を漏らして目を瞑った。

「ユウはどこか信用できる人間だからな。私は辛うじて信じられる」

そう答えたシヴァにシルクは、それじゃあどうして、と言おうとしたが、それよりも早く言葉が来た。

「だが、他の者が信じる為には、明らかに理由が足りず信憑性に欠けるのだ。その事は私達が旅を続けるにあたって問題無いと思うが、ユウの方はネプチューンと二人だけのメンバーであり、私の予想ではネプチューンは他世界の話を信じていないだろう。………カイの左腕の事も含めてな」

言い終えた瞬間、静寂が訪れた。

だが、近くのテーブルに置かれたコップの中にある氷が水によって溶け、カラント、という音を立てた時、静寂を破る動きがあった。

「……………うっっ！……………あ、ああ、おはよう！！」

「起きたのかミーナ。……………もしかして起こしたか？」

目覚めて直ぐに起き上がり、大きく背を伸ばしていたミーナは、首を左右に振った。

それを見たシルクは、腹部を両手で押さえて素直に笑い出した。

「あはははっ！ やっぱりミーナちゃんは可愛いねっ！ 抱きつきたいよぉー！！」

言いながら抱きつくシルクに、ミーナはつられて笑い出した。

するとその時、シルクは何かを思いついたのか、あっ！ と声を上げてシヴァを見た。

「これから皆で甲板に出てみない？ 風に当たると気持ちいいと思うよー！」

「さんせーい！ シヴァ、早く行こう！！」



シルクと共に立ち上がったミーナは、シヴァの手を取った。  
そして、部屋の出口へと引いて行く。

「ま、まてまて、そう慌てるなっ」

言ってシヴァは苦笑しつつも、ミーナに引かれるがままに部屋を  
後にした。

## 第四十一話：疑惑

「びっくりするほどユートピアッ！……！」

突如、叫んで起き上がったカイは、その状態のまましばらく固まった。

それから十秒、三十秒、一分と経って、ようやく動き出す。

辺りを見渡した彼は、未だに眠気が残っているような、そんな表情をしていた。

そんな彼が見渡す室内には誰も居らず、シーツが少し乱れたベッドと数個の荷物だけが確認出来る。

そして天井に設置された、僅かに冷気を放っているエンリルの賢石をしばらく眺めた彼は、

「……シルク達、何処に行ったんだ……？」

問いに答える音は無く、静寂が部屋を支配していた。

その空気に耐え切れなくなったのか、カイはベッドから降りて立ち上がった。

その時、彼は疑問を持つ。

そつえば胸元を何かで貫かれて血が出た気が、と。

だが、カイは触れる胸元には貫かれた痕など無かつた。

ただあるのは、服の胸元に開いた指二本の穴と、わずかに付いた血の跡だけだつた。

「……？ 誰かが治した？」

小首を傾げるカイには、心当たりなど無い。

それ以前に、穴となつたであろう傷を塞ぎ、治す事が出来るのかどうかもわからない。

その為カイは、眠っていて少し硬直していた身体を大きく背伸びして解し、腕を振った。

そうやって、身体に異常が無い事を確認する。

「……暇だなあ……」

部屋にはたった一人しか居ない為、孤独感に耐え切れなくなったカイは、数回頷いて何かを自己解決して出口へと向かった。

ドアが無数にあるように見える廊下。

その壁の上部には、鮮やかな宝石を使って飾られたライトがあり、中部には時たま、部屋番号が刻まれた銀のプレートや船内の構図埋め込まれていた。

客室を出たカイは、丁度目前にあった船内の構図を見つけると、それに近付いた。

そして、それを見た彼は眉間に皺しわを寄せて口を開く。

「ひ、広いなあ……。絶対に迷うよ、コレ」

カイが苦笑しつつ見る構図には上部から見た船が二つ、上下に描かれており、下の構図には一定の間隔を線で区切られている。

それは船内のエリアを仕分けるものであり、船首から順に前方休

憩室、客室Aブロック・Bブロック、大型食堂、売店、客室Cブロック・Dブロック・Eブロック、艦橋および船員専用室（関係者以外立ち入り禁止）と書かれていた。

ちなみに上の構図には、甲板とだけ書かれている。

「現在地は…… Bブロックか」

とりあえず甲板に出よう、と決めたカイは、大型食堂近くに書かれている階段を指す事にした。

だが、向きを変えた彼の視界には、丁字の通路を横切る、見覚えのある侍女服姿の人物が映った。

それは、

「確か…… ヘル……！？」

アッシリアにてカイに襲撃を仕掛けたヘルが同じ船に乗っており、その上視線の先にいる事に驚いた彼は、殺した声で叫んだ。

だがすぐにその口を塞ぎ、身構えつつ彼女が気付いていない事に安堵し、忍び足で後を追いつつ始めた。

そして、彼女が向かった通路への角を曲がると、丁度客室に入っていく姿を確認でき、その客室のドアまで近寄る。

なにやってんだろ、と思い苦笑したカイは、ドアに耳を当てて聞いた。

他から見れば異様である事を知ってか知らずか、彼は耳を澄ます。すぐに聞こえてきたのは、男の声だ。

「戻ったか、ヘル。悪いが今は取り込み中だ。用件は後回しにしてくれ」

その言葉に答えるようにして聞こえる声は、ヘルと思われる女性の声。

「ヤー、マイマスター。では、腕の修理を何時でも実行可能にする為の準備をし、終了次第待機します」

「そうしてくれ。さて、今回の襲撃は失敗した事には謝る。だが、同行している女剣士が、銃弾を叩き切る化け物だとは聞いてないぞ？ ユウ・ウラハス」

ドアに耳を当てて聞いていたカイはその名前を聞いて、えっ？、と一言だけ発して固まった。

そんな彼に追い討ちを掛けるかのように聞こえた声は、  
「わりいな、あそこまで強い奴だとは思っていなかったんだ。……  
その女剣士の事は依頼主に報告しておく」

先ほどとは少し違う、冷静な男の声だ。  
その声を聞いたカイは、目を見開いて呟く。  
ユウだ、と。

「ヘルを負かすほどの実力を持つてる奴等を相手にするんだ。報酬はいくらか、そういくらか上乗せしてもらっぜ？」

「……俺のミスとは言え一般人が他世界を、ジードを知ってしまったんだ。依頼主の邪魔者になってしまっ前に仕留める必要がある。そう考えると、上乗せは許可されるだろうな」

それはありがたい、という言葉が聞こえた直後、急に会話が終わった。

それと同時にカイは、背筋の凍る寒気を感じた。

殺気の籠った、鋭い視線。

それは、彼が耳を当てているドアの向こう側からだった。

「！！」

判断は一瞬だった。

カイは素早くドアから離れると、全速力でその場を去った。  
どうしてユウが、と奥歯を強く噛んで呟きながら。

穏やかな波が打ち付ける先には棧橋がある。

木で作られているその棧橋には小船が何隻も見られ、陸には木造建ての平屋が数軒見られる小さな村が広がっていた。

そんな村の棧橋に、一隻の船が近付いていた。

減速して、棧橋に停めるかのように、だ。

そしてその船の甲板には、紅いワンピースと、更に黒のチェックと白のラインが混ざったスカートを身に纏った獣人の女性が立っていた。

クレアだ。

彼女は頭に生えている猫耳を隠すように、右手に持っていた黒い帽子を被り、上陸に備えていた。

と、その時だ。

彼女の視線の先、棧橋の上に一つの動きがあった。

それは十人ほどの背が小さい男女の子供達であり、船が来るのを歓迎しているかのように大きく手を振っていた。

それを見たクレアは突然の来航でも歓迎してくれるのね、と思い、振り返すべきかしら？、とも思う。

そして、偶然それに答えるように発せられた声は、彼女の背後から来た。

「クゝレア、手え振り返したらどうぜよ？」

「……貴方にしてはまともな答えね、ネプチューン」

「あれ？ わっち、出会って間もないのに、クレアの脳内では人間としての価値が決まっちゃってんか！？」

妙な奇声を上げて頭を抱えだしたネプチューンをクレアは無視し、棧橋の上の子供達に向かって軽く手を振り返した。

すると、その子供達は更に大きく手を振った為、クレアは思わず苦笑した。

「元気な子達ね。主<sup>あるじ</sup>も、あれくらい元気があればいいんだけど」

「……わっち、思っんだんが、ユウがあんな感じだったら正直引くぜよ……？」

眉を寄せ、怪訝な表情をするネプチューンを見たクレアは、冗談よ冗談、と半目で言い返した。

丁度その時、船が微かな振動音と揺れと共に、棧橋近くに停止した。

それと同時に、棧橋より少し高い位置に浮く船を見上げながら近付いて来た子供達は、笑顔を甲板にいる二人に向けた。

「こんにちは！ お姉さん達、何しに来たの？」

好奇心交じりの声で問い掛けた一人の少年に、クレアは笑顔を作った。

「私達はちよつと道に迷つたの。……えと、もしよかつたらここから王立図書館のあるテクノス王国までの方角を教えてもらえないかしら？」

問いに子供達は、え？、とそれぞれ疑問の言葉を発し、顔を見合わせた。

そして、先ほどの少年が代表と言えるような形で一歩前に出てクレアを見、小首を傾げながら答えた。

「王立図書館なら、ずっと前に地震で壊れちゃったよ？」



#### 第四十一話：疑惑（後書き）

どもー、Izummoです

身勝手な更新休止報告から一ヶ月。  
やっと、訂正作業が終了しました！

変更内容は、文の書き方と、シナリオの少々たる修正と、30話あたりに新規シナリオ追加、となっております

長い間の更新休止でしたが、これよりIzummoは復活いたします  
ので

これからよろしく願います！

## 第四十二話：親切の裏側は

村の建造物の一つで来客用とも言える部屋に、ユウ達三人は居た。五畳ほどのその部屋には、長椅子と丸く小さなテーブルしか無く、床は地面である為に皆土足だ。

そんな室内を物珍しそうに見渡すユウは、足音に気付き、入口を見る。

「はいはい、お客さん！ お茶をお持ちしたよー！！」

元気すぎる声と共に入口からは、十人程の子供達の群れが入って来ており、その内の一人が、湯飲み茶碗が三つ載ったお盆を持っていた。

そしてその子供は早足で三人の下に寄り、湯飲み茶碗を差し出す。その湯飲み茶碗からは、湯気が立っていた。

「あ、ありがとう。でも、今は夏よ？ さすがに熱いお茶は……」

「暑い時に熱い物を口にする。それは、意外といい事ですよ？」

湯飲み茶碗を見ながら苦笑しているクレアに言葉を放ったのは、子供達より遅れて入って来た男だ。

修道服を纏っているところを見ると神父なのであろうその男は、子供達に囲まれながらも三人に会釈をした。

「このような小さな村にお越し頂き、ありがとうございます。そして、何故この村に？」

両手を腹部の前で合わせ、両指を絡ませながら問う神父に、お茶

を一口飲んだユウが答える。

「……俺達はテクノス王国にある王立図書館に向かっている途中でな、上陸出来る場所を探していてこの村を見つけたんだ。だが、子供達から聞いたところによると、王立図書館は数日前に地震で壊れたそうだな？」

「はい、ものすごく大きな地震でした。その時私達は丁度、馬車でテクノス王国近くを走っていたのです」

「すっごかったんだぜ！？ガラガラガラーって崩れたんだよ！」

緑髪の少年は両手を使って崩れるのを表現しながら、驚いた表情をしていた。

そんな彼の頭を神父は笑顔で撫でながら、されど視線はユウ達の方を向いて困った表情になる。

「元々、終戦以来テクノス王国は廃墟同然でしたからね。老朽化もあつてか壊れやすかったようです」

「ん？ って事は、今現在テクノス王国には誰も居ないという事か？」

「はい、そうなりますね。……とは言っても、無法者達の住処になっているかもしれません」

ですが、と付け足し、神父は言葉を続ける。

「それでも行くとおっしゃるのなら、馬を三頭お貸し致しましょうか？」

「まじですかいなあゝ！！」

神父の提案に驚いたのか、ネプチューンは声を上げた。

一方ユウは、考え事をしているのか顎に手を当てている。

だが、何か思いついたのか顎から手を離して神父を見る。

「……その行動は良心からか？ それとも、誰かに頼まれた際に貰える報酬に対する欲求からか？」

「注意深いお方ですね。もちろん、前者ですよ？」

笑みと共に言った神父を見て、ユウは鼻で笑い立ち上がった。それじゃ言葉に甘えよう、と言い残し、部屋を出て行く彼の後を追うように、クレアも立ち上がって出て行った。

「あ、皆さん？ お客様達を馬小屋に案内して差し上げて下さい」

唐突に思いついたかのように言った神父の言葉に、子供達は元気な大声で返事をし、無数の足音を立てながら二人を追って行った。そして残ったネプチューンと神父の二人は、何故か睨み合っていた。

無言で、全く動きを見せずに、だ。

文字通りの静寂。

しばらくしてその静寂は、ネプチューンによって破られる。

「……わっちからも質問だっちゃ。      キミ、本当に神父さんなんかい？」

問いに神父は、しばらくきょとした表情を見せた。

だがその表情もすぐに崩れ、口元に手を当てて笑い出した。

「面白い事を言いますね、ネプチューンさん。見ての通り、私は神父ですよ」

彼は自信満々言うと、ネプチューンは不適な笑みを作り、立ち上

がった。

「それもそうんね。変な質問しちつてすまんぜよ。じゃ、馬借りに行くつちゃ」

そう言い残し、ネプチューンは部屋を後にした。

そして、たった一人残った神父は、テーブルの上に置かれた三つの湯飲み茶碗を見る。

それらの中身は全く減っておらず、神父は思わず苦笑を漏らした。

「……やはり、熱い物はお気に召しませんでしたか……」

呟く声は、部屋中に虚しく響いた。

真夏の太陽が容赦無く照らす浜辺。

穏やかな波が打ち寄せるその場所には黒い、鴉<sup>カラス</sup>の羽根が無数に四散していた。

そしてその奥、大きな木々によって日陰となっている場所には、長身の男が居た。

彼の側の大樹の根元には大剣が立て掛けられており、海で濡れたのであるう漆黒のローブを木の枝に掛け、上着も脱いで同じく枝に掛けた。

そうして露になった上半身には傷痕が無数に残っており、肩甲骨の辺りには真新しい傷痕が見える。

と、その時。肩甲骨の傷痕近くに突然、小さな光の粒子が渦巻き、弾けた。

そうして姿を現したのは、四枚の半透明な羽を背に生やした、小さな女の妖精フェアリーだった。

「じゃーん！　今回も違った登場に挑戦してみた妖精界のアイドル、ライト・ウィッチちゃんだよっ！！」

両手を広げ、元気一杯に声を上げたライトは、羽を微動させて長身の男の周りを飛び回った。

そんな彼女を紅い目で睨んだ彼は、口を開く。

「……あれは、何の真似だ？　ライト」

その声には、怒りの感情が感じ取れる。

それに逸早く気付いたライトは、飛び回るのを止めて男の眼前で浮遊する。

彼女の表情には、笑みが見えた。

「何の事？」

「惚けても無駄だぞ？　……お前、船上でウラハスとの戦闘中、俺に魔術を使つたろ？　お前が得意とする誘惑の魔術を」

呆れ交じりの声で問われたライトは、少しの間を置いて溜息をつく。

「……何でもお見通しなんだねえ、レイヴンは。バレないと思ったのに」

「俺を甘く見るなよ……それよりも、何故邪魔をした？」

「気付かなかった？ あの時、ユウ・ウラハスは二人居たんだよ？」

右手の指を二本立て、目を細めた笑みを見せるライトは、更に左手の指を一本立てる。

「二対一だよ？ さすがにあの身のこなしをする人が二人も居たら、絶対敵わないって。だから、誘惑であの場に居た全員の視界・視覚から一人のユウ・ウラハスを消したんだよ」

どう？ 大儀だったでしょ、と言いながら嬉しそうなライトを、どうでもいいような目で見ていたレイヴンは不意に、彼女の言葉を脳内で再生した。

ユウ・ウラハスは二人居たんだよ、と。

「……ちょっと待て。ウラハスが二人居た？ 俺が切り刻んだ奴は、お前の誘惑が見せた幻覚じゃなかったのか？」

「違うよ？ レイヴンが切り刻んだユウは実体のある分身みたいな奴だったよ。クローンって言った方がよかったかな？」

ライトの言葉を、驚きの隠せない表情で聞いていたレイヴンは、奥歯を力一杯噛み締めた。

そして舌打ちをし、木の枝に掛けてある上着と漆黒のローブを着、羽織った。

上着は多少濡れたままだが、彼は気にする素振りを全く見せない。

「……とんだ屈辱だ。なあ、ライト？ ……これは、倍にして返す必要があるよなあ……」

怒り交じりの低い声。

そんな声にライトは答える事無く、彼を導くかのように前へと飛んで行った。

彼はそれを見、そして立て掛けてあつた大剣を背負って歩き出す。ただただ、ユウが向かっているという王立図書館を目指して。

広大な荒野を馬に跨って駆け抜けている中、俺は一つの事を思い出していた。

レイヴンという名の男と殺<sup>や</sup>り合った時の事を、だ。

あの後、クレアとネプチューンには氷の魔術で逃れたと言ったが、実際はそんな便利な魔術など知らない。

『まあ、正確に言えば、そんな魔術は無いわ。それに貴方の体内魔力は雷の属だから、氷の魔術自体使えないしね』

ああ、その通りだ。

だが実際、あの時あの場にいた全員の視界から、俺が消えていたと思う。

あれは、突然の恐怖だった。

記憶石を使つてもう一人の俺を創造して数瞬後、俺に対する全ての視線と殺気が消え失せたのだ。

それこそまるで、俺があの場合から居なくなつたかのように。



『……あの感じは、クレアに掛かっていた魔術を広域化したようなものね。だけど、それほどの魔術を発動したと言うのに、術者の位置特定が出来なかったの』

少なくともレイヴンでは無いと思うが、どちらにせよ面倒事が増えたってわけか。

そのようね、というティファの返答を聞いたのと同時、背後から声が来た。

「ユウ、王立図書館が見えて来たわよ」

そう言ったのは、同じ馬に跨っているクレアだ。

ちなみに何故、彼女が同じ馬に跨っているのかと言えば、三頭も馬を借りるのは申し訳無いから、とネプチューンが俺とクレアが共に乗るよう提案したからだ。

その事に対して俺は別にいいのだがティファは、私の座る場所が無くなるじゃない、と猛反対していた。

とは言っても、俺以外にティファの声が聞こえるわけが無い為、今の状態に至る。

「……ユウ？ 聞いているの？」

「ん？ あ、ああ、聞いてた。にしても、でかい建物だな、王立図書館ってのは」

言いながら見た正面、まだ数キロメートル先には、その距離でも巨大に見える建造物があった。

クレアが言うにはそれが王立図書館であるらしく、その隣にこれまた大きく、そして広大な城壁に囲まれている城が、テクノス王国なんだそうだ。

「王立図書館は、テクノス王国よりも遅く建造されたんだっちゃん。そのため、王立図書館は城壁の外に建ってるんぜよ」

馬を隣に寄せて来たネプチューンは、正面を見つつ言う。

ふと彼の表情を見れば、わずかに苦笑していた。

「……何が壊れちゃったよ？　だっちゃん。前に見た時と、何ら変わり無いぜよ……」

言い終えたのと同様、ネプチューンは速度を上げて前へと出た。

……確かに、ネプチューンの言う通り、王立図書館は崩れているところか壊れてもいない。

だが、廃墟である、という雰囲気は醸し出されている。

そんな場所へと、馬の速度を一気に上げて向かう。

太陽は既に傾き始めており、夕刻が近付いていた。

#### 第四十三話：敵わない味方

青く広大な海原を行く、巨大な客船。

その客船は水を掻き分け、時たま汽笛で大気を震わせながら、停まる事無く進み続けている。

そんな客船の甲板では、怒声と悲鳴が連続して響いていた。

「どうした！？　まだまだ速度は上がるぞ！　殺気を感じて避けてみろー！！」

「無理無理無理無理無理だつて！！　シヴァの斬撃が早過ぎ　あぶね！　　うお！？」

「これくらい避けられなければ、この先銃撃など避けられぬぞ！？　わたっかな？　わかつたなら速度を上げるぞ！？　　はあ！！」

その二つの声を上げているのは、長剣を素早く振り、斬撃を連続して放つシヴァと、彼女の斬撃を防いだり無理な回避運動を行って避け続けているカイだ。

そんな二人を微笑ましそうに見ているのは、近くのベンチに座っているシルクとミーナだ。

「あははは、頑張れシヴァー！！」

シルクの膝の上に座って足をバタつかせているミーナは、両手を筒状にしてメガホン代わりにし、シヴァに声援を送っていた。

そんなミーナを見てシルクは笑いながら、逃げ回っているカイへと視線を移す。

「それにしてもよかったあ、カイが無事で……」

呟くシルクの表情には、安堵の色があった。  
その表情を下から見上げたミーナは、満面の無邪気な笑みになった。

「よかったね、シルク！」

「うん、そうだよ。よかったよかった！」

「ああああ！！！！ 死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ！！！！」

安堵し、声に出して笑う二人を他所<sup>よそ</sup>に、カイは叫びながら斬撃を避け続けていた。

途中、何度も髪が切れて宙を舞うが、幸い衣服と身体には一撃も入っていないのか無傷だ。

「余り無駄口を叩くな！ 集中し、心の目で斬撃の起動を読み！」

「おわあ！ こ、心の目で……」

呟き、深呼吸をし、目を瞑る。

刹那、長剣の刃が腹部辺りの衣服を横に切り裂いた。

「おわああああ！！！！ 何にも読めねえー！！ ストップストップ！！！！」

大声で一時停止を求めるカイに対して、シヴァは斬撃を止める事はしない。

むしろ、わずかに速度を上げた。  
と、その時だ。

カイは閃光の如く迫る斬撃の中に、一箇所だけ穴がある事に気付いた。

左脇腹。

空いている穴から一撃を入れれば、確実にその位置に当たり、シ

ヴァはよろめく。

文字通り、隙から更なる隙が出来るのだ。

そう思ったカイは迷う事無く、一度バックステップし間隔を一瞬だけ空け、右手に持った諸刃の剣を振るう。

出来るだけ早く、そして有効的な一撃を入れる為に、防御に入ろうとする長剣を右足で蹴って、だ。

そして、

「ぐっ！！」

一撃は入った。

その際、右足で蹴ったはずの長剣が、右脚の脛ふくらはぎを斬るが、カイは気にしない。

入れた諸刃の剣を振り切り、右足を振り切って身を翻して体勢を整え、長剣を落として軽く吹き飛んだシヴァを追撃する。

だがその瞬間、カイの勢いが止まった。

それもそのはず、いつの間にか体勢を立て直し、平然と立っているシヴァに、片手で胸元を押されているから当然だ。

両者の表情は、笑みと焦り。

「……えと、シヴァ？」

「よく見破れたな、私の隙を。己の目で相手を見、戦況を優位にするのはいい事だ。合格っ！」

腹部に力を入れて放った言葉と同時に、左足を前に出して片手を突き出し、掌てのひら低を胸元にかました瞬間に、カイは吹き飛んだ。

「ぐいつ！？」

そして、一瞬ともいえる時間の後に、カイは壁に叩きつけられた。

「カ、カイ!？」

「ん? 強くしすぎたか?」

いつて笑いながら、シヴァは落ちた長剣を拾い上げ、鞘に収めた。一方、カイの下に駆け寄ったシルクは、脹脛の切り傷に手を添えて、回復魔術・トウルを唱えていた。

すると切り傷は見る見る内に塞がり、そして無傷になる。

「……えあ? こ、これ、シルクが役に立てるって言うてた力……? なんか、すごい」

「すごいでしょう? って、そんな事よりカイ、あんまり無茶したら駄目じゃない!」

切り傷のあった右脚の脹脛を平手でペチペチ叩きながら、シルクは眉を顰めてカイを叱る。

そうする彼女にカイは、頭を掻きながら苦笑を返した。

そしてすぐに、腕を組みながら近付いて来るシヴァに視線を移す。

「さ、さすがシヴァだね……でも、どうやってあの状況で体勢を元に?」

問われたシヴァは、カイの前で立ち止まると、組んでいた腕をすぐに解いた。

そして、右の掌うでを胸元の位置で上に向け、五指を僅かに開く。

「言ってなかったか? 私は生まれつき特異体質でな。私の属性魔力である風の魔術を司れ、詠唱無しで発動出来るのだ」

笑いで答えるシヴァの掌には、風が終結し始めていた。

もちろん、人の目に視認出来るものではないが、風が吹き荒れる

音と余波でカイ達に届く微風<sup>そよかぜ</sup>が、彼らに風の存在を知らせていた。

「この風は言わばもう一人の私。自由自在に操る事が出来る。……いくら合格したとしても、やはり敗北は敗北だ。その為、敗者であるお前の頭を坊主にする事など容易いぞ？」

「じよ、冗談キツいつて。……マジ？」

初めは笑っていたカイの表情は、見る見る内に不安に染まっていた。

そんな彼を他所に、シヴァは風を潰すように手を握り締める。すると風は一瞬の音と共に四散し、消え失せた。

「冗談に決まっているだろう。教え子を辱めるような真似はしないさ」

「……嘘だあ。本気の顔してたくせに…… わああ！ すみません冗談です！」

ほう、と呟きながら再度、右の掌を開いたシヴァを見て、カイは全力で謝った。

だが、彼女は無言のまま、掌に風を生み出す。

「ほ、本当にすみません！ だから止めてください！！」

「カイ、観念して坊主になっちゃえば？」

「坊主はいやだああ！！！！」

しゃがみ込んで、坊主になる事を提案したミーナにこれまた全力で否定し、必死にシヴァから逃れようとする。

だが、先ほどの衝撃で腰が抜けて立ち上がれず、背後は壁であるが為に下がれない。

さらに左右にはシルクとミーナが居る為、結果逃げ場はどこにも

無いのだ。

「カイ、カイ、大丈夫！ 坊主になっても私は友達でいるから！！」  
「シルク・セシル！ その言葉を俺の目を見て言ってみるよお！  
！」

するとシルクは、薄目でカイの頭を見、  
「……坊主にすれば、頭を洗う時楽だよお」  
「嫌だあああああ！！！！」

そうこうしている間に、シヴァは口元に笑みを作り、右手を振り上げた。

刹那、カイ達三人が、まるで風に舞い上げられ麦藁帽子むぎわらぼうしのように、自然と立ち上がった。

ふわり、という擬音が似合うほど滑らかに、だ。

そんな体験に、三人はぽかんと口を開けて、直立に固まっている。

「そんなに驚く事では無いと思うぞ？ 風で立ち上がったただけだ」

その言葉にカイは、髪を必要に触りながら、シヴァを凝視する。

「坊主は………無し？」  
「何馬鹿な事を言っているのだ？ そんな事より、だ。そろそろ戻るぞ。私は疲れた」

言ってミーナを見ると、丁度大きな欠伸をしていた。  
それを見たシヴァは笑みを作り、彼女に背を向けて負ぶった。  
そうしてシヴァは、客室へと歩き出した。

「……あつ、じゃあ私達も行こうよ、カイ！」



元氣すぎる声で言ったシルクは、スキップしながらシヴァの後を追った。

そんな後ろ姿を見ながら、カイはふとある事を思い出す。殺し屋とユウの会話を、だ。

「……ユウが別行動をとるって言った、本当の理由って……」

呟き、そして頭を左右に振って疑念を吹き飛ばす。

そして、大分離れてしまったシルク達の後を追いつめた。

汽笛が、船内に響き渡る。

その轟音を煩く思いながらも、フェンリルは作業を続ける。

ここは、数多くある客室の一つ。

その客室内には、バチバチという火花の散る音と、それによって起きるフラッシュが何度も光っていた。

その源である工具を持っているフェンリルは、金属のプレートで火花から顔を守りつつ、ヘルの外れた右腕の二の腕の間にある接合部分を修理していた。

「……痛くないか？」

「痛覚プログラムは現在停止中ですので、問題ありません」

首だけをフェンリルに向けて答えるヘルの声は、何故かユウの声だ。

それに対してか、フェンリルは溜息をつく。

「お前な。声戻せよ、声」

「失礼いたしました。発声プログラムの変更要請を実行いたします。……完了いたしました」

「いや、完了じゃないからな。それは俺の声だからな。戻せよ、な？」

怒りを堪えつつ言うフェンリルに、ヘルは一言謝罪し、変更を実行した。

そしてフェンリルは、少しずつワイヤーを繋げながら、作業を続ける。

途中途中、左側に置いてある電子端末を操作しながら、慎重に全てのワイヤーを繋げている。

そして全てのワイヤーが繋がった時、不意にヘルが問い掛けた。

「あれで、よかったのでしょうか？」

「……何の話だ？」

ヘルに視線を合わせずに、腕の皮膚細胞を張り替えているフェンリルに、彼女は言葉を続ける。

「カイ・エディフィスの話です。現在、彼にとってユウ・ウラハスは疑うべき対象となっている確率が八十パーセントを占めてしまっているはずです」

「意外と優しい奴だな、お前は」

「お褒め頂き、ありがとうございます」

言って、頭だけで一礼したヘルにフェンリルは、だがな、と付け足した。

「これは飽くまで仕事。そう、仕事なんだ。対象に情を抱くのは、殺し屋として失格だ。……いいな？」

「ヤー、マイマスター」

ヘルはそう言って再度、頭だけで一礼する。

それに対してフェンリルは、上出来だ、と言って完治した彼女の右腕を軽く叩いた。

その動作とほぼ同時、彼の左側に置かれている電子端末が、ピピピツという電子音を出して何かを報せた。

それを聴いたフェンリルは、左手で電子端末を操作して、ディスプレイにウィンドウを開く。

そこには、殺しの依頼を要求するメールが映し出されていた。

## 第四十四話：ジードの歴史

薄暗い、日陰のような場所を列になって進んでいる者達が居た。ユウ達だ。彼らは、もうじき日が暮れるというのに明かり一つ持たず、王立図書館の中を歩いていった。

探しているのは、神話聖書”エニグマ”。ユウの居た世界、ジードの手掛かりとなる資料だ。

それを探す為に、無数の本が入った本棚の群を抜けて行く。

と、その時不意に、中間を歩いていたユウが、先頭を歩くネプチューンに声を掛けた。

「なあ、ネプチューン。さっきからずっと歩いているが、場所はわかってんのか？」

「明かりの保管場所も含めて、全部順調ぜよ」

ネプチューンは振り向く事無く、手を上げてひらひらさせながら答えた。

そんな彼をクレアは、内心で不信に思っていた。

それは、獣の勘だ。この先に、彼が導いて行く場所には、危険な臭いが漂っていると、そう感じとっていた。

ただそれを、彼女は敢えてユウに話さない。

確信の無い事で余計な心配事を主にさせたく無い、という気遣いがあったからだ。

「……おう！？ あった、明かりがあったぜよ！！ ほれ」

同時、ネプチューンの右手に光が宿った。

その源は、賢石”シャマシユ”だ。太陽のようで少し違う、優しい光を放つそれを、ネプチューンはもう二つ手に取ってユウとクレ

アに投げ渡した。

そして二人が手に取った瞬間、シャマシユは光を放ち出した。

「……綺麗ねえ……」

眩くクレアは、シャマシユを見てウツトリしながら、ユウの隣りで立ち止まった。

対するユウは、シャマシユを高く揚げてある物を見上げていた。

視線の先には、模様が多数彫られた大きな門。

その門を、ネプチューンは警戒する事無く開ける。

そして、両腕を広げて笑みを作った。

「ようこそ、王立図書館・機密倉庫へ！　ここは一般人はもちろん、軍人さんでも滅多に入れなかった所だよお！」

その奥には、またしても無数の本が収納された本棚の群があった。

「あつたあつた！　これじゃないの！？」

歓声を上げたのは、門から少し離れた所にある本棚の上部、梯子はしに上っているクレアだ。彼女は分厚い本を片手に持ち、軽快に梯子を降りていく。

そして、中央に位置する大テーブルに本を置いた。

重みのある鈍い音と大量の埃を巻き上げたその本の表紙には、薄っすらとだがエニグマと書かれている。

「ほらほら、ユウ！ ついでにネプチューンも集まってー！」  
「わっちはついでかな……」

溜息をつくネプチューンと、無言無表情のユウが本棚の間から現れ、クレアの近くに集まった。

「……これが……ジードの記録か……」

呟くユウの表情には、僅かな苦笑が生まれる。  
だが、そんな事はお構い無しに、ネプチューンは本を開いた。

「……どうやらこれは、エニグマ戦争あるいは戦記を主に、開戦の理由とそれまでとそれから暮らしをまとめられているようだっちや。えと……人間と、謎めいた異形の存在エニグマ。まずはこの二種族が争うまでの歴史ぜよ」

言ってネプチューンは数ページ捲り、止めた。

「んとんと……この世界、ジードには四季があり、大地は永遠に育まれていた」

「これは私達の世界と変わらないわね。でも、補足があるわ。」

……この世界は、我々グラルスよりも、遥かに広大だと推測される……だ、そうよ」

「広い意味は……これじゃないん？」

ネプチューンが指で示す位置。

そこには丸い惑星が描かれており、四方向にそれぞれの四季を示す絵が、そして惑星の北と南の大地に対をなすように、人間とエニグマが描かれていた。

その二つの種族が向く方向は、左右逆だ。それは丁度、歩き出し

ても鉢合わせしない形。

「人間とエニグマ。その二種族は、互いに四季が一周する毎に移住し、その先でまた四季が一周するまで過ごした。それが、戦前まで人間とエニグマが出会わなかった理由だった。よく出来た世界っちゃねえ」

そう言っている間にも、ページはどんどん捲られていく。  
そして、開戦直前のページが開かれた。

「開戦理由っちゃね。数百年という時の中で人間は、解明され始めていた魔力を、最大限に用いた機械の開発に成功したようだった。それにより人間の暮らしは異常なまでに発達し、大陸を移動する速度も従来の数十倍にまで達した。そしてそれが、人間とエニグマの初接触となってしまったのだ」

一ページ分を言い終え、ネプチューンは溜息をついた。

「……正直、似てるのか似ていないのかさっぱりぜよ。唯一わかるのは、こつちの世界では希少な生きもんがこの……ジードって所じや人間並みの数が居るって事だけな」

「それに、魔力を使用した機械も発展してるしね。グラルスでは、ほとんど賢石に頼ってるもの」

苦笑しながら、クレアはページを捲った。  
そして今度は、彼女が読み始める。

「そうして幾重にもわたる接触の末、ついに人間が攻撃を仕掛けたのだ。それは、開戦である。戦いに特化した、銃や車両などの兵器を投入する人間に対し、異常なまでの繁殖力と見た者を恐怖さ

せる姿で対抗したエニグマは優勢を保っていた。……左腕に光を宿す者が現れるまでは、だ　　って、え……？」

そこで、止まった。

理由の一つ。最後に出てきた呼び名に、心当たりがあるからだ。だが、それはすぐに別人だと知らされる。

「デイン・ガードナー。眼帯をした長い銀髪の男。髪の色以外、カイには全く当てはまらないわ」

それは、ユウの声。口調がおかしいが、確かにユウの声だ。だが、やはり口調に違和感を感じたクレアは、振り向いて問おうとした。

今のは何？、と。

だが、それを遮る音が来た。遙か上の天井にあるステンドグラスが、大きな破碎音と共に割れたのだ。

それに気付いた三人は、少し遅れつつも素早く散開する。それから数瞬後、三人が居た大テーブルの周囲にガラスの雨が降り注いだ。



くそつ、何だいきなり……

そう内心で呟きつつ、素早く本棚と本棚の間を駆け抜ける。

『鳥でもぶつかっただんじやないの？　　え！？』

……どうやらガラスが割れた後、魔力を抑え切れずに放出している奴が十人ほど、この中に入ってきたな。殺気は完全に消えているが。

『未熟ねえ……ここは私がやりましょうか？』

いや、まだいい。万が一、遭遇して囲まれた時に頼む。それより

……

一度言葉を止めて、向かって右の本棚を蹴りで思い切り倒す。

それによつて、固定されていない本棚がドミノ倒しになり、うわあ！、という声が一瞬間こえたが、轟音によつて掻き消された。

それに目もくれず、走り続ける。

……さつき、俺の身体を使って放った言葉、デイン・ガードナーとは誰の事だ？

問うと、ティファは微笑した。

『まだ、ヒミツよ』

わかっていた。問い掛けた際に、ティファは微笑を返してきた場合、絶対に先延ばしにされるという事は。

だが、無駄だとわかっていても、

「聞きたくなるのが俺　だっ！！」

最後の言葉と共に、腰の鞘から左手で長剣を抜き、後方へと振るう。

瞬間、金属音が響く。その音源である武器、ロッドを持っていたのは、

「チッ、まさかガキまで共犯者だったとはな！」

そのガキは、上陸した際に入った村に居た、十人ほど居たガキの一人だ。

そいつに対して笑みで言い放っておき、力でガキを吹き飛ばす。するとガキは、本棚に衝突したが、武器を落とさないところを見ると、大分訓練されているようだ。

「……厄介だ」

呟き、長剣を右手に持ち替えて、左手で後ろ腰のホルスターから拳銃“ガバメント”を引き抜く。

そしてガバメントの銃口を、吹き飛ばしたガキに向けて引き金を引く。

乾いた銃声が、響いた。それを数回、繰り返す。そうして放った銃弾は全弾……当たらなかった。

「チッ、魔術師か」

その全弾は、倒れたガキの数センチ前で、大気に目視出来る程の波紋を生みながら止まっていた。

『残念なお知らせよ。囲まれているわ』

その報告を聞き、辺りを見渡す。

……数は五人。全員が本棚の上で詠唱待機中、か。

「群れる魔術師は嫌いだ……」

言ったのと同じ、俺を囲んでいるガキ共が、魔術を放った。

「なんなのよ、もう！」

そう大声で叫んだクレアは、叫ぶべきではなかったと後悔し、口を手で塞いだ。

そうして冷静になろうと本棚と本棚の間で止まって深呼吸し、太股に巻いてあるベルトからダガーナイフを引き抜いて、両手にそれぞれ逆手にして持つ。

同時に構え、感覚を研ぎ澄ます。そうして標的を、獲物を獣の勘で……捉えた。

「はあー！」

勢いよく飛び出し、ダガーナイフを振るう。

その勢いで、被っていた帽子が飛んで猫耳が露になるが、気にしない。

するとタイミングよく人影が横切った。

だが、肝心の刃はロッドによって防がれる。金属音と共に、だ。そうしてクレアが見た相手は、先程まで居た村の子供だった。

その事に、クレアは眼を見開く。

「何で貴方が!？」

言ったのとほぼ同時、クレアは新たに気配を感じた。

背後、クレアが元居た本棚と本棚の間にもう一人、少年が居ただ。

彼は丁度詠唱を終え、魔術を放とうとする。

その事に、しまった!、と言おうとしたクレアよりも先に、動きがあった。

本棚がドミノ倒しになり、魔術を放つ寸前の少年に覆い被さった。うわあ!、という声は轟音で掻き消される。

それを見たクレアは、うわ……、と苦笑し、前へと向き直す。

現在、彼女のダガーナイフを防いでいるロッドは、もちろん金属製だ。

その為に、強烈な打撃に注意しなければならない。それを認知の上で、クレアは動いた。

ダガーナイフを強く前に押し、相手との空間を空ける。

同時に、素早くバックステップをし、更に距離を作った。そうして載ったのは、本棚の上だ。

そこから、全速力で相手の前方へと走る。

疾走。その状態から繰り出されるのは、上段回し蹴り。

もちろんの事、相手はバックステップをしながらロッドで防ごうとするが、蹴りの速度が早過ぎる為に、軌道を僅かにずらしたただ。

空を切る蹴りが、子供の頭上を掠る。

そうして次に、姿勢を最大まで低くし、相手の横腹に蹴りを叩き込もうとした。

それは、最初の回し蹴りを防ぐ際にロッドを上げており、尚且つ蹴りがロッドに直撃し、その反動で素早い行動が出来なかった隙を

突く一撃。

だがしかし、その一撃は、  
「ふおうっんっ」

手応えを全く与えず、風に流されたかのように脚が振り切られる。  
子供は吹き飛んでいない。

「え!?! なんて!?!」

クレアの驚いた声と共に、脚は虚しく振り切られた。  
同時、ロッドの重い一撃が、彼女の腹部に直撃する。

## 第四十五話：作られし者達

ロッドがクレアの腹部に直撃し、メキツ、という嫌な音が鳴った。それは何処の骨から聞こえたのかはわからないが、そのロッドの一撃は威力が異常である事は確かだ。使い手が、子供だという事を忘れる程に。

「……痛いじゃないの　よっ！！」

最後の一言に力を込めて、クレアは掴んだロッドを下から蹴り上げた。

その際に起きる振動は、使い手である子供には耐え切れなかったのかロッドが手から離れた。

それにより、最後まで掴んでいたクレアは痛みを堪えながら微笑を漏らし、ロッドを宙に投げた。

同時に彼女は素早く、目にも留まらぬ速さでダガーナイフを振るう。

するとロッドは、素材が金属である事を忘れさせるかの如く切り刻まれた。

ダガーナイフには、傷一つ無い。元々、エターナルで加工されたダガーナイフは強度が異常に高い。それにクレアの振るう速さが加われば、金属など容易い物なのだ。

「まさかとは思っていたけど、これ程まで切れ味がいいとはね」

クレアは微笑しながら、ダガーナイフの刃を軽く撫でる。

そんな彼女に対して、ロッドを壊された子供は、あはは、と笑い出した。

「すごいね、お姉ちゃん！ 僕の武器が無くなっちゃったよお！」

後が無いような台詞を、緊張感の全く無い声で言っている子供は、宙に左右の手で半円を描いた。

その動きに、クレアは身構えて警戒する。

「……何をするつもりなの？」

「何をする？ ……あはは！ 何をするんだろう！？ 何だろうねえ！……」

明らかに異常と思われる口調の子供に、クレアは一步下がり苦笑する。

だがその子は、その動作を気にする事無く半円を描く事を続けた。それによって少しずつ、何かが浮かび上がる。

それは、

「……魔方阵？ ……しまった！……」

言つて、阻止しようと走り出した時はもう、遅かった。

露になったのは黒魔方阵。それはコピーされたかのように分離し、クレアの頭上に散らばった。

それを見た彼女は急停止し、飛び交う黒魔方阵を見渡す。

刹那、その黒魔方阵から突然黒槍が飛び出した。

その黒槍は、まっすぐにクレアを狙っていた。

「魔術！？ ……しかもやっかいそうな形してるじゃない！」

驚きつつも、バックステップで回避運動をとる。

すると黒槍は、クレアの元居た場所に突き刺さり、小さなクレーターを作った。

だが、それだけでは終わらない。他の黒魔方阵からも、黒槍は飛

び出す。

その量は既に雨だ。

「な、何よこの量！

あ、意外と簡単に……」

放った言葉と共に生まれるのは笑み。

それとほぼ同時に降り注ぎ始めた黒槍を、クレアは素早い動きで走り回り、避けた。

まるで猫か兎。野を駆け回る小動物のように、だ。

「あ、あれあれ？ 何で避けるんだよぉ」

悔しそつに腕を振った子供は、更に黒魔方阵を増やした。

だがそれも、クレアにとっては遅すぎた。

それは黒槍が遅いわけではなく、増やすのが遅かったのだ。既にクレアは、子供の懷に飛び込んでいた。

同時に子供を突き倒し、その上に馬乗りになる。

彼女は子供にダガーナイフを向けながら、声に出して笑う。

「ふふふつ、もう少し多く出しておけばよかったのにね。だから、脅威に見えた黒い槍は、すぐに話しにならなかったわ」

言いながら、勢いをつけて振り下ろしたダガーナイフはしかし、  
「ひゅるゝん」

子供を逸れて、地面に突き刺さった。

「あ、あれ……？」

「避けるのなら僕にも出来るんだよ？ お姉ちゃん」



今度は子供の方が笑顔になり、クレア表情からは笑みが消える。同時、何かに気付き彼女が顔を上げた時、丁度正面に黒魔法陣が一つ、降りて来た。

そして、黒槍は射出される。

「あぶ　　！！」

ない、と言い終える前に、クレアは身体を横に傾けて避ける。

そんな彼女の右後方に、またしても黒魔法陣。

何の前触れも無く射出される黒槍を、彼女は脚を上げて避ける。

そうして続く射出と回避の連鎖は、五回目でやっと止まった。

終わった、とホッとして吐息したクレアの支えはダガーナイフを下に敷いている左手のみ。

他の四肢は全て黒槍を避ける為に、さまざまな方向を向いていた。

その姿を見る子供は、とても楽しそうに笑っていた。

「あははは！！　すっごいよ、お姉ちゃん！！」

「そ、それはど、どうも……」

震える声で言うクレアの左手と腕は既に限界間近なのか、小刻みに震えていた。

それを堪えつつ、彼女は子供に問い掛ける。

「そ、そういえ、ば貴方……なま、名前は？」

「僕？　僕の名前？　AC-07だよ」

AC-07。

明らかに人のなであるはずがない名を聞いて、クレアは驚いた。それにより、支えとなっていた左手への集中が途切れ、姿勢が崩れる。

「ちよ！ 冗談で　　しょ……？」

崩れた身体は、しかし黒槍に触れても何とも無かった。  
その事に啞然としているクレアは気付く。

この黒槍は固体の物質である、と。

刹那、彼女は手に持ったダガーナイフを握り締め、音速ともいえるような速度で振るった。

すると黒槍は切り刻まれ、まるで千切りのように次々と落ちてゆく。

それらの中央で、クレアは未だに仰向けになっているAC-07と名乗った子供の首筋にダガーナイフを添えていた。

零距离。

それは、軌道を逸らすという厄介な事が出来ない距離。

それは、ダガーナイフでいつでも頸動脈を搔っ切る事が出来る距離。

その距離をもってクレアは、再度子供に問い掛ける。

「……その名前。まるで機械のように人外の名のようだけど、人間なの？」

「あははは！　もちろん人間だよ、人間！　殺しの為に、特化された人間！　国王が、ここに人が入り込まないようにと配置した暗殺者……！」

「そう……貴方達は、既に滅んだテクノス王国の忘れ物なのね……」

悲しそくに呟くクレアの目には、感情が無かった。

それは、今から殺すのであろうAC-07に情が移らないようにするが為。

躊躇無く、殺す為。

その決意の基で、彼女はダガーナイフを横に引いた。

そして、パツクリと空いた切り傷からは少し遅れて鮮血が噴き出す。

「……長い間、お疲れ様……」

死者への手向けの言葉を送ったクレアは子供から離れ、顔にかかった血を拭い取る。

その後、既に息をしていない子供の臉を、そっと瞑らせた。性別がわからないほど幼い顔立ちの子供の臉を。

瞬時に放たれた魔術は、五色の鮮やかさを見せる。

だがそれは、遠方から見た時のみだ。

炎、水、雷、樹、光属性の魔術は、それぞれの形をもって中央に居た避ける隙の無いユウに向かって叩き込まれる。

轟音。

それにより、ユウは再起不能になっている……そう思われた。

巻き上がった埃などが治まり始めた頃、中央に立っていたのは女性。

自称・大魔道師の彼女は、紋章が刻まれた肩肌が剥き出しになった黒い服を身に纏っており、僅かにズレたソックスをミニスカート近くまで上げて、その手で金色の長髪を掻き上げた。

そして目を一度瞑り、口元の笑みと共に開けた。  
開いた目は、白と黒のオッドアイ。

その二つの目は、本棚の上で何が起きたのか理解できていない子供達を見渡す。

「やゝつと私の出番ね。ウズウズしてたのよ、魔術師と殺<sup>や</sup>り合つのは……ま、貴方達なら、魔術で充分でしょうけど」

フフン、と笑う彼女　ティファは、余裕の表情でそう告げた。  
すると一つ、本棚の上で動きがあった。

一人の少女が、詠唱をしながら降りたのだ。  
そんな彼女に、少年が静止の言葉を放つ。

「待てAC-04！　まだ相手がどんな奴か」

「大丈夫だよ！　どうせ、まぐれで避けれたただの女装野郎！　近距離で放てば確実に……！」

言いながら、余裕の笑みを浮かべる少女は上手く着地し、走りながら両の掌に魔法陣を展開させる。

そうして放たれたのは、樹木の根だ。

その、触れる物全てを巻き込むような根は、ティファに到達寸前まで行った。

「フォース・フィールド」

ティファがそう言い、指を鳴らした瞬間、根は彼女の数センチ前で消滅した。

消滅、というよりかは、空間に飲み込まれたかのように消えていくのだ。

そして根が全て消え、魔法陣でさえ消え、走り続けていたAC-

04の掌は、ぴたりとガラスに手をついたかのように止まった。

「え……？」

その状況に、AC-04の思考は停止していた。  
何が起こったかわからない。

ただその言葉が、脳内に響く。

そんな彼女にティファは、満面の笑みを見せた。

「女装野郎って私の事？ よく、ほざいてくれたわね」

表情とは裏腹に、怒りの籠った声。

それと同時に、AC-04の周囲からはパキパキ、という音が響く。

刹那、冷氣と共に現れたのは板状の氷だ。

それは二枚あり、内側には大量の氷柱。閉じれば丁度、AC-04を挟み食らう形。

そして、それは起きる。

ティファが、「メイデン・ファイアー」と呟いて指を鳴らした瞬間に、だ。

その氷は、恐怖の中で後ろの仲間に向いて縋るような表情を見せた少女を、跡形も無く食らった。

すると氷は一瞬にして蒸発し、血を一滴も残さず何もかもが消える。

「……貴方達は、強いのかもしいわ。でも、決定的な敗因があるの」

大魔道師は言う。視線の先、突然起きた事態に驚き、硬直している子供達を見据え、

「子供だからよ。だから脆く弱い精神は、すぐに隙を見せる。ホラ、気付かなかった」

言葉はそのまま、形となって現れる。

子供達の背後、黒い空間の穴がポツカリと空いており、その中には無数の手が伸び出した。

標的であろう子供達を引きずり込まんとする、地獄からの招き手が。

## 第四十六話：追加任務

カタカタ、という無機質な音が、とある客室内に響いていた。それ以外に音は無く、余計に音は耳に残る。

その音源、電子端末のキーボードを打つフェンリルは、ベッドの端に座りながら多少の苛立ちを見せていた。

故に、キーボードを打つ力は少しずつ強くなっていく。

そんな彼の傍らで、無表情のまま立ち尽くしているヘルは不意に、左手を彼の頭に載せて撫で始めた。

「よしよしい子いい子」

飽くまで無表情で、その上棒読みの言葉に、キーボードを打つ手が止まった。

そして、今まで電子端末のディスプレイを見ていた視線が、ヘルに向けられる。

だが、彼女はその動作を止めようとする素振りさえも見せない。

「よしよしい」

「待て、何の真似だ」

「……マスターが、何やら拗ねている様子でしたので、もしもの為にインストールしておいた育児補助プログラムを起動し、マニュアルに従って行動させていただきました」

ヘルの返答を聞いたフェンリルは、深い溜息をつく。

そして未だに頭を撫で続けている手を退けて、あのなあ、と前置きした。

「拗ねてるんじゃない、苛立っているんだ。それに何だ、もしもの

為の育児補助プログラムって。もしもなんてないから消せ。容量の無駄だ」

「……ヤー、マイマスター。不本意ですが、削除致します」

本当に残念そうな表情を作ったヘルは、開閉の遅い瞬きを数回した。

「……本当に削除いたしますか？」

「そうだ、消せ。今すぐ消せ」

「それでは、削除しますか？ という問いの項目を削除します。：

…さて、それでは育成補助プログ

「しつこいぞ！ そんなに削除は嫌なのか、お前はっ！」

ついに爆発した怒りを、再度の深い溜息で治め、視線を電子端末へと戻す。

だが、キーボードに添えられた指は動かない。

それを見て好機だと思ったヘルは、小首を傾げて問い掛ける。

「それで、何故苛立っていたのですか？」

「ああ、依頼の追加だ。添付してある画像の人物が同じこの船に乗っているらしく、ソイツを殺せとな。だが……」

フェンリルが指で示す先、電子端末のディスプレイには画像ファイルが多数展開されている。

その画像ファイルの一つひとつには一人ずつ人物が写っており、数は数百、数千は確実にあるだろう。

それらに、添付されていた画像ファイルを照らし合わせている作業が自動で行われており、それも終わりつつあった。

残り枚数は、五十。その数もすぐに減り、零となって”NO File”と表示された。



同時に、ピーツという電子音が鳴り出す。

その音に混じえて、フェンリルは舌打ちした。

「……念の為にもう一度検索して、コレだ。居ないんだ、そう対象はこの船に居ないんだよ」

「どういう事でしようか。可能性は多数ありますが、その全ては思考に含めましたか？」

問いに、当たり前だ、と言いながら電子端末を操作し、展開した画像ファイルの船内見取り図の客室Cブロックに指をさす。

「この、客室Cブロックがこの船の入口となっている。この場所にカイ達に乗ったかを確かめる為に二つ前の便からカメラを設置していたんだ。人が移り込むと写真としてデータを残してくれる便利なヤツをな。それを確認した所、俺達に乗っているこの便以外の便にも対象は写り込んでいなかった」

「ずっと中に乗っていた、または後の便に乗ったという可能性は、どうですか？」

「前者はありえない。この船に乗り込んだ人数は、船員がカウントしているからな。降りた客の人数が足りない場合、船員総出で船内を探し回る。過去に数回、実際にあったらしいしな。……後者は無理だ。依頼主は必ず、と言ってる。今日中に乗船だとな。しかも、この船は最近、毎日早朝にしか出ない。レジスタンスのアクアトレインテロのせいで、バビロニア皇国軍による警戒が強化されたからな。これは、前者の答えにも該当する。よって、対象はこの船に乗っているはずだが、居ないという現状に行き着いている……」

言い終え、頭を掻き始めたフェンリルの指先には、徐々に力がかもっていく。

そうして溜まるのは、苛立ちだ。

「依頼主はこれを追加と言った。カイ・エディフィスを殺す依頼に追加だと！……いいか、ヘル。俺達はプロ、そうプロだ。だがいくらプロと言っても、全知全能なんかじゃない。なのに依頼主は少ない情報と乗船していないガキの写真だけで探し出し、殺せと言ってきている！」

怒りの言葉を発しながら、フェンリルは一つの画像ファイルを展開した。

そこに写っているのは、黒く長い髪とパツチリとした濁りの無い目特徴的な少年だ。

それを見るヘルは、瞬きを二回程して頷いた。  
では、探しましょう、と言いながら。

その言葉に、もちろんフェンリルは反応した。

「……探す？ このガキを馬鹿広い船内からか！？」

「もちろんです。ここで無駄な時間を過ごすよりかはいいと判断します。何分、面倒な提案ですが、プロである私達は仕事を優先すべきかと」

言って会釈し、フェンリルの返答を待つ。

対するフェンリルは、無表情で電子端末を操作し始めた。

キーボードで打ち込む文字は、”報酬は上乘せだ”の一言。

たったそれだけの文章しか書かれていないメールを、彼は送信した。

そして、送信完了の報せを確認せずに立ち上がり、部屋の隅へと向かった。

そこには、大型の長方形で灰色一色のトランクが置かれていた。

彼はそれをベッドの上まで持って行き、横に倒して開く。

すると中には、真つ黒な拳銃が三丁と、それと異なった丁字の形ハンドガン

をした短機関銃”イングラム”が二丁入っていた。

そして、それらの物であろう黒く長細い弾倉が、上蓋にゴムで敷き詰められていた。数は、軽く五十を超えているだろう。

その中から彼はイングラムを二丁取り出し、既に装着されていた両サイド脇のホルスターに差込み、一番細長い弾倉を二本ずつ持って、胸元の細いポケットに収めた。

次に、拳銃を同じく二丁取り出し、今度は後ろ腰のホルスターに差込み、先程よりも若干太い弾倉を四本ずつ持って、ベルトに空いた、まるで弾倉を入れる為のような隙間へと差し込む。

そして、トランクをヘルへと向けた。

すると彼女は両の掌に穴を展開させ、右には長細い弾倉を、左には若干太い弾倉をそれぞれ二本ずつ差し込んだ。

その後、穴は閉じられる。

それを見ていたフェンリルは、苦笑を漏らした。

「全く、製作者である俺でも未だにわからん。腕の中にチャージャーを追加されたと設計図にあったが、どこに入ってるんだよ……」

「マスター、誰にも観測されていない領域は、何が起きているのかはもちろんの事不明。逆に、何でもありという事です。故に、深く考えない方が今後の為だと判断します」

「支援兼近接格闘型自動人形、ヘル。あの人の最後の作品であり、最高傑作……先生の……」

虚空を見つめ、呟く。

そんなフェンリルを見て溜息をつく真似をしたヘルは、トランクを閉じた。

大きな音が出るように力強く、だ。

「過去に浸るのは悪いとは思いますが、任務中故、極力控えてください」

「……ああ、そうだな。悪い癖だ……」

顔を片手で覆い隠して苦笑したフェンリルは、少しの間を置いて立ち上がった。

それと同時にヘルも立ち上がり、彼女の傍にあったもう一つのトランクを開いて、綺麗に折り畳まれた衣類を取り出した。

彼女の手によって広げられたそれは、真っ赤なロングコートだ。

フェンリルはそのロングコートを受け取って羽織り、ポケットに手をつ込む。

「それじゃ、行くか。仕事だ……」

その言葉に、ヘルは無言で頷く。

そして二人は、部屋を後にした。

まるで、血に染まった赤きロングコートを羽織った死神が、野に放たれたかのように。

#### 第四十七話：快樂となる恐怖

暗い暗い闇の中。

僕はずっと、その時が来るまで潜んでいた。

だけど、それももうすぐ終わる。その時が来たから。

だから僕は、闇の中から光に向かって飛び出した。

「　　おわあ！　びっくりしたあ！！　いきなり飛び出して来るな  
よあ  
」

僕が飛び出した先には、一人の少年がいた。  
銀髪の、少年が。

それはまさに、地獄絵図だった。

背後の穴に即座に気付き、回避運動をとったのはたった二人の少年少女。

残りの二人は逃げ遅れ、今まさに、穴から出る腕に引き擦り込まれそうになっていた。

「　いやあああああああ！！！！　」

「うわあああああ！た、助けてよ、A C - 0 1！！ えーし  
」

恐怖に染まった悲鳴は館内に響いたが、いつしかその声は途絶え、  
静寂が訪れた。

その静寂を破ったのは、ティファだ。

「……ふ、ふふふ…… あはははは！！ そう、これ、コレよ！！  
恐怖に染まった心を食らい尽くす！ これこそ最高の快樂！！」

突然と笑い出したティファは、片手で顔を覆いながら歓喜した。  
”恐怖”。老若男女問わず持つ恐怖という感情を、彼女は楽しんで食らっていると、そう見えた。  
だが、その状況下で動く者が居る。

「……何が、恐怖だ……！」

少年だ。

A C - 0 1と呼ばれた少年は、恐怖では無く怒りを露にして、詠  
唱の構えを取った。

「……殺<sup>や</sup>るぞ、A C - 0 3。あのイカレた女を、殺す！」

その言葉に、A C - 0 3と呼ばれた少女は頷き、同じく詠唱の構  
えを取る。

そして、動く。

A C - 0 1は回り込むように疾走した。

目にも留まらぬ速さで、まるで光のように、だ。

そんな彼を目で追おうとして向きを変えたティファに、詠唱を終  
えたA C - 0 3が魔術を放つ。

「……………ライトニング」……………」

瞬間、無空間から稲妻が生まれた。

その稲妻は、ティファが気付くよりも速く彼女に到達する。

「んあっ！！……………危ないわね！」 ライン・アロール」！」

衝撃を堪えるティファは、素早く指を鳴らして、現れた光の矢をAC-03に向けて射った。

だがそれは、軽々と避けられる。

同時、ティファの真下に、片膝を立ててしゃがみ込んだAC-01が現れた。

「え？」

「稲妻が直撃してそれって事は……………魔術耐性か」

言いながら、床に手を付ける。

そこに浮かび上がるのは、白魔法陣だ。

「ジャッジ・レイ」！！」

AC-01が大声で言い放つと、それに答えるかのように光が生まれ、

「そんな！？ まだ体勢が」

白魔法陣から上に向けて、太い光の柱が放たれた。

その光は天井まで達し、風穴を空ける。

しかしティファは、寸ででフォース・フィールドを展開した為に逃れる事が出来、二人から距離を取っていた。

そんな中、彼女はある疑問を持った。

……詠唱が、短すぎるわね……

通常、魔術を使う際には詠唱が必要不可欠だ。

それは、言葉を鍵として特定の魔術を生み出す為の行為。

ちなみに、禁術を得た際に魔術の理を知るティファには詠唱はほとんどいらない。

代わりに、更に上の禁術を知っており、これには詠唱が必要である。

だがその理を知っているのは、ティファと彼女の祖父、そして僅かな事だけがシルクと、その三人だけだ。

もちろん、その三人だけという確証はないが……

それでも彼女は、子供達が魔術の理を知っているはずが無いと、内心で断言していた。

けれど、そこに生まれるのは矛盾。

だからこそ、ティファはそれを確認する為に仕掛ける。

遠く離れた所で、油断が僅かに見えるAC-03に向けて、指を鳴らす。

「ウインド」

言っと、距離に関係無く魔術は発動し、AC-03の周囲に風を生んだ。

その鋭い風の刃は、まるでカマイタチだ。

それは容赦無く、AC-03の衣服を切り裂き、肌を露にした。



まるで眠っているかのような表情のAC-07を見るクレアは、  
ダガーナイフに付いた血を振り払い、太股の革ベルトに差し込んだ。  
そして、テクノス王国の忘れ物であるAC-07の頬に手を触れ  
る。

「……死んだ後なら、情を少しくらい移してもいいわよね……」

呟き、どことなく懐かしそうな表情を作った。

だがその表情は、すぐに変わる。

AC-07の衣服の、少し破れた部分。その場所に、模様が見え  
たからだ。

けれどその下に、何かを着ている様子では無い。

つまり、直接肌にその模様があるという事だ。

それが気になるクレアは、ダガーナイフを取り出して衣服を裂い  
た。

「……っ!? こんな物が……!」

驚くクレアの目に入ったのは、隙間がほとんど無く、敷き詰めら  
れているかのように書き刻まれた紋章だ。

たぶんそれは、全身に刻まれているだろう。

その歪な紋章に、彼女は耐え切れず目を逸らした。

「こんな……これじゃあまるで……」

「人間兵器ね。しかも、とびつきり危険な」

言うティファが見たのは、衣服を切り裂かれて露にした肌に、ビッシリと書き刻まれている紋章だ。

それを、彼女は知っている。

「……魔術式……その中でも、一番厄介なヤツよ。　　いいえ、もつと厄介。強制魔力定着式と魔術詠唱記憶式の二重紋章。空気中の自然魔力を強制的に身体へと吸収させて、身体を魔力貯蔵庫にし、同時に紋章に記録されている魔術を素早く発動させる事が出来るの」

言いながら、ティファは本棚の裏に隠れ、深呼吸をする。

戦闘中の魔術師に重要なのは、集中力と判断力、そして応用力だ。どれか一つでも欠けていれば、危険を伴う事になる。

その為に彼女は、とりあえず会話で集中力を強める為に、冷静になって説明を始める。

「……説明が途切れちゃったみたいね。　　とりあえずは、ただのドーピングなんだけど、その分デメリットがあるの。人が生きていく上で、空気中の魔力は酸素のように、自然と体内に巡回させている。でも、その魔力に接する量が異常であればあるほど、自身に支障をきたしてしまう。身体の成長停止、精神異常、言語障害などなど。で、成長停止は彼らを見ればわかるわね」

それは、麻薬となんら変わりのない物なのだ。  
そんな物が子供に使われている、という事は、魔術師であるティ  
ファにとっては腹立たしい事だった。

だがその反面、喜んでいるのもまた事実。

彼女にとって彼らは既に、こっちの世界で自分がどれだけの存在  
なのかを確かめる事が出来る物の一部でしかない。

故に、口元が緩む。

それを我慢しながら、彼女は指を鳴らし、光が集結し始めた人差  
し指と中指の二本を合わせて、宙に魔法陣を描く。

だが、その描いている物は一つだけでなく、多数。

通常の魔法陣である五芒星（ごぼうせい）という星型の絵を中央に、それを囲む  
二重の円の間に、追加で文字を書き込む。

その作業は目にも留まらぬほど素早く行われ、同じ魔法陣が少し  
下にずれて左右と、直線状にあたる間隔の空いた真下にそれぞれ作  
られる。

計四つ。

その、まるで十字架を連想させる配置を見て、ティファは軽く吐  
息。

そしてすぐに、次の作業に移った。

一番上の、最初に描いた魔法陣に右の掌を合わせて、呟く。

「……」冥界に、魔界に預けし我が神の器。魔の全てを統べる王の  
杖。汝のソレを、我が魔力を喰して現世に呼び寄せ」……」

それは、詠唱。

その詠唱を行いながら、右の掌を真下の魔法陣へと垂直にスライ  
ドしていく。

すると上下二つの魔法陣は光を宿し、同時に光のラインで魔法陣  
同士が繋がった。

次に、左の魔法陣に右の掌を合わせてスライドし、詠唱を続行する。

「……」呼ぶ名はゲオルギウス。龍を穿ち得た血で新たな姿を見出した汝に、更なる血を与えん事を契りとし、今ここに生まれ出<sup>いずる</sup>事を望もう”！」

言い、同時に掌が右の魔法陣に到達すると左右の魔法陣も光を宿し、光のラインで繋がる。

そうして出来る形は、まさに十字架だ。

その上部、柄のような部分を掴むように右手を握り、叫ぶ。

「契約者、ティファは欲しよう！　今こそ、魔術が何たるかを愚か者に身を以て思い知らせるが為に！！”！」

その詠唱を終えたのとほぼ同時、それがきた。

光のラインは粒子となって弾け、新たな姿を生む。

ソレは刀。鍔が無く、先端から刀身、柄の端まで黒一色の刀が、ティファの右手に握られていた。

「……あまり時間を掛けてしまって、私の姿をクレア達に見られるわけにもいかないのよね。だから、一気に終わらせるわよ……！」

言って、ティファは動いた。

黒刀を左手に持ち替えて本棚の裏から飛び出し、彼女を探していたACの名を持つ二人の下へと走る。

だが、到達するよりも早く、AC-03が気付き、迎撃体勢に入った。

そして彼女の正面、無空間から稲妻が、ティファ目掛けて走る。対するティファはその稲妻を、黒刀を薙ぐ事によって、掻き消し

た。

AC - 01は、その光景を見ていた。  
だからこそ、驚いた。

刀で魔術を斬る。そんな事が、目の前で起きたのだから。

「……追い詰めたと思ってたら、実は誘い込まれていましたなんて、冗談にも程があるぞ！」

叫びながら、AC - 01は走った。

このままでは、AC - 03が危険だからだ。  
だから、疾走する。

同時に、両の掌に魔法陣を展開させ、ティファを狙う。

「フォールライン」！」

言い放って出たそれは、掌の魔法陣から光の鞭が十本ほど出て来た。  
た。

それらはまっすぐに、様々な動きでティファの下へと辿り着く。  
当たった、とAC - 01は思った。

だが、それは糠喜びに終わる。

それは、ティファが全てを避け切ったからだ。

身体を僅かに捻らせ、仰け反らせ、低くさせ、避ける。

そうして全てを避けた後、地に着いた片足に力を込めて跳躍した。  
黒刀で光の鞭を断ち斬りながら、だ。

そして、迫る。

AC - 01に、避けるという行動を取らせる前に。

「……お前も結局は油断だな。冷静になっていれば、勝てたろうに……」

その、男口調の低い声が聞こえたのと同時、黒刀がAC - 01の胸元を穿った。

それにより肺が破れて出血し、彼の口から血が吹き出す。だが、そんな事などお構い無しに、彼は喋ろうとする。ゴホツゴホツ、と噎せながら、

「……しかた……ないだろ……AC……3が……あぶ……」

言いたかったその言葉は、途中で途切れて終わった。喉に、血が溜まったのだ。

するとティファは、黒刀を横に薙いだ。血が、噴き出す。

それを気にする事無く、彼女は黒刀を振って血を落とし、AC - 03を見る。

「シメはお前がやれ。元よりこれは、お前の戦いだか」

ティファの言葉が、止まる。

ただ一つ、驚きの表情を作りながら。

その視線の先に居るのは、AC - 03。

彼女は、頭に指を当てていた。

「全滅……とんだ茶番……」

表情は無。

その表情のまま、彼女は魔術を放つ。

自身の脳に、だ。

それによつて脳は崩壊し、ただの肉塊となつた身体は、無造作に本棚の下へと落下した。

それを見届けたティファは、崩れるように座り込む。

若干、疲労が見える顔を右手で覆い、溜息をつく。

「疲れたわぁー！ 黒刀を呼ぶだけで魔力使うつてのに、現世に定着させる為に常時魔力放出よ！？ 底無しの魔女でも、さすがに疲れるわよ。 矛盾？ 気にしないのっ！」

誰かと会話するティファは怒鳴るが、その声に疲れは感じ取れなかった。

それが、底無しの魔女という名の由来なのだろう。

その名は、今付けたばかりの名だろうが……

ともあれ、一戦を終えた彼女の左手からは、いつの間にか黒刀が消えていた。

#### 第四十八話：飼育する者、される者

「で、一体全体お前は何者なんだよ？」

船内の先端部、前方休憩室にあるベンチに座るカイは、向かい合うようにして置かれているベンチに座っている長い黒髪の少年に問い掛けていた。

その少年は指を絡ませながら、困ったような、何を言えばいいかわからないような表情をしていた。

見ず知らずの者に、お前は何者か？ と聞かれれば、当然の反応である。

それに気付いたカイは、微笑を漏らす。

「そうだな、自己紹介しなきゃな。俺はカイ・エディフィス。訳あって先生達と旅をしてるんだ。あ、先生ってのは、学校の先生の事だよ」

出来る限りの笑顔を作ったカイに、黒髪の少年は指を止めた。

そして、パツチリとした濁りの無い目でカイを見、ようやく口を開いた。

「……僕はゼクス……っていう、名前しか覚えていない……」

どこことなく、申し訳無さそうな声。

そして同時に、自分に自信が持てないような声だった。

そんなゼクスと名乗った少年に、カイは小首を傾げて問い掛ける。

「名前しか覚えていないって事は……記憶喪失なのかな？」



「そう……かもしれない……」

ゼクスはそう言っただけ、俯いてしまった。  
静寂。その状況にカイは内心、まいったなあって、と呟く。  
左腕のフラグメントという名の力を使えば、記憶は戻す事は出来るだろう。

だが、記憶が無くなったのがいつなのか、また記憶は本当に無くなっているのか、などの疑問と不安が、彼にはあった。

前回の、獣人の時のような傷は無い為、限度もわからない。  
けれど、このまま放っておくのも、良心が痛む。  
だからこそ彼は、思い切って思った事を言った。

「……何なら、俺達についてこないか？ 俺達はこれから、後二つは大陸を回る。その間に、記憶を取り戻せる切っ掛けがあるかもしれない。だから、一緒に来ないか？ 友達として」

言って、満面の笑みを見せた。

その言葉に、特に最後の友達という言葉に、ゼクスは顔を上げて目を見開いた。

驚きの隠せないような表情で。

そんな彼に、カイは笑みのまま頷く。

するとゼクスの表情は、見る見る内に綻びた。

「……いい、の……？」

「もちろんだ！ 男に二言はねえ、ってな！」

誇らしげに胸を張って言ったカイは、徐に右手を差し出す。  
おもむろ

それは握手の意。

対するゼクスはその手の意味に気付き、手を伸ばした。  
つと、その時、

「お前ら、動くな!!」

突然の男の声が、二人に制止の言葉をぶつけた。

「……酷い結果っちゃねえ、戦後のテクノスの無責任さは……」

呟くネプチューンは、そっと辺りを見渡した。

そこには崩れたり倒れたりしている本棚があり、その隙間からは子供の物と思われる手や足がはみ出している。

彼らは皆、既に息絶えている。

そしてネプチューンが最後に見る正面には、ただ一人立っている者が居た。

神父だ。彼は荒い呼吸をしながら、ネプチューンを見据えていた。片手に、極めて細く先端だけが鋭利な細剣レイピアを持ちながら、だ。

そんな彼は、何とか息を整えてから、口を開いた。

「……ど、どうやってこの四人」

「どうやってこの四人を一人で倒したのか、なんて言うべきじゃないぜよ？ それ言うだけで、アンタはただの雑魚に成り下がっちゃうんやから」

肩を竦めて溜息をつきながら言ったネプチューンは、その場に座

った。

そして、口元に笑みを浮かべながら、神父に問い掛ける。

「……アンタがあこわっばの小童達の”飼育係”かな？」

「！？ ”飼育係”を知ってるのですか！ ……つまり貴方は、戦争経験者であり、どちらかの軍の高い地位を与えられていた者なのですね……？」

驚き、嬉しそうに、神父は問い返す。

それは明らかに、”飼育係”という名に反応しての問いだ。

そんな彼に対し、ネプチューンは鼻で笑った。

「はっはん、情報に恵まれた商人に、戦争経験者であっても無くても関係無いっちゃ。……”飼育係”。幼児頃から強制的に、戦闘技術や殺人衝動の刷り込み、二重紋章の書き刻みなどをする事によって生まれた殺人兵器を統括、制御する者の名」

そして、

「この小童達は、科学者キース・ヨルムンガンドによって完成へと導かれた殺人兵器、— アサシンAssassin チルドレンChildren。略称・AC……で、あってるんね？」

「……はい、まさにその通り……否定はしません。ですが、そんな彼らはやつと幕を下ろす事が出来ました」

「やつと幕を？ ……小童達の死を、アンタは望んでたんかい？」

問われ、神父はゆっくりと頷く。

「生憎、貴方達は仕留める為に長年待っていたバビロニア皇国軍ではありませんでしたが、これもまた運命です」

「……バビロニア皇国軍に、ねえ。……なら、その望みの者の手で、

仕留めてやるっちゃ」

ネプチューンはそう言うなり、ポケットからある物を取り出した。それは、灰色の天然賢石だ。

彼はそれを両の掌で包み、目を瞑る。

「……久々だかなあ……腕が鈍ってなけりゃいいんが」

その呟きとほぼ同時。

ネプチューンの掌から光が漏れ始め、次の瞬間には離れた掌の間から、棒状の鋼が姿を現し始めた。

そのまま限界まで腕を伸ばして鋼の中程を掴むと、人一人分程の、一六〇センチはある槍となった。

その槍の先端の刃は、十字架の如く三方向に分かれており、刃はその鋭さを見せ付けるかのように半透明となっている。

その槍は、じゅうもんじそう十文字槍と瓜二つ。

ネプチューンはその十文字槍にスナップを利かせて身体の周りで回転させ、背の位置で止めた。

一方、その光景を見た神父は、驚きのあまり目を見開く。

「ま……まさか、その術……武装式魔術錬金……ですか……!?  
ですがそれは、バビロニアの」

言葉は、そこで途切れた。

言葉を生むべき喉は引き裂かれ、言葉を発するべき口は頭部と共に胴体から離れていた。

その切断を行った十文字槍は、既にネプチューンの腕の動きに合わせて、背の位置へと戻っている。

「死ぬ前だからって、余計な事は言わない方がいいっちゃ……アン

夕は、理想の死を迎えられたんから……」

その言葉のすぐ後に、神父の身体は無造作に倒れた。  
後はただ、細剣が床に落ちて金属音を鳴らしているだけだ。

数々の倒れた本棚の上に行く俺は、戦闘前にジードの本を読んで  
いた場所へと向かっていた。

……それにしても、ほとんどの本棚が倒れたり壊れたりしてるな。  
これじゃあもう、図書館としての機能は失われている、か。  
元から既に使われてないだろうが、

「やりすぎだ、お前」

「わ、私だけの仕業じゃないわよ！ ……たぶん……」

ティファは最後の一言だけ、自身の無さそうな声のトーンで言っ  
た。

そんな彼女を尻目に、俺は先程の戦闘を思い出していた。

殺人を、いや人の恐怖を食らう事が快樂だと言っていたティファ。

その時のティファは、ノアでの夜に戦闘があったあの時と、同じ  
だった。

だからこそ、問う。

……お前の、あの殺人衝動は何だったんだ？

『唐突ね。……癖よ。悪い癖。禁術を手に入れた時、私の全てを奪  
った魔神を封じたって言ったでしょ？ その時からずっと、殺しに  
繋がる行為で言葉遣いが、ね……』

俯き加減で言うティファは、どうやら殺しが好きってわけではな  
いらしい。

その事に、内心ホツとした。

もしかしたら、俺は殺しが好きなのかもしれない。

だからこそ、殺しが好きなのは俺だけでいい。俺だけで、充分だ

……

「……つくづく、訳のわからない事を言うな、俺は……」

『？ どういう意味？』

ティファの小首を傾げた問いに、何でも無い、と答えておき、最  
後の本棚から跳躍して一気に本があるはずの場所へと向かった。  
するとそこには、クレアの姿があった。

彼女は既に本を開いており、”シャマシュ”を光源に黙々と読み  
続けているようだ。

どれ程前から読んでいたのかはわからないが、本の右半分の厚み  
からして、読み始めてから少しは時間が経っているだろう。

その為、俺はクレアの正面に回って、本を覗き込む。

「……で、何かわかったか？」

「ええ、わかってしまったわ。何故かカイの腕の正体について、ね」

予想外の言葉に驚くが、話を聞き続ける事にする。

「まず気になったのはここよ。この、訳された言葉と元の文字」

言いながら、クレアが指で示す場所には、光る腕を持つ者の旅の  
内容が記されていた。

……確か、ティファが言うにはディン・ガードナーって名前の男  
が腕の力を持ってたんだよな。

ソイツの旅の内容で、時空の柱を蘇らせるところを、クレア是指で突いた。

「これは今、カイが行っているのと全く同じ旅よね？ でもここ、時空の柱の数が、四つって書いてあるんだけど……元の文字がここと無く引つかかるのよね」

「と、言うത്？ 訳を間違えてるって事か？」

「間違えているのかどうかはわからないけど、他のページを確かめたところ、この文字は三と訳すべきなの」

つまり、

「時空の柱は全部で三本なんだけど、訳……もしかしたらわざと間違えてあるかもしれないのよ」

確証は無いけどね、と付け足したクレアは吐息。

そして、話を続ける。

「でも、もしそうだとしたら、いくつか仮定が生まれるの。一つは元から三つで、ネプチューン達が洞窟で会った会ったっていうナンナという人物が一つ破壊されたってうそをついたかもしれないって事。一つは、本当に破壊されていて、またジードの時も破壊されていて、その結果が合計三つなのかもしれないって事。けれど、」

言葉の途中で深い溜息をついたクレアは、肩を竦めた。

「この本が真実を記す為の本だったら、元の文字は嘘をつけない。ましてや、時空の柱の数なんで重要な物はもつとね。だったら、優先されるのは前者。それでも、情報が足りない為に、何の答えも見えてこないのよね。嘘をつく理由とか……ま、どちらにせよ、後二つでカイの旅は終わる。そして、私が読んだのは、最後の柱を

蘇らせるところまで。で、次のページは初見なんだけど　　ッ!？」

次のページを捲った瞬間、クレアの表情が変わった。  
もちろん、俺の表情も変わる。

驚きの表情に。

「……光を宿す者、全ての時空の柱を蘇らせた数時間後、身体に異変あり。光を宿していた左腕は異形と化しており、本人に意識無し。だがしかし、共に旅をした者達を次々と殺したが為に、乱心と見做し抹殺。……一体、何があつたって言うんだ!？」

「でも、はつきりとしている事は、カイの旅を一時中止にしくちやいけないって事よね!？　今すぐ追いつかないと!」

その提案に、俺は一瞬迷う。

だが、元より目的は果たされた。

この世界、グラルスに置けるジードの情報の入手。

それは既に、果たされている。この王立図書館以上に、書物があるところは無いとネプチューンも言っていた。

それに……ティファ。お前はディン・ガードナーの暴走の真相を知ってたりするのか？

『知らない、わ。でも、これだけは言える。　　カイを止めた方がいい』

それだけ聞ければ、充分だ。

「クレア、急いでカイ達と合流するぞ!　ネプチューンを探してくれ!」

「ネプチューンなら今、こっちに向かって来ているわ。足音が、聞こえるから。　　ってそれよりも、カイ達に合流するって言ったっ



て、間に合うの!？」

「大丈夫だ。ここから海を北に渡った先、ミーン大陸があるだろう？  
そこに、手っ取り早い移動手段がある!」

言いながら、クレアが指をさした方向へと走り出す。

その後ろを、クレアは文句を言いながらついてくるが、すぐに声は止んだ。

これ以上、何を言っても無駄だとわかったんだろう。

その事に微笑し、ふと上を見る。

天井のガラスから見える空は、既に真っ暗だ。

……夜間の移動は、危険だろうか……

そう思いながら、俺は走り続けた。

少しでも早く、合流する為に。

## 第四十九話：レジスタンス、襲撃

動くな、という制止の言葉に、カイとゼクスの二人はその通りにした。

そんな状況で、動かない方がいい、とカイはゼクスにアイコンタクトでそう伝える。

だがそれでも、顔を動かして相手を確認する事は忘れない。

それは、シヴァから教わった事だ。

静止を余儀なくされた時、僅かに顔を動かして、相手の反応を見る。

その際、顔を見られたくない者ならそれ以上動くな、と言うだろうし、見られる事を気にしない者なら何も言わない。

そしてこの相手は、後者だった。

だからこそ、カイは相手を確認する。

場所は右側の通路。数は男が一人で、体勢は魔術の詠唱終えた後の構えなのであろう、左手の人差し指と中指がまっすぐにカイの方へと伸びていた。

「……魔術師かよぉ……」

相手、魔術師に聞こえぬように小声で項垂れ、ガックシと肩を落とす。

そんな彼を見たゼクスは、小首を傾げて問い掛けた。

その時の口は、腹話術を応用しているのか、全く動いていない。

「……どうしたんですか？　なんだか浮かない顔をして」

「ん？　……お！？　すげえ、腹話術みたいだな！　俺、そういうの全然出来ないんだよ。　む、んぐむむむっ！」

「嫌いぞ！　余り喋るな！！」

おふざけが過ぎたカイに怒りを覚えた魔術師は、怒鳴りながら二人に近付いた。

だが、次の瞬間、

「くかつ」

小さく、乾いた爆発音。

それは一発目で、男の喉に赤き薔薇を咲かせ、続く二発目で額にも咲かせた音。

やや送れて床に落ちて響く音は、金属音。

その金属音の音源を追うように、無造作に倒れた魔術師の鈍い音。その全ての音に驚いたカイは、即座にその方へと向く。

するとそこには、二人の男女の姿があった。

手前に居る、赤いロングコートを羽織っている男は白の短髪で、コートの間からは迷彩柄の服が見える。

また、胸元にはドッグタグが掛けられており、左手には先端から僅かに煙を出した長細い鉄が握られている。彼は、笑っていた。

その一歩後ろに立っているのは、侍女服姿の白髪の女性だ。

カイの記憶の中に、見覚えのある女性。

「あー！ た、確か……ヘル？ そうだ、ヘルだ！！」

「覚えていていただき、ありがとうございます。つまり私が、記憶に残る程の強者であったのだからと、判断します」

言って、スカートの裾を掴んで会釈。

その後にながった顔は、相変わらず無表情だった。

一方、無表情な彼女を見た白髪の男は、呆れたような苦笑を漏らす。

「挨拶してる場合じゃないだろ……ただでさえ、訳のわからない奴

らがこの船を襲ってるんだからよ」

「たった今、それに関する情報が入りました。勢力名は反皇国軍組織”レジスタンス”。該当する編入部隊種は魔術師、または魔術を扱える暗殺者です。数は不明。しかし、確実に船内を制圧しており、反抗する者は容赦無く殺害」

また、

「総員が、何かを搜索中の模様。どちらにせよ、船内全域の制圧完了は時間の問題であり、仕事に支障がきたされると判断します。以上、大型食堂エリアに設置しておいたカメラからの中継を、お伝えいたしました」

言い終えたヘルは軽く会釈し、白髪の男は満足そうに頷いた。

そして、カイの方へと視線を移す。

同時に、左手に持った鉄を向けて、だ。

「コレ、初めて見たか？ コレは拳銃って言うんだ。さて、それじゃあ死んでもらうか。標的が二人共揃ってんだしな」

冷酷な表情で、白髪の男は言う。

そして、引き金に掛かっている人差し指に力が入り、

「ッ！ マスター、六時の方向！！」

刹那、ヘルが警告したそれが来た。

炎の塊が六時の方向、二人の後方から足元に向かって、それぞれ飛んで来たのだ。

二人はそれを、前への跳躍で回避する。

すると、炎の塊は床に激突して燃え上がり、それに反応して天井のスプリンクラーが作動した。

それによって、水が雨のように降り始め、二人を濡らす。

「……マスター、標的は既に逃走した模様です」

告げるヘルに、白髪の男は水で濡れたロングコートを、嫌そうな表情で見ながら言う。

「全く……邪魔者つてのは本当に邪魔だな。潰すか」

刹那、二人は動いた。

身を翻した後に低くし、大股の左足を初步に大きく前へと出たフエンリルは、スプリングラーの雨の中を駆け抜けて、一気に新手の魔術師の下へと向かった。

距離は大体で四メートル。

……いい距離だ。

内心でそう呟く彼は、腰のホルスターからもう一丁の拳銃を抜き、両の拳銃を前へと突き出す。

だが、その視線の先には既に、動きがあった。

魔術師は詠唱を終えていたらしく、フエンリルが拳銃を突き出したのとはほぼ同時に、炎の塊が放たれた。

「チツ、面倒くせえ」

舌打ちをしたフエンリルはそう言い、身を起こす。  
だがそれも一瞬。

次の瞬間には伸ばしきった右足を前に、同じく前に出した左足は

くの字に曲げ、同時に左へと捻った身を横にして床に落とした。

そうして、彼は水で濡れた廊下をスライディングし、紙一重で炎の塊を回避した。

そしてその体勢のまま、前方に見える魔術師に向かって両の拳銃を再度向け、引き金を引く。

その瞬間に撃鉄が内部にある薬莢の後部、雷管に衝撃を与え、そして爆発が起きる。

それによって薬莢の先端に詰められている魔力の塊で出来た銃弾が放出され、銃身の中を走って射出される。

同時、拳銃の上部の遊低が前後し、撃鉄は起こされ排莢口から、空になった薬莢が飛び出した。

一方、射出された銃弾はまっすぐに軌道上を走り、魔術師の額を穿った。

その全てが、数瞬の出来事だ。

後に残るのは、倒れる魔術師と一度だけ金属音を立てて消える薬莢だけ。

だが、フェンリルはまだ止まらない。

前方にはまだ、増援が来ていたからだ。

数は二人。その為彼は、くの字に曲げていた左足を立てる事によって傾いていた身をまっすぐにし、次に右足を曲げると同時にスライディングの勢いを利用して身を起こした。

そして右足に力を込め、高く跳躍する。

対する魔術師は、そんな彼を目で追うが、次の瞬間には銃弾を数発撃ち込まれ、倒れた。

フェンリルはその魔術師の上に着地し、勢いを殺さずに疾走。

「な、何だコイツ!?」

残り一人の魔術師に魔術を使わせるよりも早く懐に入り込み、横へと蹴り飛ばすと同時に銃弾を撃ち込む。

そしてその場でしゃがみ込み、銃把グリップの少し上にあるマガジンキヤツチと呼ばれるボタンを押しながら、腕を前から後ろ、下から上に振った。

すると銃把の下部から弾倉が抜け、宙を舞う。

それに対する動きを取るかのように、ヘルが走り出し、掌に展開した穴から新たな弾倉を出して握る。

そして、投げた。

「自動人形の投擲は、正確且つ高速です」

ヘルのその言葉通り、弾倉は素早くまっすぐ飛び、フェンリルが持つ拳銃の銃把の下部に入った。

再装填リロード。

その結果をもって、更にヘルは動く。

「失礼します」

言葉と共に、ヘルはフェンリルを踏み台にし、跳躍した。

その際、宙を舞っている弾倉を掌の穴に収めて、だ。

次にその両手は、新たな銃把を掴む。

それは、フェンリルの脇のホルスターに収められていたT字型の短機関銃サブマシンガン”イングラム”だ。

その動作は、フェンリルが拳銃の再装填を終えた瞬間に腰のホルスターに収め、次に脇のホルスターからそのイングラムを抜いて前に投げた事による結果だった。

これによりイングラムを手に取ったヘルは、フェンリルの前方に着地し、両手のイングラムを、両腕を垂直に上げて前に向けた。

彼女の視線の先、そこには再度の増援。

数は六、いやそれ以上は確実に居るだろう。

中には、剣を持った者も確認できる。

そんな彼女に向けたイングラムの引き金を、ヘルは無表情で引く。瞬間、イングラムの上部の遊低は短く高速で前後し、大量の銃弾と薬莢がばら撒かれ、全弾撃ち尽くした。その数、三十二発。

また、射出された銃弾は軌道上を多数で走り、増援が次々と倒れ、そして道は開かれる。

ヘルはその光景に満足したのか、後ろに居るフェンリルの方へと振り向いた。

「今の連携は、完璧だったと判断しますが、よろしかったですか？」  
「ああバッチリだったなよくやった」

「……マスター、棒読みは人を不快にさせます。それは感情を持った自動人形であっても同じ事。こういう時、マスターに対して言うべき言葉は、  
はあ？ 人としてどうかと思うしいゝ、さいてえゝ、死ねばいいのに。むしろ死ね」

口調には目一杯の悪態を込め、されど無表情でヘルは言った。  
そんな彼女に、フェンリルは苦笑を返す。

「お前なあ……どこでその喋り方を覚えたよ？」  
「ジードにて、最近の十代後半女性の喋り方、口調を意のままに扱う事が出来るとキャッチコピーに書かれていた言語サポートソフト、ギヤル言語集」スペシャルエディション シーズン2」を購入し、インストールしました。そしてそのマニュアルに沿って、喋らせていただきました」

「また糞ソフトか……どうせ、購入者はお前だけだろうに」  
「ヤー、マイマスター」

ならすぐ消せ、と言うフェンリルは、ヘルが投げ渡してきたイングラムを受け取り、脇のホルスターに収めた。

そして腰のホルスターから拳銃を二丁抜き、走る。



その後を追うようにして、ヘルも走り出した。

「マスター、標的の居場所がわかるのですか？」

「わかるわけないだろ。だが、これ程の騒動だ。レジスタンスを始末しながら、船内を隅々まで行く。その間に別の戦闘が、そう別の戦闘があれば、それがカイだろう　なっ！！」

曲がり角、その先から来る足音の主に先制を仕掛ける為、最後の一言に力を込めつつ、左足で軽く右にステップし、それを軸に右足で蹴りを放つ。

すると飛び出してきたレジスタンスの魔術師の腹部に直撃し、吹き飛んだ。

そんな彼に追い討ちをかけるように、フェンリルは銃弾を打ち込む。

直撃したのは頭部、額。それは、即死を意味する。

それを知っているフェンリルは、その魔術師を見る事無く、一気に走った。

彼らは既に、Aブロックを突破していた。

## 第五十話：混乱の中の疾走

数多の声が、船内に響く。

悲鳴、怒声、断末魔。

そしてそれらに合わせて聞こえる、生々しい声。

そんな音が聞こえる廊下を、流れるように逃げる乗客とは逆の方向に走る者達が居た。

カイとゼクスだ。

彼らは、次々と向かってくる乗客の間を走り抜けながら、現在Bブロックを通過中だ。

向かうのは、自分達の客室。

その客室は既に、目の前の角を曲がるだけとなっている。だが、勢いよく角を曲がった刹那、

「うおお！？」

「なっ！！！」

カイはレジスタンスの魔術師と鉢合わせし、両者が声を上げた。その瞬間、カイは反射的に相手の胸部へと掌底を叩き込んだ。

左足で床を蹴り、右足で身を支えながら、左の掌で、だ。

すると魔術師は、衝撃で少し飛び、床に倒れて気絶した。

カイはその魔術師の横を通り、更に走る。

そして、見えた自分の客室に駆け込んだ。

「シルク！……あれ？」

急いで入ったその客室内には、誰も居なかった。

荷物さえも、そこには無い。

「移動した……のかな」

呟くカイには、皆の行った場所などわからない。

だからと言って、この騒動の中を、何の当ても無く闇雲に駆け抜けるわけにもいかない。

ゼクスが共に居るのもそうだが、何よりヘルとその仲間に出会うけにもいかない。

手詰まりだ。

だが不意にゼクスが、あつ、という声を上げた。

「カイ、ベッドの上に紙が、見え難いけど確かに紙があります！」

「……あ。しまった見逃した！」

言葉通り、しまったというような表情をしたカイは、全速力でベッドへと走り、シーツの上を見た。

そこには、確かに紙がある。

シーツと全く同じ色の白であり、簡単なカムフラージュとして皺しわが作られた紙が、だ。

カイはそれを手に取り、紙の裏を見る。

そこには走り書きで”後部、艦橋エリアにて待つ、急げ”と、あった。

……あれ？ これって結局、駆け抜ける事になるんじゃないか……

内心でそう呟くカイは溜息をつき、紙を捨ててゼクスの方を向く。

そして、苦笑し、

「ごめん、突っ切るしか方法が無くなった……」

「あ、僕は大丈夫ですよ？ 走るの得意ですし」

「ならいいんだけど……それじゃ、ついてきてっ……！」

言った瞬間、カイは走り出した。

ゼクスの横を抜け、そのまま客室を飛び出し、一気に駆けける。

目指すのは、船内構図で見た、後部にある関係者以外立ち入り禁

止とあつた艦橋エリア。

シヴァやシルク、ミーナが待っているであろう場所。  
その場所に向け、カイは武器である諸刃の剣を組み立て、行く。

「はあ……！」

力のこもつたその声と同時に振るつた長剣の一撃は、レジスタンスの魔術師を二人纏めて斬つた。

そして、長剣を振って血を落とした彼女、シヴァは軽く吐息した。  
それは、自分を落着かせる行為だ。

「キリが無いな……」

呟くシヴァは思う。

カイはメッセージに気付いただろうか、と。

村に居た頃、カイにした特訓の中には、有事の際に止むを得ず集合地点から移動する場合、メッセージを辺りの地形や環境に合わせ  
てわかりにくいように残しておけ、というものがあつた。

彼女はそれを使ってメッセージを残した為、気付いていればここ、  
艦橋エリア前の通路をカイは通る。

だからこそ彼女は、その手前の狭い通路でレジスタンスを迎え撃

っていた。

大人が二人程しか並べない横幅の通路は、しかし天井が高い為に長剣を振り下ろしやすい。

そのかわり、横に振るう際には細心の注意が必要の為、戦闘は中途半端となってしまう。

しかし今、通路の床には十数人のレジスタンスが血に染まって倒れている。

全ては、シヴァが切り倒した者達。

そんな彼らを見据えるシヴァは、不意に口を開く。

「……こやつらは、何が目的で襲撃を……」

シヴァはその思考の中で、カイの力が目的なのではないかと思う。その上、ネリンに居た時に駅員が言っていた、テロ行為の多発という情報がその考えを後押ししてしまっている。

しかし、だからと言ってカイの下に向かう為にこの持ち場を離れる訳にはいかない。

唯一、彼女が制圧から取り返したエリアなのだから。

それに、

「そう簡単に死なないように訓練したのだから、心配はいらんだろ  
う……」

微笑交じりに呟いたシヴァは、背後から聞こえる足音に気付き、素早く振り向く。

するとそこには、奥から走ってくる、この客船の船員の男二人の姿があった。

彼らは急ぎ、息を切らしながら彼女の前で立ち止まる。

「来たか。中の状況はどうだ？」

「げ、現在、船内のほぼ全域が制圧状態……！ 戦闘の出来る船員は、孤立しながらも交戦していましたが……次々と来るレジスタン

スの増援により、全滅です！！」

そして、

「レジスタンスは、捕らえた民間人を邪魔と見なして殺害！ これ以上の生存者確保は不可能かと……」

「そうか……外はどうだ？」

「外は既にレジスタンスの船が接近中で、本船は行動不可。脱出用の高速艇は何とか出せますが……追撃があつた場合、振り切れるかどうかわかりません。なお、キエンジのバビロニア皇国軍に救援を求めようとはしましたが、魔力による伝達妨害が出ているのか、通信機器が使用できません！」

それは、極めて危険な状態を意味していた。

高速艇は艦橋エリアの通路から奥へと行った先のドッグにあり、カイの到着に合わせて、艦橋で待機している生存者達と共に乗り込む事になっている。

だが、それよりも早くレジスタンスの増援がここを攻めて来れば、間違い無く全滅だろう。

それに、脱出に成功したとしても、追撃を振り切る事が出来るかもわからない。

けれど、迷っている暇がないのも事実。  
だからシヴァは決心し、指示を出す。

「……生存者を、高速艇に誘導しろ。そろそろ大群が侵入してくるだろうからな」

「せんっせーい！！ 間に合ったぜー！！！！」

突然聞こえたのは、威勢のいい声。

それは一般エリアからの出入口からであり、声の主は、  
「カイ！ 間に合ったか！！ ……そっちの者は？」

「ん？ ああ、ゼクスってんだ。新しい仲間だよ！」

「よ、よろしく願いします！」

素早く一礼したゼクスに、こちらこそよろしくな、と言って微笑したシヴァは、すぐに真剣な表情になってカイを見る。

「今から生存者と共に脱出する。カイは負傷者の手助けを頼む」

「りょーかいっ！ 行くぞ、ゼクス！」

「あ、はい！」

その掛け声と共に、カイとゼクスは艦橋エリアへと生存者の手助けに、シヴァと船員の二人はこのエリアと一般エリアとの出入口を閉める為に、それぞれ走り出した。

天井が高く、そして広いドッグに、数多くの声が木霊する。

それらの声は、ドッグの中央に敷かれたレールの上に設置されている、縦に長く巨大な脱出用の高速艇に乗り込もうとしている者達のものだ。

老若男女問わず居る彼らの数は、二十六人程。

二十六人も、では無く二十六人しか、居ない。

そんな中、周りの声よりも一際大きな声が響いた。

「シルク！ 通路の防火壁をいくつか閉めてきたからもう少し時間を稼げるぞ！ その間、早めに誘導を終わらせてくれ！」

それは、ドッグの出入口から入って来たシヴァの声だ。

対するシルクは、開いたばかりの高速艇のゲートに生存者達を誘導しつつ、シヴァに向けて左手の親指を立てた。

それを見て頷いたシヴァは、走って高速艇の先端まで行き、甲板に飛び乗った。

ちなみにこの高速艇は、底が深い造りとなっていて、故に甲板上は一面平らだ。

その為に後部から乗り込む際は、平らな甲板の一部がゲートとして上部に展開するようになっていた。

そしてそれは、先端の操縦室も同じだ。

シヴァはそれを知っているが為に、甲板の先端に飛び乗ったのだ。また彼女は、床の小さなパネルに隠れたスイッチを押して、操縦室へのゲートを展開させる。

そこから中に入り込み、操縦室内を見渡した。

内部は非常に狭く、三人程の大人がやっと入れるくらいだ。

数多くの制御装置やパラメーターがある為、仕方の無い事だろう。そして前方側には、いくつものレバーやスイッチと、横長のハンドルを操作する事が出来る操縦席があり、そこから外を覗ける長方形の窓がある。

シヴァは急ぎでその操縦席に座り、慣れた手つきでスイッチやレバーを操作する。

それとほぼ同時、後方のドアが開き、先程の船員が二人、入って来た。

「シヴァさん！ 生存者全員、乗り込みました！ ちゃんと、シートベルトも締めさせてあります！！」

「ならば、お前達も早く座れ。すぐに出るぞ」

「あの……操縦経験は？」

「もちろんある！」



答えた後、ゲートが開いたのを確認して、シヴァはスピードレバーを全開まで倒した。

刹那、高速艇はレールの上を火花を散らしながら走り、船外へと飛び出した。

## 第五十話：混乱の中の疾走（後書き）

どもーIzumoです。

今回も、読んでいただきありがとうございます！

さて、ここで皆様にお伝えしたい事がございます。

この度、同時連載している「いつもの空＋時々雨」ですが、今年開催されるスクエアエニックスの小説大賞に挑戦する為に、二週間後に公開停止させていただきます。

また、その準備の為に本作の更新ペースも落ちる可能性があります。またことに勝手ながら、ご理解と共に、よろしければ密かに応援していただければ幸いです。

それでは、長々と失礼しました。

## 第五十一話：スピードレース

突然、客船の後部から飛び出した影がある。  
高速艇だ。

それは海に大きな波紋を作って海面に浮き、次の瞬間には船体の周囲に波を作りながら海面を走り出した。

その、突然の出来事に、客船を取り囲んでいた船に乗るレジスタンスは、行動が遅れた。

甲板に居る者達は、隊長と思わしき者から怒声を浴びせられながら、次々と自分達の船に戻って行く。

そんな光景がほとんどの船で見られる中、高速艇は猛スピードで客船を離れて行く。

だがその時、高速艇に向かって、一つの炎の塊が飛んだ。

レジスタンスによる、追撃の魔術。

それは真っ直ぐに高速艇の方へと飛ぶが、しかし逸れて海に落ちた。

灼熱の炎が海面を、音を立てながら蒸発させ、水蒸気が上がる。

同時、海面に揺れが起き、高速艇が揺れた。

その船内の後部、シートが大量に並んでいる場所の通路で、カイは立ち上がって揺れを楽しんでいた。

「おわあ！ す、すげえ！」

「あ、こらかイ！ ちゃんと座ってないと駄目じゃん！」

シルクの注意も空しく、次の揺れが来て、またしてもカイはバランスを保ちつつ、揺れを楽しんでいた。

そんな彼を見て溜息をつく彼女とは逆に、隣に座っているミーナは満面の笑みだ。

一方、高速艇を操縦するシヴァは、僅かな視界を頼りに操縦して

いる為、悪戦苦闘している。

時折、高速艇を飛び越えて正面の海面に落ちる炎の塊を見て舌打ちしつつ、素早くハンドルを切って避ける。

速度は、優に八十キロを超えているが、それでも船体に負担が掛かっていないのは、魔術加工されているおかげだろう。

元々、高速艇は有事の際に、要人を安全に脱出させるのが目的であり、故に頑丈なのだ。

また、旧式ではあるが、魔術障壁展開装置も積まれ、起動している為に安全である。

しかし、シヴァは内心に不安を抱いていた。

いくら頑丈であるとはいえ長くはもつまい、と。

彼女が見る、左前方に設置されたモニターには、後方の映像が映し出されている。

レジスタンスの船が十隻程、甲板から無数の魔術を飛来させながら追って来ていた。

相手の速度は、遅くも無く早くも無く、といった状態だ。

それを確認したシヴァは、すぐに視線を前へと戻す。

少しでも手元が狂ったら大惨事となってしまう為、仕方の無い事だ。

だからこそ、彼女は操縦に集中する。

要は、当たらなければいいのだ。

刹那、

「シ、シヴァさん！ 魔術障壁展開装置の限界値が、五十パーセントを超えました！ このままだと、装置がオーバーヒートして、魔術障壁が消滅してしまいます！」

「少しぐらい、持ちこた …… 全く、次から次へと問題が……！」

苛立ちを覚えたシヴァの視線の先、僅かに大きな影が見える。

次第にはつきりと見えるようになってきたそれは、多数の軍艦が横一列になり、また後方にもう一列並んだ事によって構成された艦

隊だ。

しかもその列は、異常に長い。

「あれは……バビロニア皇国軍の艦隊ですよ！」

「らしいな。しかし……来るぞ！」

刹那、バビロニア皇国軍の艦隊から、無数の光が放出された。

突然の出来事に、シヴァはとっさの動きでハンドルを素早く操作し、回避運動を取った。

その判断は適切だったのか、大半の光は高速艇を逸れて後方、レジスタンスの船に直撃する。

するとレジスタンスの船は破砕音と共に砕け、海の藻屑となった。飛来して来たのは、光の矢。

そしてそれは、高速艇への直撃コースだった。

「ど、どうしてバビロニア皇国軍が私達に攻撃を！？」

「そんな事はどうでもいい。とにかく、この場を切り抜ける事だけを考える。それよりも、無駄なエネルギーを全て動力源に回せ！艦隊の間を抜ける為の出力が欲しい！」

「え！？　む、無茶言わないで下さい！　艦隊に突っ込むなんて、正気の沙汰じゃありませんよ！」

船員がそう反論している間にも、高速艇はバビロニア皇国軍の艦隊に近付いて行く。

速度は落ちない。

同じく、光の矢も止まない。

「……どうやら、あちら側には敵味方の認識が出来ていないらしい。どちらも高速であるが故に、だろっな。ならば、生き残る可能性に賭けてみるのも悪くは無いだろっ？」

振り向かず、後ろ姿で問うシヴァに、船員の一人は考えた。だが、すぐに答えが出たのか、上部のスイッチを数個、押した。すると、高速艇は突然にして速度を上げた。

バビロニア皇国軍との距離が、見る見るうちに迫る。

「シ、シヴァ！ 電気がいきなり暗くな うおお！！」

慌てた表情で入って来たカイを無視し、シヴァは視覚に集中した。狙うは、軍艦と軍艦の間にある、高速艇一隻分の隙間。

それは、速度故に一瞬のズレも許されない行為。

果たして高速艇は、軍艦に触れる事無く間に入った。

幸い、バビロニア皇国軍にとって、軍艦と軍艦の間を抜けられるというのは想定外だったらしく、まだ光の矢は来ない。

しかし、まだ油断は出来ない状態だ。

二列目は、軍艦の位置が一目より半分ほどズレている為、直進で抜ける事が出来ないのだ。

「シヴァシヴァシヴァッ！ ぶつかるぶつかるぶつかってえええ！」

「煩い、分かっている！ 少しは黙っている！！」

「はい、すみませんでした」

カイを黙らせたシヴァの手には、僅かに汗が滲んでいる。

正面は、言うならば丁路地。

その手前に差し掛かった瞬間、彼女はハンドルを左に目一杯切った。

それに合わせて、船体に向きを変え、滑りながら水飛沫を上げて左を向く。

だがしかし、海面を滑る船にとって、急旋回による即座の直進は不可能だ。

故に、船体の右舷後部が軍艦に直撃した。

「少しの衝撃ぐらい、耐えてみせろ！！」

吼えるシヴァは、瞬時にハンドルを、今度は右に切る。

それにより、左舷前面が軍艦に直撃した。

が、船体には大きな破損は無い。

頑丈さ故の結果だ。

しかし、僅かに軋みの音が聞こえる事に彼女は不安を感じながらも、目前に港が見えてきた事に安堵し、スピードレバーを逆方向に倒し、スクリューを逆回転させて速度を落とした。

その後、彼女は操縦を船員の一人に任せて立ち上がり、操縦室を出て後部に居る生存者達の前に立った。

「皆、よく耐えたな。ようやく目的地、キエングに到着だ」

その言葉に船内には、歓喜の音が響き渡った。

港に到着した高速艇は、後部を棧橋に寄せてハッチを展開した。その中からは、生存者達がぞろぞろと出て来、最後にはカイ達が出て来た。

カイとシルク、ミーナは揃って手を大きく上げて背伸びし、青空を掻いた。

そんな三人を見て微笑を漏らすシヴァは腕を組み、隣に居るゼクスを見据えた。

そして、問う。

「それで、お前の目的地はここなのか？」

「あ、いえ、実は……僕、なんであの船に乗っていたのか分からないんです」

その言葉に、シヴァが眉を寄せる。

なんと云えばいいのか、と考え、自然と言葉が生まれる。

「……記憶喪失、というものか」

言葉に出しながら、シヴァは内心で、また記憶喪失か、と呟いた。ユウも最初は記憶喪失だったなと思い、ゼクスも他世界、ジードの人間なのか？とも思う。

だが、その事は後で触れようと決め、次の問いに移ろうとしたその時だ。

前方に居る生存者達が、急にざわめき出した。

そして次の瞬間には、生存者達を掻き分け、十人程の兵士が二列になってカイ達の前に立ちはだった。

かなり派手な装飾の付いた鎧に顔を覆い隠すメット、そして腰に二本の剣と一本の宝剣を添えた兵装からして、バビロニア皇国軍の



親衛隊クラスの者達だ。

彼らは一度足踏みし、二列になっている間を開けて道を作った。その間を通って新たに現れたのは、白を基礎とした上に金のラインが入った派手な服を着ている、小太りの男だ。歩みが僅かにフラついている。

だが、カイの前まで行くと背筋をしっかりと伸ばし、不気味な笑みの表情を作った。

「長旅、お疲れ様です。私はここシユメール大陸の首都・キエンギを統治している、バビロニア皇国軍將軍のドライゼン・セグライでございます」

その自己紹介に答える様に、シヴァはカイの横に並んだ。

「私はシヴァ。まあ、代表の様な者だ。して、そのような偉い方が、何故にわざわざこんな所に？」

「簡単な話ですよ。ここに居る、貴女を含めた全員に、レジスタンスの者であるかもしれないという疑いが掛けられました。ですので……おとなしく連行されていただけませんか？」

疑いという言葉にシヴァは、当然の事だろうな、と思う。

さて、この状況をどうしようか、とも。

しかし、彼女は隣りを見た。

そこに居るミーナは、彼女の視線に気付くなり、笑顔を見せた。

それは、私は捕まっても平気だよ、という意味か、それとも、戦闘になっても平気だよ、という意味か。

シヴァがその笑顔を見て捉えた意味は、

「いいだろう。どうせ、レジスタンスでは無いのだから、逃げる必要も無い」

前者だった。

そして、その言葉を聞いたドライゼンは身体を後方へと翻して、歩き出した。

またしても、フラついた足取りで。

その後ろを、兵士に囲まれながら、その場に居た者達が追い、歩き出す。

無言のまま、何の反論もせずについていくのは、相手がバビロニア皇国軍だからだろうか。

だがしかし、彼らの目には怯えが無い。

それはこの後、何が起こるか分からない状況では、幸いな事なのだろう。

ともあれ、彼らは歩き続ける。

首都であり、賑やかな街とも呼ばれるキエングの、人影一つ見えない街中を。

## 第五十一話：スピードレース（後書き）

おはこんばんちわ。

どもーIzumooです。

お久しぶりです、連載スタートです。

やっと何かもの問題を終え、再開する事が出来ました。  
それでは、これからもよろしく願いします！

## 第五十二話：舞う脱走者達

薄暗い部屋がある。

窓には鉄格子がはめられ、出入口にも大きな鉄格子がある。

石で出来た部屋、牢屋だ。

そこは非常に殺風景であり、あるのは鉄部分が錆びていてマットがボロボロのベッドと便器、洗面台だけ。

その、ボロボロのベッドの上では、ミーナが静かな寝息を立てて眠っている。

また、そのベッドに背を当てて、カイとシルク、そしてシヴァが座っていた。

彼らは今、最終決定が下るまで、牢屋に入っていなければならぬ。

理由は、数時間前に連行された際、一人ひとりに行われた事情徴収にて、先導した者がカイ達であると分かり、また武器を持っていた為に不審の対象となってしまう、別室に誘導された。

その際に、彼らはバビロニア皇国軍によって指名手配されていると告げられ、詳しく説明する準備と、今回の件に関しての最終決定待ちを牢屋でする事になったのだ。

「……俺達、指名手配犯なのかあ。やっぱり、村を襲撃した皇国軍がそうさせたのかなあ……」

溜息交じりに言ったカイは、膝を抱えて項垂れる。

そんな彼を見て、あははっと笑うシルクは、彼の背をバンバンと叩いた。

「落ち込まない落ち込まない！ 悪い結果を知らされない事を祈ってようよっ！」

「その通りだ。さすがシルク、ポジティブだな。そんな事、私の不安よりも遥かに軽いものだ。ところでカイ、頼みがあるのだが」

言いながら、シヴァは立ち上がり、眠っているミーナを見た。

そして彼女に近付き、起こさない様に両手でそつと抱き上げ、ベッドを見る。

「すまんがこのベッド、綺麗にしてもらえないか？ 鉄の脚までもが錆びてしまっていていつ折れるか分からん。出来れば昔の姿に戻して欲しいのだ」

「ん？ シヴァの不安って、もしかしてこれ……？」

問うが、完全に無視されたカイは肩を竦めた後、マットと鉄部分に左手を当てる。

するとその左手が光を放ち、フラグメントへと形を変えた。

彼がその力を使うと、ベッドは見る見る内に綺麗になっていき、鉄部分の錆びも消えていった。

それを見て、ありがとぅと例を言ったシヴァは、ゆっくりとミーナをベッドの上に戻す。

「……そういえば、あのゼクスとかいう名の少年、大丈夫だろうか」  
「え？ それって、どういう意味？」

ミーナの髪を一度撫でた後、腰を下ろしながら言ったシヴァに、シルクが問い掛けた。

「あの子は一乗客なんだから、今頃は助かった人達と一緒に部屋に居るんじゃない？」

「いや、彼は記憶喪失らしくてな。身分が証明出来ないかもしれないのだ。その場合、彼にも疑いが掛けられるかもしれない……」

「そ、それってヤバイんじゃない!?」

シヴァは考える。

どうすればいいのか、と。

そして同時に、最近私は考えてばかりだなっとも思った。

実は私は、教師よりも評論家に向いているのか……!

一瞬、そんな事を思ったが、すぐに止めた。

「……カイ、ここを出るか」

「さっすがシヴァ! そう言うと思ってたよ!」

彼女の言葉に、歓声を上げたカイは急いで立ち上がり、出入口の鉄格子へと向かった。

と、その時だ。

不意に通路側から、足音が響いてきた。

それは少しずつ大きくなっていく事から、近付いて来ているのだ。その音に警戒するシヴァは、優しくミーナを起こしてシルクの横に座らせ、ベッドの下部にある鉄部分の長い部分を掴み、両端を力尽くで押し折った。

彼女はそれを武器にし、背の後ろに隠す様にして、壁側へと向かった。

そうしている間にも、足音は近付いて、

「皆さん、無事でしたか!？」

「ぜ、ゼクス! 何でこんな所に来たんだよ!？」

「そんな事はどうでもいいんです。それよりも、早くここを出ましよう! そうしないと皆さん、殺されてしまいます!」

ゼクスの言葉に、牢屋の中に居る全員が驚いた。

「こっさり抜け出した時に、たまたまドライゼンって人の会話が聞

こえて、皆さんを処刑せよ……！ だから、だから早く」

「慌てるな、少年。元々、私達はここを出ようとしていたのだ。…

…カイ、頼む」

「あいあいさー！」

威勢のいい声と共に、カイは左腕のフラグメントを発動させ、鉄格子に触れる。

すると、鉄格子はあっという間に錆びていき、引っ張ると簡単に折れた。

彼はそれを見て頷き、次々と折っていく。

そして、充分な大きさの出口が出来る、シヴァの方へと振り向いた。

「さ、早く脱出しようぜっ！」

「さっすがカイ！ てっぎわっがいい」

満面の笑みを見せるシルクは、ミーナと共に牢屋を出て、カイもそれに続いた。

そして最後に出た、鉄棒を持ったシヴァは、ゼクスを見た。

彼は、カイの力を見たからか、啞然としている。

そんな彼の肩を、彼女は力強く叩いた。

「少年、外に出たければお前も来い。とりあえずは、捕まらない事を最優先だ」

「は、はい！ わかりました！」

よし、と頷いたシヴァは、カイ達の後を追う様にして走った。その途中、牢屋が並ぶこの場所への入口にある監守室に目をやった。

だがそこには、普段居るべき監守の姿が見えなかった。

偶然、席を外しているのか？　と思っただ、しかしここは首都だ。その上、つい先程捕らえたのだ、すぐに警備を緩める訳も無いだろう。

ともあれ、とシヴァは思う。

安全にここを出られるだけでも良しとしよう、と。

向かうは外。

そして出来れば、途中で武器を取り返せる事を祈って、皆と共に走った。

通路はまるで、宮殿の様だった。

派手で高価そうな物、金や銀などで作られた装飾品などの飾り物が、所狭しと壁際に敷き詰められる様に飾られている。

そんな通路を、五人の者達が走っていた。

シヴァが先陣を切る形で、ただっ広い屋敷の中を走り続けている。警報が鳴り響いている通路を、だ。

「カイ、後方は任せたぞ！　武器を持たぬ三人を、守りきって見せる！」

「まかせとけい！　先生！」

右手の親指をグツと立てたカイは、横から飛び出して来た兵士に驚きつつ、交戦を開始した。

同時、シヴァの前方からも、兵士が数人、走って来る。

数は四人。

武器は先頭に槍持ちが二と、後方に剣持ちが二。

行けるな、と彼女は内心で呟き、口元に僅かな笑みを作った。



そして、行く。

初撃を仕掛けて来たのは、先頭の槍持ちの一人。

一直線に、シヴァを狙って突きを放つ。

彼女はそれを紙一重で横に回避し、兵士の顔面に鉄棒を持っていない右手で拳を打ち込む。

それによって、兵士は軽々と吹き飛んで壁に直撃した。

高価な壺の破砕音が響く。

しかし彼女は、そんな事などお構い無しに、次の行動に出る。吹っ飛ばした兵士が持っていた槍に右手を伸ばしたのだ。

するとその槍は、風が起きるのと同時に、彼女の手元に行く。

今、彼女が持っている武器は、鉄棒と槍。

それをしっかりと掴み、身体に回転を掛けながら振るう。

まず当たるは、左手の鉄棒。

それは勢い良く、槍を持ったもう一人の兵士の腹部に直撃し、よろめかせた。

ぐがつという声と共に唾液が飛び、前屈みになり頭部が垂れる。

追撃の槍はすぐ、その頭部に来た。

鉄棒と同じ速度で横から振り下ろさせた槍によって、兵士の身体を捻らせながら、被っていた鉄製ヘルメットにヒビを入れ、同じように壁際へと吹き飛ばした。

高価そうな額縁に入った、絵画の破ける音と共に破砕。

彼女はそれを程と同じように無視し、折れた槍を捨てて前を見る。するとそこには、間隔を空けて横に並んだ二人の兵士が、剣を振り上げていた。

だが、勢い良く振り下ろされたその剣を、彼女は鉄棒で受け止める。

次いで、即座に両者の間へと入り込み、左側の兵士の腹部に右手の掌低を叩き込む。

そして、掌低を打ち込んだ勢いのまま身体に回転を加え、右側の兵士の腹部に、左腕の肘を打ち込んだ。

すると両者は、呼吸する間も無くそれぞれの壁際へと吹き飛ぶ。  
高価な皿が、時間差で破砕音を響かせた。

一方、ようやく破砕音を気に掛けた彼女は、風を起こして落ちていた二本の剣を拾って両手に持ちながら、内心で呟く。

……こんなに壊して、良いのだろうか？

正当防衛だ、と言い切るには、一方的にやり過ぎた。

余計に捕まる訳にはいなくなってしまった。

だからこそ、走る。

理由が何であろうと、とにかく走る。

途中、後ろへと振り向いて、シヴァは叫んだ。

「カイ！ 二本の剣を渡す！ 床に刺すから受け取れ！！」

おっけー！ つという返答を聞いたシヴァは頷き、床に突き立て

ようと両手の剣を振り下ろしたその瞬間、

「っ！？」

折れた。

「何やってんだよシヴァアッ！」

「す、すまん！ 床が硬かったのだ！」

謝罪の言葉を叫ぶシヴァの背を細目で見るとカイは、思わず溜息を漏らした。

「怪力だよ、怪力先生だよ……」

「良いじゃん？ シヴァちゃんらしくって」  
「そういう問題かなあ」

そういう問題なんだよつと、振り向いてのウィンクと共に言ったシルクは、右側の通路を指差した。

数歩の差でカイには見えない場所を、だ。

刹那、その通路から、剣を振り上げた兵士が飛び出して来た。

丁度、カイが前を通った瞬間に。

「うおお！？ 危ねえ！」

驚きの声を上げながら、大きくバックステップをして回避し、最初に床に着いた左足に力を入れて床を蹴った。

俊足、とまではいかないが、その素早い走り出しは、相手の懐へと容易に飛び込める程だ。

行く。

そして放つは、速度で威力を上げた体当たりだ。

「いつてえ！ 鎧、堅すぎるよあんた！」

「馬鹿だねえ」

「あはは、ばかだあ！ カイはばるかばかつ」

「う、うるせえうるせえ！ 特にミーナ、馬鹿馬鹿言い過ぎだっ！」

渴を飛ばすカイは、体当たりの際に落ちた相手の剣を拾い、走る体勢を立て直す。

それと、ほぼ同時。

シヴァ達の居る方向から、鼓膜や肌に響く程の爆碎音が聞こえた。見ればそこ、立ち止まった彼女達の少し前方、左側の壁には土煙と共に大穴が開いていた。

## 第五十三話：意外な救い手

土煙が収まり始めた頃、カイ達の正面には一人の男が立っていた。身長が高く、大柄なその男は、羽織っている黒いローブを脱ぎ捨てて、黒い短髪を露にさせた。

全身はカラフルなシャツとカーゴパンツで、腰にはポーチがいくつも付けられている。

また、そのポーチからは筒状の爆弾がはみ出ており、先程の爆発が彼の仕業だと分かる。

そんな彼は、背中の鞘に納められている大剣を左手で引き抜いてから、振り向いた。

無精髭を生やし、眼鏡を掛けたその男は、微笑を漏らしながら口を開く。

「よう生きとったな！ 安心したわい」

言葉と同時に、大穴から黒いローブを羽織った者が次々と入って来、バビロニアの兵士達と戦闘を開始した。

だが、シヴァをそれを気にせず、男に問い掛ける。

「お前は、どちらの味方だ？」

「もちろん、あんたらの味方や。わいはナギ・コーウェン。レジスタンスの諜報部隊隊長や！」

「ええ！？ もしかしてタマネギ！？」

「タマネギ言っくなや！」

驚きの声を上げたシルクに、素早く突っ込みを裏拳と共に入れたナギは、左手の大剣の切っ先をカイに向けた。

「とりあえず、わいが入って来た穴から出るんや。わいらの馬車が待つとる」

「待て！ どうも信用出来ない。だからこそ、一つ聞きたい事があるのだ。……数時間前にあった、キエンギ行きの客船襲撃の目的は何だ？」

問いに、ナギは小首を傾げる。

客船襲撃？ と呟きながら斜め上を見る動作をし、不意に口を開いた。

まるで何かを思い出したかのように。

「あれはわいの管理下じゃないんやけど、客船内に重要人物が居るから、確保するようにって任務だったそうやわ。残念ながら捕まらなかったらしいんやけどな」

「その重要人物とは、カイ・エディフィスか？」

「カイ・エディフィスう？ ちゃうちゃう。そいつは確保やない、護衛対象や。だから今、こういう状況になっている訳や」

にひひつと笑うナギは、不意に走った。

カイ達の方へと。

そして彼らを越え、その後方へと迫っていたバビロニアの兵士達の下へと。

瞬間、金属音が響く。

「さ、早く行くんや っと！」

ナギは最後の一言に力を入れるのと同時、兵士が構えていた剣を弾いて胴体に一撃を入れた。

次いで、近寄る兵士を足蹴にして吹き飛ばし、追撃に向かった。その姿を見るシヴァは、次にカイを一瞥し、頷く。

するとカイは、笑みを見せた後、大穴へと走った。皆も、それに続く。

外に出れば、一台の馬車が停まっていた。

鉄製の扉が後部にある木製の馬車は、軽く十人は乗れそうだ。

と、その時。

鉄製の扉が、ぎいっという木と鉄が擦れる音を鳴らしながら、外側に開いた。

そしてその中からは、一人の小柄な女が姿を現した。

「みなさん、乗って下さい！」

突然の登場だ。

だが、皆はそれに驚く事無く、中に入り込む。

馬車の内部には窓が無く、天井に吊るされたランタンのみが、内部を照らしていた。

また、縦横共にゆとりがある為、カイ達は窮屈する事無く座る事が出来た。

唯一立っているのは、先程の女だけだ。

藍色の短髪の彼女は、羽織っているロープの間から手を出し、彼女の背後にあるカーテンの向こうから、二つの武器を取り出した。

専用のベルトに、分解されて納められている諸刃の剣と、鞘に納められている長剣だ。

彼女はそれをカイとシヴァに渡し、会釈する。

「先に武器庫を襲撃し、回収しておきました。他の物と隔離してありましたので、合っているかと」

「ああ、確かに合っている。……だが、何故カイの為にそこまでするのだ？」

「任務だからです。　　っと、謝罪が遅れました。シルク・セシールさん、先日は突然の襲撃、失礼致しました。こちらの者が早とち

りをしてしまい、あのような形になってしまったのです」

深深と頭を下げる彼女の謝罪に、シルクは戸惑いを見せた。  
そして、あははつと苦笑を漏らしながら、両手の平を振った。

「いいいいいよ、過ぎた事だし。ユウに助けられたから、私は無傷だったしねっ。……えと、他の人は大丈夫だった？」

「はい。他の者は、気絶していたものの、命に別状はありませんでした」

意外な答えにシルクは、おかしいなと思ったが、すぐに面白く思えた。

……ししょーって意外と優しいのかなっ。

思わず漏れた笑い声を、片手で口を塞ぐ行為で防ぎ、良かったと言葉にだしておく。

一方、話が分からないカイ達は小首を傾げるが、シヴァはすぐに話を進めるべく、口を開いた。

「一悶着があつたようだが、どうやらもう解決したのだな。それでこれから何処に連れて行くつもりだ？」

「貴女達にはこれから、私達が利用している隠れ家に向かってもらいます。まずは安全第一、です」

「そう、か……」

呟くシヴァは、顎に手を当てて考え事を始めた。  
暫しの沈黙。

それから少し経って、彼女の顎から手が離れた。

「ミーナ、ゼクス。お前達二人は、先に隠れ家に向かってくれ」

「……え？」

突然の言葉は、ミーナを啞然にさせた。  
だがすぐに、眉尻が下げて首を左右に振った。  
力強く、拒否の意味を込めて。

「いや、いやだよ！ 一緒に！ 私も、わた」

「ミーナ！ ……聞いてくれ。私は、やらなければならない事と、  
確かめなければならない事が出来たのだ。市民を力で捻じ伏せるド  
ライゼンに会う事が、な」  
それと、

「それと、この場所は何かおかしい。容易に脱走と襲撃が出来るな  
ど、余りにも脆過ぎる。だから、それを確かめに行きたいのだ」

「で、でも……でも……！」

「大丈夫だよ。大丈夫」

不意に、そう言いながらミーナの頭を撫でたのは、シルクだった。  
彼女は、涙を溜め始めた目をそっと拭ってやり、小さな身体を正  
面から浅く抱いた。

あやすように、慰めるように。  
高等部を撫で、言葉を掛ける。

「大丈夫だよ。だって、カイやシヴァはとっても強いもん。だから、  
すぐに終わって、すぐに追いつくよ」

「……本当に？」

シルクの胸元に埋まっていた顔を上に向け、ミーナは上目遣いで  
問い掛ける。

可愛いと、素直にそう思ったのは、不覚にもその場に居た全員だ  
った。

ともあれ、頬が別の意味で変形しそうだったのを堪えるシルクは、



飽くまで普通の笑顔をミーナに向ける。

「本当だよっ！ カイの力にシヴァちゃんの神速剣技、ついでに私の魔術！ もう完璧だよ百人力っ」

「自信満々ななのな、シルクは」

「あつたりまえじゃ〜ん」

へへ〜んと、豊かとはいえない胸を突き出して誇らしげな顔をするシルクに、カイは失笑した。

そんな彼女を見て、ミーナの表情は緩み始め、一度だけ頷いた。

「うん、分かった……絶対、帰って来てね？」

「ああ、約束しよう。ありがとう、ミーナ。……ところで、ゼクスは良いか？」

「あ、はい。もちろん良いです。僕には反論する意味がありませんから」

少し困ったような表情でそう答えるゼクスは、膝を抱えて座る体勢になった。

騒がしい事続きたった為か、一般人であろう彼はかなり疲れているようだ。

カイはそんな彼を一瞥してから、シヴァを見る。

「それじゃあ、いただきますか」

「だな。それでは……っと失礼、名は？」

「……メルディ、メルディ・エルマンです」

「ではメルディ、二人を頼む」

「お任せ下さい。無事に、私どもの隠れ家へお連れ致します」

その言葉を最後に、シヴァ達は武器を持って立ち上がった。

次いで扉を押し、出口を開放する。

「うむ、やはり妙だな」

馬車から降りたシヴァは、唐突にそう呟いた。

それを聞いたカイは、走り出した馬車を目で見送った後、小首を傾げて問い掛ける。

「どうしたんだ？ 藪からポウに」

「……さて。見逃しはしないぞ。なんなのだ、ポウって」

「あつはは、何言ってるんだよせんせつ。ポウはポウだよ。藪からポウがこう、シュビツ！ っと。そんでもってシュババツ！ ってなっってもう」

「すまん……教師として担任として、生徒であるお前の発言が理解出来ん……」

「おいおい先生！ いくら担任でも、人の心までは読めないんだから、気にする事無いんだぞ！？」

「シヴァちゃん大丈夫？ 珍しくカイの空気に吞まれてるけど」

問われ、片手で顔を覆っていたシヴァは、深い溜息をつく。

ついでにもう一度溜息をつき、吐いた分の息を深呼吸で補給した。そして、顔を覆っていた手を下ろし、辺りを見渡す。

中庭であろうこの場所は、建物によって周りをコの字型に囲まれており、当然出入り口も多数存在している。

だが、人影は三つ、カイ達の分しか確認出来ない。

また、目前に開いた大穴からは音が聞こえず、どうやら戦闘を終

えた様子。

だが、ナギ達が出てこないところを見ると、戦闘は他で行われているのだろう。

しかし、だ。

シヴァは、疑問を持っていた。

「……やはりおかしいな。兵士の数が少ない。その上、馬車内と今の会話で時間はかなり経っている筈なのだが、一人として外に出て来ていない」

「だったら、サクサクっと中を見回って、原因解明に勤しまなきゃねっ！」

簡単に言ってくれるなっつと、苦笑混じりに言ったシヴァは、大穴を見て頷く。

「では行くか。今度は問題事に巻き込まれる前に、首を突っ込む為にな」

## 第五十四話：猛攻

廊下に発砲音と金属音が、連続して鳴り響く。

また、それらに続いて悲鳴も上がる。

鎧を纏っていない者は、四肢の各急所から鮮血を流し、豪快に転倒する。

頑丈な鎧を身に纏った者は、僅かな隙間から鮮血を噴き出し、同じく豪快に転倒した。

状況は圧倒的だ。

片や負傷者多数にして、片や少人数にも関わらず無傷。

その状況の原因でもある発砲音を放っているのは、半目で標的を見据える青年、ユウだ。

彼は一向に減らない兵士にうんざりしつつも、撃ち続けている。

時折、銃弾が切れて弾倉を補充しつつも、撃つ事を止めない。

そんな彼の後ろには、ネプチューンとクレアが、床に座って会話をしていた。

何処と無く、暇そうである。

「それにしても、まさか空飛ぶ乗り物が森の中にあるなんて驚いたわ。それを操縦出来るユウも凄いけど」

「少なくとも、わっちはあんなもん見た事ないかなあ。でんも、狭い場所に押し込まれたときや、勘弁してほしかったっちゃ」

「小窓付いてて、外が見れただけマシじゃない」

「ま、そうなるんけどねー」

あはははつと、二人分の笑い声が重なり、響いた。

「つてえか、こんな所にカイ達は居るんかいな」

「大丈夫。私の野生の勘が、ここに居ると告げているの」

「野生の勘？ それ、嘘つちょ？」

「まあ、所詮は勘だから仕方ないわ。それに、ここだって言ったのはユウだしね。シルクの魔力がどうか呟いてたし」

「結局、嘘だったわけかいな。ま、仕方ないさね。あんさんは既に野生じゃ無くて飼い猫だかなあ」

「うっさいわね、このインチキ商人」

再度、重なった笑い声が響く。

だが、その笑い声を聞いて不愉快な感情を溜め込み始めている者が居た。

他でもない、ユウだ。

「お前ら！ 休憩してないで手伝え！」

怒りを露にした彼の怒声は、二人の方を向いていなくても笑い声を停止させていた。

そして、二人は顔を見合わせる。

瞬き数回でアイコンタクト。

次いで、ネプチューンがユウの方を向いて口を開いた。

「で、でもよ、わっちらは空酔いしてるんさ」

「いやいやいや、それは流石に苦しい言い訳でしょ」

「うっはあ！ まさかの速攻裏切りい！？」

オーバーリアクションで驚くネプチューンを見視し、クレアは立ち上がった。

少しフラつきがあるようだが、両足を仁王立ちの形にして、体勢を固定する。

そして、太股のベルトからダガーを両手で抜き取り、構えた。

「ごめんなさいね。それで、どうすれば？」

「酔いは本当だったか。まあ、立てるのなら良いんだ。……多分、兵士の波が弱まる瞬間があるだろう。そこを一気に攻めるぞ」

言いながら、ユウは拳銃を持っていない右手で、腰の鞘から長剣を抜く。

そして、今撃っている分の弾倉が空になった瞬間、二人は走った。姿勢を低く、左右に展開して、行く。

対し、先頭に居る三人の兵士は、突然に走って来た事に驚きつつも、追撃体勢に入った。

左右の二人は斧を横に、中央の一人は剣を縦にそれぞれ難いだ。それをユウはスライディングで回避し、クレアは振るわれた斧を跳躍で紙一重に回避する。

また、それと同時にユウは足を、クレアは首筋を斬った。

鮮血と悲鳴が噴き、吹き出す。  
だがまだ、猛攻は止まない。

クレアは着地と同時に、しゃがんだ状態の脚をバネのようにし、駆ける。

正面、薄い鎧の兵士を狙って、だ。

速度は、猫型獣人特有の俊足。

故に防御は遅れ、兵士は腹部に膝蹴りを容易に受けてしまった。

くの字に折れ曲がった身体に、彼女は見向きもせずダガーを振り下ろす。

斬るのは、またしても首筋。

次いで、左に向かって身を一回りさせ、その勢いで二人同時に斬った。

そんな彼女に、一人の兵士が長剣を振り上げる。

しかし、彼女はその兵士に対応する動きを見せない。

まるでそこには、誰も居ないかのように。

刹那、その兵士に向かって蹴りが飛んで来た。

ユウの回し蹴りだ。

その蹴りは兵士を吹き飛ばし、壁に叩き付ける。

次いで、まだ行く。

立ちほだかる者を全て斬り、薙ぎ倒し、道を開く。

対する兵士達は二人に対し、成す術も無く、その数を減らしていた。  
った。

と、その時だ。

不意に、ユウの長剣を防ぐ金属音が鳴った。

突然の異変にユウは驚き、長剣を防いだ者を視界に捉える。

「!? シヴァか!」

「ユウ!? 何故、ここにいるのだ!」

交えていた長剣を即座に離れた二人は、現状を把握する為お互いの背後を見る。

どうやら兵士は殲滅したらしく、どこにも姿は見えなかった。

すると、シヴァの後方からはカイとシルクが少し遅れて走って来ていた。

その上彼らは、ユウの背後にクレアが居る事に、かなり驚いている。

「質問が増えたな。何故、お前が殺した筈の獣人が共に居るのだ?」  
「ああ、それも含めて、伝えるべき事を全て話そう。なに、すぐ終わるさ」

## 第五十五話：疑い深き行動

とりあえず、話そうと思っていた事は全て話した。

クレアが生きていて、共に行動している理由。

クレアを操っていた男と、海の船上で一戦交えた事。

テクノス王国の王立図書館で襲撃にあった事。

そして、その図書館にて、カイの腕に関わるジードの歴史が記された資料を見つけ、内容を知った事について、だ。

ちなみに、カイ一行からも、少なからずこれまでの経緯を聞いた。特に、シルクが魔術でカイを助けたと聞いた時は、ティファがかなり喜んでいた。

俺の頭を叩くのは止して貰いたいものだが。

対して、弟子は笑みを浮かべて、一礼をしてきた。

隣に居たカイの「え？ 急に何してんの？」とでも言いたげな表情は、可笑しかったな。

ともあれ、聞くところによるとシヴァ達は、ドライゼンなる男を捜しているらしい。

なんでも、ここら一体を牛耳っている独裁者ごっこ常連者らしい。

一部、俺の解釈が含まれているが。

にしても、独裁者、か。

「で、そいつを見つけ出してどうするんだ？ 殺すのか？」

「ストレートな男だな。……だが、確かにそうだ。私はドライゼンを殺す。独裁者は太古の昔から市民を傷付ける事しかないからな。私はそれが許せない」

グツと、シヴァの拳に力が籠る。

見るからに、相当な怒りを溜め込んでいるようだ。

まあ俺も、独裁者は許せないから同意だな。



良し分かったと、そう言おうとしたその時。

言葉が喉まで出掛かった瞬間、ティファが先に口を開いた。

『ユウ！ 急に変な魔力が溢れ出してきたわ！ 場所は……この地下よ！』

地下？ って事は、ドライゼンとやらはそこか？

『分からないわ。でもこれは……なんか、気持ち悪い……』

探せるか？

『やってみるわ。だから、入れ替わってもらえる？』

どういう理由かは知らんが、良いだろう。

同意して目を瞑り、入れ替わりの体勢に入った瞬間、意識が一瞬途切れ、目を開ければ隣に俺が居た。

……俺が俺を見ているってのは、どうも慣れないな。

ある意味、ドッペルゲンガーより質が悪い気がする。

ふと、シルクを見れば、おお！ と言ってるかのように口を開け、小さく拍手していた。

無視、すれば良いのか？

「シヴァ。なら俺が、ドライゼンを見つけ出してやろうか？」

「……何？ 居場所が分かると言うのか？」

「ああ、ばつちりだ。奴は、強力な魔術結界の中に居るようだ。だが、それが仇となつてな、魔力を俺が感知出来た」

なるほど、そういう理由だったのか。

つまりは、その結界を解除する為に、魔術を使わなければならな

いと。

言っと、ティファは頷く。

それは他者から見れば、シヴァに対しての反応だろうが、俺に対してでもあるのだろう。多分。

兎に角、俺であるティファの提案に皆は同意し、走り出した。ティファを先頭にして。

走りながら、カイはユウに対して警戒していた。

理由は他でもない、客船での一件で彼に不信感を抱いていたからだ。

また、ドライゼンの居場所が分かるという言葉が、更に不信感を積みらせる。

……ユウは、俺達を罠に掛けようとしている？

結果、そのような信じたくない事さえ、脳裏に浮かび始めていた。だが、皆に言っても信じてもらえるかどうか、分からない。

笑い飛ばされるのがオチだろう。シルクやネプチューンに。

けれど、殺した筈のクレアを実は殺しておらず、共に行動していたのも解せない。

もしかしたら、最初からグルだったのかもしれない。

いや、もしグルだったとしても、クレアと交戦したのはユウだけだ。

俺は彼女にフラグメントを使っただけ。

故に、クレアは何のメリットも得ていない。

しかし、ユウが別行動を取ると言っただけはその後だ。

それが計画通りの行動だったとしたら……。

分からない。切りがない。

カイは内心でそう呟いて、思考に休憩を挟む。

とりあえず今は、ついていくしかない、そう決めておいた。そして暫く走っていると、急にユウが立ち止まった。

どうやら、彼の横にある壁が気になっているようだ。

周囲を見渡し、再度同じ壁を見る。

明らかに、壁を疑っているようだ。

すると彼は、指を鳴らして壁に掌を添えた。

と、その時だ。

壁に、まるでガラスのように輝が入り、次の瞬間には碎けて、下りの階段が姿を現した。

「　　っ!？」

その場に居た全員が驚く。

ユウを除いて。

「すげえー、さすがユウだっちゃ」

「喜んでいるようには聞こえんぞ？　まあいい。ユウ、これは降りても大丈夫なのか？」

「分かん。ただ……どうする？　一気に駆け下りるか？」

問いに、シヴァは少し考えてから、後ろの者達の方を向いた。

無言で、いいか？　と問いかけているような表情で、だ。

対して、問われた皆は頷いた。

その答えと同時に、走る。

暗い階段を、駆け下りて行く。

途中、人が来た事を察知したのか、壁に掛けてある松明に、自然と火が灯った。

だが、シルクを除いた皆は、見向きもせず走った。螺旋のような階段を、ただひたすら駆け下りる。

そして到着した場所は、円錐のような大部屋だった。

装飾品などは何も無く、ただ金属製の壁に囲まれた場所。

明かりは、かなり高い天井にあり、正面より少し上を見ると、円で例えるなら四十五度くらいの位置に、大きなガラス張りの部屋があった。

そしてそこに、ドライゼンが立っていた。

見下ろす形で、不適な笑みを浮かべながら、だ。

「見つけたぞ、ドライゼン！」

叫び、長剣の切っ先をドライゼンに向けたシヴァは、睨みを効かす。

そんな彼女に、ドライゼンは鼻で笑って返事を返す。

「見つけたからと言って、なんだと言うのだ」

ガラス張りでもクリアに聞こえる声は、どうやらスピーカーを通して喋っているようだ。

「どうせお前達は、もう地上には戻れんよ。そして、我らが野望は果たされる！」

「野望……？ 何だ、何を考えている？」

「簡単だ！ それはせ ぐぶう！？」

刹那、ドライゼンの腹部から銀色の刃が生えた。

それは、背後から刺されたという事だ。

するとその刃はすぐに引っ込み、次いでドライゼンが倒れた。

「全く、キースが要らぬ部分の感情を残した所為で、お喋りが過ぎる男になったな。おかげで私の刃にヘドロが付いた」

声は、ドライゼンを刺したであろう者の声。

そしてその声の主は、皆に見える位置へと出て来る。

真っ黒なスーツを着た長身の、茶髪をオールバックにした男が、見下し侮蔑するような視線を向ける。

対し、その姿を見たシヴァの眉間に力が籠り、歯軋りを鳴らして怒りの表情を露にする。

男も、彼女の姿を見ると、わざとらしく驚いて見せた。

「おや、誰かと思えば賢妹か。相変わらずの表情だな」

「こんな所で何をしている、愚兄!!」

両者の声が、室内に響き、静寂を生んだ。

## 第五十六話：愚兄

シヴァの言葉を聞いた皆は、驚きの表情を露にした。だが、彼女はそんな事など御構い無しに、ただ一人の男だけを見る。

彼女が愚兄と呼んだ男を。

対する男も、シヴァを見据え続けている。

そして、彼が最初に言葉を発した。

「愚兄とは、全く酷い言い草だな。何を根拠に私を愚者と？」

「とばけるな！一族を戦争の道具として使い、市民を大量虐殺した恥晒しが、愚者に値せぬと思っているのか！？」

「待て待て、それだとその作戦に少なからず参加していたお前はどくなる。同じ愚者ではないか」

「ち、違う！あれは命令で、当時の私は仕方無く」

「仕方無く人を殺し、命を奪ったのか？無責任だな。それは進んで殺すよりも罪だぞ。神にでもなつたつもりか？賢妹」

ほくそ笑むその表情は、口で笑って目で冷めていた。

憎たらしいと、そう評価する事も出来る。

だが、次の言葉は予想外の者から発せられた。

「あ、ちょ、ちょっとちょっと！シヴァちゃん、大量虐殺とかって何の事？」

シルクだ。

彼女は、まるで他の皆の代わりとでも言うかのような、疑問多き表情で問い掛けた。

対するシヴァは、罰の悪そうな表情をし、男は眉をピクリと微動

させた。

同時に表情が変化し、妹を呆れた目で軽蔑する。

「賢妹、まさか話していなかったのか？　　いいか、貴様ら。そ

こに居るのは、報復戦争時代にテクノス王国の聖五騎士の一人だった、シリルヴァード・ユリウス・ファリエトスという女だ。最も、戦況を傾けさせる程の裏切り行為をして、脱隊している身だがな」

「黙れ愚兄！　それは関係の無い話だ！！」

「関係あるさ。隠し事は良くないだろう？　ともあれ、貴様ら。私の賢妹が世話になったな。おかげで、全員揃って立派な邪魔者だ」

言いながら、男は後ろへと振り向き、誰かに指示を出し始めた。そしてそれが終わると、再び皆の方へと向き、微笑する。

「めでたく邪魔者に当選した貴様らには、表舞台から降りてもらいたいのだ。　やれ」

刹那、皆の周囲に複数の巨大な魔法陣が展開し、光を放ち出した。僅かに目を細めるほどの光を、だ。

それらは白や黒、青などの色を持っており、皆の周囲を取り囲むようにして固定された。

「ななな、なんだっちゃー！？」

「何よこれ！？　多すぎるじゃないの！」

「愚兄！　これはなんの真似だ！？」

ガラスの向こうに居る男に問うシヴァは、長剣の切っ先を真っ直ぐに向けた。

対して、呆れた表情で口元に笑みを見せる男は、当然だとも言うかのような表情で、妹を見下ろす。

「つい先程言っただろう？ 表舞台から降りてもらいたい、と。さ  
ようならだ、賢妹」

別れの言葉と同時に、それは来た。

魔法陣の放つ光が強さを増し、次第に目も開けていられない程になっ  
ていく。

それと同時に、周囲に空間の歪みを生み出し、やがて光は圧縮を  
開始する。

途中、男は告げた。

「それとユウ・ウラハス。中にいる者を返してもらおうぞ？」

言葉は伝わったのか分らない。

けれどもただ、男は一応として告げた。

そして、告げた先に居る者達は、圧縮されていく光に飲まれ、消  
えていった。



## 第五十七話：激戦後の静けさと

地平線の彼方まで澄み渡る空と海。

スカイブルー一色のこの場所には無数のカモメが飛び交っており、群れを成している。

その目下、海面上には一隻の船が浮いていた。

船体に？レジスタンス？と書かれているこの船の甲板には、Ｔシヤツ一枚の男がハンモックに揺られていた。

太陽の光によって銀色に見えなくも無い白髪のは、ここ暫くは全く眠っていなかったが為に、問題の無いこの時間に睡眠を取っているのである。

また、同じく太陽の光を受けている、彼の首に掛けられたドッグタグには、？フェンリル・ヴァナルガンド？という名が彫られていた。

一方で、そんな彼に近寄る侍女服姿の女は、不快な表情をしていた。

「マスター。私には雑用を押し付けておいて、貴方は南国気分を満喫中ですかこのやろー」

言いながら、左手に持っているモップを振り上げ、構える。

そのモップの先端は、丁度フェンリルの顔に影を作る形となり、彼の目を覚まさせる形となった。

眠気眼に、うぐんつと唸りながら目をゆっくりと開ける彼は、視界に入ったモップを捉えた瞬間、目を見開いた。

同時、モップが勢い良く振り下ろされる。

「わああああ！ 危ねえだろーがヘルー！」

「真剣白羽取りを成功させるとは、さすがマスターです。

おは

ようございます」

「おはようございますじゃねえぞ！ 何考えてるんだ！？」

「？ 起床時の挨拶は、おはようございますしか登録されておられません。また、それに関連した適切な言葉は無いと判断しております」

そうじゃねえよつと溜息混じりに言うフェンリルは、起き上がった甲板に足を着き、ハンモックに座った。

「侍女つて奴は、主人に危害を加える事は許されない。そう、許されないんだぞ」

「お言葉ですが、その機能は先日、マスターが削除要求したソフトと共に消滅致しました」

「なんでだよ！？ 何で消え えぐっ！？」

声を荒げて吠え出したフェンリルに、次の瞬間、口内へとモップの柄が突っ込まれた。

暫しの沈黙。

やがて、二分程経った頃に、ヘルは三度頷いてモップの柄を口から離れた。

そして、謝罪の意を込めて頭を下げる。

「無礼を働き、申し訳ありませんでした。マスターを一度落ち着かせるには、こうするのが一番だと判断致しましたので」

「はっ、良く言うな。まあ、口内に傷がつかなかったから、減点は少量だ。とりあえず、罰として昼食を」

「既に用意してあります。ご要望とあらば、今すぐにもお持ち致しますが？」

小首を傾げて、さも当然のように言う表情に、フェンリルは思わ

ず失笑した。

次いで、腕を組んで人差し指を彼女に指す。  
対して、ヘルはその指先に焦点を合わせ、停止している。

「それじゃ、迅速に用意しろ。少し遅れた昼食を取るぞ」

「ヤー、マイマスター」

無表情で命令に従う伊を示し、踵を返してから来た道を戻って行った。

その方向には正方形の部屋があり、船内へと続いている扉がある。  
彼女はそこから船内へと入り、姿を消した。

……あいつ、口が悪くなった気がするな。

内心でそう呟くフェンリルは、しかしすぐに考えるのが面倒になった為、それを捨てる。

代わりとして、気晴らしに周囲を見渡した。

周囲に目立った物は無く、この船に乗っているのは二人だけだ。

ちなみに、彼らが今乗っているのはレジスタンスの船であり、客船襲撃時に使われたのを奪い取った物だ。

目標を取り逃がしてしまった彼らは、すぐに後を追おうとしたが見つけられず、現在は依頼人からの連絡待ち状態。

そして、その連絡であるメールが着た知らせが、船外に出て来たヘルによって伝えられた。

「マスター。依頼人からのメール着信と、昼食をお持ちした事を報告致します」

彼女は右手に電子端末を、左手にサンドイッチの盛られた皿を持ち、特に急ぐ事無くフェンリルの下へと向かう。

そうして、到着すると同時に彼はサンドイッチを一つ取り、口に運んだ。

電子端末には目もくれず、一口分を含んで咀嚼する。

「……ん、ハムサンドか。卵は無いのか？」

「生憎、船内の冷蔵庫に卵はありませんでした。ご要望に沿えられず、申し訳御座いません」

頭を下げ、謝罪するヘルに、別に良いつと言いながら、また一口。それが後数回続き、咀嚼を終えると同時に汚れていない指先を舐めた。

次いで、やっと電子端末を見やる。

画面には既に、メールは展開されていた。

「差出人は当然の事、依頼人か。本当、シンプルな奴だな、このヴァンってのは。任務変更・プランB決行、だよ」

「プランBという事は、ひとまずキエンギへと向かう必要がありますね。では、今暫く船旅をお楽しみ下さい」

皿をフェンリルに手渡して一礼し、ヘルはまた船内へと入って行った。

そして、一人残されたフェンリルは、残りのサンドイッチをたいてらげてハンモックに寝直した。

視線を空に向け、右手を真つ直ぐ伸ばす。

指の隙間から覗く太陽を隠し、手の影で顔を覆った。

明るい周囲と暗い中心。

その手の甲をジッと見つめながら、彼はある光景を思い出していた。

自分の故郷の光景を。

「……今更、捨てた筈の故郷に戻る羽目になるとはな……」

眩き、目を瞑る。

するとその時、彼の手<sup>が</sup>に風が強く当たり始めた。

船<sup>が</sup>加速を始めたのだ。

それを知った彼は、不意に微笑し、右手を下ろす。

船<sup>が</sup>起こす水飛沫の音を子守唄のようにし、彼は短い睡眠へと落ちていった。

## 第五十八話：遅れた男

孤独だった。

目が覚めた時から、ずっと一人だった。

いや、正確には他にも居たが。

そいつらは、俺を人として扱わず、ただ実験道具としてしか扱っていなかった。

だから、そうだ。独りだったんだ。

けれど、いつからだろう。

俺の隣に居座り始めた奴が、現れたのは。

その時から俺は、独りじゃなくなった。

感謝の言葉は、まだ告げていない。

廃墟に近い王立図書館に、轟音が響き渡った。

それは、入口の扉が蹴破られ、床へと落ちた際に出た音だ。

強制的に役目を終えさせられた扉は、自重で床に風を起こし、埃を舞い上がらせる。

その埃に咽せながら、長身の男、レイヴンが扉を踏みながら入ってくる。

漆黒のローブを羽織り、その下に大剣を担ぐ彼は、紅い目で周囲を見渡し、舌打ちをした。

彼の視界の先、王立図書館内は、荒れていた。

数え切れない程ある本棚が倒れて本を散乱させ、中には破損し、粉碎されている物もあった。

また、奥へと進んだ先にある大扉を抜けると、天井にあるステン

ドグラスが割れており、光が射し込んでいた。  
何か大きな騒動があった、その跡のように。

「事後、か……」

レイヴンが呟いた、その時だ。

彼の顔の横に突然、光の粒子が生まれて中心に収縮し、次の瞬間には拡散した。

そしてそこには、小さな妖精が姿を現していた。

「じゃっじゃじゃーん！ 登場シーンのバリエーション豊富な、ライト・ウィッチちゃんとうじょーう！」

「……………」

「あゝあゝ、つれない顔しちゃ駄目だよレイヴン。明るくつ、明るくつ！」

無言のレイヴンは、無表情のままライトの頬を親指と人差し指で摘む。

ぎゅむつ、と声を漏らす彼女を無視し、顔を捏ねった。

「ぎゅむぎゅむむつ　　つぶえ、や、ひやめみやひやい！　もみゅめれみゃ〜」

四肢と四枚の羽をバタつかせて抵抗を試みるが、力の差によって逃げられないでいた。

そんな彼女を、笑う事無く無表情で見るレイヴンは、不意に彼女を放す。

刹那、彼の頬に拳が飛んだ。

大して威力の無い小さな拳が、だ。

「このやろーこのやろー！ レディーの頬を気安く摘むなんて、最低だー。レディーの頬は繊細なのだ、アイデンティティーなのだー！」

「アイデンティティーの使い方、間違ってるぞ。まあ良いが。それより、今はふざけている場合じゃないだろう」

「むぐつ、話を逸らした……。にしても、ボロボロだねえ。何があっただろう？」

問いにレイヴンは、分からん、と呟くが、口の端は釣り上がっていた。

「分からんが……血の匂いがする」

嬉しそうな表情をする彼の目は細く研ぎ澄まされており、まるで獲物を探す獣のようだった。

その彼が、歩みを始める。

グシャリと本を踏む音を立てながら、奥へ奥へと進む。

本棚の残骸を踏んでも気にせず、雪道を歩くように、ゆっくりと前へ行く。

ライトはそんな彼の肩に乗り、眉を潜めて周囲を見渡していた。

途中、彼の視界には死体がいくつか映る。

様々な倒れ方をしている、子供の死体が。

その度に、笑みが増す。

あいつらだ、やはりあいつらがここに來ていた、と内心で嬉しそうに呟く。

すると、彼の表情を見たライトが小首を傾げた。

「凄く嬉しそうだね？」

「当たり前だ。ここにあいつらが來ていたんだからな」



え？ という疑問の声を上げたライトに答えるように、言葉を続ける。

「あいつらはこの大陸に向かっていたんだ、この王国以外に行く場所は無いだろう？ それに、船上に居たあいつの仲間の、獣人の匂いが微かに残っているしな」

「海には潮の匂いつてのがあるのに、よく獣人の匂いを嗅げたね？」  
「獣つてのは、臭いもんだからな」

言う彼は、不意に足を止める。

視線の先には、辛うじて無傷な大テーブルと、その上に置かれた厚い本。

その本の周囲には埃が無く、故にこの本は最近開かれた物だという事が分かる。

彼はその本に近寄り、表紙を見た。

「……神話聖書？ エニグマ？……。まさか、これを調べていたのか？」

「えにぐま？ 何それ」

「ジードっていう世界の物語だ。神を造るという愚かな事に挑んだ、愚者共が前に居たって言ってた世界のな」

刹那、頭痛が起きた。

それは記憶のフラッシュバック。

映るのは、白衣を着た者、水槽、痩せこけた男、血飛沫、スーツ姿の男、斬殺死体、惨殺死体。

数々の記憶が痛みとなって彼を襲い、無意識に頭を抑える。

大丈夫！？ と言うライトの声も耳には届かず、締め上げるような痛みが続く。

それが長く続き、気が遠くなりそうになるが、歯を食いしばって

耐える。

ぐっという声が響かず漏れ、足元が少しふらついた。  
だが、二分程経つと痛みは引き、手も頭から自然と離れた。

「も、もう痛くないの？ 大丈夫？」

珍しく困惑の表情を見せるライトを手で制し、踵を返す。

「なんでも無い。ただの頭痛だ。そんな事よりも……行くぞ。目的  
地は、バビロニア皇国だ」

告げるレイヴンは、本棚の残骸を踏みながら、来た道に戻り出す。  
今や王立図書館内には、破砕音だけ響いていた。

## 第五十九話：荒野の中心で

人は今、堕ちる所まで堕ち続けている。

抗争、殺戮、虐殺、殺し合い……。

争いを好む人間は、それらをいつまでも続けている。

止められない、人の闘争本能。

そして、別の何かがそれらを悪化させた時。

人は一体、どこまで堕ちるのだろうか。

鳥の鳴き声が響き渡る。

それは、円を描くようにして同じ場所を舞う、鷹のような生き物の鳴き声。

鋭いその目は、獲物を狙い、上空で待機しているかのよう。

視線の先にはただっ広い荒野が広がり、建物どころか草一つもない、ひび割れた大地。

その一箇所に、六人の男女の姿があった。

彼らは死んでいるのか気絶しているのか、ピクリとも動かず倒れていた。

そんな彼らを、その鳥は狙っているのだ。

しかし、不意に彼らが微動する。

次いで、手が動き出し、ゆっくりと身体も動き出した。

内の一人であるカイは顔を上げ、周囲を見渡す。

目に映るのは、青い空と茶色い地面の二つだけ。

後は、耳に入る風の音と鳥の鳴き声だけだ。

それを感じた彼は暫く啞然とし、しかしすぐに起き上がろうとする。

節々の痛みには耐えながら、他の者達も同じ動きをしており、皆が身体を起こして顔を見合わせている状況になった。

誰も彼もが、不思議そうな表情をしている。

すると、シヴァが最初に口を開いた。

「……皆、無事か……？」

問いに、全員が疎らに頷く。

その事にまず安堵した彼女は、ミント色のスーツについた砂を掃いながら眉を潜める。

「ここは、どこなんだろうな……」

それは、皆が思っている疑問だった。

見慣れない光景に、混乱しているようだ。

しかし、その疑問に答える者が居た。

「ここはジード。私の住んでいた世界よ」

思わぬ答えに、全員が返答者の方へと向いた。

視線の先に居る、金色の長髪の女は、左右の色が違オッドアイう目で、周囲を見渡す。

彼女の姿は、袖が長く肩の辺りが露出した真っ黒い服に包まれており、表面にはかなり細かいラインがいくつも走っていた。

長い腕には紋章が刻まれ、まるで魔術師か魔女のように見える。

そんな彼女は、間違い無いわ、と言って深く頷く。

だが、その発言に関係無く、シヴァは警戒心を強めていた。

「お前は……いったいだ」

「おおあ！　ししょーが実体になってる！！」

しかし、シヴァの質問は、シルクの驚いた声に掻き消された。師匠と言った彼女は、驚きのあまり震える指先で、金髪的女を指す。

対し、女は笑みを向けて手を振って見せた。

この予想外の状況に、シヴァはもちろんの事、他の者も言葉を失っている。

陽気な表情をしている、ネプチューンを除いて。

「で、シルクの師匠っちゅーあんさんは、何者なんぜよ？」

「……私はティファ。元々はこの世界の住民で、ユウの中に居た存在よ」

「お、おいちよつと待て！　次から次へと驚かされて、私は混乱してしまっている！」

片手の平で会話の制止を求め、もう片方の手で頭を押さえる。まるで頭痛がするかのよう、シヴァの表情は険しくなった。

「……私達は、ジードに来たのか？」

そして、恐る恐るの問いに、ティファと名乗った女は頷く。

次いで、シヴァは質問を続けた。

「地下のあの部屋で、光に包まれたと思ったら意識が飛んだのだが、もしやあれが原因なのか？」

「ええ、多分そうよ。この現状を考えると、あれは他世界に干渉する魔術ね。ジードに送った理由は……この世界が滅びる予定にあるという事を知っていたから、だと思う」

「この世界が、滅びる……？」

「ええ、この世界は滅びる。過去の歴史の過ちによって」

淡々と問いに答えるティファは、しかし不意に表情を変えた。

ハツとした表情は、荒野の果てを向いている。

その視線の先には何も無かったが、暫くすると何かが見えてきた。先頭を走る二頭の馬と、それに引かれる大きな車体。

馬車だ。その馬車が、荒野を駆けてカイ達の方へと向かって来ていた。

それは、偶然、進路上に彼らが居ただけだろうが、ティファは立ち上がって両手を振った。

すると、馬車は速度を緩め、彼らの近くで停止した。

車体の前方で手綱を掴んでいる中年の男は、どこか見た者を安心させるような笑みを浮かべている。

「どうしたんだい、こんな所で。旅でもしているのかい？」

「ええ、そうよ。でも、どうやら道に迷ってしまったらしくって。

それで、良かったら乗せてもらえないかしら？ 貴方が向かっている場所までで良いわ」

男と同じように笑顔で答え、問うたティファに、彼は顎に手を添える。

そうして数刻の間、うん、と唸って考え、頷いた。

「丁度、帰り道だったから荷物は無いし、良いだろう。美人さんが三人も居る訳だし、仲間に自慢出来るわい」

がつはつはつ、と大口を開けて笑う男は、座っている椅子の横にあるレバーを引いた。

すると、馬車側面の壁がスライドして開き、内部への入口が出来

上がった。

それを見て素直に驚くカイとシルクを見て、男は更に笑う。

「まさか、そこまで驚いてくれるとはね。作った甲斐があるって  
もんだよ。さ、入りの御一行さん！」

言われるままに、彼らは中に入り、備え付けの椅子に腰掛ける。

全員が入り終えると、入口の壁がスライドして閉まり、馬車は走り出した。

それと同時に、ティファは口を開く。

「それじゃ、せっかく来た訳だし、この世界についてお話ししようかしら。もちろん、何故滅びるのかも含めてね」

## 第六十話：ジード

「その者、ディン・ガードナーが持つフラグメントで、エニグマ戦争を終わらせたの。それによって、人々には平和が戻ったわ」

揺れる馬車の中で、説明を続けるティファは一息ついた。

彼女は、戦争前の歴史とエニグマとの遭遇、開戦とフラグメントを持つ者の事などを話した。

それはネプチューンやクレアも本を見て知っている事であつた為に、ところどころで口を挟んでいたが、それから先は知らない為、聞き入る体勢に入っている。

一方で、カイは相変わらず混乱しており、ティファが休憩に入っている今は、シルクが彼に要点を教えていた。

そして暫しの休憩の後、ティファは話を再開する。

「けれども、エニグマが姿を全く現さなくなつて数年後、異変は起きた。住処を増やしていった人間は、ある現象を見つけたのよ」

それが、と言いながら、壁の小窓から外を覗く。

「それが、この荒野。自然が消え始めたのよ。それにより、大地は枯渇し、生息していた生物は死に絶えた」

「つまり、エニグマがいるから、自然が生まれていた？」

シヴァの問いに、ティファは頷く。

「エニグマは自然を育ませ、人間は自然を利用して作物を育てる。このようにして、知らぬ内に両者は共存していたの。自然は増えすぎると大地を埋め尽くすし、かといって自然を使い続ければ、大地



は滅びる、といったようにね。けれど、それをぶち壊したのが人間。だからこれは、生き残った人間への罰ね」

魔力は今も変わらず抱負だけどね、と言って吐息。

同時にそれは、説明の終わりを意味させた。

それを待っていたかのように、ネプチューンが小さく手を上げた。

「次はわっちからの質問ぜよ。この世界に町や都市は、今でもあるんかいな？」

「もちろんあるわ。枯渇に抗うように、二、三ほど巨大都市が作られ、人工自然で生活を賄っている。古くから地下水が豊富な村も、いくつかあるわ。今はどれだけ残っているか分からないけどね」

「ほへえ、巨大都市！ こりゃなんかたのし」

「ティファ！ ユウはどうしたんだ？」

ネプチューンの言葉を遮ったのは、突然、質問を投げ掛けたカイだった。

対して、ティファの表情には雲がかかる。

「その事なんだけど、こっちに来てから、私の中にユウが居ないの……。ああ、私とユウは入れ替わる事が出来るのよ。姿形が変わるのは、魔術的な事による効果と考えてもらって結構よ」

言いながら、彼女は胸元を押さえる。

目は虚空を見つめ、表情には悲しみの色を見せていた。

「なんというか、半身を失ったような感覚がするの。ずっとあった何かが、急に無くなる感じ」

「……そういえば、愚兄が最後に何か言ってたな。ユウの中のものを返してもらっ、と」

そのシヴァの言葉に、ティファはハツとした表情を見せた。

「あの時、私は表に出ていたから……中に居たユウが代わりに連れて行かれたって事、なの？ 私の、せいで……」

呟き、俯く。

彼女はそうやって、自分を責めた。

どうしてすぐに、身体を返さなかったのか、と。

だがそれは、既に取り返しのない事だった。

と、その時。

次の言葉は、思わぬ方向から来た。

「さつきから聞くユウって名前、もしかしてセイル村のユウ・ウラハスか？」

前方の小窓から顔を覗かせた中年の男は、そう問い掛けた。

その事に全員が驚くが、咄嗟にティファが答える。

「そう、そうよユウ・ウラハスよ。けど、どうして彼を知っているの？」

「そりゃあ、俺もセイル村出身だからさ。ウラハスにも、何度か世話になってるしね」

言って、彼は何か思いついたかのように指を鳴らした。

実際は鳴らそうとしたが鳴らず、ただ指同士が擦れる音しかなかったが。

「もしセイル村に用があるのなら、次の村で小包を受け取ったら、次はセイル村に向かうし、送って行ってあげるよ」

「え！？　ぜ、是非、お願いするわ！」

その言葉に、男は嬉しそうな表情になり、がっはっはっと大口を開けて笑いながら、正面へと向き直した。

目的地が決まった事に、皆は安堵の吐息を漏らす。

ともあれ、彼らはセイル村への道のりを、馬車に揺られながら待つだけとなった。

## 第六十一話：さつそくの一騒動

馬車に乗る事、一日と数時間。

一行は一つの村を経由して、やっとセイル村に到着した。

それもこれも、馬車の持ち主である男、マクリのお陰だった。

彼はカイ達が資金を持っていない事を知ると、珍しい物と交換するのを条件に、ジードの通貨であるセルを分けてくれたのだ。

幸い、シヴァが持っていたグラルスの通貨であるラノンは金で作られている為、それで交換する事が出来た。

マクリがラノンを見て不思議がっていたのは、言うまでも無い。

ともあれ、通常よりも急いで馬車を走らせてくれたお陰で、難なく到着する事が出来たのだ。

セイル村は作物の栽培が盛んで、近くの洞窟からは銀が採掘される事から、有名な村となっている。

しかし、どここの家も木造やレンガ造りで、贅沢が全く見られなかった。

それを不思議に思うシヴァは、道案内をしてくれているマクリに問い掛ける。

「銀が取れて裕福である筈だが、何故、村という雰囲気を保っているのだ？ 都市として発展する事ぐらい、出来るだろうに」

問いに、笑顔で振り向くマクリは、当然であるかのように答える。

「村の皆は、贅沢を好まないんだよ。何せ、生まれた時からこの環境で育っていたもんだから、一生この景色を残したいと思っているもんで」

「そう、なのか。……良い村だな」

「ありがたい言葉、早速仲間内に伝えておくよ」

嬉しそうに微笑むマクリは、数回頷いて前へと向き直した。それを見たシヴァは、周囲を一瞥して、良い村だと再度思う。次いで、後ろへと振り向くと、同じく周囲の光景を見渡している三人の姿がある。

……三人？

彼女はその数字に疑問を持ち、もう一度人数を数えた。だが、人数は変わらず三人。

ティファとクレア、それとネプチューンだけだ。

「……カイとシルクが居ないぞ!!」

突然の大声は周囲の動きを停止させ、一瞬の静寂を生んだ。しかし、そんな事は気にせず、シヴァはマリクの方を向く。

「すまないが、連れが居なくなつた！ 探しに行くからここで待っていてもらえないか!？」

「ん？ いやいや、それなら俺が行くよ。君は……ほら、その酒場に居ると良い。情報収集なら酒場でつてね」

マリクが指で示す方向には、木造の大きな酒場があった。

それを教えた彼は、じゃあまた後で、と言って小走りどこかへと消えて行つた。

シヴァはその後ろ姿を見届けた後、ティファを見る。

「情報収集、と言っても何を知る？」

「とりあえずは、ユウの関係者を探しましょう。彼の自宅の場所が分かれば、グラルスに戻る手掛かりが、見つかるかもしれない」

どういう事だ？ と問うシヴァに、ニヤリと笑みを作ったティファ

アは、答えた。

「ユウが仕事で関わった内容の中に、他世界に干渉する方法に関する何かがあるかもしれないでしょ？　だから、彼はグラルスに行けたのかもしれないし。とりあえずは、資料探しよ」

酒場の中は薄暗く、酒の匂いが充満していた。

また、丸テーブルが均等に置かれた席には、その酒を飲む者が多く居り、それぞれが酒の席を楽しんでいた。

二階席を含め、そこから笑い声や怒鳴り声が上がリ、グラスとグラスがぶつかるガラス音も多々聞こえる。

酒を浴びるように飲み、酔い潰れる者も、中には数人居た。

シヴァ達四人はその中を歩き、カウンターへと向かっていた。

だが不意に、クレアの腕が客に掴まれた。

「おいおい嬢ちゃん、頭のそりやなんだ。バニーガールの真似事か？」

頬を赤くしてかなり酔っているであろう男は、気味の悪い笑みを浮かべながら言った。

彼の行動につられて、同じ席の男達もテーブル越しに身を乗り出す。

クレアはそれを無視し、男の手を振り解いた。

だが、男はしつこく詰め寄り、尚も腕を掴んで来る。

「連れない猫ちゃんだなあ。どうだい？　これから俺とにやんに

や　　ぶぐつ！？」

刹那、クレアの爪先による蹴りが、男の頬に直撃した。

それにより、彼は勢い良く吹き飛び、隣の客を巻き込んで豪快にテーブルを引っ繰り返した。

地に着く轟音と、ガラスの破碎音が響き渡る。

一瞬、辺りは静まり返った。

動きが止まり、グラスを傾けていた者は、中身が零れていても止まっている。

そんな中で、ネプチューンは肩を竦めて溜息をついた。

「なんだっちゃあんたら。この村に来て、もう二度も時間止めちゃうがな。わっちゃ知らんぞ」

言い終えたのと同時、騒ぎが起こった。

吹き飛んだ男と同席の者達と、巻き込まれた者達がクレアに殴りかかったのだ。

彼女はそれらの猛攻を上手く避けながら反撃し、一人ずつ襲い来る者を床に叩き伏せる。

千切っては投げ千切っては投げ、という言葉が似合う光景だ。

それを呆然と見ているシヴァとティファは、共に溜息をつき、顔を見合せて頷く。

まるでアイコンタクトでもとったかのように二人は歩き出し、カウンターへと向かった。

カウンター前に備わっている椅子に座った二人は、もう一度溜息をつき、正面を見る。

すると、丁度そこには黒いタキシードを着た店員と思わしき女が立っていた。

彼女は酒場に似合わないくらい若く、整った顔立ちをしており、濃い青色の前が長い短髪から覗く目は、澄んだ水色だ。

その目の視線は、二人の後方で起きている騒ぎを見ている。と、その時、酒場内の空気を震わす程の歓声が響き渡った。

何事かとシヴァが振り向けば、クレアが多数の客に揉みくちやにされながら、勝利を称えられていた。

どうやら、悪い騒ぎはすぐに治まったようだ。変わりに、別の騒ぎが起きている訳だが。

その事に安堵したシヴァは、カウンターの方へと向き直し、店員の女に声を掛ける。

「内の者が失礼したな。是非とも、お詫びに何かさせていただきたい」

言いながら、頭を下げたシヴァに、彼女は慌てて否定の言葉を掛ける。

「いえいえ、謝らなくて結構ですよ。この店では、しょっちゅうある事ですので。……それにしてもお強いですね、彼女」

「あ、ああ、それがあいつの取り柄みたいなものだからな、多分。つと、申し遅れた。私はシヴァだ。見ての通り旅の者だが、ちよつと聞きたい事があってここに来た」

見ての通り、ですか？　と言いながら笑う店員の女は、小さく会釈した。

「それじゃあ私も自己紹介しますね。私はリリィ・ウラハスです。ここは情報が集う酒場。何なりとお聞き下さい」

「ああ、それで　ん？　ウラハス？」

聞き覚えのある名に、シヴァは眉を潜めた。

それは、隣に居るティファも同じだ。



「……失礼だが、ユウ・ウラハスの家族か？　もしや妹か姉？」

問いに、意地悪そうな笑みを見せたリリィは、首を左右に振った。

「いいえ、私はユウの妻です」

## 第六十二話：先に來ていた男

雲一つ無い青空の下、活気あるセイル村内で、少年少女は迷子になっていた。

初めて来た村で、所持金も無く、腹を空かしている二人は、どこに行くでも無くただ歩いていった。

いつまで経っても鳴り止まない腹に嫌気をさしつつ、シヴァを探す。

「カイィ。こんなことなら、寄り道しなきゃよかったねえ……」

言いながらシルクは、先程寄った店の事を思い出す。

綺麗なシルバーアクセサリーが売られていた店。

その店先には、シルクが腕に付けている赤い腕輪に似た物が置かれていた為、つい足を止めてしまったのだ。

だが、カイは笑顔で、シルクに返事をする。

「いや、シルクの所為じゃねえよ。俺がそこで一緒になって足を止めなければ良かったんだ」

「はあ……」

俯く二人の溜息が、虚しく地面に落ちる。

だが、そんな二人の前に、不意に人影が被った。

誰かと思いい顔を上げれば、そこには安堵の表情を見せるマクリの姿があった。

その事に二人は驚きの声を上げ、同じく安堵の表情となった。

「良かったあ、マクリさんに会えて。一時はどうなるかと思ったよ」

「俺こそ、びっくりしたな。いきなり、君達が居なくなっただけでシヴァが驚くんだから」

そう言って笑い、二人を手招きした。

「さ、彼女達が待っているから、急ごうか」

マクリは二人の返事を聞く前に歩き出し、二人をはその後が続く宿屋を過ぎ、酒場を過ぎ、民家を過ぎてまだ歩く。

次第に畑が見え始め、それさえも過ぎて行く。暫く歩くと村の端に近付き、そこでカイが問い掛けた。

「あの、マクリさん。もうすぐ村を出ちゃう感じだけど、シヴァ達は村を出ちまったのか？」

問いに、まくりは答えない。

ただ歩くだけで、振り向きもしない。

やがて三人は村を出、鉱山の入口に差し掛かった。

銀が取れるとして有名な鉱山も、どうやら昼時には誰一人居ないらしい。

故に、人気の無いその場所を見て、ようやくカイはマクリを疑った。

「マクリさん。シヴァ達、ここに居ないよね？」

「……当たり前だ。お前とあいつらを分散させるのが、目的だから」

言いながら、マクリは振り向く。

同時に、顎に手を添え、爪を立てて一気に引っ張った。

すると彼の顔の表皮は簡単に剥がれ、その下には全く別の顔があ

った。

ニヤリと、企みに満ちた笑み。

「まさか、こんなに上手くいくとはな」

「お前は確か、ヘルの間頭の！」

「ヘルの主人、フェンリルだ。覚えとけよ？ あの世界でな！」

刹那、彼の服が中心から一気に裂ける。

その中からは、重火器を持ったフェンリルの手が伸び、カイに照準が向けられた。

突然の事にカイは一瞬、混乱した。

だが、咄嗟に真横にある岩肌に左手を押し付け、フラグメントを発動した。

行方は、岩肌から直接通じている、地盤の活性化。

未来へ向かう時間の早送りは、地盤の動きを早め、揺れとなって地上に伝わる。

同時、その揺れは鉦山の入口に影響を与え、フェンリルの前を塞ぐようにして瓦礫が崩れ出した。

彼が内側に居たのは、ミスだったのだ。

それに救われたカイは、シルクの手を取って来た道に戻るようについて走る。

「え！？ マクリさんどうしちゃったの！？」

「敵だった、あの人は敵だったんだ！ とにかく逃げるしかない！」

全く状況が掴めていないシルクに、最も簡単な情報を与え、一気に駆ける。

背後から聞こえるのは銃声。

同時に、二人の数歩後ろの土に穴が空き、土飛沫を上げている。

止まれば死だ。

だが、不意にカイは思った。

このまま村に向かうと、村の人達を巻き込んでしまうんじゃないか、と。

「……！シルク。先に行って、シヴァ達を探してくれ！俺は、ここで食い止める！」

「そ、そんな！むちゃ　っ！！」

驚くシルクの視線の先、土飛沫が目前へと迫っていた。

だから、彼女は前へと出る。

土飛沫の方へと。

「シル　」

「？フォース・フィールド？！」

叫びながら、左腕の赤い腕輪に触れた右手を正面に翳す。

すると、彼女の手を中心に光り輝く円形の、半透明なガラスの壁が出現した。

視覚に捉えられる程のそれは、土飛沫を起こす元である銃弾を防いだ。

いくつもの銃弾がガラスの壁に衝撃を与え、しかし割れる事は無い。

魔術を防ぐそれは、魔力で構成された銃弾に反応し、着弾と同時に打ち消しているのだ。

もちろん、魔術の発動者である彼女は、銃弾が魔力で出来ている

事など知らないが。

「私も戦えるんだよ。魔術はまだまだ未熟だけど、それでも！」

途中、命中する銃弾の数が増えた。

見れば、正面からフェンリルが迫って来ていた。

距離にして、約三十メートル。

彼はその距離を、両手に持つ重火器をフルに撃ちながら、走って詰める。

だが、その時だ。

不意に、二人の横を駆け抜ける風があった。

それは人影であり、俊足のそれはフェンリルの懐へと飛び込む。

刹那、二本の刃をフェンリル首目掛けて薙いだ。

彼はそれを、身体を反らす事で避けたが、重火器を真つ二つに切断され、使い物にならなくなる。

「チツ！　なんだこいつは！」

突然来たそれに向かって大声で怒鳴りながら、バックステップで距離を取る。

彼の視線の先に居るのは、頭部に猫耳を生やした女、クレアが両手にダガーを持って立っていた。

そんな彼女を見て、カイはフェンリル以上に驚く。

「ク、クレア！？　なんで助けに来れたんだ！？」

「獣の勘よ。少し前から鳥肌が、いえ猫肌？　まあ、そんな感じが総立ちだったの。で、銃声が聞こえたから何かと思えば、この有様よ」

ユウが来たかと思っただじゃない、と文句を追加しながら、両手の

ダガーを構える。

正面に居るフェンリルを、睨むようにして見やった。  
対するフェンリルは、口元に笑みを浮かべる。

「……なんだ、獣人を飼っていたのか」

「勘違いしてもらうと困るわ。私は飼われているんじゃない、自分の意思で味方をしているの」

「つまりは、敵か。だが、残念な事に、お前やシヴァに対抗する装備じゃないんだよな」

言って、拳の形にした両手を上げ、降参の意を示す。  
するとクレアは、嬉しそうに微笑を漏らした。

「随分とすんなり降参してくれたわね。何？ 素直に殺されてくれるの？」

「いいや、違うな。お前は俺を逃がす。そう、逃がす事になるんだよ」

告げるのと同時、開かれた彼の手から、棒状の何かが落ちた。

刹那、強烈な閃光と炸裂音が放たれ、その場に居た者の視覚と聴覚を同時に奪った。

キーンツという音が三人の耳に響き、暫し頭を抱えさせる。

「なんだなんだなんだー！」

「何にも見えないよぉ」

一瞬の出来事に戸惑うカイとシルクは、かなりパニックになっている。

しかし、クレアは冷静にそれが止むのを待ち、回復した視覚でフェンリルを探した。

だが、既にフェンリルの姿は無く、その場に残っているのは三人だけだった。

その事に肩を竦めるクレアは、振り向いて二人を見る。

「全く、苦勞するのね、貴方達は」

言って、苦笑。

対する二人は罰の悪そうな表情で、眉尻を下げた。

そんな二人を見てクレアは、とりあえずつと言いながら歩き出す。

「シヴァ達の下に行きましょう。面白い出会いがあつた訳だし」

彼女の台詞に、二人は顔を見合わせて小首を傾げる。

しかし、すぐに前へと向き直して、先に行くクレアの後を追った。



## 第六十三話：仲間の自宅へ

「ええ！？ ユウのお嫁さん！？            っと、おわあ！」

驚き、勢い余って手に持っていたコップの中身を零してしまったカイは、カウンター上に広がった水を慌てて拭きだした。服の裾で。

それを見たシヴァは拳を彼の頭部に落とし、罰を与えておく。

「少しは落ち着かぬか、馬鹿者。ユウとて既に青年。配偶者の一人や二人、居てもおかしくはないだろう」

「シヴァちゃん、二人だなんて普通じゃないよ……。にしてもお嫁さんかあ。なんか、羨ましいなあ……」

両手の平を合わせて、目を輝かせているシルクは、カウンターの向こう側に立つリリイを羨ましそうに見ていた。

対するリリイは、どう答えれば良いのか分からず、ただ微笑を浮かべているだけとなっている。

今、一行は酒場に集合していた。

とつくに沈静化していた騒ぎの対象となったクレアは、丸テーブルの客席にてネプチューンに注がれる酒を飲んでおり、頬が赤くなつて大分酔っている様子だ。

残る四人は、全員がカウンター席にて、端からティファ、シヴァ、カイ、シルクという順で座っていた。

ちなみに彼らは飲むのは、純正の真水だ。

唯一、酒を飲んでいるのはクレアとネプチューンだけである。

「それでだ、リリイさん。話を続けるが、この村にあるっていうユウの自宅に案内してもらっても良いか？」

「さん付けで呼ばないのであれば、もちろん良いですよ。どうせまだ帰って来ないでしょうし。ですが……」

「ですが？」

「あの人は貴方達と出会い、別れる時、どこへ行くと言ってしまったか？」

問いに、シヴァは一瞬、言葉を詰まらせた。

理由は簡単。

彼女は、リリイに自分達が他世界から来た者だと伝えていないからだ。

自分達は旅の者で、その途中に出会ったユウに再度会う為、手掛かりを探している。

そんな、嘘の理由を伝えていた。

もちろん、他世界などそう簡単に信じられる物では無いと分かっているからこそ、言葉なのである。

だからこそ、シヴァは言う。

更なる嘘を。いつか真実を明かす事になるであろう嘘を。

「仕事を、仕事を続けると言っていた。だから、手掛かりとなりそうな仕事の資料を、自宅で探させてもらいたいのだ」

「そう、ですか……。分かりました。それでは、ちょっと準備してきますね。出来次第、ユウの自宅に向かいましょう」

「店の方は良いのか？」

「ええ、大丈夫です。他の従業員も居る訳ですし、問題はありませんよ」

それじゃあまた後で、と告げたりリイはカウンターの奥へと姿を消し、残った四人は顔を見合わせた。

安堵の吐息を揃って一つずつし、水を一口飲んだティファが口を開く。

「……ここからが、本番ね。数多くか、もしくは数少ない資料を隅々まで読み、他世界干渉に関する資料を見つける。それでもし、無かった場合は」

「振り出しに戻っちゃうんだね。その時は、何か策があるの？ ししょー」

「あると言えばある、無いと言えば無い。そんな状態ね。でも、今はユウの自宅に手掛かりがある事を祈りましょう」

苦笑混じりの言葉に、他の三人は浅く、カイは数回頷いた。  
そして待つ事、数分。

タキシード姿からフリル付きのロングスカートを胸元まで上げた姿で現れたリリイに案内され、酒場を後にした。

向かった先は村の端にある大きな二階建ての一軒家。

そこはリリイがユウと共に暮らしている場所であり、文字通りウラハス家である。

一行はその中へと、案内されるがままに入って行った。

ぞろぞろと、列を成して廊下を歩く一行は、リリイを先頭にして二階へと到着した。

続いて奥へと歩いて行くと、一つの戸に行き着く。

ここが夫の部屋です、と言いながらリリイは戸を開け、中に全員を案内した。

中は八畳程のスペースがある書斎で、天井まで届く大きな本棚が幾つもの壁に沿って置かれていた。

中央に置かれたデスク上には数冊の本が置かれているだけで、他には何も無い、図書室と呼んでも良い空間である。

ネプチューンはその光景を見て、思わず言葉が零れる。

「こ、こんの中から資料を探すんかいな……。何日掛かるか分かったもんじゃないっちゃ……」

同時、溜息が漏れる。

だが、その言葉に、予想外の返答が返って来た。

「いいえ、ここにはお探しの資料は無いと思いますよ」

言ったのはリリイ。

彼女はそう言った後、並んでいる本棚の前に立ち、端を掴んだ。

次いで、軽く引いたその瞬間。

大きな本棚は、まるで重さが無いかのように、軽々と無音で床をスライドして、元あった位置からずれた。

その光景に驚く一行はしかし、本棚の向こうに見えた下りの階段を視界に捉えた。

微かな光を放つ照明に照らされたその階段を、リリイが先に降りていく。

一行もその後を追うように、階段を降りて行った。

果たして、彼らの目に映ったのは、上の書斎よりも広い、窓の無い部屋だった。

北と階段のある西の壁際には、無機質な色をしたミニサイズのロッカーが敷き詰められており、蓋が透明なそれは中の物が容易に確認出来る仕様となっている。

また、南の壁際にはまるで牢屋のようなロッカーに、幾つもの重火器が収納されていた。

長く細い物、短く太い物、人の手に収まる程の物など。

それらを隔てる網状の蓋には南京錠が結び付けてあり、容易に開く事は出来ないようになっていた。

まるで、誰にも使わせないように。

最後、東の壁際にある机の上には、一つの電子端末が置かれていた。

正方形の、薄い板のようなそれへと、リリイは近づいて行く。

「重要な情報は、この端末に収められていると思います。また、このロッカーに入っている資料は、端末内の内容とほぼ同じの筈です」

言いながら、彼女は端末の電源を入れ、数多くのキーが埋め込まれたボードを操作する。

カタカタカタ、と鳴る音は室内に響き、それに興味を持ったシヴァ、カイ、シルクの三人は、後ろから覗き込むようにして電子端末を見た。

画面の中に流れるのは、数多の記号。

だが、それが何の作業なのか到底分からない彼らは、ただ無言でキーを打ち、鳴らす。

「ちなみにネプチューンさん。それらを見るのは構いませんが、触らないようにして下さいね」

不意に、顔どころか視線さえも変えずに言ったりリリイの言葉は、重火器の入ったロッカー内に人差し指を差し込もうとしていたネプチューンに放たれたものだった。

すると彼は、両手の平を高々と上げて、触らないという意味表示を見せた。

隣に居たクレアも、一応として同じ動作をする。

それが作業中のリリイに見えているのか見えていないのかは分か

らないが、彼女は無言で頷いてみせ、微笑を浮かべた。

などとしている間にも画面内の記号は流れ、最後に？ Login  
？という文字が残った。

彼女はそれを、何の躊躇も無しにEnterキーを押し、Login  
なる動作を実行する。

刹那、画面内に出て来たのは無数の文字。

そして、同時に新たなウィンドウで出現したのは、それぞれが名  
前の違う幾つものファイルだった。

リリイはそれを見て、安堵の吐息を漏らす。

「……これです。これらが、ロッカー内に入っている資料をデータ  
化した物です。ちなみに、名前の横にある記号が、同じ記号のある  
ロッカーに入っている資料となります」

説明をしながら彼女は振り向き、ロッカーの方へと指差した。  
その指の先には、既に資料に目を通していているティファの姿があっ  
た。

彼女が開いたのは？ W - 5？のロッカー。

だが、開いたロッカーなど関係無く、リリイは指示を出した。

「私はこれから、皆さんの提示するキーワードを使って、資料内に  
検索をかけます。それに関連したワードが含まれている資料を発見  
した時、記号をお知らせいたしますので、資料の方を取り出して下  
さい」

「ほう、つまり虱潰しじしつぶしに探すよりも、少しは手間が省けるという事  
か。分かった。皆、早速作業に取り掛かるぞ！」

「それで、早速ですが最初のキーワードは？」

「そうだな……？ 他世界？ という言葉の入った資料を探してくれ」

他世界ですか？ と独り言のように呟くリリイは頷き、キーを打

ち始めた。

かくして、膨大な量の資料の中から、特定の情報を探し求める作業が始まった。

それは終わりが明確では無い作業だが、彼らは行動する。  
ただただ、元の世界へと戻る術を探す為に。

## 第六十四話：潜入調査依頼

資料探しの作業は、既に二時間経過していた。

その間に彼らは関連する資料とそうでない資料を大まかに仕分ける作業を終え、今はその中から更に関係する資料を探しているところだ。

電子端末を操作していたリリイもまた、実物の資料に目を通して  
いる。

彼らが探すキーワードは、？他世界？と追加で？極秘任務？？潜入？の三つだ。

最後の一つである？潜入？はカイ曰く、出会ったばかりの頃にユウが、施設に潜入していたと言っていたのを思い出したからだそう  
だ。

それにより、目標はかなり絞る事が出来るが、それでも資料は多い。  
い。

と、その時だ。

不意にティファが声を上げ、近くに居たシヴァを呼んだ。

「これ、どうかしら？ ほら、未完任務扱いになってるし」

「未完任務？ ……しまった、その手があったか！ 今まで極稀に未完任務があったが、その全てに報告書があった。しかし」

「この資料には報告書が無い。つまりは、報告さえも出来ていない。だって、この世界から居なくなっただから……」

その結論に至った二人は、大きく溜息をつき、膝から崩れて床に両手をついた。

床に散乱した資料が音を立てて舞い、皆の視線を集める。

「盲点だった。何をやってたんだろうな、私達は……。 皆、作



業中止だ！ それらしき資料を見つけたぞ！」

簡単に見つけられたであろう方法は、敢えて言わないでおこうと内心で固く決意したシヴァは、身体を起こして皆を一瞥する。

ティファも同じく起き上がり、手元の資料に目を落とした。

任務名は、北部廃墟都市周辺における不審な動きの調査と施設の発見、と書かれている。

そして、名の左側にある任務完了印と書かれている枠には印が無く、未完である事を表していた。

内容をシヴァが読み上げる。

近日、エニグマ戦争時にエニグマから襲撃を受け、廃墟となった北部の都市周辺にて、所属不明の武装部隊が確認されたとの事。しかし、都市の周囲は荒野となっている為に、偵察部隊の接近が出来ずにいる。

そこで、潜入と暗殺に関して好評のあるユウ・ウラハスに任務をお願いしたく、連絡させていただいた。

依頼する任務概要はこうだ。

潜入までの方法は全てそちらに任せるが、潜入に成功した後は手順通りに事を進めて貰いたい。

まずは都市内に展開している部隊の数と配置を確認。

次いで、使用中の施設を見つけ次第、内部にて施設の使用目的を探って貰いたい。

その中で、もし目的が驚異的な物であり、相手が少人数だった場合は、抹殺を願う。

なお、我々の偵察部隊による遠距離からの調査では、化学実験棟にて一定の間隔で閃光が起きているそうだ。

我々の推測では、兵器を開発しているのではないかと読んでいるが、真相は定かでは無い。

だからこそ、ユウ・ウラハスに任務遂行をお願いしたい。

良い返事を待つ。？承諾？

資料は、ここまでだった。

最後にある承諾印は、依頼を受けた証である。

つまりこれは、探していた資料である事がほぼ確定という事になる。

一通り頭に内容を入れた皆は、顎に手を添えたり腕を組んだり、それぞれの動作を行う。

数分経ち、シヴァが組んでいた腕を解いて口を開いた。

「決まりだな。私達はこれから、その廃墟都市に向かう。異論は無いな？」

問いに、全員が頷いた。

次いでシヴァも、彼らの反応を見て頷く。

そして、リリイの方へと向いた。

「そういう訳だ。私達はこれから、ユウの手がかりとなる場所へと向かう。協力、ありがとう」

「あ、そういう事でしたら」

言うリリイは、思いついたかのように書斎机に向かい、引き出しを引いた。

その中にはスイッチがあり、彼女はそれを押す。

すると彼女の背後にあった壁がスライドし、通路が現れた。

それを見てカイは、スゲー！ 男の浪漫だー！ と騒いでおり、

その様子にリリイは微笑みつつ、皆を奥へと案内する。

短い通路を抜け、出た先は格納庫だった。

また、その中央には機体が一機、置かれている。

カイとシルク、ネプチューンにクレアは、それを見て一斉に声を上げた。

「ユウが乗ってた奴だ！」「まさかのアサルト！」

「あ、知ってましたか。説明する手間が省けましたね」

「いや待て、私だけ蚊帳の外だ。なんだこれは？」

焦りながら問い掛けるシヴァは、横から説明しようとするカイに片手で断りを入れる。

対してリリイは、片手の平でアサルトを指しながら、説明を始めた。

「これは、汎用航空機？アサルト？です。近年、民間技術会社が発表したもので、空を飛ぶ事が出来る乗り物です。まだ流通はしていないので、見た事の無い人が居て当然ですね」

「そのようなものが、何故ここに？」

「前にユウが、これを開発した民間技術会社の依頼を受けた際、報酬として金銭の代わりに頂いて来たそうです」

格納庫は空だったので、ここに置いてあるんです、とリリイは付け加える。

対し、シヴァはその説明で納得したのか、三頷いてアサルトを見据える。

アサルトの大きさはかなりのもので、シヴァ達が見上げる程の物だった。

グラスにてネプチューンやクレアが乗ったアサルトよりも、大きな物だ。

形は、大まかに言えば三角形で、表面は銀色のフォルムが前方から後方にかけて、滑らかな曲線を描いている。

後部には板状のハッチが斜めに降りて来ており、そこが搭乗口となっている。

「これで向かえと言うのか。移動が楽になりそうだな。何から何ま

ですまない、感謝する」

「いえいえ、お気になさらずに。その代わり、私も連れていって下さい。多分、この中で操縦出来るのは、私だけだと思うので」

一瞬、シヴァは戸惑った。

だが、考える暇も無く、ネプチューンの声が放たれる。

「良いんじゃないかっちゃ？ 危険を顧みず、夫を迎えに行く妻つてのは、素敵ぜよ」

「あんたが素敵つて言つと、鳥肌が立つわね」

「あんさんの場合、獣肌ちゃうん？」

「猫肌よ。じゃなくて、私は一応人間っ」

敢えて漫才は無視した。

しかし、シヴァはネプチューンの前半の言葉を聞いて、答えを出した。

それは、頷きであり、

「それでは、よろしく頼む。リリイ・ウラハス」

同行許可の言葉だった。

リリイが自宅の戸締りをしに書斎を出た頃。

カイ達一行は書斎内に散らばった資料を片付けていた。

そして、その作業が終盤に差し掛かった頃、ティファが唐突に一つの提案を出した。

「ねえ。私、この世界で見たい所があるから、アサルトを借りても良いかしら？」

その突然の言葉に、資料を整えていたシヴァが驚いた表情で顔を上げる。

どうしたのだ、急に。

ティファの中で、無言の彼女がそう言ったように思えた。

だから彼女は、その訳を言う。

「ここから南西に向かった方角に、キルバスという村があるの。私の故郷よ。もう、壊滅していて誰も住んでいないけど、最後に見ておきたくて」

でも、

「その村に行くには、山を越えなければいけないの。だから、空を飛べるアサルトを貸して欲しい……！」

「……むう。納得はいくが、如何せん私達の移動手段がな。私達も、急がなくてはいけない。……リリイに相談してみるか」

「そこで断らないシヴァちゃんさっすが！」

称賛するシルクは、両手を挙げて喜んだ。

シヴァはそんな彼女を見て照れ臭くなりつつ、作業を再開しつつリリイが来るのを待つ。

作業が完了して暫くし、戻って来たリリイに事の説明をすると、分かりましたと答えた。

「でしたら、キルバス村に向かわない人達は、裏手に停めてある車を提供します。運転方法は覚えれば簡単ですよ。ご案内します」

言いながら階段に足を掛けたリリイに、カイとシルクがついてい

った。

そしてシヴァは、ティファと向かい合って微笑する。

「何の用かは聞かんが、早めに終わらせて合流するのだぞ？」

「分かつてるわよ。大丈夫、すぐに終わるわ」

ハイタッチの音が響く。

次いで、シヴァはアサルトを見上げているネプチューンとクレアを見据えた。

「お前達はどうするのだ？ まだそこに居るという事は」

「ん。わっちらはティファについて行くっちゃ」

「私も、カイを守る前にユウの妻を優先するわ」

告げ、彼らはまたアサルトに視線を戻した。

それを見てシヴァは踵を返し、リリイの後について行く。

四人の姿が見えなくなり、暫くして。

アサルトを見上げていたネプチューンは踵を返し、ティファの下へ歩み寄った。

口の端を吊り上げ、企みのある笑みを見せながら。

「シヴァ達は気を遣ってか理由は聞かんかったけど、残念ながらわっちは自分優先主義の商人だっちゃ。……何しに行くんぜよ？」  
「ただの、里帰りよ。それと、私の所為で滅んだのだから、直接謝罪にね」

苦笑と共にやや俯き加減になるティファにネプチューンは、分かったぜよっと言って、それ以上は何も言わなかった。  
そして、彼はクレアの方へと早歩きで近寄る。

「クレア、先にアサルトン中入って、色々タイジくるっちゃ！」  
「いや、それはさすがにマズイでしょ　　ってこら、待ちなさいって！」

騒ぎ、揉みくちやになる二人。

その光景を見て、ティファは思わず笑みを溢した。  
平和ね、と呟いて。

## 第六十五話：襲撃者、再び

村から離れた、辺り一面が荒野である場所を一台のトラックが走っていた。

大量の砂を巻き上げ、エンジン音を響かせるそれには、三人の搭乗者がいた。

ハンドルを握って運転をするシヴァと、隣の助手席にシルク、そして後部座席には二人の間から顔を出すカイが乗っている。

シヴァはやや緊張気味に、反対にカイとシルクは楽しそうな笑い声を上げていた。

「ま、まさかこのような物があるとは……。地上の移動手段は馬車だけかと思っていた」

「確か、昔は主燃料となっていた液体燃料が必要な乗り物だっけってたね。今は燃料が取れないから、誰も乗らなくなったとか」

「まあ、それよりも驚いたのは、記憶石という物が賢石の代わりとなっている事だな」

「俺が驚いたのは、先生がこれをもう乗りこなしているってところだぜっ」

グツと親指を突き出すカイは無視された。

現在、彼らはティファ達と別行動で、廃墟都市へと向かっていた。その際、道を分らないとシヴァが言ったのだが、ひたすら北を目指せば着くと言われた為、案内役は乗っていない。

たった三人で、というのは心もとなかったが、できるところまで接近し、危なくなったらすぐに撤退する、という作戦を立てていた。

「にしても、どこまでも続くなあ、荒野。景色に変わり栄えが無くてつまんねえよー」



駄々を捏ねるカイは、周りを見渡す。

しかし、視界に入るのはほとんど何も無い荒れた大地だけだ。また、シルクも彼に便乗して見渡すが、何も無い。

だがその時、彼女は景色の変化に気付いた。

トラックの進行先、荒野の果てに巨大な建造物の群が見える。廃墟都市が見えて来たのだ。

「シヴァちゃんシヴァちゃん！ 目的地が見えてき」

刹那、車内に衝撃が起きる。

同時にシヴァが掴むハンドルが大きく揺れ、コントロールが困難になった。

彼女はそれを必死で制御しようとするが、二度目の衝撃が起きると車体は向きを大きく変え、横に滑って傾く。

「お前ら！ 座席にしっかりと掴まれ！」

指令を出す大声が聞こえた後、車体は傾き続け、そして横転した。金属の軋む音と轟音、ガラスの破碎音が響き、土埃が巻き上がる。倒れてもなお、勢い任せに滑るトラックは、数メートル滑ったところでやっとな停止する。

横向きに倒れた上体の車体は破損が酷く、また原因になったと思われるタイヤは破裂していた。

しかし、三人が乗っていた内部からは光が漏れており、それはシルクによる魔術をクッション代わりにした結果だ。

通常、魔術や魔力で構成された物質のみを防ぐ事が出来る？ フォース・フィールド？ だが、彼女が今回発動したそれは、ティファオリジナルのものである。

高濃度の防衛フィールドを構築すると同時に、周囲に付着性の

ある魔力を放出する事によって、無理矢理魔力に干渉している状態にし、防がせるという方法だ。

欠点としては、打ち消すのでは無く防ぐだけであり、また消費魔力量がかなりの量である為に、連続して使用は出来ない。

だが、現状は使うべきだとシルクは判断し、発動した。

ともあれ、それにより傷一つ負わなかった三人は、魔術の発動が切れたのと同時に車内から這い出て、外へと出る。

刹那、

「ッ！？ 伏せる！」

シヴァが言葉を放ったのと同様、抜刀した刃に衝撃が当たる。キンツと金属同士が当たる音が聞こえ、数刻差で銃声が響く。音の遅れからして、数キロメートルは離れているだろう。

三人は咄嗟に横転するというトラックの下側に当たる場所を背に隠れる。

しかし、銃声は止まらない。

次々と放たれる銃弾は、全てトラックに直撃し、金属音を響かせる。

まるでトラックを穿とうとしているかのように。

「な、なななんなんだぁー!？」

「奇襲だ、馬鹿者！ 急いで武器を準備しろ！」

命令通り、カイは武器を組み立てる。

完成したのは、一本の両剣。

それを構え、戦闘の覚悟を決める。

「相手、誰だか分かる？」

辺りを見渡しながら問うシルクに、シヴァは少し考え、答える。

「フェンリルとかいう男も有り得るが、この世界には銃が山ほどあるからな。断定出来ないのが残念だ」

そう言った瞬間、シヴァはふと何かに気付いた。

意識を何かに集中し、後方へと振り向く。

「風が、動く……右だ、来るぞ！」

同時、それが来た。

トラックの前方側から飛び出して来たのは、人影。

その人影は両手に短機関銃を持っており、銃弾が放たれた。

だが、一足早くシルクが発動した？フォース・フィールド？がそれを防ぎ、打ち消す。

次いで、銃撃が止むのを見計らって彼女の横から飛び出したカいは、両剣を構えながら一気に接近した。

再装填は、間に合わない。

そして、二人は激突する。

「おわあ、ヘルか！」

「御機嫌よう、カイ・エディフィス。決着のお時間です」

カイが振り下ろした刃は、クロスした短機関銃により防がれ、鏝迫り合いに似た状態となる。

そのまま硬直が続くと思われたその状況は、しかしシヴァの蹴りで終わる。

右腕に蹴りを入られたカイは横に吹っ飛び、刹那、頬を銃弾が掠った。

表情が青ざめる。

だが身体を捻り、受身を取ってすぐに立て直し、シヴァの剣戟を

紙一重で避けるヘルへと迎撃行動に移った。

一方、二対一は分が悪いと踏んだヘルはバックステップで後退し、距離をとった。

同時、廃墟都市の方角へとハンドサインを送ると、身構え長剣を振ったシヴァ目掛けて銃弾が放たれた。

今度は連続して放たれるそれをシヴァは全て叩き斬り、トラックの影へと退避する。

カイも同様に一時退避し、ヘルと睨み合いとなった。

「フェンリルが厄介だね」「フェンリルが厄介だな」

言葉の重なった二人はアイコンタクトを取り、武器を改めて身構える。

一方、ヘルは短機関銃が破損している事に気付き、投げ捨て、新たな武器を取り出した。

それは、侍女服の背に隠されていたであろう物で、大きめの機関銃だった。

黒光りしたそれはゴツゴツとしており、側面からは銃弾の束が飛び出していた。

また、その束はヘルの袖から出ている為、残り弾数は他人に把握出来ないようになっていた。

新たに出された武器を見てギョツとしたシルクは、大急ぎで？フオース・フィールド？を展開する。

ほぼ同時、銃弾の雨が来た。

先程よりも耳に響く重い銃声に、障壁に対する負荷が目立つ銃撃。明らかに、魔術は長続きしない様子だった。

「お、重いよこれ！ 魔力がどんどん持ってかれちゃう！」

「後、どれくらい持つ！？」

「もつ……無理！ 解ける！」

叫んだその時だ。

不意に、カイが前に飛び出して来た。

片手には鉄板を持っており、それを盾にしている。

彼が持つ鉄板には着弾音が絶えず響き、しかし貫かれはしない。

その理由は、彼がフラグメントを発動しているからであり、

「トラックの後ろ、扉が脆かったから持って来た！ 時間を戻し続ければ、無敵の盾だぜい！」

疲れるけど！ と言いつつ、カイはヘルの下へと突進して行った。銃弾が鉄板をへこませ、しかし鉄板自身の時間はすぐに戻って平らになる。

破壊と再生が瞬時に行われる中で、気合の叫び声を上げるカイは、疾走する。

対し、接近する鉄板を見るヘルは、後退し距離を取ろうとするが、機関銃を撃っているが為に姿勢を安定させなければならず、故に素早く動けない。

反動の大きい機関銃は、撃つだけで手元がブレる為、固定が必要だからだ。

距離は縮む。

だからヘルは決断し、機関銃を投げ捨てた。

そして足を一旦縮めて、フロントキックを鉄板にぶち込む。

鉄の拉げる音ひしひしが聞こえ、同時にカイの叫びが上がる。

「おおあああああああ！！ びっくりしたマジで！」

驚くカイはすぐに鉄板から手を離し、スピンをかけながら左へと飛び出して右手の剣を打ち込もうとする。

ヘルの目は鉄板へと向いている為、不意打ちとなる筈だった。

しかし、彼女の右袖から飛び出した短剣に、その一撃は防がれる。

金属音が響き、視線が交差する。

「自動人形の視界を舐めてもらっては困ります」

「なんだよ、耳も目なのか、すげえな！」

違います、という言葉と同時に右足が上がり、カイの武器に絡むようにして振り下ろした。

次いで右袖を離し、そのまま両剣を地面に叩き落す。

両剣の先端が下に、後端が上となった。

その動きに引かれるように、カイは前屈みになり、思わずあつと間拔けな声を出してしまった。

刹那、両剣に載っていたヘルの足が、カイの腹部を直撃した。

モロに入った、とヘルは判断した。

その判断通り、蹴りを食らったカイは武器を手放して後方へと吹っ飛ぶ。

ヘルが抑えている為に放さざるを得なかった両剣を、彼女は一瞥し、カイとは正反対の位置に蹴り飛ばす。

そして、後ろ腰の位置から右手で短機関銃を取り出し、銃口をカイに向ける。

「チェックメイトです。カイ・エディフィスは二度死ぬ、良い響きじゃないですか」

「ま、まだ一度も死んでねえし……まだ死なねえ、よ」

咽ながら喋るカイを見据え、これ以上の会話は無駄だとしたヘル

は、引き金に指を掛け 短機関銃が破碎した。

「 っ！？」

突然の事に驚きつつ、周囲を見渡せばトラックの、先程までカイ達が居た場所には誰も居ないが、しかし空気が歪んでいる。

そこには、確実に何かがあつて、故に左手で取り出した短機関銃を構え、銃撃する。

すると確かに空間は揺れ、大きくなった歪みが薄れてくると、そこにはシルクと、

「大量の手書き魔法陣ですか！？」

言葉と共に、それが来た。

放たれるのは、無数の光の矢。

高速で放たれるそれらは、一直線にヘルへと飛翔し、回避行動を行おうとする彼女を襲う。

スピンやサイドステップを使い、紙一重で避けていくが、しかし確実に光の矢は、少しずつ彼女を穿っていく。

侍女服が破れ、肌が裂け、鮮血が舞い、火花が散る。

そうなりながらも、彼女は短機関銃で銃弾をばら撒き、手書きの魔法陣を破壊していった。

シルクを狙わなかったのは、単に防御魔術が彼女に集中して展開されていたからである。

回避と銃撃の末、シルクの魔法陣は全滅し、ヘルは負傷した。

衣服はボロボロになり、左腕は半壊し、だが頭部はほぼ無傷だ。

回避運動の際、短機関銃を右手に持ち替え、左腕を頭部の防御に回した結果である。

関節から先が穴だらけになり、二の腕も三箇所程抉れたり擦り傷になっている。

左腕を失ったが、頭部を守れたのは上出来だと、彼女は判断した。

そして、シルクと会話をしているカイを見据えた。

「びつくりしたぞ、シルク！ いつの間にあんな凄い技を覚えたんだ！？」

「前に馬車の中で、ししょーに教えてもらったんだよ。手書きは時間かかるし、作成中は隙が多いけどね」

「故の光学迷彩式ステルスの魔術を使った訳ですか」

問いに、シルクは親指を突き立てて笑顔を見せた。

……敵にそのような表情を送れるのは余裕だからか、それともマイペースだから明確な敵意を持っていないのでしょうか。

我ながら可笑しい思考だと、ヘルは内心で呟く。

しかし、彼女から見たカイ達は、今まで見た事の無い変な集団と認識している為、無理も無いだろう。

ただ、確実に思う事は。

……面倒な相手です。

味方であればどれだけ頼もしいものかと考えるが、生憎敵だ。だから彼女は、全力で相對する。

「出し惜しみは無し状況だと、そう判断します……！」

言いながら、ヘルは動いた。

侍女服の縁を掴み、一気に剥ぎ取る。

二回戦目が始まった。



## 第六十六話：見せ付けられる強さ

シヴァは、荒野を疾走していた。

ただ一点だけを見据え、鞘に収めた長剣の柄に手を添えながら。先程まであった銃撃は止み、今は静かだった。

何か策があるのかと思いつながら、まっすぐに廃墟都市へと向かう。そこには必ず、銃弾を放ってきたフェンリルが居ると予想して、だ。

……カイやシルクは無事だろうか。

彼女が心配するのは後方、横転したトラックで起きている戦闘だ。カイが鉄板による防御を行った際、シルクが視覚妨害の魔術を發動したと言った為、彼女の勧めでシヴァはトラックを飛び越え、フェンリル撃退に向かったのだ。

二対一ならば問題無いと思うが、それでも彼女は心配で仕方ない。

いくら戦う力があつたとて、彼らはシヴァにとって生徒なのだから。

そこまで考えて、かぶりを振る。

思考を中断し、索敵に集中する。

刹那、

「っ！」

銃弾が来た。

空気の壁を無理矢理破りながら、音速をもってシヴァへと一直線に向かう。

その位置とタイミングを空気振動から読み取り、彼女は抜刀した。

同時、金属音は響き、銃弾が真っ二つとなって地面に落ちる。

彼女はただ、感覚を研ぎ澄ませる。

風を司る能力は集中する事によって空気の振動を読み取る事が出

来、発砲と銃弾の移動によって起きる空気振動を感じ取る事が出来る。

感じ取るのは、音では無く感覚がリンクした空気であるが為に、銃弾本体と音の間における時間差という概念は無い。

その範囲は障害物が無い現状では数キロメートル先まで届き、故に分かる。

それが、銃弾を叩き斬る事が出来る理由だ。

彼女はその方法を生かし、神懸りな反射神経で次々と銃弾を叩き斬って行く。

長剣を振るう度に金属音が響き、しかし彼女には傷一つつかない。廃墟都市まで、後五百メートル。

一分以内に接敵だ。

その時不意に、銃撃が止んだ。

代わりに生まれるのは、一秒間に数十回という異常な量の空気振動。

来るのは、大量の銃弾だ。

シヴァはそれを、右前に向かって前転し、次いで左足に力を入れて右に跳躍。

着地と同時に軽くクラウチングの体勢を取り、再び疾走する。

銃弾の雨は止まないが、初弾の数百発と比べると精度は落ちていく為、回避運動は容易だった。

彼女だからこそ、だが。

「伊達に元・切り込み隊長の名は持つておらんわ！」

叫び、自らの士気を高め、走る。

戦争を思い出すな、と内心で呟きながら、ひたすら突き進む。

その時。

明らかに、今までとは違う質量の銃弾が飛来している事に気付く、しかし回避は間に合わず斬撃をぶち込むと、

「しまっ　　！」

銃弾が爆砕した。

複雑な構造をしている廃墟都市の一角。

都市入口近くにある観測室内に、口笛が響き渡った。

そこには大量の散らばった薬莢と空气中を漂う硝煙が舞っており、開いている窓際には匍匐体勢のフェンリルが居た。

彼は先程まで撃っていた固定式の重機関銃を止め、片手で担いでいるRPG-7（携帯式対戦車擲弾発射筒）を放り投げた。

金属が床に激突する喧しい音が聞こえ、一瞬眉を顰める。

だが、RPG-7の事など気にせず、彼は手元の望遠鏡を覗き込んだ。

視線の先には黒い爆煙が漂っており、標的の姿は無い。

先程の爆発は確実にシヴァを巻き込んだと、そう確信する。

しかし、次の瞬間。

爆煙の中から、煙に巻かれた人影が飛び出して来た。  
シヴァだ。

超至近距離で爆発を受けた筈の彼女は、無傷だった。

それどころか、着ているスーツさえも無傷だ。

「なんだあいつ!?　無敵かよ、クソツ！」

悪態を吐き捨てながら、重機関銃の引き金を再度引く。

連続した轟音と、飛び散る薬莢の音が室内に響く。

だが、狙った先の標的には、当たる気配など無い。

その事にフェンリルは舌打ちし、また舌打ちし、苛立つ。  
ふざけるな、と内心で何度も連呼し、引き金に掛かっている指に  
より力が入る。

「任務失敗はしたくねえ。そう、もう失敗なんかしたくねえんだ……！」

誓ったんだ、先生と！ と押し殺した声で叫び、引き金から指を  
離す。

即座に立ち上がり、壁際に置かれたガンキャビネットを開き、い  
くつかの銃器を取り出して身に付ける。

最後に、床に置かれた狙撃銃を拾い上げ、窓の外を見る。  
ここからの迎撃はもう無理だとそう判断し、彼は次の行動に移っ  
た。

大量の銃器を見に付けた彼は、部屋を後にする。  
もう、逃げ戦はしないと決めて、次の戦場へ。

廃墟都市の中は、荒れ果てていた。

窓ガラスは一つ残らず砕け散り、木製の物は腐り、鉄製の物は錆  
びてボロボロになり、所々の壁には爪痕や大穴が残されていた。

何十年も放置されていたこの場所は、戦争の被害を訪れた者に見  
せつける。

それはシヴァに対しても例外では無く、彼女は眉を顰めて周囲を  
見渡しながら走る。

……ここまできると、この光景は惨いものだな。  
思い、目を瞑って黙祷する。

多くの者の魂が眠る場所に無断で入った事に対して謝罪し、ここで戦闘を行う事に対して先に詫びて。

そして、正面を向いて長剣を薙ぐ。

同時、金属音が響き渡った。

銃弾を斬ったのだ。

それが来たのは、十時の方向。

彼女はその方向へと加速した。

行く先にあるのは雑貨屋だ。

かなりの広さを持ち、棚が大量に並べられた店舗へと、シヴァは突入する。

刹那、連続した空気振動が起こり、銃弾が彼女を襲う。

それに対し彼女は、斬りと回避を器用に使い分け、確実に発砲者へと迫った。

店の奥、カウンターに居るのは、フェンリルだ。

彼は両手に短機関銃を構え、叫ぶ。

「よく来たシヴァ！ 是非、手合わせを願いたい！」

「今回は逃げ無しなら、その願い……受けてやろう！」

言葉が交差した瞬間、金属音が響く。

それは短機関銃の用心金と長剣が鏝迫り合いになった音だ。

両者、一步も譲る事無く、力を込めて耐える。

睨み合いになり、そして言葉が交わされる。

「全く、本当のところ私達はお前らにかまっている暇は無いというのに」

「残念ながら、俺は契約上お前達にかまってないといけないんだ。

ここで果てる覚悟で、全力でな！」

言葉と共にフェンリルは足を振り上げ、長剣の柄を狙う。

だが、その一撃は長剣をずらす事によって避けられ、空を切った。舌打ちが鳴り、瞬時に足を振り下ろす。

踵落としが再度柄を狙うが、シヴァはバックステップで回避した。同時、短機関銃が構えられる。

引き金に掛かる指に力が入り、発砲される瞬間。

シヴァは左へと素早く跳躍し、回避と同時に棚を蹴り倒した。

大量の雑貨がばら撒かれ、フェンリルに降り注ぐ。

刹那、棚と雑貨を一閃が真つ二つにする。

シヴァが、死角から長剣を薙いだのだ。

だが、フェンリルはそれを身体を仰け反らせる事で避け、後方へと跳躍した。

鼻頭に出来た傷の血を拭い、シヴァを睨む。

二人の間に、真つ二つになった棚と雑貨が派手な音を立て、数年分の埃を巻き上げる。

それは視界を遮る煙となり、しかしシヴァは迷わず突っ込んだ。埃の煙の中を突っ切り、抜けた先には　フェンリルは居なかった。

気配を感じる先は、正面では無く、

「　下かつ！」

「正解！」

スライディングでシヴァの真下に来ていたフェンリルは、今度こそ引き金を引く。

対し、シヴァはそれよりも早く突風を生んで身体を捻り、強引な動きで右へと回避しようとした。

だが数瞬間に合わず、彼女の左脚を銃弾が穿つ。

その痛みに空中で姿勢が乱れ、しかしなんとか上手く着地する。

床に左足が着くと傷から血が噴き出し、シヴァの眉を顰めさせる。

銃弾は太股の中央付近一ヶ所と脛の周囲を三ヶ所程穿ち、抉っており、噴き出す鮮血は少なくは無かった。

しかし、風が彼女の足元に吹き、その血は瞬時に渴いて止まる。

「やっぱり、何か能力を持ってやがるな？ お前。どんなもんなんだ？」

問い掛けるフェンリルは既に身を起こしており、銃口をシヴァに向けている。

状況は、硬直化していた。

数秒の時間が経ち、シヴァは問われた言葉に返答をする。

「……空気だ。周囲の大気を司る事が出来る」

「空気、か。つまりそれを使って傷の渴きを早くしたんだな。だが、頭を潰してしまえばお終いだよな？」

チェックメイトだ、と呟き、引き金を絞る。

刹那、真下から雑貨が短機関銃に当たり、銃口が少し上に反れた。そのまま発砲が起きるが、シヴァが瞬時に姿勢を低くし、その体勢のまま前へと出る。

あ？ と疑問の声を上げるフェンリルは、油断から反応が遅れ、長剣で短機関銃を弾き飛ばされた。

「そん　　！」

な馬鹿な、と言葉を続けるよりも早く、素早くバックステップし、距離を取る。

だが、一度攻めに入ったシヴァの猛攻は止まらない。

形成が逆転し、脚のベルトに収納してあったコンバットナイフで防衛するフェンリルと、低い位置から長剣を連続して振るうシヴァとの剣戟が始まった。

## 第六十七話：かつて少女だった彼女は。

そこは、かつて村だった。

小さいながらも活気があり、何より魔術についての知識が豊富にあった村だ。

サーベルト村と呼ばれたそこには、住む者が皆家系による関係で魔力が常人以上で、魔術師となる者が大半だった。

魔術師と言っても、彼らは戦いの為では無く、魔術師としての頂点、世界の理を知る者ことわりとなる為に研究と学習を繰り返す、そういう者達の集う村だった。

一人の少女が、好奇心から禁忌を犯すまでは。

今、廃村となったこの村は荒れ果て、建造物は一部の骨組みしか残っていない。

そんな村に、人影が三人分ある。

先頭を行く者は、少女からすっかり成長し、女性となっていた。

彼女、ティファは周囲の光景を見渡しながら、しっかりとした歩みで進んでいた。

その後ろを少し間を空けて、ネプチューンとクレアが続く。

一行が向かう先、その方向には墓石の群があった。

墓石といっても、大きさや形の異なる五個の石を使って三角錐の形にしてあり、それらが一定の間隔をもつて並んでいた。

それらの一歩手前で、ティファは足を止める。

風が吹き、彼女の髪を靡かせ、俯き気味の横顔が露になる。

暫く経ち、片手で後頭部を掻いて一息ついたネプチューンが、口を開いた。

「……じゃあ、早速しつもんだっちゃ。これは何の墓ぜよ？」

問いに、ティファは振り向かない。



ただ領き、数刻置いて言葉が生まれる。

「これは、この村に住んでいた人達のお墓よ。私の所為で死んだ人達の」

言つて、ようやく振り向いたティファは言葉を続ける。

「この村は魔術についての知識が豊富でね、特に私の家系は最もふるいところだったの。祖父が村長を務めている程のね」

彼女は言いながら、過去を思い出す。

幼かった頃の自分を。

「当時、私はとても好奇心が強くてね。知りたいと思った事はほとんど調べ追求する、そんな子だったわ。それで、ある日祖父が禁術という物の話をしてくれたの」

思い出す。

祖父が、お前もそろそろ知るといふ過程で良い物と悪い物の良し悪しを考えないといけない歳じゃな、と言つて話してくれた事を。

「それは、祖父が偶然見つけた、間違つた世界の理らしいんだけどね。禁術は適していない術者の精神を蝕み、破滅に導く。だから、決して手を出してはいけないと、そう教えられたの」

でも、

「でも、私はその危険性を全く理解出来ず、ただ好奇心に突き動かされる形で、禁術に手を出してしまったの」

今でも鮮明に覚えている。

当時、禁術は危険な物だとは認識したが、好奇心は自制を凌駕し

ていた。

ちよつとぐらいなら良いと、そんな気持ちでいたのだ。

禁術は書物に記されている物だと思い、祖父の書斎を探し回ったが無かった。

それでも諦めきれず、家の裏にあつた倉庫に入り、地下の扉を見つけ、中へ入った。

奥に進むと、壁一面に魔法陣が描かれていて、それらがまるで生きていくかのように脈を打ち、赤く光っていた。

彼女はその光に魅了され、手を伸ばし、光に包まれた。

「当然、後から知つただけど、その禁術は強大で危険な物だったらしいわ。私が予想していた域を遥かに超えていたの。それは、魔王との契約術。手にした術者は全てを知り、力を得る。そして代償に、術者の全てを奪う。……その奪われた全てというのが、この村の人々」

まるで眠っているような感覚から目を覚ました時、いつの間にか村の広場に居て、辺りは焼け野原だった。

そして、自分の後ろには何かが居ると、そう感じた。

威圧感と恐怖心が全身を支配し、怯え身体が動かなくなる。

一方で両親や弟、周囲の人達は次々とそいつに殺されて、その場で生きているのは彼女だけとなった。

だが、次の瞬間、彼女の前に一人の男が現れ、手刀で胸元を貫かれた。

同時、後ろに居たそいつは断末魔を上げ、彼女の胸元を貫いた男に一撃を与え、気配を消した。

不思議と彼女の胸元の穴はすぐに塞がり、鮮血を流す者は目の前の男、彼女の祖父だけだった。

「魔王を抑えきれず、暴走状態だった私を、祖父が命がけで止めて

くれたの。魔王を私の中に封印するという形でね。でも、祖父は  
の際に重症を負い、死んでしまったの。以来、私の中には魔王が眠  
り、未だに傷跡が胸元に残っているわ」

「もしかして、あんさんの強さは、魔王とやらと契約したからかい  
な？」

「そうなるわね。全てを知るという事は世界の理を知り、力を得る  
という事は無限の魔力を得るという事。これが大魔道師となれた訳  
が無かったら私は一魔術師でしかなかったわ」

ほうほう、と言いながらネプチューンは三度頷く。  
ついでに、じゃっと付け足して質問を続ける。

「この墓石は、その時に作ったんかい？　つつつても、さすがにこ  
れだけの数は無理があるかなあ」

「墓石はその出来事から数年後に、仲間達と作ったの。でも、墓石  
作りと急いでいたとで、余裕をもって謝罪は出来なかったわ」

だからこそ、彼女は心からの謝罪の意を込めて、墓石の群へと向  
いて目を瞑り、黙祷する。

最初、村を壊滅させてしまった時はただ悲しく、絶望し、謝る余  
裕を持ち合わせていなかった。

二度目に訪れた時は、急いで急いでいた為に落ち着いた時間を作  
れず、結局謝れなかった。

だからこそ、三度目である今回は、彼女は心から謝罪する事が出  
来た。

その事に安堵し、閉じていた目を開けて一息つく。

……こんな事で、許される訳が無いと思うけど、それでも精一杯  
の謝罪をしておこう。

内心で呟き、二人の方へと振り向いた。

彼女の視線の先、ネプチューンは腕を組み、まだ言葉を続ける。

「まだ質問は続くつちゃ。仲間つてのは、誰ぜよ？」

「ん……そうね、別に話しても良いかしら。昔、エニグマ戦争があったって話をしたでしょ？ その戦争で英雄となったディン・ガードナーの事も。私は、彼らと一緒に行動していたの。つまり、墓石は彼らと一緒に作ってたって訳ね」

ぬうぁんだってー！？ とネプチューンが大げさに驚く横、彼を見据えるクレアは小首を傾げる。

「そんなに驚く事なの？」

「オーバリアクションをかましてみたつちゃ。けど、そこまで冷静になれるあんさんも案外、変ぜよ」

クレアの猫耳を摘みながら問い掛けるネプチューンは、横腹に一撃を食らって蹲る。

無様な彼を見下すクレアは、肩を竦めて言った。

「だって、驚き疲れたもの。他世界に來たりユウに奥さんが居たりで、もうお腹いっぱいよ」

「元兎なだけに、反応が鈍いんかとおも すまんぜよ、マジで！ 武器を収めてえー」

「まあ、真面目に言えば、向こうの世界で貴方がディン・ガードナーって名前を言った後この世界の歴史を知って、なんとなく仲間か知り合いなんじゃないかとは感じてたけどね。それに、貴方とユウの話を聞いた時、昔の人だって分かった訳だし」

「本当、貴方って察しの良い人ね。記憶力が良いって言えば良いのかしら？」

微笑を混じえて言うティファは、その後正反対の苦笑を漏らす。

何かを懐かしむような口調で、簡潔に過去を口に出す。

「エニグマ戦争を終結させる、所謂勇者ご一行ね。結構、今みたい  
に楽しいメンバーだったんだけど、終戦までに何人も死んじゃった  
わ」

「どっちの世界の勇者ご一行も、似たようなもんってことっちゃね  
」

くつくくつ、とネプチューンは笑い、後頭部に両手を回す。  
そのまま来た道の方へと向き、顔だけ後方のティファに向けた。

「んで、用事は済んだんかい？」

「……ええ、そうね。もう終わりよ。アサルトに戻りましょ」

告げると、りょーかいりょーかい、とネプチューンは言いながら、  
早足で来た道に戻って行った。

その後ろをクレアがついて行き、しかしティファは一步を躊躇う。  
不意に後ろへと振り向き、虚空を見据える。

自分で壊してしまった過去に謝罪した今、もう心残りは無いのか  
と自分自身に問い掛け、考える。

数刻置いて頷き、よしつと呟いてようやく一步踏み出す。

罪には謝罪した。だから、これからは死んだ皆の為に生きようと。

……身勝手かしら。

思い苦笑し、それでも前へと進む。

彼女は、確かな決意を胸に秘めていた。

「うああ……何度乗っても慣れないっちゃ。アサルトマジ嫌いぜよ！」

「あんた、乗る前と後じゃ、随分とアサルトに対する印象が違うわね」

「わっちゃ、気分屋じゃ。けんど、どっかの自由気ままな猫と違って、計画性はありゆぶっ！」

「何あんた最近喧嘩売りすぎじゃない!?」

怒声と同時に、クレアは隣に座っているネプチューンの腹部へと膝をぶち込んだ。

その痛みに、彼はわざわざシートベルトを外して床を転げ回り、悶絶する。

そんな光景を尻目に見ていたリリイは、クスクスと笑う。

彼女は操縦を自動に切り替えており、今は休憩中だ。

「ところで、意外と早く戻って来たようですけど、もう用事は済んだんですか？」

「ん？ ええ、そうらしいわ。謝罪したとかなんとか言ったわね。で、今はあの状態っ」と

言って微笑しながら振り向いた先、アサルトの後部席には二つ分の席を使って横になり、寝息を立てているティファの姿があった。

彼女にしては珍しく無防備で、安らかな表情で眠っている。

皆には魔力温存の為と言っていたが、内心では長年抱えていた不安が軽くなった故、気が抜けたのだろう。

だからこそ、皆は彼女の事に触れないようにした。

代わりと言っちゃあなんだけど、と唐突にネプチューンは言い、リリイに問い掛けた。

「ストレートにいくっちゃ。ユウのどこに惚れたんぜよ？」

「本当にストレートですね」

ふふ、と嬉しそうに笑うリリイは、顎に人差し指を添えながら、上の虚空を見つめて答える。

「そうですね……。あの人は、数年前に突然、セイル村にやって来たんです。その時のユウは、怪我はしていなかったものの、疲労からか道端で倒れてしましまして。倒れた場所が、偶然私の家の前だったんです」

「え、幼馴染とかじゃなかったの？ てっきり私はそう思ってたわ」「残念ながら。でも、その偶然に押されるようにユウを自宅で看病して、居候として招き入れ、親しくなっていく内に幼馴染並みの仲良さは生まれたと思いますよ」

何の遠慮も無く接する事が出来る、という訳でも無いが、幼馴染を経験した事が無い彼女にとっては、幼馴染と呼んでも過言は無かったのだろう。

だから、と言うように彼女は懐かしそうに話し、記憶を蘇らせる。

「そうして、たくさん話して接していく内に、どちらが先かは分からないけどお互いに好きになりまして。ある日、ユウが告白してきたんです。かなり緊張した様子で、結婚してくれて」

「……え？ ちょっと待って、過程をいくつか飛ばしていない？」

「わっちはそっちよりも、あのユウが緊張してたとか告白したって事に驚いたんぞ」

場が一気に盛り上がる。

その事にリリイは心から喜び、話を続ける。

途中、自分が惚気ている事に気付くが、この際いいやと思い、どんどん記憶を掘り起こした。

だが、そんな空間を引き裂く音が、機内に響き渡る。  
それは警報。

アサルートの操縦機器の一つが、けたたましく電子音を鳴らしていた。

なにごとなにごと！？ と騒いでいるネプチューンを気にせず、  
リリイは機器を操作し、原因を探る。

そうして発覚した内容は、

「こ、後方からエニグマの大群が接近中です！ モニター、出しますね！」

リリイが告げると同時に、操縦席の上部にあるモニターに映った  
光景は、モニターだけでは収まらず、空を覆い隠す程の大群だった。  
距離はまだ離れている為に、姿はよく見えないが、翼を持った非  
行型だという事は分かる。

その大群が、一直線にアサルトへと向かっていた。

「な、何で私達が狙われているの！？」

「いいえ、これは私達を狙ってるんじゃない。目的地は分からない  
けど……そう思うわ」

「お、ティファっちおはようさん。で、なんでそう思うん？」

そうね、と言って腕を組むティファは眠気眼を擦ってからモニタ  
ーを指差す。

そこはモニターの端、目いっぱい広がったエニグマ。

「この移動は、彼らにとつての進軍。戦争後半時にも、こんな進軍  
があったわ。拠点となる場所を中心に三六〇度全方位に進軍する。  
けれど、どうしてこれだけの数のエニグマが居るのか、そこが私に  
とつての疑問なの」



顎に手を添え、思考する。

何故これだけの数が居て、何故進軍するのか。

しかし、長く思考する暇も無く、リリィから警告が発せられる。

「エニグマの方が速度が有利な為、このままでは遅かれ早かれ追いつかれます！」

「任せなさい。私が迎撃してあげるわ」

言葉と同時に、ティファは後方へと振り向いて両手を掲げる。

親指と中指を擦り合わせ、パチンツと指を鳴らした。

すると機外、アサルトの後部に多連層の魔法陣が二つ展開した。

そして、迎撃の光が走り出す。

## 第五十八話：二度目の激突

カイは見た。

ヘルが脱ぎ捨てた侍女服によって彼女の身体が一瞬隠れた後、現れた黒のスポーツウェア姿には左腕が付いていたのを。

自動人形だからこそ出来るその荒技に驚きつつ、カイは動く。

姿勢を低くし、両手に刃を装備したヘルに対して、両剣を分解する事によって同じく両手に刃を持った。

激突する。

四つの刃が擦れ合い、火花を散らす。

だがそれは長続きせず、すぐに離れて再度激突した。

離れては当たり、離れては当たる。

その動きは両者の領域を侵す事無く、一定の位置で連続して起こっていた。

左で振るう刃は右の刃で防がれ、隙が出来た右腕を右の刃で狙えば、左の刃で弾かれる。

時に蹴りが出るが、バックステップや仰け反りで回避され、その際に勢いをつけて反撃が来る。

現在、両者は無傷だ。

「いい加減、諦めた方が身の為だと判断しますが？」

「諦めたら殺すだろ、絶対！　ってか、俺達はただ帰りたいだけなんだから、道くらい開けてくれって！」

「それは出来ない相談です。これは私の任務ですので。通りたければ、倒してくだ　さい！」

最後の言葉に力を込めて振るった刃は、カイの右脇を穿ち、抉った。

鮮血が飛び散り、痛みが彼の表情を歪めさせる。

彼は剣を持ったままの左手で傷口を押さえながら、バックステップで距離を取る。

対し、ヘルは追撃しなかった。

彼女が見る先は、カイが押さえている右脇。

今、カイの左腕は光を放っており、次の瞬間には傷口が塞がって、衣服さえもが元通りになっていた。

フラグメントで時間を戻したのだ。

「……その力は、本当に厄介です。それは底無しですか？」

問われたカイは口の端を吊り上げ、笑みを見せる。

剣を構え、左手の剣を逆手に持つ。

その過程で、

「それは言えないね。言ったら、バレちゃうじゃん」

「成る程、底無しでは無いという訳ですね。安心しました」

「え？ ……ああ！ きたねえ、ハメやがったな！？」

叫び声と共に、戦闘が再開される。

カイは右手の刃を振り下ろし、それを防がせた上で逆手持ちの刃を薙いだ。

当然、それは防がれるが、次いでヘルの胸元目掛けて、身体を傾ける事によって勢いがつく右足の蹴りを放った。

だが、ヘルはそれを身体に回転をかける事で左へと回避し、裏拳の勢いで刃を薙いだ。

カイは咄嗟にそれを防ごうと左の刃を向けるが、僅かに間に合わず腕に一閃が入る。

また鮮血が噴き出し、ヘルの黒いスポーツウェアに血が付くが、色は変わらない。

だが、カイの顔色は変わった。

一瞬見せた苦痛の色を、笑みの色にだ。  
それを見たヘルは疑問に思うが、すぐに気付いた。  
左手が迫ってきていたのだ。

即座の回転運動は、思わぬ隙を見せてしまった。  
それは、ヘルの中でフラグメントは危険な為、優先的に回避すべきだと記憶していたからこそその行動だった。  
今行っている全ての動きをキャンセルし、全身を後方へと引いて避ける。

だが、その動きは次の行動への移行が不可能であり、故に接近して来たカイの右刃が彼女の胸元を横に斬った。

金属が擦れる音が聞こえ、人工皮膚が容易に裂ける。

続いて起こるのはコードの断裂と散る火花だ。

傷は深い。

痛覚は遮断してあるが、彼女の脳内で警報が鳴り響いていた。

フラグメントが来る。

サイドステップの要領で横に跳躍し、尚も伸ばそうとする左手が現状を把握している内に目前に迫る。

故に彼女は、着地したばかりの左足に力を込め、後方への宙返りを行った。

それは回避と同時に、右足でフラグメントを迎撃するサマーソルトとなる、筈だった。

一瞬だけ触れる蹴り上げは、カイが確実に右足首を掴む事によって、失敗に終わったのだ。

勢いが弱かった。

刹那、足首を中心に人工皮膚が腐り、フレームが錆び始め、次々と崩れ落ちていく。

パージは間に合った。

しかし、右足を失った事はかなり痛手となった。

宙返りからの着地の際、足を掴まれた事によってバランスが崩れた事と片足が無い事が重なり、大きく転倒した。

その瞬間に、彼女はミスに気付く。

カイを視界から逸らしてしまったのだ。

後悔し、すぐさま視界にカイを捉える。

正面、日の光が背に当たり、陰となって表情が見えないカイの姿がある。

そこに、ヘルは異変を感じた。

彼の目が光っていた。

淡い白が、フラグメントと同じ色が、そこにあった。

同時に、左手のフラグメントは脈を打ち、僅かに膨張と縮小を繰り返している。

彼女の記憶にある物とは異なっているフラグメントを見て、成長していると、そう判断した。

このままでは壊される、とも。

だが不意に、カイの目から光が消え、フラグメントもまた、元の左腕に戻っていた。

それから数刻経ち、彼の口から吐息が漏れる。

「勝負あり、って事で良いかな？ 先生には詰めが甘いって言われるかもしれないけど、殺しはしたくないから」

苦笑と共に告げられた言葉に、ヘルは拍子抜けする。

機械の彼女には珍しく、啞然の表情を見せた。

「……本当に、詰めが甘いですね。今まで何人も人間に死や傷を

与えていたというのに、殺したくないとは」

「シルクには偽善者だって言われちゃったくらいだし……。それでもやっぱ、殺したくねえよ」

……本当に、甘い人です。

内心でそう呟きながら、手首に隠してあるナイフを取り出そうと思ったその時だ。

不意に、脳内に声が響いた。

それは彼女の脳内に搭載された通信機器が、無線を傍受したからだった。

。 全域にオープンチャンネルで配信されたその無線は、女の声で

## 第六十九話：剣戟の果てに

蛍光灯が割れ、薄暗くなった雑貨屋内にいくつもの火花が散り、金属音が響き渡る。

時たま雑貨の崩れる音が聞こえ、その一瞬に金属音が増す。

シヴァとフェンリルの間で激しい剣戟が行われ、しかしシヴァの方が優勢と言える現状だった。

その戦いの中、シヴァは内心で思う。

戦いとは、良いものだ。

今、彼女は自分の実力を存分に生かし、また相手であるフェンリルも全力で向かって来ている。

互いの力を最大まで生かし、ぶつかり合う。

そこには何の邪魔も無く、二人だけの空間だ。

戦士である彼女にとって、非常に好ましい状況だった。

こいつは強い、と喜びに震え、無意識に表情が緩む。

薄暗いが、相手に表情が見えていないかと心配しながら、長剣を振る。

その途中、シヴァはふと過去の記憶を思い出した。

アクアトレインでのユウとの会話を、だ。

彼女はその時、銃を否定する意見を放った。

……しかし、今だけは撤回しよう……！

自分と相対しているフェンリルは銃だけに頼らず、己の身体の能力をフルに活用している。

だから良いと、認めるに値すると、そう思った。

故に彼女は、更に速度を上げる。

薙ぎ、弾き、防ぎ、そしてまた薙ぐ。

繰り返し行われる一連の動作は、しかし動くたびに形を変え、まるで舞っているかのようにも見える。

だが、その舞も終わりの時が近付いていた。

シヴァが薙いだ長剣は、フェンリルのナイフを弾き飛ばし、隙を作る。

そこを彼女は、一度長剣を引き構え、彼の胴体目掛けて貫手の動作を使い、勢い良く突き刺した。

すると刀身は狙いを少し逸れて脇腹に直撃し、背中を貫く。

だが、シヴァは見た。

フェンリルの表情は痛みで歪んでいるものの、僅かに笑みを見せている事を。

口の端を吊り上げ、左手で刀身を思い切り握る。

血が掌から滲み出ている。

同時、彼は右手で背面から新たな銃を取り出し、自身を貫いている長剣に銃口を押し当てる。

笑みが一層濃くなり、人差し指で引き金を絞った。

銃声が鳴り響く。

甲高い金属音と共に、長剣は確実に折れた。

それは折った本人が肉眼で確認した事であり、まず間違い無いだろう。

痛みで霞むフェンリルの視線の先、折れた長剣の下半分を持ったままバックステップで後退するシヴァは、驚愕の表情を彼に向けた。それは長剣を折った事に対する驚きか、それとも自身を犠牲にした事に対する驚きか。

どちらにせよ、フェンリルには関係の無い事だが。

今、シヴァは武器を失っており、一方で彼は短散弾銃を手に入れている。

銃身が短いそれは、携帯性には優れているものの、威力は通常の



散弾銃よりも劣っている物だ。

ならば、何故長剣を折れたのか。

それは銃弾が長剣と同じ？エターナル？製だったからだ。

同じ強度の物質は、相殺する事が出来る。

それを見越して、彼は？エターナル？製の銃弾を用意していたのだ。

結果、長剣は折れ、形態は変わった。

だから彼は、痛みを引き攣った笑みを作る。

……ヤバイなあ、鎮痛剤持って来てたか？

内心で呟きつつ、ウエストポーチに手を伸ばすと、鎮痛剤の入ったミニボトルと注射器が手に触れる。

それを認識するとすぐに取り出して腹部に注射器を打ち、ミニボトル内の鎮痛剤を全て口に流し込んだ。

次いで勢い良く咀嚼し、無理矢理砕いて飲み込む。

一度の服用量を軽く超えているが、気にしない。

そうした後、突き刺さった刀身を抜かずに一息ついて、口を開いた。

「さて、形勢逆転だな。これで俺の勝ち。そう、俺の勝ちだ」

「その気になれば、私は折れた剣でも戦えるぞ？」

「また折るぞ？」

「貴様にそこまで戦う余力は残ってないだろうに。……そこまでして戦う理由は何だ？」

問われ、フェンリルは苦笑を漏らした。

……お前が言えた事かよ。

敢えて口には出さずに呟く。

同時に、彼はシヴァに言われた言葉を口内で咀嚼した。

……そこまでして戦う理由、か。

痛みが薄れていく中で、思い出すのは過去。

まだ争いも無かった頃。

三人が仲良くて、先生もまだ生きていた頃。

誓った事は最後までやり遂げるのだと、そう約束した。

そして、先生が死んだ時。

俺と先生を裏切った兄弟を殺すと、自分に誓った。

だから言う。

「理由なんて簡単だ。任務だからだよ。依頼人であるヴァンって男からの依頼だから、遂行するまでだ！」

「……ヴァン、だと？」

不意に、シヴァの表情が変わった。

眉間に皺を寄せ、明らかにヴァンの名に反応している。

それはフェンリルも気付いていた。

故に問い質す。

「なんだ、ヴァンを知っているのか？」

「愚兄の名を忘れる訳が無からう……！ 言え、愚兄に何と言われ  
誑かされた！？」

喝が響き、思わず一步引いてしまう。

それ程までに、フェンリルの目に映るシヴァの表情が、怒りに満ちていた。

いや、それよりも驚いたのは、誑かされたという言葉だった。

……… どういう事だ？

ヴァンを愚兄と呼ぶ理由としては、シヴァは妹と言ったところだろう。

それは分かる。

だが何故、ここまで憤怒しているのか、フェンリルにはそこが解せないでいた。

だからこそ、素直に答える。

「ヴァンからの提案は、依頼を受ける代わりに、成功報酬として俺が探している男の居場所を教える、というものだ」

「探している男？ そいつの名は？」

正直、何も知らない者に名を教えるのは気が引けていた。しかし、今の彼はただ聞かれた用件に答える事にした。

「キース・ヨルムンガント。俺の恩師を殺した、兄弟であり裏切り者だ」

「キース・ヨルムンガントだと？ だが、それだと……ああ、そうか」

突然怒りが薄れた代わりに、疑問の表情を見せたシヴァは、顎に手を添えて呟く。

そして彼女は一人で納得し、フェンリルを見据えた。

「キースは、愚兄と共に居たぞ。姿は見えていないが、愚兄がキースの名を呼んだ事と返答の声、それが記憶にあるキースと一致する。……どうやら私達は、愚兄の手中で踊らされていたようだ」

その言葉を聞いた瞬間、フェンリルの思考は停止した。

……今、シヴァはなんて言った？ キースがヴァンと共に居ただと？

聞いた言葉を脳内で再生させ、やっと動いた思考は混乱する。まさか、長年探し続けていた人物が、協力者の身近に居ると思いもしなかっただろう。

ふと、記憶がフラッシュバックする。

吐血する先生。高笑いするキース。再起動して間もないヘル。

全てが狂った過去の出来事。

その時から、ずっと探し続けていた仇。

そいつの手掛かりが、ようやく見つかったのだ。

「……シヴァ。この戦い」

『応答して下さい、マスター！ 繰り返します。応答して下さい、マスター！』

フェンリルの言葉を遮ったのは、都市内に響き渡るヘルの声だ。

その声は都市内の放送スピーカーから出ているのか、そこら中から重なって聞こえる。

フェンリルはその声に対し、返答しようと耳に手を当てるが、声は出さなかった。いや、出せないでいた。

通信機が壊れていたのだ。

故に返答する事が出来ず、同じ事を言うヘルの声だけが響き渡る。だが不意に、言葉が変わった。

『返答が無い、という事は通信機器の損失と判断し、こちらの報告を開始します。 現在、周囲の電波にオープンチャンネルで高広域化された無線通信が配信されています。この内容は、是非耳にしておくべきだと判断して、都市内の放送機器を使い、報告に当たりました。配信内容は以下の通りです』

その言葉を最後に、一旦言葉が途切れ、数刻置いて違う声が聞こえて来た。

思わずシヴァが反応した、切羽詰った様子が感じ取れる女性の声だ。

『 周辺にお住まいの方々、並びにこれを聞いた運の良い方達に警告します。現在、ジードの一部地域において、エニグマの大群が

発生しました。数は定かでは無く、また進軍条項も定かではありません。しかし、エニグマ戦争経験者によると、これはジード全域に向けて、円を描くようにして進む方法なのだそうです。これは、私の勝手な推測ですが、逃げ場はありません。このままだと、ジード全域が飲み込まれてしまうでしょう」

しかし、

『だからこそ、団結すべきです。力有る者は前へ、力無き者は避難を、権力有る者はその援助を、技術有る者はこの通信をもっと遠くに伝えて下さい！一人ひとりが助け合い、手を取り合わなければ生き抜けない現状を、乗り切ってください。どうか……どうかお願いします！！』

そこで言葉は途切れ、また数刻置いて次はヘルの言葉が来た。

『後は、最初から同じ言葉の繰り返しです。一応、私はこの通信に都市中枢の管理室で電波増強を追加して、高広域に飛ばしました。マスターに許可は取っていませんが、必ず許可を頂けると判断します。また、この通信の発信源は、真っ直ぐにこちらへと向かって来ています。お早めに体勢の立て直しを。以上』

放送が止み、静寂が生まれる。

今のはリリイか、とシヴァが呟き、折れた長剣の残りを鞘に収めた。

そして、フェンリルを見据え、問い掛ける。

「この勝負はお預けで良いな。お前も、早く相棒の下へ向かわなければなるまい？」

「だが！……分かった、恩にきる」

反論と感謝をしたフェンリルの内心では、葛藤があった。  
任務に忠実になるか、私情で離脱するか。

前者では先生との約束を守り通す事になるだろう。

しかし、後者を選べば先生の仇を討てるかもしれない。

その思考の中でフェンリルは、後者を選んだのだ。

だから、彼はシヴァの方を向いて数歩下がり、踵を返して走った。  
内心で先生に謝罪しながら。

同時に、仇が討てると歡喜していた。

## 第七十話：空中での迎撃戦

大気に轟音が響き渡る。

その音源である爆発を放っているのは、空を飛行するアサルト。対し、爆発を受けているのは空を影の黒色で染めている、エニグマの大群だ。

今、多重層の魔法陣を展開し、魔術を使って迎撃を行っているアサルト側は、しかし距離を詰められつつあった。

ちなみに展開している魔法陣は、アサルトに近い陣から順小さくなり、計五つで一纏まりの筒状となっており、後部四つが回転しながら無数の矢を放ち、一番小さい前部は爆発の正体である黒い球体を放つ。

これが二セット分あっても、迎撃しきれないのだ。

そして確実に、エニグマはアサルトへと迫る。

機内、後部ではその状況にティファが舌打ちした。

両手を宙にかざし、時折り指を鳴らしている彼女は、機外の魔法陣の発動者だ。

両手の動きに合わせて動く殲滅型魔術を放つ彼女は、操縦席のリリースへと振り向かず言葉を送る。

「目的地まで、あとどれくらい!？」

「えと、残り二十キロ! 到着まで十五分程度です!」

「遅いんだか、速いんだか……!」

ティファの言葉に返答したリリースは、現在二つの動作を行っていた。

一つはアサルトの操縦。

もう一つは先ほど録音した、ジード全域における警告の音声を、少しでも多くの電波に乗せる作業だ。

生憎、手の空いているネプチューンとクレアは機械作業が出来ない為、彼女一人で行っている。

多忙だが、しかし彼女は全力で取り掛かる。

と、その時だ。

不意に、機内に振動が起きた。

同時に操縦機器が警報を上げる。

「っ！？」 左翼の一部が破損！ あと数回、同じ事があれば、航行に大きく支障が出てしまいます！」

「ごめんなさい、迎撃が間に合わなかったわ！ ……これは、出し惜しみなんてする状況じゃないわね」

謝罪の言葉を放つティファは、右手の指を再度鳴らした。

そうする事によって生まれたのは、もう一つの多重層の魔法陣だ。一から順に形成されていくそれは、完成と同時に攻撃を開始する。三つ同時の発動は、彼女にとってかなりの負担だが、今は気にしている場合では無いようだ。

一方、座席に座って小窓から外を眺めるネプチューンは、ふと何かを思いつき、視線はそのままリリイに問い掛ける。

「そういえば、アサルトの基礎素材はなんだっちゃ？」

「素材、ですか？ えと…… 大部分が鉄を改良した物質ですが、翼やエンジンなどの重要部分にはオリハルコンを使用しています！」

「ほほう、オリハルコンなあ…… オーリキヤルク…… っとお……」

オリハルコンの名前を繰り返しながら、おもむろに手遊びを始める。

誰も彼のその動作には気付いてはいない。

隣のクレアでさえ、猫耳を瞬かせながら警報の鳴る機器を見渡している為、眼中には無い。



動物としての本能が、音に敏感に反応しているのだ。  
そして、数刻が経ち、再度警報が上がった。

「また破損な　え？　な、なんで？」

「どうしたのよ。まさかもう大破してたり？」

「違います、逆です！　無傷に戻っているんです。機器の故障でしょうか……」

小首を傾げ、モニターを見つめる。

しかし、すぐにこれ以上考えないようにし、作業を再開した。  
アサル트는、目的地までの距離を残り五キロメートルへと詰めていた。

だが、エニグマの接近はもうすぐそこに迫っていたのである。  
確実に、間に合わない現状となっていた。

しかしその時、エニグマの群に向けて一閃が走った。  
そして次の瞬間には、群の一部が横薙ぎに吹き飛び、散った。  
一撃を放ったのは、大鎌を持った一体の巨人。

アサルと同じ速度で浮遊するそいつは、含み笑いを零した。

巨人が現れる、僅か数分前　。

三つの魔法陣を器用に使い分け、迎撃を行っていたティファは、  
眉に皺を立てた。

苦痛が、彼女を襲ったのだ。

心臓を鷲掴みされるような痛みが起こりそれを奥歯を噛み締める  
事で必死に堪える。

だが、その痛みは次第に強さを増し、額に汗が滲み出てくる。

それでも、手は止めない。

迎撃が間に合わなければ、皆が死んでしまうから。

だから、彼女はその手を止めない。

そんな彼女を襲う痛みは、とうとうピークに達した。

心臓が握り潰される感覚が、確かに体内であつた。

呼吸が止まり、息の代わりに血が噴き出す。

何故なのと、鉄の味を口内に感じながら自問する。

……何故、急に心臓が！？

問いに答える声は当然無い。

そう思った……のだが。

『あゝあ、魔力を使い過ぎるからだよあゝ。ま、死なないと思うから別に良いけどね』

その声は、彼女の脳内に響いた。

まるでユウと会話しているかのような感覚に、ティファは驚く。

だからすぐに、声に出そうとした。

「あなたぐふっ……ごぶっ……！」

『こらこら、吐血しているのに話そうとしない。内心で呟いても大丈夫だよ。ユウと会話するようにね』

……ユウの事を知っている！？

驚愕は内心で呟くが、当然相手には聞こえる。

『当たり前だよ。僕は、ずっと前から君と一緒に居たんだからね。にしても、久々に誰かと会話したなあ。何十年ぶりだろう。前にユウに話し掛けた時は、一方的に喋ってたし、夢の途中だったから拒絶されちゃったしで悲しかったよ』

……独り言はいいわよ。それよりも、貴方はなんで私の中に！？

『なんでって言われるのは心外だなあ。僕を呼び起こしたのは君だと言っのに。最も、ちゃんとした召喚じゃなかったけどね』

召喚。

その単語に、ティファは反応する。

私が召喚した者で、尚且つ内側に居る者。

心当たりはあった。

それは、自分が犯した罪によって現れた者であつて。

だから知っている名を、口にする。

「ま……おう……っ」

『半分正解だけど、まあいいよ。まったく、あの時は不完全な召喚の所為で、僕は宿主が特定できなくてね。自分でも制御出来ないほどの魔力が溢れて暴走しちゃったんだ。今でも、悪かったと思っているよ』

でもね、と魔王が言葉を付け足す。

『君のお祖父ちゃんに感謝する事だね。自分の心臓を契約媒体にして、君の中に埋め込んだんだから。そうでもない、最終的に僕の矛先は召喚者である君に向いていたから』

……え？

魔王の言葉に、思考が停止する。

彼は今、なんと言ったのだろうか。

祖父が、心臓を契約媒体に……？

つまりそれは、祖父の死の原因が全てティファにあるという事だ。原因の大元は彼女だ。しかし、殺したのは魔王だと思っていた。

だからこそ、その事実は彼女にとって衝撃過ぎた。  
罪が、増えてしまった。

その事に彼女は、内心で叫ぶように嘆く。  
だが、それでも魔王の言葉は続く。

『だから、君には心臓が二つあるんだよ。君の心臓とお祖父ちゃんの心臓がね。で、今潰れたのはお祖父ちゃんの物だ。老いた心臓は、人としての機能を失うからね。封印されてた僕が、外に出された』

ティファにとって、魔王の言葉は心を追い込むものだった。  
その上、祖父が命懸けで封印した魔王が解き放たれてしまうのだ。  
不味い、と真っ先に思い、必死に適した封印術を考える。  
だが、彼女の思考を読んだ魔王は、微笑する。

『大丈夫、封印する必要は無いよ。元々、僕は召喚されたんだから。  
今の君なら、上手く僕の魔力を使いこなせるだろう。だから、僕は  
君の召喚魔となり、力を貸そう』

思い掛けない言葉だった。  
故に絶句し、ついでにむせる。

そして気付けば、胸の痛みは無くなっており、残ったのは口内の  
血だけだ。

ティファはそれを吐き捨て、質問を投げ掛ける。

「……で、貴方を味方に入れるのは良いけど、それは償いの意思に  
背く事になるんじゃないの？」

『あれ？ 分かっているくせに聞くの？ 簡単じゃん。魔のと契約す  
るって屈辱と、反して僕の力を借りて今度こそ守れなかった人達を  
守る。これって、結構罪滅ぼしになると思うよ』

「そこまで説得力は無いのに、貴方が言うのと納得した気分になるわ

……。それじゃ、早速貴方を召喚しても良いかしら？」

『良いね、早速だねえ。腕がなるよ、久々の大暴れだ！』

嬉しそうに、魔王は笑う。

それに答えるように、ティファは両手を掲げ不意に質問の言葉をまた放つ。

「そういえば、貴方を呼ぶ名は魔王で良いの？」

『違うよ。だってさっきは、半分正解って言ったからね。……本当は、魔王だなんて大げさなもんじゃないよ。遊び好きな、子供さ。遊びの度が過ぎて天界から落とされた、堕天使なんだ。名前は、ルシファー』

同時、アサルトの機体に黒と白が入り混じった魔法陣が一瞬にして展開し、光を放つ。

そして、次の瞬間には、世界にルシファーが解き放たれていた。

全身が黒だというのに、生えている翼のみ白一色の巨人は、檻褻切れたローブを纏っていた。

手に持つ大鎌は黒光りしており、エニグマの群を薙いだ際には緑血がこびりついている。

彼はそれを払い飛ばし、再度大鎌を構えた。

圧倒的な存在感だった。

だが、エニグマ達は進軍する。

例え巨人が目前に居ようと、それが堕天使だったとしても、構わず行く。

対し、ルシファーは楽しそうに大鎌を振るい、次々と切り刻んだ。その光景は延々と続くと思えた。

だが、終わりの時は来る。

アサルトが、目的地に到着した。

廃墟都市に突っ込む形で、だ。

## 第七十一話：装置の発見、そして…

突然の衝撃は一瞬だけだった。

それは、機体が廃墟に突っ込む直前にティファがフォース・ワールドを展開した為、一瞬で済んだのだ。

彼女オリジナルの魔術障壁は五枚分を必要としたが、無傷を得る為には仕方ない事だ。

内部、シートベルトに固定されているネプチューンやクレア、リイはかぶりを振って目眩を吹き飛ばし、ベルトを外す。

また、後部座席に居たティファはふらつきながらも立ち上がり、突っ込んで来た方向へと振り向いた。

視線の先、壁を抜けた向こう。

彼女が召喚したルシファアは、まだ戦闘中だった。

その事に不安を抱きつつ、彼女は前部座席に居る三人の方へと視線を移した。

皆は既に席を立ち、後部のハッチを開けたところだ。

「お、ティファっちも無事だったかいな」

「助かったわ、ティファ。とりあえず、ここを出ましよう」

クレアの言葉をきっかけに全員が動き、アサルトを出た。

突っ込んだ場所はホールだったのか周囲はかなり広く、故に障害物が少なかった。

無事に到着出来たのは、そんな偶然のおかげかもしれない。

ともあれ、その場所をティファ達は走り、通路へと飛び出す。

出た先は一面が灰色の、シンプルな作りとなっていた。

「ところで、どこに行けば良いのかしら？」

「とりあえず、都市中枢の管理室に向かいましょう。そこなら、シ

ヴァさん達がどこに居るのか監視映像で分かりますし、都市内放送を使って指示も出せます！」

「ナイスアイデアっちゃ！　んなら、早速向かうぜよっ」

「電力が生きていれば良いんですけどね……」

リリイは多少、不安そうな声を漏らしつつ、三人について行く形で走り出す。

途中、都市の案内板を確認しながら、中枢の管理室へと向かった。

到着した管理室は、電子端末などが全て起動していた。

まるで、つい先ほどまで誰かが使用していたかのように。

しかし、リリイはそんな事など気にせずに、電子端末に飛びついて操作を始める。

また、他の三人は役割が無い為、室内の正面へと向く。

そこには二十インチほどのモニターが均等の間隔で大量に設置されており、一つ一つが都市内を映し出していた。

どのモニターにも人は映っておらず、無人の光景がそこにある。だが不意に、ネプチューンが声を上げた。

「おうあ、カイとシルクが居るぜよ！　つと、シヴァも居た居た！」

「良かった、到着していたのね。後は、他世界干渉に関する情報を見つckerだけね」

「もう少し、もう少しだけ待って下さい！」

もう少しです、と呟きながら、素早い手捌きで電子端末を操作するリリイは、瞬きさえしていなかった。

いつ渴いて痛みに変わるか分からない眼球を忙しく動かし、次

々と流れていく情報に目を通す。

それから何分経っただろうか。

不意に、リリイの手が止まり、画面の情報の流れも止まる。

次いで目蓋を何度も瞬かせ、吐息する。

「見つけ、ました。科学研究棟です。そこで、他世界に干渉する為の装置が研究、開発されていたようです。現在は完成しており、装置が置かれているとの事です」

「さすがぜよ、リリイっち！　さすがユウの奥さんだっちゃ！」

歡喜の声を上げたネプチューンの言葉に、リリイは頬を赤らめながら電子端末を再度操作する。

そして、言葉をぶつけた。

指示の言葉を。

「カイさん、シルクさん、シヴァさん、聞いて下さい。皆さんが元の世界に戻る方法を見つけました！　集合場所は科学研究棟の一階格納庫。案内板を見れば分かると思いますが、そこそこ近い距離です。どうか、お氣をつけて」

放送を終え、リリイは電子端末の電源を落とす。

そして、三人の方へと向いた。

「では、行きましょう。すぐそこですので、先に準備してるって事で」

ぐつと親指を突き立て、笑みを作る。

その姿に思わず笑みを零した三人は、また走り出した。

向かう場所は科学研究棟の一階格納庫。

その時は既に、都市全体が揺れ始めていた。



全員が、その揺れに危機感を覚える。

刹那、通路の壁が粉碎され、外から何かが入ってきた。

「え、エニグマ!? タイミングの悪いやつね……!」

突入した際に体勢を崩したのか、ゆっくりと身体を起こすそいつは、見た事の無い形をしていた。

腕が異様に長く、四メートルほどの腕が半分に分れた形となっており、二の腕に値する位置の筋肉は膨張し、反対に分れた先の部分は細く、代わりに折り畳まれた翼がついていた。

そして胴体はかなり細くなっており、足は無いに等しいほど小さい。

腕と同じくらい長い首は周囲を見渡し、最後にティファ達を視認する。

同時、咆哮を放つ。

大気が震え、戦いを経験した事の無いリリイが、鳥肌を全身に立てる。

それは、竜だ。上半身が発達した、竜。

「な、ななななんだっちゃーもう! 迫力凄すぎて、手も足も出んぜよ!」

「馬鹿は放つといて……どうするの、ティファ? あんたがやつちやう?」

「私はパス……って言いたいところだけど、時間が無いのよねえ」

溜息ついでに肩を竦め、面倒くさそうにエニグマを見る。

そんな彼女の横を、クレアが俊足で行く。

両手にダガーを構え、エニグマの翼に振るった。

すると翼の膜が裂けて、緑の血が噴く。

しかしそれは致命傷にはなっておらず、反撃が来た。

横に薙いだ爪を、クレアは前方への跳躍で回避する。

踏み込んだ先にはエニグマの胴体があり、彼女はダガーを胴体に刺し、踏み台にしてエニグマの頭上上がる。

一方、エニグマは胴体に刺さった刃が、踏み台にする事で身を挟まれ、痛みに悲鳴を上げていた。

クレアの姿は視界に入っていない。

「クレア、首よ。エニグマは首の皮膚が柔らかいの」

ティファのアドバイスが放たれたのとほぼ同時、落下に身を任せたクレアが手片に残った一本のダガーを振るった。

目にも見えぬ速さを持った刃は、確実にエニグマの首の一部を微塵にする。

そして、頭が離れた巨体は轟音を立てながら倒れた。

次いで片膝を立てて着地したクレアは、刃に付いた緑血を払い、エニグマに近付きもう一本のダガーを抜く。

「さすが猫だっちゃ！ 素早いっ、強いっ！」

「喧しいわよネプチューン。迫力あり過ぎて、凄く緊張してたんだから」

「わっちなんか、ブルって足が動かんかったんやから、それよりマシぜよ」

「凄い速さで震えてましたね。その速さはクレアさんに負けてませんでしたよ？」

「『どっという比べ方っ！？』」

ネプチューンとクレアの揃ったツツコミに、リリイは片手を口に添えて静かに笑う。

そんな光景を見て苦笑を漏らすティファは、さてとっと言いながらクレアの方へと向いた。

「まあ、エニグマの対処法は今みたいな感じね。出来たらもう会いたくは無いのだけれど……とりあえず、先を急ぎましょう?」

怪我の痛みが強くなり始めた事に、シヴァは苦い顔をする。その度に失敗を悔やみ、だがすぐにその考えを掻き消す。今は、科学研究棟に向かう事が先決だからだ。そうしてようやく到着した格納庫には、既に全員が揃っていた。彼女の到着に気付いたカイは、喜びの声を上げる。

「シヴァ先生！ 無事でよかったあ。今、グラルスに帰る為の装置を起動してるところなんだよ」

言いながら指差す方向にあ、大きな筒状の装置があった。それは全面ガラス張りの装置で、床やガラスには数多の魔法陣が展開している。

同時に、それらは今、ゆっくりと光を帯び始めていた。シヴァはそれを見ながら、電子端末を操作しているリリイの下へと向かった。

「現状はどうだ？ 動きそうだろうか」  
「バッチリ動きますよ。……ただ、問題点があるんです」

言いにくいんですけど、と言って小声になった為、シヴァは耳を貸す。

その際に左脚の怪我が痛み眉を顰めるが、すぐにその表情を消す。幸いと言っているのか、誰もその表情には気付かなかった。

「もう準備は出来てるんですけど、実はこの装置、一人が残って……この起動スイッチを押さなきゃいけないんですよ。そこで、私がのこ」

「なんだ、そういう事か。分かったぞ」

リリーの言葉を途中で遮り、シヴァが皆の方へと向いた。

「全員、装置に入ってくれ。準備は出来ているようだ」

「おお、とうとう初体験の世界移動だっちゃー！」

「いやいや、ここ来る時にしただろ」

笑い声上がる。

その光景をシヴァは微笑ましそうに見ていた。

だが、その光景は長続きしない。

シヴァの合図で全員が装置に入り、リリーも放り込まれる。

しかしカイは、小さな違和感に疑問の声を上げた。

「先生？　なんで入らないんだ？」

「それは簡単だ。この装置は、誰かが残って装置を起動させないといけないようだな。故に、私が残るのだよ」

刹那、ゲートが一瞬にして閉じた。

皆とシヴァとの間に、ガラスの壁が出来てしまったのだ。

カイはそれを拳で叩くが、当然ビクともしない。

「お、おい先生！　なんの冗談だよそれはっ！？　早くここを開けて入って来いよっ！」

必死に叫ぶカイの言葉は、しかし向こう側には届かない。

時空を超える際に起きるどんな衝撃にも耐えなければならぬが、ラスの壁は、余りにも頑丈過ぎるのだ。

対し、仕方の無さそうな表情をするシヴァは、目を瞑って呟く。

「……私は、人殺しだった。戦時中、いったい何人殺してきたも、定かでは無い。人を殺す事に無関心過ぎたのだ。だが、自軍を裏切り、戦況を変え、終戦まで持ち込み、戦争を終わらせた時、初めて心から罪悪感が湧き上がり、嘆いた」

だが、

「隠居の為に田舎村に住み移った時、戦争被害に遭って親を亡くしたというお前達二人を一目見た瞬間から、親代わりになろうと決めたのだ。初めは、罪滅ぼしの為に。自分の罪悪感を埋める為に、お前達を引き取った」

しかしな、

「親代わりとして、また教師として共に過ごす内に、日々が楽しい事に気付いたのだ。それは、罪滅ぼしをしようとしている私にとつて許されぬ事だったが……ただただ、幸せだったのだ。      っと、聞こえてはいないか」

言葉は、互いに届かない。

その事にシヴァは苦笑を漏らし、電子端末へと歩み寄る。

一方、彼女の後ろ姿を見るカイは、フラグメントを発動させた。壁を退化させて壊そうとしているのだ。

けれど、それは装置を破壊する行為であり、

「ちよ、やめるっちゃカイ！ そんな事したら、装置が壊れちゃうぜよっ！」

ネプチューンがカイを羽交い絞めにし、動きを封じた。  
しかし彼は、もがいてネプチューンの腕から抜け出そうとする。

「馬鹿、ネプチューン馬鹿！ 先生を置いていったら、意味無いだろ！ 仲間を見捨てるぐらいなら、ここに残った方がマシだって！」  
「見捨てるなんて言わないでカイ！ シヴァちゃんは……シヴァちゃん、私は私達をグルルスに帰す為に、残ったんだよ！？ その思いを、踏み躪っちゃだめ！」

「だけどそれじゃ っ！」

カイの言葉は途中で止まった。

彼の視線の先、シルクは目に涙を溜めていたからだ。

彼女も、辛いのだ。

しかしそれでも、彼女は耐え、無理に受け入れようとしている。  
それを見たカイの身体からは、自然と力が抜けていった。

唯一、拳だけに力を残して。

その、フラグメントを発動していない拳を、壁に向けて思い切り打ち込もうとした。

だが、羽交い絞めにされている為に、虚しく空をきる。

彼が見据えるのは、電子端末の前でこちらを見ているシヴァの姿。  
彼女は、最後であっても微笑んでいた。

「先生の……先生の馬鹿やろおおー！！」

叫び声は、装置の発動とほぼ同時に放たれ、少しずつ声は消えていく。

眩い光がカイ達を包み、次の瞬間には、完全に姿を消した。

## 第七十二話：フェンリル・ヴァナルガンド

建物内の揺れが、増し始めていた。

天井に少しずつ、少しずつ亀裂が入りだし、その内崩れ落ちそうな様子だ。

それを見上げるシヴァは、電子端末のサーバーを背もたれにして、しゃがみ込む。

同時に我慢していた痛みが一気に彼女を襲い、呼吸が荒くなった。左脚の怪我は、血こそ出ていないものの、皮膚を塞ぐだけの処置しかしていない為、内側の肉が穿たれたままなのだ。

その状態で走り回った彼女には、もう限界が来ていた。

「武器も無く、怪我で動く事も出来ない。ならば、無傷で尚且つ未来のある若い者達を優先すべきだろうと、判断したのだが……冷静になって考えてみれば、シルクに治してもらえば良かったな。痛みが冷静な思考を邪魔しおった……」

呟き、苦笑する。

いくら歴戦の戦士でも、結局は人間なのだ。人とは脆いものだ、と内心でつくづく思う。

そして目を瞑り、一息つくこうとしたその時だ。

「間に合ったと、そう判断します」

言葉と共に、シヴァの身体に衝撃が走った。

それは、ヘルが彼女を全身でガッチリ捕らえ、装置内に突っ込んだからだ。

一瞬、シヴァは何が起きたのか理解出来ず、周囲を見渡してようやく装置に入っている事に気付く。

ヘルにワイヤーで捕らえられている事もだ。  
ワイヤーは金属で出来ており、シヴァの肌に食い込み、身動きを封じる。

故に、もがいても動けず、ワイヤーが余計に締まる。  
その事に彼女は舌打ちをし、電子端末の前にフェンリルが居る事に気付いた。

彼は片手で腹部を押さえながら、電子端末を操作する。

「どういふつもりだ、フェンリル！」

「簡単だ。今度は俺が残って装置を起動させるんだよ」

馬鹿な、と言葉を吐き捨て、更に問う。

「貴様は仇を討たなければならないのだろ！？」

「それは私が引き受けました。マスターの意思を全て、です」

「そうだヘル。本当に最高だよ、お前は」

「—Nichts zu danken、マイマスター。しかしその言葉、礼に及ばすともありがたく記憶媒体に刻んでおきます。

では、—Viele n dank f u a r a l l e s ……S  
ehen wir wieder」

「ああ、また会おうな、ヘル」

その言葉を起点とし、ヘルはワイヤーの締めりを強め、フェンリルは起動の為にスイッチに手を添えた。

装置が完全に密室となり、魔法陣が光を灯す。

次いで、再度眩い閃光が放たれ、二人は姿を消した。

それを待っていたかのように、急に揺れが強くなり、フェンリルは思わず体勢を崩して倒れてしまう。

その衝撃で、テーピングで無理に止血をしていた腹部の傷から血が噴き出す。



「ぐっ！？……ここまでってやつか……」

苦笑混じりに呟き、匍匐に近い状態で這って、サーバーを背もたれにする。

そこで、シヴァと同じ事をしている自分に気付き、失笑。

次いで溜息をつき、目だけを動かして周囲を見渡す。

視線の先にあるのは、いくつもの大きなカプセルだ。

人一人が容易に入れそうな大きさのあるそれあ前面が開閉式になっており、今は全てが開いている。

彼はそれを見て、ふと過去を思い出す。

もう、取り戻せない過去を。

しれは、平穏な日常の光景だった。

科学研究棟の二階、個人実験室。

そこには二人の少年と、長身の痩せた男が居た。

同じ白髪で、尚且つサイズは違えど同じ白衣を纏った三人は、一つのカプセルの前に立っていた。

彼らの視線の先、カプセルは培養液に浸されており、中には少年達より少し年上の少女が入っている。

長身の男　左胸の位置にピンセットで引っ掛けてあるＩＤカードにロキと書かれている彼は、腕を組んで嬉しそうに頷いた。

「これが君達にとっての、初の一大実験となりますよ。キース君の細胞複製と人工臓器の理論と、フェンリル君の自動人形に量子コンピュータを導入し、人としての意思を与える技術。これら二人の考

えが、大きな成功をもたらしました」

君達は天才です、と言いながら、ロキは二人の頭を撫でる。

左手で撫でられているキースは照れ臭そうに鼻の頭を人差し指で掻き、右手で撫でられているフェンリルは照れ隠しに他所を向く。

そんな二人を見て微笑むロキは、腕時計を一瞥し、再度カプセルを見る。

「そろそろ時間です」

「やっと、僕達の成果がご登場だねえ」

「……先生。本当に、これでまたヘルに会えるのか？」

不意に、フェンリルが不安混じりの表情で問い掛けた。

彼の目には戸惑いの色があり、眉尻が下がってる。

だが、その問いにロキは、不安を吹き飛ばすような笑みで答えた。

「大丈夫ですよ。残念ながら、君達と同じ年齢基準の彼女では無いですけどね。容姿も、声も全部、成長した彼女を想定した状態であり、ヘルそのものです。ただ、彼女が一度死んで、私達が新たな肉体で蘇らせた、というのは伏せておきましょう」

「なあんでだい？」

「彼女は、新しい彼女として今、生まれるのです。私達の知っている彼女では無く、新しい彼女として。……君達は、それを覚悟してヘルを作ったのでしょうか？」

ロキに逆に問われ、二人は俯く。

そして、かつて幼い頃に一緒に遊んでいたヘルの姿を思い出す。

三人は兄弟であり、また孤児だった。

しかし、ある出来事をきっかけに三人の頭脳は天才と呼べるほど周囲からずば抜けている事が判明し、ロキが養子として引き取った

のだった。

その頃は三人には名前が無く、「お前」や「きみ」と互いを呼び合っていたのだが、そんな彼らにロキが名をつけたのだ。

だが、不運の事故でヘルは死に、以来フェンリルとキースの二人はヘルを蘇らせる為の研究に没頭していたのである。

そしてその結果、現在に至るというわけだ。

二人は決意した。

頷き、ロキの方へと向く。

「僕は、賛成だよお」

「俺も賛成だ。先生、お願いします」

その言葉にロキは頷き、真顔となる。

次いで一歩前へと出て、カプセル横のスイッチをいくつか押し、レバーを引く。

するとカプセル内の培養液が下部の排水口から出ていき、前面が開き始めて隙間から一瞬だけ煙が噴き出す。

やがて全開となったカプセルの中には、後頭部に向けて無数の配線を繋げられている、全裸の少女が眠っていた。

彼女はまず、目蓋をゆっくりと開き、眼球を上下左右に向けて初期設定を行う。

次いで数回瞬きし、今度は後頭部を上下左右に向ける。

それを終わると正面を向き、口を開いた。

「全神経、接続確認。初期設定完了。続いて、対象の視認に移ります」

言いながら、彼女は三人を一瞥し、また瞬きをする。

「対象を確認。おはようございますフェンリル、キース、ロキ

先生」

その言葉を聞いた瞬間、三人が顔を見合わせた。互いが、それぞれの喜びの表情を見せていた。

同時に三人は同じ事を思う。

成功だ、と。

だが、喜びも束の間、ロキ先生が少女の最終チェックに入る為、彼女の電源を落とした。

それから、数ヶ月が経って……。

口論が聞こえる。

それは通路を走るフェンリルが持つ無線機を介して、彼の耳に入っていた。

声の主はキースとロキのものだ。

『だから、だからだよ！ 僕達の技術を軍事利用すれば、あの忌々しいエニグマを駆逐出来るんだよあ！？』

『確かに出来るかもしれませんが。しかし、私達は兵器を作る為に研究して来たのでは無いでしょう？ ただひとえに、ヘルを蘇らせようという想いで。』

『失敗作だったじゃないかあ！ そりゃ、姿形や声はヘルだよあ？ でも、記憶はヘルじゃない！ 僕達は、失敗したんだよあっ！』

怒りと後悔が混ざり合ったキースの声が、イヤホンを通してフェンリルの耳を突き抜ける。

彼はその会話に危機感を抱きながら、必死に走った。

向かう先は、科学研究棟の一階、格納庫。

そこはキースが実験に使っている場所であり、ロキでさえ滅多に入った事の無い場所。

だが、何故そんなところにロキは居て、フェンリルが無線で会話を聞いているのか。

それは先日、最近のキースの行動に不信感を抱いたロキが、フェンリルに格納庫へと行ってみる、と報告したからだ。

その為フェンリルは、こっそりと無線機をロキの白衣に忍ばせ盗聴した。

口論の始まりは、ロキが入室した際に何かを見つけた時だった。

そこから言い合いは激化し、危機感を感じたフェンリルは走り、格納庫へと向かう事になった。

格納庫まで、あと少し。

『だから、だからだようせめて、せめて有効活用しなきゃいけないんだ。それが、蘇る事の出来なかった妹への、せめてもの手向けなんだよお……』

『キース、その事に関してだが』

『もおいしいよう、先生』

刹那、発砲音が響く。

突然の音に思わず眉を顰めたフェンリルは、あと数歩の所にある格納庫の扉を開き、中へと入った。

その先にある、カプセルがいくつも置かれた室内の光景を見て、彼は目を見開く。

そこには研究を持ったキースと、胸元を押さえながら倒れている

ロキの姿があった。

キースはフェンリルが入って来た事に気付くと、微笑んだ。

「やあ、フェンリル！ 丁度今、僕達の障害になるやつを始末しようと思ってたんだよ。でも、死体は一人で運べないんだあ。だから、ね？ フェンリルも手伝ってくれるでしょ？」

拳銃を持ったまま両手を合わせてお願いするキースは、とても楽しそうだった。

その姿に、フェンリルは頬を引き攣らせる。

だが、そんな彼の表情を気にしていないのか、キースは言葉を続けた。

「こいつあね、僕達が執念かけて研究した成果を、有効活用しようとしないうんだよ。変だよええ、僕達の成果なのに。邪魔しちゃ、駄目だよええ？」

今の彼は、兄弟であるフェンリルの目から見ても、明らかに狂っていた。

言動こそ生まれつきであるが、昔の面影はそこには無い。

その異変にロキが気付いていて、兄弟である自分が気付けなかった事に、フェンリルは後悔した。

と、その時だ。

啞然と立ち尽くすフェンリルに向けて、ロキの言葉がぶつけられる。

「行きなさい、フェンリル……！ 君はヘルを連れて……ここから……ここから逃げるのです！」

「うるさいよう、本当うるさいよ、邪魔者」

再度、発砲音が響く。

だが、その時は既に、フェンリルは端って格納庫を後にしていた。故に発砲音が誰を狙ったのかは、分からない。けれど走る。

ロキからの頼み事を果たす為に、だ。

階段を駆け上がり、二階の個人実験室へと入る。

そこにはヘルが入ったカプセルがあり、しかし培養液には浸されていなかった。

いつでも起動出来る状態になっていたのだ。

だからこそフェンリルは、迷わずレバーを引き、前面を展開させる。

そうして露になった全裸のヘルを引っ張り出して、ロッカーに入っていたロキの白衣を着させる。

途中、起動して意識が覚醒したヘルは、必死の表情になっているフェンリルを見て小首を傾げる。

「お急ぎのようですが、どうしたのですか？」

「気にするな！ 今は、俺についてくる事だけを考えろ！」

「……ヤー、マイマスター」

「ん？ ドイツ語か。いつの間に覚えたんだと。よし、走るぞヘル！」

最後に靴を履かせ、手を取り走り出す。

その間、何一つ喋らずにヘルはついてきていた。

どこへというわけでもなく、ひたすらに走る。

それから数十分後にエニグマの襲撃があったというのは、数日後に知る事となった。

「それからは、ただひたすら殺しとかして、金を稼いでいたなあ……」

懐かしそうに呟き、苦笑する。

彼の中で思い返される記憶は、彼が今の仕事、傭兵を始めるきっかけとなったものだった。

彼はそれをしみじみと回想し、死を待っていた。そんな彼に應えるように天井のヒビは増え、時折瓦礫が落ちてくる。

直接フェンリルには直撃していないが、彼の周囲には瓦礫が積み上がり始めていった。

それらを見渡しながら、彼はふとある事に気付いた。

何気ない、ただうっ通のように思っていた事に、疑問を生む。

「……ドイツ語？　ドイツって……何だ？」

ジードの言語は世界共通だ。

故にグラルスからしてみれば、ジード語と読んでいいだろう。

しかし、

「シヴァとは、普通に会話出来ていたな。他世界でも言語は共通か。確か、グラルスも世界共通だった。……じゃあ、他にも世界がある？」

思考し、だがそれをすぐに止める。

「まあ、俺には関係無い。そう、関係無い事だ」

呟き、目を瞑る。



やり残した事は、全てヘルに託した。

後はもう、死を待つだけだった。

すると瓦礫は装置を破壊し、そして次は、フェンリル目掛けて落ちた。

廃墟都市は崩壊する。

最後の命が消えた。

それを感じ取ったルシファアは攻撃の手を止めた。

するとエニグマの群は一気に進撃し、ルシファアを突き抜けて廃墟都市に覆い被さる。

一瞬にして建造物は崩壊し、跡形も無くなった。

戦闘中の襲撃などとは、比べ物にならないくらい。

それを見据えるルシファアは、その姿をゆっくりと消していった。契約者はもうジードに居ない故に、彼もジードを去るというわけだ。

「……ジードは滅んだね。ばいばい、世界」

目一杯に口の端を吊り上げ、満面の笑みで別れを告げたルシファアは、その姿を完全に消した。

そして世界は、滅びを迎える。

エニグマを殲滅出来るフラグメントを持った者はもうこの世界には居らず、全勢力を投入したエニグマに対抗出来る力は、ジードの人間には無かった。

無限に増殖するエニグマはやがて世界を覆い、そしてジードはジードでは無くなり、その姿は？空間？から消滅した。

## 第七十三話：知る真実と、これから

夢の中にカイは居た。

その夢は無空間。

身体が浮遊し、まるで水中に居るかのよう。

それも、はつきりとした意識が彼にある状態だ。

彼はこの感覚に身に覚えがあり、思い出す。

これは、彼がフラグメントを契約した時と同じだった。

それに気付いた時、不意に彼の脳内に声が響く。

「カイ。カイ・エディフィス。よくぞここまで辿り着きましたね。それは偶然か、あるいは必然か。どちらにせよ、貴方は二つ目の時空の柱に辿り着いた。これは、紛れも無い事実」

声の主は、ナンナだった。

姿を見せていないが、声だけが聞こえる。

必死に姿を探していたカイも、すぐにその事に気付き、声に集中する。

「さて、時空の柱を蘇らせてください。貴方のその手で」

同時、フラグメントが発動した。

それはカイ自身の意思では無く、ナンナの意思によるものだった。

刹那、眩い閃光がカイを襲い、反射的に目を瞑らせる。

暫くし、目を開ければそこにはナンナの姿があり、カイを見て微笑んでいた。

「ありがとうございます。残るは後一つ……。それは、全てが揃う場所に。全ての運命が集結し、終わりへの道しるべが示される前に」

最後の時空の柱へと導く言葉が伝えられる。

それからすぐに、カイの意識が少しずつ薄れ始めた。  
夢からの目覚めだ。

それは、現実へと戻る為の行為。

ナンナの姿も薄れ始め、そして完全に意識が飛んだ……。

目が覚めた時、そこは見慣れない天井だった。

彼、カイが見上げるそれはテントの物であり、周囲を見渡すと彼が寝ているのと同じベッドがいくつも、均等に並べられていた。

鼻を衝くのは独特な薬品の臭い。

そこは、医務室だった。

カイは自分が何故、医務室にいるのかと疑問に思い、気を失う前の記憶を辿ってみる。

そして、思い出したのは、

「シヴァ先生！」

「うわあああ！？　びっくりした！」

大声を上げて起き上がったカイに驚いたのは、丁度医務室に入ってきたシルクだ。

彼女は片手に水の入った水筒を持っており、もう一方の手に銀コップを持っていた。

それは、カイが起きた時の為に持ってきたのだろう。

「わ、やっと起きたんだ、カイ！　凄く心配したよあー」

言いながら、ふらふらつとした歩調でカイに近寄り、水筒の水を銀コップに注ぎ始める。

その間、カイは少し目眩がするのをかぶりをふって吹き飛ばし、シルクに焦点を合わせる。

すると彼女は、はいつと言って銀コップを差し出してきた。

カイはそれを両手で受け取り、一口飲む。

水の冷たさが口内に、喉に染み渡り、脳が一気に覚醒する。

次いで一息つき、再度シルクを見る。

「……なあ、ここどこ？」

「ここはね、レジスタンスの駐留キャンプだよ。いや、この世界に戻って来た場所がキエングだったんだけど、周りがまさかの戦争真っ盛りでね。ヤバかったんだよ。カイも気を失ってるし」

そこら中がどか～んって、と言いながら手を大きく広げ、爆発を表現する。

「でもね、そこに颯爽とタマネギが登場してね、助けてくれたんだよ。で、ここに居るわけ。もう二日は経ったかなあ」

「そうか、タマネギが……って、三日！？俺、二日も寝ていたのか？」

「そつ、三日間もすやすや眠ってたよ。フラグメントを使いすぎちゃったのかな」

心配そうに左手を見るシルクは、深い溜息をつく。

そんな姿を見て、カイは小首を傾げた。

視線の先、シルクの目元を良く見れば、隈が出来ていたのだ。

「どうした？　なんでそんなに疲れてんだ？」

「そりゃ疲れるよ。私の治癒術が買われて、ついさっきまで怪我

人を治してたんだから。ついでにカイの事も心配だったし」

「お、俺はついであや……」

「冗談だよ、冗談！　っと、そういえばタマネギに起きたら連れて来いって言われてるんだけど、動けそう？」

話を逸らしたな。

そう思い、ジト目でシルクを見るカイは、すぐにそれを止めて腕を振り、軽いストレッチをする。

寝すぎたのか、バキボキと音が鳴る事に苦笑しつつ、暫くそれが続けた。

そして、勢いよくベッドから飛び出し、左手でブイサインを作る。

「大丈夫！　よし、タマネギの所に向かうか！」

「その元気が羨ましいよお」

五月蠅いくらいに元気なカイに文句を言いながら、シルクは先導をきって医務室を出た。

カイも彼女に続き、外へと出る。

外は雲一つ無い青空から降り注ぐ日光で暑く、今まで室内に居た二人の目を瞑らせる。

レジスタンスの駐留キャンプは平地に設けられており、周囲には多くのテントが張られていた。

そして、レジスタンスの兵士であろう者達が、武器や医療品、資料を持って忙しそうに走り回る。

ある者はテントへ、ある者はキャンプの外へと。

カイはそんな光景を見ながら、シルクに案内されて他のテントよりも少し大きめのテントへと入っていった。

「第三防衛ラインまで突破されたかあ……。圧倒的やなあ」

「それでも、準備不足だった部隊が三日保っただけ、まだ良い方だっちゃ。問題は、撤退準備をいつ始めるか、ぜよ」

「援軍と輸送部隊がまだ来てないんや、まだ離れられん。幸い、戦線からの負傷者は、セシールがかもってくれてるから助かってるわ」

二人の男、ネプチューンとナギは、シュメールの大陸を揃って睨んでいた。

その図にはレジスタンスの駐留キャンプを示す、大きめの赤い三角が大陸の南、海に近い所に描き込まれており、そこを拠点に小さな赤い三角がいくつも北に向けて描かれている。

それらは横一列になる形で一ライン、計六ラインあり、上から三ラインにはバツ印が付けられていた。

全滅の証であるそれを見るナギは眉を顰め、残りの三ラインを見る。

「ここは、前線二ラインを最終防衛ラインまで後退させて、守りを固めるっつーのはどうや？」

「それは難しい事ぜよ。敵の戦力が全く掴めてないかんのお。……でもま、一応一ライン分後退した方がいいかもんな」

「タマネギー、カイを連れて来たよ」

「誰がタマネギやつ！」

入室してきたシルクに素早くツツコミをいれたナギは、彼女の後に入って来たカイを見て笑みを作った。

その笑みのまま、スキップをしてカイに近寄る。

「カイ・エディフィスう！ やーっと目え覚めたんやな！ このま

ま起きんかったら、どうしようかと思つとつたわい」

「三日も寝ちまつたけど。んで、なにがどうなつてんの？　なんか戦闘になつてるとは聞いたけど」

「なんや、なんも聞いとらんのかい。んなら、説明するわ。わいらがエディフィスらと離れた後、キエンギを制圧したんや。そしたらどうや、わいらの仲間が、いやレジスタンスと同じ服装のやつらが戦闘を仕掛けてきたんや」

その兵士達は、服装こそレジスタンスではあつたものの、一人一人の力は本物のレジスタンスより劣り、しかし数で押して来た。故にレジスタンス側は少しずつ、後退せざるをえなかつたのである。

そんな中、ナギはカイ達が向かつたと思われる階段があつた事を思い出し、数人の護衛と共に階段を下りていった。

理由は当然、護衛対象であるカイを保護する為である。

ナギ達が到着した時、丁度良いタイミングで眩い閃光が起き、カイ達と遭遇したというわけだ。

しかし、カイが気を失っていたが為にナギは不安を抱きつつ、そこから彼らは急いで外に待たせてある馬車に乗り、現在居る駐留キヤンプへと移動したのだった。

「　　つと、ここまでが、キエンギ襲撃後から脱出までの経緯や。

質問はあるかい？」

「はいはい！　なんで俺が護衛対象なんだ？」

「ええ質問やな。それはわいらが、皇帝から直々の命を受けたからや。……ああ、皇帝つてのはバビロニア皇国のギルガメシュ皇帝のことな」

その言葉を聞いたカイとシルクが、え？という反応をする。

次いで、二人は顔を見合わせ、





「そうだった〜！ すまん、あんときは考え事してたんだった！ ほら、途中で退席したんろ？」

「ん〜……言われれば、そうだった気がする……」

今度はカイが頭を抱えだし、しかしすぐに顔を上げる。  
同時に軽く溜息をつく。

「まあ、教えてくれた人は、もう居ないわけだから……。よし、じゃあまた質問いくぜ！ いっぱいあるから、一気にするぞ！」

「前置きはいらん。はよいえや」

「ぐつ、急に冷たくなった……。じゃ、聞く！ キエングでタマネギが」

「タマネギやない、ナギやつちゅーてるやろ！」

「ごめんなさい！ ……気を取り直して。キエングでナギが管理下じゃないって言ってた、キエング行きの客船を襲ったやつらは、何を確保しよう？ それと、なんで乗客を殺したんだ？ んで、次！ 俺を保護する詳しい理由ってのはなんだ？ ほい、次！ 皇帝の直属なら、世界中の皇国軍の駐留地はわかる？ ミーン大陸の皇国軍が悪さしてたんだけど。俺の居た村も襲われちゃったしな」

「ほんまに一気やない……。しゃーない、順番に答えてやるわい」

言って、ナギは説明を始める。

まずは、キエング行き客船襲撃について。

これに関しては、キエングでのシヴァの質問に対し疑問を持った為、ナギが諜報部を動かして調べたそうだ。

それで分かった事は、第三勢力が同時に襲撃していた、ということ。

もちろん、これにはカイ達が一勢力として含まれている事を前提としている。

そして、虐殺を行ったのは第三勢力であり、レジスタンス側も大きな被害を受けたそうだ。

また、この時も第三勢力はレジスタンスの服装をしていたという。これにより、レジスタンスは第三勢力を“アンノウン”と命名した。

このアンノウンが客船にて、何を狙っていたのかは不明だが、レジスタンスが確保しようとしていたのは、とあるルートで入手した情報に含まれていた生物兵器だそうだ。

なんでも、正体不明の組織が極秘裏に生物兵器を開発し、キエングヘと送ったのだという。

諜報部はこの開発組織とアンノウンが同一組織ではないかと推測している。

ちなみに、その客船に護衛対象であるカイが乗っていたのは偶然なのだそうだ。

続いて、ナギはカイが護衛対象である理由を話す。

皇帝直属特殊部隊である彼らの中でも、ナギのような幹部クラスの者にのみ、与えられた命令があった。

“この世界は今、危機にひんしている。それを救える者がいるのだ。神の力フラグメントを持った少年、カイ・エディフィスを保護し、私の下に連れて来い”と。

そして、キエングに居た諜報部員が、カイを発見したと報告し、一番近くに居たナギの部隊が保護に向かったのだ。

これが、キエング襲撃が起きる過程だ。

しかし、そこに疑問を持った者が居た。

片手をあげて質問をしたのは、ネプチューンだ。

「あれ、キエングってバビロニア王国の領地じゃなかったかな？ほら、テクノスから亡命した蝙蝠男ドライゼンが」

「まるで怪人扱いやの……。んまあ、それ故に簡単に入れると思ったんやけどな。キエングの皇国軍のやつら、通行証見せても入れて

くれなかったんや。皇帝の拇印が入った通行証を無視しやがったんやで！？」

言いながら、懷から紙を取り出し、全員に見えるようにして拡げた。

その紙にはあらゆる検問・交通機関においての通行を許可するといった内容がかかれており、皇帝の名前と拇印が押されていた。

しかし、カイ達は特に興味がなかった為に、軽く相槌を打つだけで終わる。

そんな皆の態度にナギは渋々と通行証を懷に戻し、話を続けた。

「とりあえず、なんとか街にはいれてもらえたんやけどな？ 突然、わいらの部隊が攻撃されたんや。キエングの皇国軍にな」

「ええ！？ なんでだよ？」

「わいもしらん。せやけど、やられたらやり返すしかないから、反撃に思い至ったんや。せやから、襲撃は少しちゃうな」

だが、現在になって判明した事があった。

それは、キエングの皇国軍はアンノウンの一部であったということ。

確定事項ではないが、味方である皇国軍がレジスタンスを攻撃したこと、キエングがアンノウン出現地点だったこと。

この二つを踏まえれば、その線は高確率で有力だ。

「これが、ネプチューンの質問に対する答えな。んで、次は……ミーン大陸の

皇国軍についてやな。そいつら、なにしたんや？」

「旅を始める前、俺たちの村が皇国軍に襲われたんだよ。なんか、フラグメントを探してたみたい。それ以前にも、ミーン大陸の色んなところで村を襲っていたんだ」

「皇国軍がそんなことしとったんかいな……。皇国の印象悪くなるなあ。……。へ？　ちよいまで今なんて言った？」

「え、皇国軍が村を襲って」

「そこやない！　少し前や前」

「皇国軍がフラグメントを探してたってところ？」

その言葉を聞いて、ナギは啞然とする。

次いでブツブツと独り言を言い出し、頭を振った。  
しばらく思考し、答えを出す。

「……そいつらは、皇国軍やない。なんせ、フラグメントの情報を知ってんのはレジスタンスの幹部クラス。そして、命令された待機エリアはカナン大陸、シユメール大陸、アツカド大陸や。ミーン大陸はわいらみたいな軍人の上陸にはかなり厳しいんや。数年前にやとと、港の警備のみを任せただけやからな。ほら、教育面にも情報規制がかかってるほどや。その上、命令されたんはレジスタンスや。皇国軍やない」

口調とは裏腹に、表情はかなり深刻だ。

レジスタンスの幹部に選ばれる者には、皇帝への忠誠心が必ずと  
いつていいほど存在する。

命令違反・裏切りという考えが生まれることはまず無く、また功  
績を持った者、それが彼らだ。

故に、命令に無い”ミーン大陸への上陸”を行う者は居るはずが  
無く、ミーン大陸に向かったのがレジスタンス幹部でないことは明  
らかだ。忠誠心に揺らぎが無い限り。

「なんも分からん。なんも分からんが……。とにかく、エディフィス  
をバビロンまで連れていくわ。それでもええか？」

「皇帝さんが会いたがってるってんなら、仕方ないな」

「カイ、頬が緩んでるよ。調子にのらないっ」

バシィツと快音が響き、お尻を叩かれたカイが飛び跳ねる。

「いつつえー！ た、叩くことないじゃん！？」

「どうせカイったら、皇帝ほどえらい人に必要とされる俺ってすげ  
ゝって、自惚れてたでしょ」

「うつ…… そ、そんなわけないそんなわけない！ そ、そうい  
えばナギ、出

発はいつになるんだ？」

「輸送船が来てからや。一応、後数時間で来ると思うんやけどな」

言つて、ナギは唐突に拍手を打った。

それは会話を終える為の合図としてか、彼は吐息する。

「そんじゃ、話はここまでや。輸送船が到着したら呼び出すさかい、  
そんまでゆつくり休んでくれな」

「おっけー、わかった！ それじゃ、行くかシルク」

「へ？ 行くつてどこに？」

「飯だよ飯！ 三日も寝てたら腹減った」

同時、腹の鳴る音が響いた。

その事にカイは顔を赤らめ、他の三人は笑い声を上げた。

するとカイは恥ずかしさを紛らわす為にテントを出て行き、シル  
クが慌ててその後を追う。

ナギとネプチューンは二人の後ろ姿を見送り、そしてネプチューン  
が視線をナギに移す。

「皇帝、元気かいな？」

「は？ なんてそんな事聞くんや。商人なら、色んな情報も入るや

る？」

「いんや、一応、身近なひとの証言が一番ぜよ」

「そうかいそうかい。あゝ、皇帝は……今んところはいつも通りや。ようもなく悪く

もなく、いつも通りなんや」

苦々しく言ったナギの言葉に、ネプチューンは軽く相槌を打つ。  
そらした顔に、曇りを見せながら。

## 第七十四話：さり気ない至福の時間

日がほとんど沈み、夕焼け空に闇が染み出すころ。

レジスタンスの駐留キャンプには、松明の光が所々に灯り始める。特に夕食時の食堂は活気に溢れていた。

その厨房には、四人の性が忙しそうに調理をしていた。

いや、正確に言えば三人だ。

もう一人の女、ティファはつまらなそうに皿を指で回す。

そんな彼女を尻目に見る、料理に盛り付けをする少女、シルクは苦笑を漏らす。

そして、次に料理を作っているリリイとメルディに視線を移し、口を開けた。

「二人とも、料理が上手だねえ。羨ましいくらいだよ」

「いえいえ、主婦となればこれくらい出来ないと駄目なですよ」

「え、リリイさんって結婚してたんですか!？」

驚きの声をあげたメルディは、思わずフライパンの上で炒めていた米を落としそうになり、慌ててバランスを取り直す。

なんとかこぼさずに済み、ホッとしたメルディは、調味料をかけながら問い掛ける。

「いいですねえ、結婚。楽しいですか？ 幸せですか？」

「はい、もちろん幸せですよ」

「興味津々だねえ」。ちなみにメルディちゃんはナギを狙ってるの？」

「ね、ねらっ!? そ、そそんなわけないでしょ! それに、もし……その、ごによごによ……だとしても、上官と部下ですし」

あきらかに動揺しているメルディは、フライパンをコンロに置いて俯く。

なにやらブツブツ呟き、指を絡ませ始めた。

そんな彼女を見るシルクとリリイは、顔を見合わせて微笑する。

「メルディさんも、上手ですよ？ 厨房担当はよくやるのですか？」  
「いえいえ、いつもは別の人が厨房担当なんですけど、その人達前線に駆り出されちゃって。ですが私は昔、よく姉に食事を作ったので、それを隊長に言ったら厨房担当に選ばれたんです」

半ば強制でしたけどね、と付けたし、苦笑する。  
だが不意に、回していた皿を止めたティファが、小首を傾げて問い掛ける。

「貴女の姉って、どういう人なの？」

「私の姉はレミイ・エルマンといって、同じ軍人です。私と違ってかなり強いんですよ。それはもう、皇国軍の隊長に選ばれるくらいです」

「姉を誇りに思っているのね。さぞかし……え、レミイ？」

ふと、聞き覚えのある名前に、ティファは眉をひそめる。

レミイ、レミイ、と何度も呟き、記憶を辿って行く。

しかし、答えを出したのは別の人物だった。

「ああ！ レミイちゃんか！ 確かアクアトレインの……そう、ネリンで会ったよ！」

「あ、姉に会ったんですか！？ 元気そうでした？」

「うん、元気元気！ カイと一騎打ちで勝ったくらい、元気だった」

その言葉を聞いて、メルディはホツとし、安堵の吐息をついた。



一方で、話がわからないリイは、小首を傾げながらティファを見る。

返された反応は、肩をすくめる動作だった。

彼女はそれに頷きで返し、調理に戻る。

だが、メルディは調理に戻る事無く、話を続けた。

「……実は、ずっと姉と連絡が取れなかったんです。忙しいからかな、と思ってたんですけど。無事を確認できてよかったです」

「まあ、最近は治安も悪いしね……。大丈夫、そのうち会えるよっ」

親指をつきたて、満面の笑みを見せるシルクを見て、メルディも笑みをこぼす。

そうですね、と自分に言い聞かせるように呟き、彼女も調理に戻った。

「さて、続きだよ続き！」

その言葉を合図に、厨房には活気ある調理の音が再び戻った。

ティファも、先ほどと同じように皿回しを再開する、

「つて、ししょーも手伝ってよ！」

「え？ いや私、料理なんてこれっぽちもできないから。唯一無二出来るとしたら、この皿回しくらいしか」

「それ料理じゃないよっ!?」

深夜、第五防衛ラインにて。

警報の鐘の音が、真つ暗な闇の中で鳴り響いていた。

だが、その警報を聞いて動く者は、その防衛ラインに居る人員の一部のみだった。

日が沈む前に、第四防衛ラインから後退してきた部隊が合流している為に、二個小隊分くらいは居るはずだ。

だが、今松明を手に戦闘体勢に入っているのは、三個分隊のみである。

彼らは緊急事態に備えて全分隊が固まって移動しており、現状把握を急いでいた。

と、その時だ。

彼らの耳に、悲鳴が届いた。

断末魔のようなそれはすぐに止み、しかしまた聞こえてくる。

また、その声は一箇所だけでなく、周囲全域から上がっていた。

暗闇から聞こえる得体のしれない声に、次第にレジスタンス兵達は恐怖を抱き始める。

鞘から抜き、構える剣は震え、周囲を見る挙動は疎らになる。

恐怖心が、彼らから兵士としての身構えを忘れさせていた。

そうしている間にも、悲鳴は続き、また次第に近付いて来る。

それによつて聞こえる音は、悲鳴の他に連続した金属音と低音で響く機動音だ。

普通の鏑迫り合いではあり得ない音は、彼らの恐怖心を更に駆り立てる。

そして……それは来た。

「ぎゃあああああああー!!」

固まっていた兵士の一人が悲鳴を上げた。

その兵士は松明を持っており、周囲の仲間に悲鳴の正体を見せつける。

それは、剣と言っても歪で、あまりにも残酷なものだった。

兵士の身体に振り下ろされた剣は、何かの機動音と共に進藤しており、一振りだというのに出血量が異常だ。

今も肉がえぐれる音と共に、鮮血を周囲に飛び散らせるほど。そして剣は深々と身体に沈み込んでいく。

兵士達は、その光景をただ見ているしかなかった。

目前で起きる惨劇を、啞然と見つめる。

そしてついに悲鳴は止み、兵士の身体が真つ二つに裂けた。

血溜まりの上に、二つの肉体がばしやりと音を立てて落ちる。

剣を持ち構える者は、赤い髪を靡かせている。

兵士達は、戦慄した。

だが、仲間を殺されたという事実が、彼らの勇気を駆り立てる。震える足を手を無理矢理止め、歯を食いしばる。

剣の刀身には、無数のチェーンがついており、それが高速で回転していた。それを持つ者は、女だ。

最初に飛び出したのは、三人。

それぞれが散開し、三方向から迫る動きで、切り込みにかかる。

迫る兵士を、彼女は無機質な瞳で見つめる。まるで人形のよう。あるいは殺人鬼のように。

対し、彼女は標的を一人に絞って、剣を横に振るう。

高速回転するチェーンは、防ごうとする剣を容易に粉碎し、身体を抉る。

二の腕から上が切り離され、文字通り真つ二つになった。

だが、迫る兵士は後二人。

赤髪の女は対応のため、剣を降った勢いを使って回し蹴りを放つ。ゴウツと力強く空を切る音が鳴り、しかし紙一重で避けられる。

二人は笑みを浮かべた。

やれると、内心でつぶやく。

だが、そんな勝気は簡単に打ちのめされることとなる。

一人の兵士の首に、ロープのような物が巻きついた。

同時に勢い良く引かれ、兵士が呼吸を失うと共に倒れ伏せる。

次いで、ロープの先の暗闇からナイフが飛来し、もう一方の兵士の首を穿った。

当然、バランスを崩す彼は、攻撃も防御も即座に取れず、体制を立て直した赤髪の女に斬り殺された。

そして気付けば、残りの分隊もまた、急所にナイフを刺され、死んでいた。

第五防衛ラインは全滅となった。

残るのは、松明に照らされた多くの死体と血溜まり。

そして、チェーンソーを片手に持った赤髪の女とナイフを持った青年だけだった。

## 第七十五話：アンノウ

夜が明けた頃、事態は大きく進展していた。

レジスタンス駐留キャンプの近くにある海岸に、輸送船と援軍が到着したのだ。

その報告を受けたナギは部隊を指揮し、大急ぎで怪我人や物資の搬入を命令した。

今、全レジスタンスがその作業に取り掛かっている。

急ぐ理由があった。

それは、夜明け前にナギの下にあった報告だ。

第五防衛ラインが落ち、最終防衛ラインが戦闘中。

この事実、ナギはかなりの危機感を覚えていた。

最終防衛ラインが抜けられれば、すぐに駐留キャンプに辿り着かれてしまうからだ。

だから急ぐ。

隊長自らも物資の搬入作業に参加し、少しでも多く入れようとする。

だが、敵の進行があるのは必然。

その時が、警報音と共に来てしまった。

高台より確認出来るのは、一個小隊。

アンノウンはそれだけの少数で、レジスタンスの拠点に攻めて来たのだ。

それは無謀と言えよう。

だが、それはアンノウン側がただの兵士であった場合のみだ。

列を作って進行してくる群れの先頭に、存在感のある少女が居る。彼女はただ前だけを見、他の兵と同じ動きで進む。

しかし、片手に持つ剣が異様だった。

いたのような刀身につけられたチェーンが、ときおり高速回転しているのだ。

それを双眼鏡でみた、高台に居る監視兵は危機感を覚え、急ぎで下へと降り、伝令兵に報告する。

すると伝令兵は急ぎでナギを探し、脅威対象を伝えた。その報告は、搬入の手伝いをしていたカイの耳にも入った。

「ナギは搬入作業を続けててくれ！俺が防衛の手伝いに行ってくるから！」

「なんや、いつちよまえな事ゆーとるな。せやけどエディフィスに死んでもらったらいが困る。メルデイ、援護にまわるんや」

指示を受け、隣で同じく搬入作業を行っていたメルデイは、荷物をいったんおいて背筋を伸ばし、ビシッと敬礼した。

ナギも彼女に軽い敬礼を返し、作業に戻る。

そして、カイとメルデイは視線を交わして頷き、急ぎで防衛へと向かった。

途中、何人かの兵士も合流し、正面入り口まで急ぐ。

戦闘は既に始まっていた。

だがそれは圧倒的なものであり、アンノウンが優勢だった。

それは他でも無い、先頭に行く赤髪の少女によってもたらされたものだ。

彼女は手に持った武器を器用に使いこなし、次々とレジスタンス兵をぶった切って行く。

それを見たレジスタンス兵達は恐怖し、中には逃げる者さえ居る。力ではなく、恐怖で押し勝っていたのだ。

カイとメルデイは、そんな相手と向かい合う。

そして、気付いてしまう。

敵として立っている少女が、誰なのかということに。

「そんな……レミイな」

「姉さん！？なにやってるんですか！」

カイの言葉を遮った驚きの声は、レミイに届いているはずだが、表情に変化はない。

それどころか、剣を構えて斬る体勢にはいつていた。

彼女の瞳に色はなく、ただ無機質なそれは肉親ではなく標的を見る目だ。

そして彼女はチェーンソーのギミックを起動し、地面を削りながら走り出す。

対し、カイは得体の知れないその武器にどう対処しようか迷いつつも、後ろ腰から刃を一本抜いて前へ出る。

刹那、刃どうしがぶつかり合い、鏢迫り合いとなった。

ただ鏢迫り合うだけでもあまり起きない火花は今、かなりの量を散らしている。

それはチェーンの回転が速い事を証明し、カイの手に異常なほどの負荷を与えた。

「がががつ！ やばいって、やばいってこれ！」

叫び、手を震わせるカイは、バックステップで距離をとり、刀身を見やった。

幸い刃こぼれはしていないようだが、かなりの負荷があったことは確かだ。

耐え切ったのはエターナル製であるからだろう。

しかし、過信は禁物だ。

カイはそう思いながら、目前に居る女を見据える。

同時に後ろ腰にあるもう一本の刃の柄に手を添え、次の攻撃に移ろうとした。その時、

「わっ、ぶねっ！」

言葉と共にもう一方の刃を抜き、両手を防御の形で構えた。

その動作とほぼ同時に両側からアンノウンの兵士が斬り込んで来ており、刃がぶつかり合う。

まさかの不意打ちに驚きつつも、状況が混戦状態であることに気付き、歯を食いしばりながら吐息する。

反撃は、すぐだった。

両の刃をわずかに引いて再度押し込み、相手をわずかながらによりけさせる。

次いで、刃を腰まで持つて行き、両剣の中央となる支柱に差し込み、一気に引き抜く。

左手で前へと持つて行くそれに、途中で右手を添えて力を加え、回転を掛ける。

その動作は左の兵士の胴を斬り、右の兵士の剣を弾いた。

続いて、左手を右に振る形で両剣の左側を兵士に叩き込み、その勢いを殺さずに身体を回し、構えた足で回し蹴りをぶち込む。

それによつて兵士は吹っ飛び、豪快な音を立てて地面を転がった。カいはそんな姿を見ながら、両剣を身体の周りで回転させ、身構える。

「乱戦上等！　つてな」

言葉と共に、数十人が束になって攻めてくる。

その中にはレミイも含まれており、チェーンソーの機械音が響き渡つたつていた。

激突する。

最初の一撃は、アンノウン兵が振り下ろす刃。

カいはそれを柄で受け止め、右足で蹴りを入れる。

それによりよるめいた相手に、右上からの振り下ろしで一撃を入れ、左からくる相手に振り切った刃で突きを入れる。

これで一気に二人だ。

だが、次に来たのはチェーンソーだった。



アンノウンの陰から来たそれはあまりにも突然すぎたために、バランスの悪い前転で回避する。

しかし、行った先では四人のアンノン兵に囲まれてしまっていた。

そんな状況でも、カイは無駄に慌てない。

今、カイは前転の体勢からしゃがみ込む体勢に、アンノン兵は振り上げた刃を振り下ろす。

それをカイは立ち上がると同時に両剣を上にあげて防ぎ、同時に右足を九十度上げ、靴裏で正面の剣を防ぐ。

また、そこから流れるような動きで靴裏から剣を滑らせ、剣を下に向けさせて顔に蹴りを入れる。

次いで、両側の兵士が横薙ぎに剣を振るうのを視認し、姿勢を仰向けになるように落とす。

彼を狙った剣は目前を通過し、空振った。

それを確認し、後転で距離をとってしゃがむ体勢になり、まげた脚をバネにして走る。

左手に力を入れ、まず狙うは左側。

胴に一撃を叩き込み、停止した勢いを今度は左回転に込め、右の刃を後ろ突きの形で押し込む。

それは見事に右側のアンノン兵に直撃した。

「うっし……！」

内心でガッツポーズをし、喜びの声を上げるカイは、振り向きついでに倒した兵士達に目を向ける。

彼らは皆、倒れてはいるものの、致命傷は負っていなかった。

これが彼なりの戦い方だった。

殺すよりも難しい、不殺の勝利。

傷が浅すぎればまた立ち上がってしまう。

逆に、傷が深ければ放っておくと死んでしまう。

しかし、シヴァから習った剣術を存分に生かしている彼は、絶妙な加減で斬り倒していた。

そんな彼に、再度チェンソーが迫った。振り下ろされる剣は、彼の頭部を狙う。

カイはそれを、サイドステップで回避し、続く横なぎをしゃがむことで回避する。

全てが紙一重だった。

故に、宙には僅かに彼の髪が散っており、思わず冷や汗をかく。だが、油断している暇は無い。

次に来たのは、またしても振り下ろし。

速すぎたそれにカイは回避よりも、本能的に防御を選び、両剣の柄で受け止める。

刹那、足が地面を滑るほどの重圧と火花が彼を襲った。

「あつっ！　ってかあつっ！　ちよいちよいたんまたんまたんま！」

悲痛な叫びをレミイは無視し、更に力を加える。

すると、頑丈であるはずのエターナル製の柄に亀裂が入った。

それが意味することは二つ。

一つはチェンソーがエターナル製だということ。

そしてもう一つは、柄が壊れれば即死だということだ。

最悪の結果を想像したカイはゾツとし、やむおえずフラグメントを発動する。

同時、柄の亀裂は消えてなくなり、元どりの綺麗な柄に戻った。けれども、チェンソーの猛攻が止むはずもなく。

だからといって、上から力を押し込まれている彼に、回避する方法は無かった。

幸い、周囲のアンノウン兵はメルデイが撃退しており、体勢を立て直したレジスタンス兵もそれに参加している。

だが、誰もレミイには近寄ろうとしない。

圧倒的な存在感が、近づく事さえも許さないのだ。

そんな彼女の色の無い表情を間近で見るカイは、混乱する心中で浮かぶ言葉をぶつける。

「なんで敵になってるんだよレミイ！ お前、皇国軍なんだろう？  
しかも隊長なんだろう！？ だったら、なんで味方を殺すんだよ！」

「……………」

必死の問いにレミイは、無言無表情で返す。  
歯ぎしりが鳴る。

それはカイの、悔しさにゆがむ表情から生まれた音だ。  
同様にメルディも、同じ表情をしつつ、レミイを見る事なくアン  
ノウン兵を倒して行く。

一兵士として、私情をはさむなかと、自身に言い聞かせながら。  
すると突然、彼女の首目掛けて先端がフック状になったロープが  
飛来した。

それは容易に彼女の首に巻きつき、呼吸を奪う。

「く……かつ……！」

反射的に声を出そうとし、だがそれは声とならない。

剣を持っていない方の手で振りほどこうとするが、しっかりと巻  
きついているそれは外れる様子が無い。

そうしている間にもロープは締めまり、彼女の視覚が次第に薄まっ  
ていく。

刹那、彼女の首元に小さな突風が起こり、フック状の部分が勢い  
よく飛んでロープが外れた。

「なによ貴方、いつの間にそっち側についたっていうの？」

言葉はメルデイの背後から来た。

向けられる先は、ロープの持ち主。

伸びきっていたロープを回収している人物は、ユウ・ウラハスだった。

## 第七十六話：見知った襲撃者

ナイフを両手に三本ずつ持ち、身構えているユウと対峙するティファは、腕を組んで笑みを浮かべていた。

武器を持たず、一見丸腰に見える彼女は、アンノウンの主戦力の一人であるう青年に人差し指を指す。

「聞いているの？ ユウ。答えないのなら、力づくでも吐かせるわよ」

言葉と共に、それは来た。

ユウが振った右手から放たれる三本のナイフが、ティファ目掛けて投げられた。

だが、彼女に直撃する寸前、見えない壁に当たり、ナイフは落ちた。

二人は表情を変えない。

ティファは当たらないことが当然であつたかのように。

ユウは自分の行動の結果に興味がないように。

唯一、驚きの表情を見せるのはメルディだ。

彼女は首を押さえて咳き込みつつ、落ちたナイフとティファを交互に見ている。

「ティ、ティファさん、それって」

「気にしちゃいけないわよ。戦場じゃ、何が起こるかわからないものなのだから」

その言葉はまるで、自分に言っているようにも聞こえる。

実際、内心では焦っていた。

だが、それを決して顔に出さないようにしつつ、どう対象するか

思考する。

そんな彼女に向かって、ユウはさらにナイフを三本投げた。まっすぐにティファの頭部を狙って飛ぶそれは、先ほどと同じく見えない壁に当たって落ちる。

「しつこいわね……なに？　それが貴方の答えだというの？」  
「……………」

ティファの問いかけに対し、ユウは無言。

それを見てティファは、決意した。

親指と中指を合わせ、宙に構える。

次いで、パチンツと乾いた音が響き渡った。

すると彼女の人差し指の先に一瞬で黒色の魔法陣が展開し、巨大な黒い槍に姿を変えた。

帯電しているのか、時折電流が走るそれを彼女は軽々と持ち、ユウに向かって投げた。

ナイフよりもはるかに速いそれは、肉眼では簡単に捉えられないほど。

しかし、ユウはこれを避けた。

姿勢を出来るだけ低くし、前かがみになって走る。

新たにナイフを一本ずつ構え、速度が衰える事なく前へ。

対し、ティファは迎撃行動に移った。

両手の指を鳴らし、展開した魔法陣を自分の両サイドに振り下ろす。

同時にもう二回ずつ指を鳴らし、魔法陣を三つずつ光の筒で重ねる。

するとその二つは宙で回転を始め、彼女の合図で光の矢を放ち出した。

無数の矢は迫り来るユウを狙っており、次々と射出される。

ティファは、最初から全力なのだ。

だが、それは相手も同じだった。

ユウは飛来する光の矢に対し、上への跳躍で回避する。

同時にポケットから石を取り出し、地面へと投げつけた。

それは記憶石。

あらゆる物質を記憶させるそれは、煙幕を放出した。

それも、かなり濃いものだ。

これによりユウの姿は、ティファの視界から消えてしまった。

しかし、それでも彼女は放ち続ける。

いくら見えずとも、弾幕を張ればいいからと。

その考えをあざ笑うように、ユウは煙幕の端から飛び出した。

そこからまっすぐに、正面を向くティファへと突っ走る。

彼女はそれに気付き、魔術の向きをユウへと変えるが、既に距離

はほんの五メートル。

また、ようやく向いた魔術の矢を跳躍で回避され、ユウが上から

迫った。

刹那、

「ブレイク」

指鳴りと眩きはほぼ同時。

そのショートカットは、地面から大きな岩の槍が飛び出し、ユウを狙う一撃だった。

鋭利な岩の先端は、彼の胴体を穿とうとその背を伸ばす。

そして、直撃が目前となった時、彼は左手を岩につき、強引に身体を前へと宙返りさせた。

果たして回避は、右足の脛脛を犠牲にすることで成功した。

手を使った回避運動はティファを飛び越える事になったが、着地と同時に一撃を入れるつもりで彼は武器を構える。

「ジュキ」

だが、そんな彼に横殴りの一撃がぶち込まれる。

放たれた魔術は、水の打撃。

高々度から入る水面は地面ほど硬いものだ。

今、それとほぼ同じ衝撃が彼に放たれたのだ。

地面を滑るようにして転がって行く彼を、ティファは尻目に見ながらほくそ笑む。

「舐めんじゃないわよ。緊急に備えて、魔術は蓄えてたの」

彼女は、ショートカットを用いる事により、数多くの魔術を記録していたのだ。

しかし、その全てが上級魔術であつたために、一回きりだ。

彼女が蓄えた魔術は七つ。

残り二つ、今の彼女に残っている。

一発でも上級魔術が直撃したユウを仕留めるには、十分な数だ。だから構える。

次の指鳴らしで発動させるのは、黒刀”ゲオルギウス”。

漆黒の間をかたどつたような外見のそれは、以前使つた事のある物だ。

彼女はそれを構え、後ろへと振り向く。

一方で、吹き飛びうつ伏せに倒れるユウは、痛む身体を震わせながら、ゆっくりと立ち上がろうとする。

その過程で、脹脛を挟まれた右足が上手く動かない事に気づかず、姿勢を崩す。

視線を右足に移して、ようやく右足の欠損に気付くほどだ。

人体は思ったよりあっさり壊れ、機能を失っていく。

そして、その人体にとどめを刺そうと、ティファが黒刀を振り上げる。



届かない声ほど、虚しいものはない。

どれだけ必死に呼びかけても、びくともしない表情。

それを見るだけでも、カイは心を痛める。

どんな手を使っても、レミイを元に戻したい。

それは、先ほど彼女がメルディの姉だと知ったからこそ、余計に思うことだ。

同時に、乱入してきたユウの事も気になっている。

やっぱり敵だったのか。

それとも、何かあったのか。

思考を深める。手はないかと。

しかし、何も思いつかない。

今、カイは集中力を戦闘に注ぎ込んでいた。

通常の剣とは違い、ちよつとでも触れれば肉体をえぐり持つてい  
かれる武器を持つ、以前負けた相手。

油断など、微塵も許されない状況だ。

途中、邪魔に入るアンノウン兵はメルディが相手をしているため、  
カイの武器は双剣の形状だ。

対個人戦に特化したスタイルで、苦戦しつつも迫るチェーンソー  
に対応する。

火花が散り、剣を持つ手が振動で震える。

「うつくうつ！」

苦痛の声を上げるカイにとって、振動を受け続ける手には限界が  
近づいて来ていた。

初めての、全く想定していなかった武器相手なのだから無理もな  
い。

しかし、だからと言って油断できぬ現状が、更に彼を苦しめる。

故に、その時は来てしまった。

感覚が薄れ始めた手から、剣が抜け落ちたのだ。  
初歩的なミスだった。

何が原因か、それを考えようとし、目の前への集中が途切れ、当然ながら思考も上手く働かない。

ただ、目視出来るのは迫り来るチェーンソー。

それが肉体に触れる直前まで迫り

「やあああああああつ！」

突如、メルディがレミイに体当たりし、チェーンソーは右肩をえぐるだけで済んだ。

鮮血が流れ出し、カイは眉をしかめるが、まだマシだと自分に言い聞かせて歯を食いしばる。

次いで、フラグメントを発動し、右肩を修復する。

すると痛みはすぐに消え、服さえも元通りになる。

一方、体当たりしたレミイと一緒に地面に倒れるメルディは、偶然落ちたチェーンソーを急いで拾い、身構えた。

彼女の視線の先には、素早く立ち上がるレミイの姿がある。

二人は対峙する。

姉と妹としてではなく、敵同士として。

片方は涙を堪えた表情で。

もう片方は無表情で。

その光景を見るカイは、落とした剣を即座に拾いながら、打開策を思案する。

どうすればこの状況を覆せるか。

どうすればレミイを元通りに出来るか。

考え、しかし思いつかない。

焦りが思考に対する集中力をうばっているのだ。  
と、その時。

カイ達に、戦闘を終わらせる合図が送られる。

それは海岸方面から走ってきたネプチューンによるもので、準備できたぜよー！ 後退やー後退やー！」

場の空気を見殺した陽気な声が、戦場に居る者達の耳に届く。それを聞いた兵士達は顔を見合わせ、互いに頷き、迫るアンノウ兵を薙ぎ倒して後退を始める。

カイ達もまた、例外ではない。

ただ、対峙している相手を置いていけないという考えが、カイの足をどうしても前へと出させなかった。

だが、多くの犠牲があつて成功する脱出を、私情で無駄にするわけにはいかない。

故に、彼はメルディの持っているチェーンソーを左手で取り、フラグメントを発動させる。

時を司る手に触れる剣は、その姿に錆を生み、次第に朽ちていった。

それを見届けるカイは、メルディと視線を交わし、頷く。

次いでレミイを一瞥すると、既に数人のアンノウ兵と共に撤退を始めていた。

だが、残りのアンノウ兵はまだ前進をやめていない。

それを確認したのち、メルディの後を追って海岸へと走る。

途中、ユウの方へと見やれば、ティファの勝ちで決着がついているようだった。

ただ一つ、

「……え？」

敗者に異変が起きるまでは。

## 第七十七話：決意の戦闘

黒刀を振り上げた状態で止まるティファは、振り下ろすまでの数秒で思考する。

ユウを元に戻す方法を。

憶測では、こうなったのはユウが一人、グラルスに残ってからだろう。

あの時、ヴァンは確かに、中に居る者を返してもらっぞ、と言った。

目的は間違いなくティファだった。

だが、その時は偶然、二人は入れ替わっていた。

その結果、向こう側に持っていたのはユウだった。

それが目的通りだったかそうでなかったに関係なく、確かにユウは敵の手に渡ってしまったのだ。

故に、今ユウは敵としてここにいる。

犯人は多分、キースという男だろう。

以前のクレアの件を考えれば、レイヴンの可能性もあるが、確率は低い。

ともあれ、少なくともユウには、変わる前が存在するのだ。

それが意味するのは、クレアと同じ方法。

と、そこまで考えたところで、思考を終える。

とにかく、目の前にいる敵を再起不能にしなければいけないからだ。

だから、黒刀を振り下ろす。

狙うは四肢。最初は右腕。

迷い無く、まっすぐ振り下ろされる黒刀は、しかしユウの右腕をぐにやりと曲げた。

斬れたわけではない、曲がったのだ。

まるでゼリー状の何かを斬ろうとしたかのように。

「え？ ……貴方、なによそれ……？」

問われるユウは、驚愕するティファを見上げ、ニヤリと笑みを作った。

刹那。

彼の身体は霧となつて歪み始め、原型を失つていく。

最後に残るのは全裸で無毛の肉体と、賢石。

熱を帯びた、表面に紋章が刻まれた茶色の賢石。

ティファはその意味を知らない。

だが、彼女が心配になり、近寄ったメルディが知っていた。

「大丈夫ですか！ あ、これ……？ ネルガル？ ですね。しかも、紋章で改良されてます」

ネルガル。

それは、シャマシユと同じ太陽の意味を持った、太陽王ではなく太陽そのものである存在を意味した名。

これは効果を発揮すると、高熱を発する熱源となる。

それは何万度にも上げる事ができ、時には蜃気楼を生み出す。

重ねて、紋章によつて改良されたそれは、通常以上の効果を発揮するだろう。

それこそ、実体のような幻を作る事も出来るかもしれない。

「……つまり、今まで戦っていたのは幻だったってこと？ 馬鹿言わないで！ そんなことが っ!？」

瞬間、ティファはハツとなつて海岸の方へと視線を移す。

彼女は何かを感じ取った。

知り慣れた、懐かしい魔力を。

「そう……いう事ね！　メルディ、急ぐわよ！　惨劇が起きる前に」  
「あ、はい！」

二人は急ぎ、海岸へと向かう。

すぐさまカイやネプチューンとも合流し、とにかく急ぐ。

この時、アンノウンの行進は緩みつつも、確実に進んでいた。

「急ぐんや！　物資よりも怪我人を優先して運べえっ」

大声で部隊に指示を出し、自らも作業をする男が居る。

ナギだ。

彼は汗を流しながら、怪我人を抱えて輸送船に運ぶ。

余計な怪我を増やさぬよう、慎重になりながら、着々と事を進める。

作業は既に、七十パーセントを終えていた。

その事に安堵しつつ、しかし気を緩める事なく作業に集中する。

そう、油断してはいけなかった。

場を乱す者が到着してしまったからだ。

刹那、轟音が響き、地面を揺らす。

何事かと周囲を見渡せば、それはあった。

搬入用の馬車に深々と突き刺さる鉄塊。

誰も見た事のない、丁字に似た不思議な形をした物体。

全員の視線を集めるそれは、不意に丁字の先端が開き、何者かが飛び出す。

ほぼ同時、レジスタンス兵の断末魔が響く。

それは、鮮血を宙に舞い散らせ、血が付かないほどの速度で長剣

を振る青年が原因となったものだ。

青年はゆっくりと崩れるレジスタンス兵の身体を蹴り飛ばし、ふらりと周囲を見渡した。

その目は無機質で、見た者を戦慄させる。

全員が、動けば死ぬと。しかし、動かなければ死ぬと。

矛盾しているが、正しい考えだと思わせるほど、異質な現状。

その中で唯一動くのは、背中に担いだ大剣の柄に手を添えようと  
するナギと、

「あるじいいっ！」

全速力で青年、ユウに突撃するクレアだけだった。

瞬間、彼女のダガーとユウの長剣が激突し、金属音と共に火花が散る。

同時に視線が交差し、クレアの睨む瞳が一方的に怒りをぶつける。  
一瞬二人は止まり、クレアがバックステップをすることによって  
すぐに離れた。

彼女は右足から着地と同時に、膝を軽く曲げて伸ばし、バネのよう  
にして前へ出る。

再度、金属音が響いた。

だが、次は一度だけではなく連続だ。

逆手に持ったダガーを高速で振るい、これでもかと言わんばかり  
の連撃を放つ。

しかし、その全てが防がれ、避けられ、一つも当たらない。

だから、動きを変える。

次に振るった右手の勢いを殺さずに身体を回し、右足を軸にして  
左足を上げる。

放たれるのは上段回し蹴り。

剣を相手にしている状況で行うのは正気の沙汰とは思えなかった  
が、何よりその蹴りは高速だった。

そしてその蹴りは、長剣による防御が間に合わず、ユウの左腕に

直撃する。

吹き飛んだ。

飛距離は無いが勢いのあるそれは、木箱に激突する事によって効果が発揮された。

ただ吹き飛んで、地面を転がるよりもダメージがあるのだ。

「……どうしたの、我が主。あんたの力はそんなものだった？」

強気で言うクレアは、しかし身体中に細かな切り傷を受けていた。それは、先ほどの攻防でユウが行った反撃だった。

しかし、それほど痛手ではない。

彼女はそう思いながら、頬を伝う血を拭う。

次いで、追い討ちをかける為に走り出した。

一方、暫くして木屑に埋れたユウが身体を起こす。

その時、左手には黒光りする物が握られていた。

拳銃？ガバメント？だ。

彼はその撃鉄を起こし、引き金に指を掛ける。

リフサイト  
照門でまっすぐに狙うのは、向かってくるクレアの胴体。

無表情で無感情で、彼は引き金に掛けた指に力を込め　　左手が

吹き飛んだ。

起こったのは、内部からの爆発。

それはガバメントではなく、左手の中で起こったのだ。

残ったのは、頑丈故に原型を保ったまま飛んでいったガバメントと、手首から先が粉碎されている左手。

動脈を流れる血は、行き場所を無くし鮮血となって流れ出る。

ユウは、啞然としていた。

自分の手になにが起こったのかわからず、某然と左手のあった場所を見つめる。

そんな彼の胴体に、勢いのある蹴りがぶち込まれる。

また、吹き飛んだ。



木箱を突き抜けて、今度は地面を滑るように。

次いで転がり、動きを止める。

そんな彼を見るクレアは、援軍が来た方向へと視線を移した。

「余計なお世話よ、ティファ」

「あら？ 思いっきり危ない状況に見えてたわ。だから助けたのに……文句より感謝が欲しいわね」

悪態をつきながら歩いてくるティファは、倒れているユウを一瞥した後にクレアを見る。

すると二人は笑みを交わし、同時にユウへと視線を向ける。

そこには、既に立ち上がっているユウの姿がある。

彼は鮮血が流れる左手首に、近くに落ちていた物資の中から布を取り出して巻き、止血する。

次いで、荒い呼吸を整えて身構えた。

残った右手にナイフを握って。

「し、しぶといわね……。ティファ、カイはどこに居るの？」

「なに？ 気付いたの？ カイは今、アンノウン相手にレジスタスと協力して防戦中よ。だから、戻って来るまでが私達の戦いねって、ナギ？ 早く作業再開を指示しなさいよっ！」

「お、おう！ まかせときゃ！ ティファたちは大丈夫なんやな？」

返事は、二人揃って親指を突き立てる事で返された。

そして、周囲で作業が再開される。

同時、戦闘も再開された。

最初に動くのは、ユウだ。

彼は前屈みになって走る。

対し、ティファは迎撃の為に指を鳴らし、魔法陣を展開させる。放たれるのは光の矢。

一秒に何百本と射出されるそれは、彼を蜂の巣にしようとする。だが、ユウはその矢を全てナイフで叩き落とし、潰しきれなかった分は身体をそらす事で回避した。

速度を緩める事なく、ひたすら前へ。

それは、どう見ても怪我人の動きではなかった。

それも左手を失ったというのに、だ。

全力を出し、前へと出続ける彼は、果たして二人の目前へと辿り着いた。

接近戦が始まる。

対応するのはクレアだ。

彼女はティファより前へと出て、ダガーを振るう。

最初に放たれるのは、右のダガー。

ユウはそれをナイフで受け、手首のスナップを効かせて受け流す。予想外の動きに、僅かに姿勢が崩れたクレアは、しまったと思う。今、彼女の右半身は無防備だ。

それを狙っていたかのように、ユウの左手首は無防備な彼女の右腕に添えられ、右膝が勢いよく叩き込まれる。

「あ……っ!？」

折れた。

バキボキッと骨が碎ける音がし、腕に不釣り合いなコブが出来る。それはどんどん盛り上がり、折れた骨が皮膚を突き破って出て来た。

同時に血が垂れ落ち、次第にその量を増す。

クレアはその激痛に、歯を食い縛って耐えていた。

それに応えるかのように、ティファが黒刀を振ってユウを斬ろうとする。

が、すんでのところで彼は回避し、バックステップで距離を取った。

彼の表情は、未だに無である。

それを見るティファは苦い顔をしつつ、詠唱を始める。  
放つのは？ トウル？

クレア腕を治す為のものだ。

それにより、彼女の右腕は何事もなかったかのように元通りとなった。

「これで大丈夫。……後は、私に任せなさい」

「嫌よ。主を止めるまで、私は戦う。命にかえてもね」

「本当、ユウにデレデレねえ。リリイに怒られるわよ？」

「誰がデレデレ よっ！」

最後の一言と同時に武器を構え、衝撃を防ぐ。

その衝撃は、再度接近してきたユウの一撃を止めたために起きたものだ。

火花が散り、また連続して金属音が響く。

二本のダガーは的確に防がれているが、ティファが横から黒刀の突きを入れた。

ユウはそれを、身体をくの字に曲げて紙一重で回避し、戻す勢いを生かして左足を振り上げた。

それにより、黒刀とクレアのダガーは二本とも足に持っていかれ、彼女は両手を上げる形となって胴体が無防備になる。

彼はその隙について、踵落としをぶち込もうとした、が回避される。

一瞬の間に、クレアは左足を軸にし、身体を回転させたのだ。

それによって空を切ったユウの左足は、しかし次の動きに出る。

力を込め、前へ出る為の軸へと、働きを変えていた。

同時、姿勢を低くし頭を下げれば、一回転して来たクレアのダガーが彼の頭上を掠める。

紙一重の回避を見せつけつつ、右足で地面を蹴って左足に力を込

める。

だが、俊足で前へと出ようとする彼に、黒刀の振り下ろしが迫った。

初速で一氣に前に出るユウと、ティファの振り下ろしはほぼ同時。故に黒刀は空を切るが、続けざまに行った横薙ぎは、ユウの背を斬った。

予想外のダメージは、彼の姿勢を大きく変えてしまう。

前転するように、右肩から地面に落ちたユウは、さきほどの木箱の残骸近くまで転がり、その途中で持っていたナイフを投げる。

体勢に似合わず正確な投射は、まっすぐにクレアを狙った。

対し、追撃のために接近しようとする彼女は、飛来するナイフをダガーで叩き落とし、ユウの目前まで迫る。

次いで振り下ろした左手のダガーは、しかし防がれた。

それは長剣。

さきほど、木箱に激突し、蹴り飛ばされた際にユウが落とした物だった。

そしてほぼ同時、手首にスナップを効かせて横に薙ぐ事によって一瞬だけ隙が出来た胴体に、逆の横薙ぎが斬り込まれる。

「あぐっ……！」

鮮血が噴き出た。

それと共にクレアは体勢を崩し、地面に倒れこむ。

だが、その後ろ。

黒刀を構えるティファもまた、目前まで迫っていた。

最初の振り下ろしは、防がれる。

次の横薙ぎは、防がれる。

続く斜めしたからの斬り上げは、防がれる。

反撃の上段蹴りは、身体を傾けて回避。

同時に少し引いた両手持ちの黒刀で突こうとするが、直前で弾か

れる。

こうした攻防が暫く続くと、そう思われた。

だが、次に横薙ぎに降ったティファの手には、黒刀が握られていなかった。

同時、黒刀を弾くつもりでいたユウの長剣は、横薙ぎにティファの胴体を斬る。

だが、彼女はそんなことなどお構いなしに指を鳴らした両手を伸ばし、彼に抱きつく。

彼の背中で両手をしっかりと掴み合い、離れないようにした。

「やっと……捕まえた……！」

言葉と共に咳き込み、口から血を吐いた。

それはユウの肩にかかるが、彼はティファを振り解くために身体を動かす事を優先させる。

だが、その行動も次第に取れなくなってくる。

二人の周囲に冷気がただよい、身体が凍りつき始めたのだ。

「いくつか犠牲にして……ようやく作った、いや作らせた隙……それと、必要な力……」

今なお、咳き込み血を吐きつつ、呟く彼女は笑みを浮かべた。

「カイ・エディフィス！ フラグメントを使いなさい！！」

叫ぶ彼女の言葉は、防戦しつつ合流して来たカイの耳に届いた。彼女はずっと待っていたのだ。

ユウを元に戻す、唯一の力を。

その持ち主が今、二人に向かって走り出している。

全速力で、左腕のフラグメントを発動させて。

そして、それは触れた。

ユウに直接触れているティファを介して、彼の時を戻す。  
眩い閃光が、二人を一瞬の間に包み込んだ。

## 第七十八話：疑う心と信じる心

暗い暗い意識の底から、無理矢理引つ張り出される感覚が全身を襲う。

いや、それを感じているのは、俺の中身？

わけが分からぬまま、神々しい光に導かれるままに、誰かの意識と入れ替わりで、表へと意識が進む。

途中の過程で、景色は記憶となっていた。

もの凄い速さで、しかし確実に脳に刻まれる記憶。

それは誰の記憶か。

それはいつの記憶か。

それはいつ消えた記憶か。

分からない。

分からないが、これだけは確かだった。

これは、俺の記憶だという事は。

刹那、眩い閃光に反射的に目を瞑る。

そして暫く間を置き、目を開ければ、そこには

「……ディ……ン……？」

光る左腕に銀色の髪。

その姿は、よく知る人物によく似ていて。

けれど、視覚が回復し、よく見えるようになれば、別人だった。

……ああ、カイか。

久々に見る仲間の姿に、勘違いした事を謝罪しようとした瞬間。腹部に強烈な痛みが走り、意識はまた遠退いていった。

日が高く登り、時刻は昼。

照らされる日の光できらめきを放つ海上を、高速で走る船団があった。

大型の輸送船を中央に、周囲を小型船で囲んでいるそれらは、まっすぐにアツカド大陸へと向かっていた。

その輸送船の内部、食堂エリアにて。

カイが抗議の声を上げていた。

言葉を放つ相手は、腕を組み少年を見据えるナギだ。

「だから、ユウを出してやってくれって！」

「せやから理由になってないゆーてるやろ。ウラハスはわいらにとつては敵、あんたらにとつては裏切り者なんや。そうはいはいと面会できるほど、やわな現状やないんや」

「その、敵がどうかつてのを、最終確認したいんだよ！正直、俺はユウを信じていない。疑う要素がありすぎて。でも、気になるんだよ。あいつがなんで、俺を見てデインって呟いたのか！」

「はっ。信じてへんのに、話を聞く言うんか？エディフィス、そのデインつてのが誰か知らんけどな、ちよつと頭冷やしてよく考えや」

不意に、ナギは立ち上がり、カイと同じ目線の高さまで腰を曲げる。

その瞳はまっすぐにカイの瞳を見つめ、離れない。

「ええか？信じてへんやつ話を聞いても、エディフィスは理解出来んやろつな。無意識に、どの言葉も嘘と言いつきにしか聞こえなくなる」

「だから、その最終確認を取るって何度も言ってるだろ！？」

「あかん。例え誰が許可しようと、わいは許可できん」

「なんでだよ！もしかしたら、ユウは操られてたかもしれない」



「そこらへんにしておけ、坊主」

必死に声を上げるカイの言葉を遮ったのは、レジスタンス兵の一人だった。

スキンヘッドに大きな傷跡があり、筋肉が強調されるタンクトップを着た男は、ゆつくりとカイの元へと歩み寄る。

身長は二メートルを超えているのだろう、カイが見上げるほどの彼は、真剣な表情をしていた。

「いいか？ お前はあの男とどんな旅をしていて、どんな思い出があるうとな、俺達にとっちゃ第一印象は仲間を殺した敵なんだ。それは、ここに居る全員が思っている事だ。そんな奴が、餓鬼の我儘で口一つでも解放されたとなっちゃあ、我慢ならねえんだよ」

「止めや、中隊長」

「俺達の役目は、お前の保護だ。けどな、坊主の言う事をなんでも聞けって訳じゃねえんだ。もし、お前の保護が皇帝の命令じゃなかったら、とつくにぶん殴つてるところだ。そう思わせるほど、お前は我儘過ぎるんだよ」

「止めや中隊長！」

ナギの怒声で、中隊長と呼ばれた男は口を閉ざす。

同時に姿勢を正し、失礼しました！ と大声で謝罪の言葉を放った。

それを見て、ナギは溜息をつき、椅子に座ってカイを見る。

「すまんなあ。せやけど、部下達は同じような不満を抱えてるんや、分かってくれな。……わいは、向こうについたら一度、ウラハスと顔を合わせる機会がある。そんな時に、聞きたい事を聞いといてやる」

「隊長！ それは甘すぎです！」

「ついでやついで。わいも聞きたい事あるんや。こんな理由はあか

んか？」

部下に問いかけるナギは、自嘲の薄ら笑いを浮かべていた。彼自身も、分かっているのだ。

自分がやろうとしている事が、先ほどの部下の意見に反している  
と。

だが、彼はある可能性に賭けていた。

「……エディフィス。わいらは、仲間を殺されて怒ってる。その怒りと苦しさは、わかるか？」

問われ、カイは頷く。

するとナギも頷き、

「ウラハスは、あんたらの仲間やった。これは事実や。せやけど、その仲間を疑ってるお前には、会わせる事はできん。せやからわいが会って聞く。エディフィス達を、仲間と思っているかを」

瞬間、食堂内はざわついた。

皆、意見を言い合い、「仲間に剣を向けてましたよ!？」「まさか答えによつては助ける気じゃ!？」という超えも聞こえてくる。

だが、ナギが睨むと、全員が口を閉ざした。

「別に助ける為やない。知りたい事を知りに行くだけや。ウラハスをどう処分するかは、軍が決める事やからな」

その言葉に、中隊長も席に戻り、皆は納得半分不満半分の表情をする。

ナギはそんな彼らを見て苦笑しつつ、柏手を打った。

「さ、あとはエディフィスが、何を質問したいのか聞いてから終い

や。……で、なんや？」

「ユウは、最初から俺達を裏切るつもりだったのか。もしくは、いつ裏切ろうと思ったのか。それを聞きたい」

「裏切る事前提かぁ。エディフィスは、随分と鬼畜やな」

そう言うナギは、笑う。

しっしっしつと、楽しそうに。

「はい、これで大丈夫ですよ」

怪我をした部分に、キュツと包帯を巻く。

真っ白だと素っ気ない気がして、リリイは蝶々結びにしたのだが、その完成度に自分自身で喜んでいた。

怪我人の男も、応急処置をしてくれたことに感謝し、彼女に向かって何度もお礼を言っていた。

そんな彼に対し、リリイはいいですよと言い、次の怪我人の元へと向かった。

今、彼女らが居るのは、広めの医務室だ。

先の戦闘で負傷した者達が運び込まれており、レジスタンスの衛生兵数十名に混じって、リリイとシルクが応急処置や治療を行っていた。

初めの内こそ、怪我人の数はかなり多く、重傷者もいたものの、シルクの魔術によってなんとか数を減らす事が出来た。

そして今、一段落ついた二人は支給された水を銀コップに入れて飲みながら、床に座って休憩を取る事にした。

二人はレジスタンスの駐留キャンプで戦闘が起きてから動きっぱなしであり、輸送船が到着した時はすぐに乗り込んだ為、戦闘は見

ていなかった。

故に、ユウが現れたのを知ったのは出航後だった。

レジスタンスが捕らえた事も、だ。

だが、リリイは全く笑顔を絶やしていない。

その事に、シルクは疑問を持っており、ようやく口に出す。

「……ユウ、戻って来たんだってね」

遠慮しがちに出た言葉に、リリイは嬉しそうな表情を見せる。

「はい、正直嬉しいです。けれど、いつ会えるかは分からないんですけどね」

最後は苦笑混じりに、しかし笑顔を保つ表情に、シルクは言葉が詰まった。

何故、そこまで明るい表情でいられるの？ と。

敵となって戻って来たのに、何故喜べるの？ と。

決して口には出ない言葉が、彼女の心の中で生まれ、膨れていく。それにより無言になり、間が空いたからか、リリイは慌てて両手の平を振った。

「ああ、ごめんなさい！ 不快な思いさせてしまいました」

「うえへ？ いやいやそういう訳じゃ」

「私も、気付いてます。悪い事をする為に戻って来たのに、なんで悲しみより喜びの方が強いのかって。多分それは、夫だからだと思います」

俯き、手に持つ銀コップを見つめて揺らす。

まだ残っている水は、その揺れで波紋を作り、鏡のように映るリリイの表情を歪めさせる。

「全くの音信不通でしたからね。もう、会えないんじゃないかって思っていました。だから、嬉しいんです。会えるとしたら、鉄格子越しかもしれませんけど、それでも……」

眩き、苦笑を漏らす。

表情には僅かな曇りがあり、しかしそれを振り払うように水を一気飲みし、咽せた。

突然の事に驚き、シルクが背中を摩りながら声をかけると、暫く咳き込んだ後に顔を上げ、大丈夫ですよと告げる。

「一気飲みに失敗してしまいました。でも、もう大丈夫です」

「もお、無茶しないでよ。……あ、ところでししよー見なかった？」

「ししよー？ あ、ティファさんですね！ 戦闘以来、姿は見ていませんよ」

「そっか……。いや、まあししよーはさいきよーだから、大丈夫！」

グツと拳を突き上げ、おー！ と声を張り上げる。

そうして自分も一気飲みし、咽せた。

二人して咽せていた事に、光景を見た医師が微笑し、彼女らに近付いた。

「今回は協力していただき、ありがとうございました。重傷者はおうお居ませんので、お二人は食事を取ってから、ゆっくりと休んで下さい。夜通しで働き続けるのは、身体に悪いですよ」

深々と頭を下げる青年に、シルクとリリイは顔を見合わせ、深い溜息をついた。

「終わった……のかぁ。お疲れ様、リリイさん！」

「はい、お疲れ様でした。貴方も、お疲れ様です。後は頑張って下さいね」

言われ、青年は笑顔を浮かべ、もう一度頭を下げてから持ち場に戻った。

医務室の責任者なのか、数人の医師に指示を出す彼を見て、二人は自然と笑みをこぼした。

その後、二人は立ち上がり、医務室を後にする。

「よっしゃー！ 寝るぞー！」

「声、大きいですよ」

「これくらい出さないと、逆に体力が保たないよっ！」

大声を上げながらスキップするシルクに注意しつつ、リリイは笑みをこぼす。

無邪気なシルクの後ろ姿を見ると、彼女自身も楽しい気持ちになっていた。

だからだろうか、普段はしないスキップを、自然としていた。軽快なステップの音が二つ、通路に響き渡っていた。

## 第七十九話：獣の葛藤

夕刻、海の彼方に太陽が沈み始める頃。

それは海を橙色に染め上げ、まるで血の海のように。

クレアは、輸送船の甲板の端に立ち、その景色を眺める。

彼女はこの船に乗ってから、ずっとこの場所に居た。

少しずつ変わっていく景色を目に焼き付け、潮風に長髪を靡かせながら、微動だにしない。

まるで人形のようにだ。

と、不意に彼女は溜息をつき、手すりに拳を振り下ろした。

打撃音と振動が響き、拳に痛覚を生む。

それでもなお、拳を打ち付け、手すりを少しずつ歪ませていく。

音がなり、痛みは増し、血が滲み、手すりに血がつく。

怒りと悔しさと惨めさの感情に身を任せる彼女は、下唇を噛んで声を上げるのを堪える。

同時に瞳から滲み出る物を堪え、身体の震えを紛らわすために身体を傷つける。

そして、最後の一撃であろう、最大の打撃をぶちこみ、動きは止まる。

聞こえるのは、風の音と船が海をかき分ける音、それと海猫が鳴く声だけだ。

この時間、甲板上で作業する者は既におらず、音は無い。

ほとんどが自然の音しか無いこの場所で、彼女はある光景を思い出す。

ユウに斬られ、地面に這い蹲りながらも顔を上げると、そこにはティファの姿があった。

ユウに抱きつく形で、全身に氷をまといながら、だ。

次第に氷は厚くなり、二人は一体となっていく。

ほぼ同時、フラグメントを展開したカイが迫り、時を戻す力が発

動した。

眩い閃光が放たれる直前、クレアはたしかに見た。

ティファが、彼女に微笑みかけている表情を。

刹那、ティファの姿は氷と共に消え、元に戻ったであろうユウはレジスタンス兵に捕らえられた。

それを思い出すと、また拳を一撃打ち付ける。

……私をもっと、強ければ！

内心で己を責めたて、怒りは歯を食いしばる事で内側で燃やす。

だが、下唇を噛んでいる上で歯を食いしばったために、唇が裂けて血が出た。

彼女はそんなことなどお構いなしに、噛み続ける。

もっと強ければ、自分がユウを押さえつけていれば、結果は変わっていただろうか。

思い、更に拳を振る。

だが、そんな彼女に、場違いな声が掛かる。

「おうおう、クレアも釣りかいな」

「……………え？」

呑気な声を出すのは、ネプチューンだ。

彼は釣り竿と餌の入った箱、それと海水の入ったバケツを両手で持ち、クレアの下へと近寄っていく。

対し、振り向く体勢でネプチューンを見ているクレアは、啞然としていた。

そして、開いた口が放つ言葉は、

「なにしてんのよ、貴方」

「そういうクレアっちは、なにしてるんぜよ？ あれ……あー、船を壊してたんな！」

なるほどなるほど、と呟きながら、クレアの真横に立つ。



次いで、どっこいしょ、と言って荷物を床に置き、腰に手を当てて身体を仰け反らせる。

すると彼の背から、骨の鳴る音が響き、同時に唸った。

「くあゝ……重くて重くて、腰痛めそうだっちゃー。さ、クレアっち、釣りするぜよ」

「……へ？ 何言って」

「ほれ、竿。安っぱいけど、我慢してな」

よく見れば、ネプチューンは釣り竿を二本持っていた。

彼はそのうちの一本を取り、クレアに差し出す。

暫くその状況で固まっていたが、結局クレアは渋々受け取った。

確かに安っぱく、細いそれをマジマジと見つめる彼女は、ネプチューンへと視線を戻す。

「で、なんで釣りなの？」

「そりゃ、簡単ぜよ。釣りは乱れた心をおだやかにして、なんだ、リラックスさせてくれるんっちゃ」

「リラックス……ねえ」

半信半疑に聞きつつ、釣り針を弄くってみる。

時々、皮膚に引つかかる感じに、クレアは癖になっていた。

一方で、ネプチューンは淡々と準備をし、釣り針に小さな肉団子をくつつけて天に掲げた。

「よっし、よっし、準備おつけいぜよ！」

「あれ？ 餌は虫を使うんじゃないの？」

「都合よく虫は積んで無かったっちゃ……。んだから、厨房から肉団子を取って来た！ ささ、クレアっちも付けて付けて」

「わ、分かった、わから急かさないでよっ」

半ば強制に肉団子の入った箱を押し付けられ、仕方なく釣り針に付ける。

粘着性が高く、釣り針にしっかりとくっつくそれを何の肉か考えながら見つめ、すぐに止めて片手で竿を強く持つ。

次いで、竿を振って釣り針を飛ばし、海に投げ込んだ。

ネプチューンもそれに続いて投げ込み、二人は手すりにもたれかかる形で水面を見つめ始めた。

釣り針と繋がっているブイは波に揺れ、しかしそれ以上の反応は見せない。

そのブイが変化を見せるのを、ただひたすら待つ。

それから無言が続く、どれくらい経っただろうか。

数十分とも数時間とも錯覚してしまいそうなほど、永く感じられる時間が過ぎ、しかし魚はいっこうに釣れない。

ふと、時折り竿に反応があり、クレアはブイをジッと見るが、変化はない。

どれだけ待っても釣れない、そんな状況にクレアの中で少しずつ苛立ちがわいてきたころ、突然ネプチューンが竿を引き上げた。

「釣れたの!？」

「いんや、肉団子なくなっちゃるわ」

「……え？」

クレアは嫌な予感を覚える。

その予感に突き動かされるままに釣り針を上げて見れば、肉団子は跡形もなく無くなっていた。

刹那、ネプチューンの頭部に平手が直撃する。

快音。

「いつあ! な、なあにするん!？」

「やっっておかなきゃいけないと、本能的に思っただけよ」

「なんね、また獣の勘かいな」

「獣に突っ込みスキルなんてないわよ」

「なんや、これで笑い取るんかい？ ボケ担当か ふばっ！」

クレアの猫耳を触った瞬間、横腹に蹴りが入った。

次いで、齒をむき出しにしている彼女は、完全に威嚇体勢に入っていた。

対し、ネプチューンは横腹を押さえて暫く悶絶し、転げ回った後に急に止まり、クレアを見た。

ニヤリと笑うその表情には、痛々しさが見えつつも、してやったぜとも言いたそうだった。

「どや？ 少しは、悩みを紛らわせたんろ？」

「は？ ……代わりに、うっとおしさが増したわっ」

「んでも、代わりになったんから、わっちの計画通りぜよ」

んくくつと齒を見せて笑うネプチューンは、ゆっくりと立ち上がってクレアと向かい合う。

対し、クレアは腕を組んでよそを向き、唇を尖らせた。

拗ねてるような、照れ隠しのようなその表情に、思わずネプチューンは吹き出す。

「なあんやその傷ついた乙女みたいな顔しちよってふばあっ！」

指を差して笑っていると、突っ込みが入った。

腹部に蹴りが入るといって、強烈なものが。

その衝撃をなんとか耐え切ったネプチューンは、フラフラになりながらも手すりにもたれかかる。

己の身体を休める為に、一息つく為に。

深く、重い溜息を一つつき、またんくくつと笑う。

「心配する事ないっちゃ。ユウは、わっちがなんとかすんからの」「あんたが、なんとかするって？ ただの商人に、なにが出来るってのよ」

「お、やっぱユウの事かや。鎌はかけるもんだっちゃ」

クレアの両眼がネプチューンを睨む。

それに悪寒を感じた彼は、両手を上げて苦笑を漏らした。

だが、すぐに両手を元の位置に戻し、遠くを見て口端を釣り上げる。

半目となっているその瞳は、先にある大陸を見据えているよう。

「ただの商人でも、わっちは情報通な方ぜよ。んから、コネはある。後は、あん人が正気であればいいだけだっちゃ」

その言葉は、クレアにかけた言葉のようにも聞こえるが。

まるで、自分に言い聞かせているようでもある。

しかし、クレアは後者だった場合の気の利いた言葉は持ち合わせていない。

故に、ネプチューンに託そうと思う。

グツと握り拳をつくり、真顔を彼に向けた。

「なら、あんたに託すわ。従者が主人を他人に託すなんて、許されることじゃないけど……今回ばかりは、あんたに頼るしかなさそうだしね」

「おおう、やあつと信用された感がするっちゃ。ん、任せとけつてな」

胸を拳で叩き、次いでその拳をクレアに向ける。

それは、獣人族の戦士同士が交わす、誓いの儀式。

彼女はそれを、獣人族でもないネプチューンが使う事に可笑しく思い微笑しつつ、拳をぶつけた。

重い打撃音が鳴り、だが両者はビクリともしない。

そして、誓いは交わされた。

笑みを浮かべる二人の小さく堅い誓いが。

痛みと目眩が全身を支配する。

まるで、つい先ほどまで深海に沈められていたような、そんな感じだ。

左手を見てみれば、いつの間にか治っている。

だが、時間感覚はとうに鈍っており、今が何時なのかもわからない。

腹も空かず、用意される食事には手付かずだ。

もっとも、出て来た物がチーズ一切れで、砂をトッピングされちゃあ、食べたくても食べられないが。

ついでに言えば、両手足は縛られているため、這って食う必要がある。

そんなことするぐらいなら、食わない方がよっぽどいい。

ふと、閉じていた目を開ける。

だが景色は相変わらずの薄暗い倉庫。

壁に設置された名も知らぬ賢石が唯一の光となっている。

かなり光量が絞られているが、無いよりマシだ。

そう自分に言い聞かせ、ただひたすらなにかアクションが起きるのを待つ。

もしかしたらこのまま置いていかれるかもしれないし、来た者が

死刑宣告をするかもしれない。

だが、そこにどんな結果が待っていていようと、受け入れよう。

今の俺は、何もかも覚えている。

カイのフラグメントによって時間を戻されたはずだというのに、だ。

同時に、記憶の奥底にモヤの掛かった記憶がある。

まだ完全に思い出す事を許されず、だがそれは俺であって俺でないような記憶。

懐かしさを感じさせるような記憶。

……それを思い出せば、俺は俺じゃなくなるのだろうか。確信はない。

ただ、ぽっかりと空いた記憶の穴が、漠然とした不安を抱かせる。思えば、ジードでリリイに会う前の記憶が、全く無かった。

どれだけ記憶喪失になれば気がすむんだと、自分に文句を言いたいくらいだ。

と、その時。

不意に倉庫を照らす光量が増し、木製の扉が開いた。

入って来たのは、長身で大柄な男。

カラフルなシャツとカーゴパンツを着た彼は、俺を見下すように仁王立ちになった。

よく見れば背中には、大剣が収まった鞘が見える。

一瞬、レイヴンかと思ったが、服装が彼らしくなかった為に、顔をよく見る。

見覚えは無かった。

だが、声には聞き覚えがあった。

「よう、ウラハス。アツカドについで。ここで、お前への処分が決まるんや」

訛りの効いた言葉に、やっと思い出す。

そいつには、確かノアで出会ったか。

「なんだ……タマネギか」

「タマネギちゃうわっ！」

反応が速かった。

まるで慣れているようだ。

だが、現状はふざけていられる暇も無い。  
空気がピリピリとしている。

こいつが内側に抑えつけている怒りが、今にも爆発しそうな気迫を感じ取れる。

……ただ、素で間違えたただけだ。

「なんや、えらい余裕やな。ほんま、操られてたとは思えんほどやな」

「状況に適應しているだけだ。こういう時、慌てるとろくな事にならないからな」

「せやなあ、確かにろくな事にはならん。けどな、ウラハス。お前は殺し過ぎた。今ここで、殺してやりたいくらいやけど、叱るべき処分が決まるまで、牢屋行きや」

「そう、か」

「そんなに落ち込むなや。……っと、エディフィスから伝言や。最初から俺達を裏切るつもりだったのか。もしくは、いつ裏切ろうと思ったのか、だとさ」

それを聞いて、思わず苦笑が漏れた。

……裏切る事が前提か。

疑われるような行動をしたつもりはない……とは言い切れなかった。

敵であるはずのクレアを助け、カイ達を騙したのだから。

それは、裏切るつもりではなかった。

しかし、結果的に疑われる材料に含まれてしまう。

だが、それだけだろうか。

もしかしたら、あいつらがヴァンとキースの罠にはめられた時に飛ばされた先で、何かを知ったか吹き込まれたか。

よく、思い出してみる。

あの後、自分の身体から精神を引き離された俺は、培養液の中に入れた。

その中ではゆっくりと俺の身体が構成されていき、ハッキリとした意識が戻った頃には、全身が出来上がっていた。

意識が戻った、とは言ってもそれは人としての意識であり、俺自身ではなかったが。

記憶の全く無い俺に、戦闘方法や殺害対象、従うべき相手や命令などが刷り込まれた感じた。

その状態の時、視界によく入っていたのはキースと赤髪の女だ。ヴァンの姿は全く見ていない。

そして、キースは独り言は多かったが、カイ達に関する情報は全く言っていなかった気がする。飽くまで、気がするだけだが。

……それとも、もしかしたら。

今、ぽっかりと空いた記憶の穴。

これが、原因なのだろうか。

そんな昔の俺には、後ろめたい何かがあったのだろうか。だがもし、何かあったとしても俺は。

「……裏切るつもりはなかった。これまでも、これからも。だが、クレアの件を隠していたのはすまなかったと、そう伝えてくれ」  
「そうかい。分かった、伝えておく。そんじゃ、行こか」

立てや、と言いながらナギは俺の腕を掴み、無理矢理立たされる。次いで強引に引っ張り、倉庫から出された。



外は既に暗く、月明かりが俺を照らす。  
今宵の月は、満月か。

## 第八十話：初老の語り人

満月の明かりに照らされた街中を、カイ達は列を成して歩いていた。

アッカド大陸の西部に位置する首都、バビロンの城下町であるその街は、深夜だからかひっそりとしていた。

民家の窓は雨戸でしっかりと閉じられており、酒屋や宿屋には光が無い。

人が住んでいるという、形跡さえ感じ取れなかった。

そんな街中をナギを先頭に、メルディを最後尾にして歩く一行は、まっすぐに城へと向かう。

誰も声を出さず、ただ流されるままについて行く。

ただ一人、暢気な表情で歩くネプチューンを除いて、だ。

それから、どれだけ歩いただろうか。

城内に入れる門を潜り抜け、そこでようやくシルクが顔を上げ、気付いた。

「うつわー……でかすぎっしょ……」

呟きは出来るだけ小声で、前に行くカイに聞こえるように出す。

するとカイもその言葉に釣られて顔を上げ、同じく驚きの声を上げた。

彼らが見る先、バビロンの城はかなりの大きさだった。

それは例える物など他にはなく、故に二人は言葉に詰まる。

だが、ふとカイは思い出す。

「……これって、ジードの廃墟都市より大きいよな……？」  
「そう……だね……」

呟く二人は顔を見合わせ、もう一度城を見た。

再度、驚きの声を上げる。

それを見たネプチューンは笑みを浮かべつつ、彼も城を見上げた。一瞬曇る表情は、しかしすぐに笑みへと戻る。

そうして、城内へと入った一行は、一階の奥にある部屋に通された。

城内は白を基調とした造りとなっており、壁には金や銀で作られた装飾が成されている。

それは一行が入った部屋でも同じであり、その部屋は広く、中央には赤い円卓が置かれていた。

ナギはその円卓に座るよう指示した為、カイたちはそれに従って各自着席した。

そこで初めて、異変に気付く。

驚きを隠せず、最初に声を上げたのは、シルクだ。

「リリイちゃんはいつから居なかったの!？」

今、ここに居るのはカイとシルク、ネプチューンとクレア、そしてナギとメルディだけだった。

今まで暗闇を歩いて来たからか、誰かが足りない事に気付かなかったのだ。

だがその言葉に、ナギは冷静に答えた。

「聞くところによると、エディフィスの旅とは無関係らしいやないか。せやから、今は別行動や。ウラハスの婚約者なんやて？ それ知った皇帝の配慮で、特別に会わしたるそうや」

それを聞いたカイとシルクは安堵し、ホッと胸を撫で下ろす。

一方で、ネプチューンは無表情となっており、視線はまっすぐにナギを見ていた。

暫くして、彼は口を開く。

「んで、ここに連れて来てなーにする気ぜよ？」

「あ、それ俺も思った！ 皇帝来るの？」

「……いや、すまん。実はわいも、なんの話をするかは聞いて無  
いんや。皇帝が直々に来るとは聞いてるんやけどな」

瞬間、入り口の扉が開き、数人の皇国軍兵士が入って来た。

何事かと皆が視線を向ける先、兵士達が列になってつくった道を  
一人の男が歩いてくる。

一八〇センチは軽く超えているであろう長身を黒のスーツで身を  
包み、まっすぐに背筋を伸ばして姿勢を良くした初老の男。

オールバックの髪と綺麗に整った髭は全て白く、掛けた眼鏡が老  
紳士の雰囲気醸し出していた。

そんな彼は、皆の前で会釈し、合図一つで部屋から兵士達を退室  
させる。

全員が出て扉が閉まったところで、皺の刻まれた頬を緩め、笑み  
を浮かべた。

「ようこそ、いらっしやいました。わたくし、ギルガメシュ・ラヌ・  
ジ・バビロニア皇帝の側近をさせて頂いております、ネルガル・ク  
ターと申します。以後、お見知りおきを」

名乗り、再度会釈する。

カイはその名を聞いて、ふと何かを思い出した。

「あれ、ネルガルって賢石の名前じゃなかったっけ？」

「そだそだ、賢石だ！ なーんか聞き覚えあったんだよねっ」

カイは先の戦闘でティファに簡単に説明されたのを思い出し、シ

ルクは授業で習った事を思い出す。

対し、問われたネルガルは、嬉しそうな表情で頷き、口を開いた。

「？ネルガル？をご存知でしたか。実は、賢石という物は戦前にバビロニア皇国が発見した物なのです。故に、名前はその賢石に見合った功績・異名を持つ皇国軍騎士から付けられるのです」

「え。っつーことは、ネルガルさんは太陽なのか！？」

「若い頃は、？灼熱のネルガル？と呼ばれておりました」

「「かつこいいー！！」」

カイとシルクは歓喜の声を上げ、身を乗り出した。

二人のネルガルを見る目は輝いていた。

まるで子供のような反応に、ネルガルは微笑みながら席につく。

「今でも現役ではありませんが、何分老化が邪魔をしまして  
「ネルガル。いらん話をすんなや」

ナギの一言で、言葉はピタリと止み、ネルガルは無表情となった。  
同時に謝罪の言葉を放ち、咳払いを一つ。

「失礼致しました。では……皆様、本日はお集まり頂き、ありがとうございます。本来ならば、皇帝直々にいらっしゃるご予定でしたが、体調が芳しくないとの事で代理を立てさせて頂きました。改めて、ギルガメシュ・ラヌ・ジ・バビロニア皇帝の代理を務めさせて頂きます、ネルガル・クターと申します」

先ほどよりは浅く会釈し、上げた瞳で全員を見渡す。

最後にカイを見据え、そこで言葉を続けた。

「カイ・エディフィス様。神の力を持つ者。貴方が世界を救う為に

旅をしていると、皇帝からお聞きしました。これから貴方が、どう動くべきかも」

「え、どうして皇帝はそこまで知ってるんだ？　なんか、俺より知ってそうじゃん」

「それはわたくしにも分かりません。ただ皇帝は、今自分に出来るのは知る事と告げる事だけだ、と申しておられました」

まるで予知能力者のように。

皇帝はカイのすべき事を知り、助言する。

それは信じていいのかと、ネプチューンは内心で迷った。

ここでシヴァが居れば、的確な判断が下されていただろうかと思いい、そんな自分に苦笑する。

居ない者に助けをすがっていた事に自嘲する。

今、旅の一行で責任が大きいのは自分なのだと、そう言い聞かせて。

目立つ事は避けたいと思いつつ、口を開く。

「知る事と告げる事しかできんのなら、カイが今後、どうなるかも知ってるんかいな？」

「いえ、残念ながら。しかし、次にどう動くべきかは知らされています」

それは、

「このアツカド大陸の南部に、空中庭園と呼ばれる建造物があります。これは、古来よりバビロニア皇帝の亡骸を納める為に造られた物です。きっと、求める何かがあるでしょう」

「空中庭園って……え、もしかして浮いてるのか！？」

「いえいえ、地上に造られていますよ。ただ、そこまでの道のりは過酷故、馬車と護衛を二個小隊、用意させて頂きます」

その言葉に眉をピクリと反応させた者がいた。  
「なんやそれ、と言って意見するのはナギだ。」

「わいは聞いとらんぞ」

「今、申し上げましたので」

「屁理屈はいらんわ。この、いつアンノウンが上陸してくるかわからん状況で、兵力を割く言うんか？」

「皇帝のご命令です。こればかりは、いくら貴方に権限があろうと、そして私であっても逆らえない事なのです」

「話にならん。皇帝に会ってくるわ」

言つて、ナギは勢いよく立ち上がる。

その動作と、ネプチューンが手を翳して彼を制するのはほぼ同時だった。

ネプチューンは、宥めるように手をヒラヒラさせ、眉尻を下げる。

「落ち着きいや、ナギっち。皇帝は今、体調がよくないってんろ？」

無理させちゃ駄目ぜよ」

「やかましいわ。ネプチューンは皇国軍の現状が分かってないからそう言えるんや。二個小隊なんて、大きすぎる！」

「だったらわっちが、また作戦の立案に協力しちゃう。これでいいかいな？」

言い訳ないやろ、と途中まで言いかけたナギは、言葉を止める。

拳を力一杯握り締め、歯を食い縛って言いたい事を堪え、吹っ切れたのか勢いよく座った。

組んだ腕を、揺らす足と同調させて指で叩きながら、大きく溜息をついた。

「……せやな、皇帝の命令やからな。皇帝の、命令なんやな……。」

出発はいつや？」

「装備の準備は出来ておりますので、明日の朝一番に。なに、ほんの二時間ほどで到着しますよ」

「二時間……緊急事態でも、ギリギリ間に合うかどうかのラインかな……。まあええわ。ほな、明日の朝やな」

再確認しつつ、腰のポーチの一つからメモ帳とペンを取り出す。そして、いくつか文字をすらすらと書き、ペンを途中で止めて力イを見る。

「エディフィス、これでええな？」

「ん、おう！ オッケーだぜっ」

グツと親指を突き立て、満面の笑みを浮かべる。

それを見たナギは満足そうに頷き、ペンを少し動かしてからメモ帳を閉じ、ポーチに戻す。

次いで、吐息を一つ。

円卓に手をつき、立ち上がるうとしたその時だ。

不意に、ネプチューンがナギの肩を掴み、無理矢理座らせた。

何事かと、本人を含めた全員の視線を集める中、笑みを消したネプチューンはネルガルを見据える。

「ところで、ユウ・ウラハスの処分はどするん？」

牢屋の中は殺風景で、何もなかった。

視界に入るのは通路と牢屋を隔てる鉄柵と、後ろの上部にあると



思われる小窓から入る月光のみ。

暗すぎて何も見えない。

手足も後ろで縛られているため、動かす事は出来ない。

故に、何も出来ない。

ここに入れられる時、勢いよく投げ込まれた為、壁際に居るのだが、その際にぶつけた肘がとてつもなく痛かった。

今はそれを耐え、自分の処分が決まるのを待つばかりだ。

……どこで間違えたんだろうか。

ふとそんな事を考えてみる。

だが、考えたところで何も思いつかない。

自分がしてきた事は全て正しいと思っていたから。

いや、そう思わないと正気を保てないことばかりして来たから、そう思う癖がついたのだろう。

ジードに居た時、人をたくさん殺した。

それは仕事だったからと、割り切っていた。

グラルスでも、人をたくさん殺した。

それどころか、カイ達の味方を殺し、刃を向けてしまった。

本意ではなかったとしても、記憶として残っている。

人殺しは、罪だ。

そんな事を平然とやってのけていた上に、向こうでは幸せを手に入れていた。

これは、その罰なのだろうか。

……そういえば、リリイは元気にしているだろうか。

結局、仕事は人を殺す事だったのだと、告げる事は出来なかった。それだけじゃない。

俺の処分が、もし死刑であつたならば、リリイを一人にしま  
う。

二度と戻らない俺の帰りをずっと、待たせる事になるのか。

これもまた、罰なんだろうな。

思い、自嘲の笑みを浮かべる。

こんなものかと、呟いて。

と、その時だ。

足音がする。

石造りの通路を歩く、二人分の音。

歩幅が疎らな音の主はまっすぐに俺の牢屋の前まで近づいて止まり、しかし通路が暗いせいか誰が来ているのか把握出来ない。

暫くして、鉄柵の扉が開き、一人が中に入ってくる。

その姿を見て、俺は目を見開いた。

「お久しぶりです、ユウ」

そこには、ジードに居るはずのリリイの姿があった。

愛おしい、妻の姿が。

思わず声が漏れる。

言葉にもならないような情けない声だが、それでも発する。発し続ける。

「あ、ああ……リ、リリ……イ……」

「はい、リリイです。ジードから遙々会いに来ちゃいました」

えへへ、と可愛らしく微笑むリリイ。

その顔を見ただけで、救われた気がした。

疲労と痛みで重い身体を無理に動かし、少しでも彼女に近づこうとする。

それに気付き、リリイもこちらに寄ろうとした。

刹那。

彼女の身体が、まるで押されたかのように一瞬揺れた。

表情は固まり、見開いた目が俺を見る。

同時に、違和感があった。

胸元から、銀の刃が生えていたのだ。

その刃には赤い液体が伝い、流れ、切先から雫を零す。  
なにが起きている？

意味がわからなかった。

どうして、こうなっているのか。

だが、無意識に、身体は前に出て。

崩れるように倒れて来たリリーの身体を受け止める。

手は伸ばせない。

力が抜けた彼女の身体を抱きしめようと、手を縛っている縄を干切る為に藻掻く。

簡単に取りれるはずもないのに、分かっているのに、ひたすらもがく。

せめて、せめて、愛おしい彼女を抱きしめたいがために。

「……あう……ユ、ウ……」

今にも消えそうな声が、吐息と共に俺の耳をくすぐる。  
懐かしい声が、脳に響き、返すべき言葉を思考させる。  
肩に載った彼女の顔を見つめ、絞り出す。

「あ……ああ、お……おれだ……」

言葉は、ただ聞かれた事に対する返事。

かけようと思った言葉では無く、似合った言葉でも無く。  
けれど、リリーはその言葉に、笑みを返して来た。

「よかつ……た……。やっと……会えま、した……」

「そう……だな、会えた……会えた……！」

「ふふ……相変わらず、です、ユウは……。でも、」

なんだ？ と、相槌を打つと、悲しそうな表情になった。

眉尻を下げ、涙を溜めた瞳を瞑り、せり上がって来る血を吐きながら。

「やくそく……やぶって、き……ちゃいました……」

ただただ、申し訳なさそうに。

ごめんなさいと、もう声の出ない口で言う。

聞こえなくても、わかった。

謝罪の言葉を出す口の動きは分かりやすい。

「きにする、な……俺は怒ってないし……会えて、嬉しいぞ……？」

精一杯の笑みと共に、そんな言葉を送る。

するとリリイは、一瞬目を見開いて、満面の笑みを浮かべた。

目を弓のようにして、幸せそうに。

同時に、呼吸の音が、静かに、止まった。

「……リリイ？ ……おい、リリイ。返事してくれよ……なあ？」

完全に力が抜けたリリイの身体を、必死になって揺らす。

意味がないと知りつつも、諦めたくない一心で声をかけ、揺らす。

「なあ、目を開けてくれよ……別に、怒ってないって言ってるだろ

……？」

どれだけ声をかけても、変化はない。

もう、笑っても、怒っても、泣いてもくれない。

そう思うと胸が押しつぶされそうで、否定の意味を込めて揺らし続ける。

こんなはずないと、死ぬはずがないと、自分に言い聞かせる。

……これは、罰なんだろうか。

「往生際が悪いね、ユウは。もう死んでるっていつのに」

声がした。

それは正面、影がかかって顔が見えない位置。

そこには血のりの付いた長剣を持った、長身の青年が立っていた。

「リリイが死んじゃって悲しい？　だったらごめんね？　でも、邪魔だったんだからいいよね？」

怒りが沸いた。

だが同時に、聞き覚えのある声だなと思う。

こいつは、誰だったか。

考えれば考えるほど、怒りは増幅され、殺意を追加する。

刹那、一つの光景がフラッシュバックする。

そこには、血まみれの男がいた。

片目につけた眼帯が特徴的なそいつの背後には、一人の少年。

俺も、そいつも、よく知る存在。

血まみれの剣を持つ少年が、声を発する。

『もう、用無しなんだよ？』

その声は、今目前に居る青年と同じ声で。  
思い出す名は、憎むべき名。

「　　ッ――！」

今すぐにも殺してやりたい名を、叫ぶ。  
その声は牢屋内に響き渡った。

無力な男の、惨めな叫び声が。

## 第八十一話：騎士の意思と弟子の意思

ネプチューンの一言に、ナギは眉を顰めた。

だが、特に何も言うわけでも無く、彼の言葉に耳を傾ける。

一方で、問われたネルガルは腕を組み、顎に手を添えた。

綺麗な白髭を弄りながら、難しい表情を見せる。

「ユウ・ウラハスの処分は、残念ながら良い結果にするのは難しいと思われます。何分、こちらに多大な被害を与えられたわけですし」  
「それはわかっちゃる。百も承知つてやつぜよ。けんど、あいつはわつちらにとって、必要なやつなんよ」

「理由が私情では、敵を味方にするという判断は容認されませんよ？」

「んや？ 私情だけじゃないっちゃ。ちゃんと、味方についた時の特もあるぜよ。報復戦争時に異例の入隊があつた、シリルヴァード・ユリウス・ファリエトスのようにのう」

その言葉が放たれたのとはほぼ同時、ナギは目を見開いてネプチューンを見、ネルガルは眉をピクリとさせた。

シリルヴァード・ユリウス・ファリエトス。

報復戦争時代、テクノス王国の聖五騎士と呼ばれる、国王直属の騎士であつた女性。

しかし、戦争中期にバビロニア皇国に寝返り、戦況を変えた者。この出来事が戦争が早期終結した理由の一つであるとされている。裏切り者の女戦士。

同時に、カイとシルクの先生であり、カイの師である人。

その名が出た事に、カイとシルクは顔を見合わせ、次いでネプチューンを見た。

視線の先、ネプチューンは笑っている。

まるで現状を手中に納めた独裁者のように。

「自軍の勢力に多大な被害を与えた敵兵士である彼女を受け入れ、一個中隊を任せるまでしたらいいんね？　どうして、そこまで出来たつちゃ？　敵なのに」

「……皇帝の命令でした。当時、武器も鎧も投げ捨てて投降して来た彼女は、皇帝に会いたいと要求してきました」

己の未熟さを知ったからと、これ以上の悲劇を生みたくないとか、叫ぶようにして、シヴァは頼み込んだ。

当然、敵の言葉に耳を傾ける者など誰も居ない。

だが、

「彼女の言葉が、偶然皇帝の耳に入りました。本当に、偶然に。その翌日、皇帝は王室に彼女を呼べと、そう仰ったのです」

もちろん、多くの者がその行動を止めた。

ネルガルもその中の一人であり、相手が相手国のどういった地位に居た存在であるかを事細かく説明した。

だが、その全てが、命令だ、の一言で一蹴される。

そして、反対の声も虚しく、シヴァは到着した。

王室には、シヴァ以外にネルガルも許可された。

つまり、皇帝とネルガルとシヴァの三人だけという事だ。

もし、シヴァが初めから皇帝を殺す気であつたら、という可能性を防ぐ為に、ネルガルが無理を言っ同行したのだ。

しかし、予想外の事態は起きてしまった。

皇帝は、シヴァに剣を渡したのだ。

瞬間、彼女は剣を構え、そして自身の胸元に切先を添えたのだ。

「私は、人を殺す事になんの躊躇いもなかった。正義の為だと自分に言い聞かせて、たくさん殺して来た。だが、気付いてしまったの



だ。私のしてきた事は、理不尽に死んで行く者と、悲しみと復讐の連鎖を作っていただけだと。そして知った。私が信じていた国は、卑劣な手を使って皇帝の家族を殺したのだと。そんな国が戦争に勝つてしまえば、未来は酷いものとなってしまふ。故に私は、この戦争を終わらせたいのだ。早期終結、これを貴方が望むのなら、私は貴方の刃となり、この命を捧げよう！……そう、言っておられました」

言い終え、当時を思い出したのか、ネルガルは含み笑いをする。対し、ネプチューンは啞然として口を開け、不意に笑う。

「さっすがシヴァっち、やる事成す事が毎回すんごいなあ」  
「なんてったって、シヴァ先生だもんなっ」  
「だね」

カイとシルクも一緒になって笑う。

今や姿を見せぬ師を想い、懐かしむように。

そして、笑い疲れたネプチューンは、言葉を続けた。

「ユウ・ウラハスは、そんなシヴァっちが認めた男ぜよ。實力は十分だっちゃ。後は」

「後は皇帝からの信頼、というわけですか。ですが、ご存知の通り皇帝は今、体調が芳しくないもので、お会いする事は出来ません」

「そこをなんとか！ わっちの顔に免じて！」

「あんだ、免じる顔がどこにあんの」

「失礼します！！」

クレアの突っ込みを遮ったのは、扉を開ける音と兵士の声だった。息を切らして入ってきた彼は、ネルガルの下へと早足で行き、耳打ちする。

皆の視線を集める中、ネルガルは報告を聞いて数回頷き、最後にわかりましたと言って、兵士を下がらせた。

そして、視線をネプチューンに移し、無表情で報告内容を告げた。

「ユウ・ウラハスが、牢屋内にて皆様と同行していたリリイ・ウラハスを殺害したそうです」

「「リリイさん!?!」」

報告に声を上げて反応したのは、カイとシルクだ。

正しくは全員が反応していたが、ネプチューンとクレアは目を見開き、ナギは片手で頭を掴んで溜息をつき、メルディは口を両手で塞いで絶句している。

予想だにしない出来事だった。

「ユウ・ウラハスは先の戦闘で所持していた長剣を使い、リリイ様の心臓を一突き。手足は縛ってあったはずなので、第三者の手助けもしくは介入も考えられますが、ユウ・ウラハス自身が血まみれの長剣を持っていたが為に、彼が犯人と確定されました」

また、

「それを見つけたのが、処罰に関する権限のある皇国軍上層部の者でして、自身の妻を殺したという事に大変お怒りのようです。よって即刻、郊外にて処刑が行われるそうです」

刹那、カイとシルクが立ち上がって、走り出した。

そして、制止の言葉に聞く耳を持たず、部屋を後にする。

残った者達は暫く沈黙し、場の空気は凍りつく。

そんな状況で言葉を放ったのは、灼熱の男だった。

「では、ネプチューン様。申し訳ありませんが、ユウ・ウラハスを

受け入れる件は却下という事でよろしいですか？」

「ん、ああ……しょうがないぜよ」

いつも通りヘラヘラと放つその言葉に、クレアは素早く反応した。何を言っているの、とでも言いたげな表情をネプチューンに向けるが、彼女は見た。

彼が、ネルガルに見えない位置に回した手に拳を作っているところ。

そして、その拳が握る指の爪が、手の平に痛々しく食い込んでいくところを。

爪先が入り込む皮膚は赤くなり、次の瞬間には血が、少し垂れた。クレアにとってはそれが、初めて見るネプチューンの悔しがる姿であり、また自分の望みが無残にも叶わなくなった瞬間だった。

一方で、ナギは舌打ちをし、メルデイにアイコンタクトを送る。すると彼女は、返答として頷きを返し、立ち上がって扉へと向かう。

開け放つと同時に、ナギは立ち上がってネルガルを見る。

「ほな、わいはここで退出するわ。二個中隊の選抜もせなあかんしな」

嫌味混じりに言い、メルデイが開けた扉へと向かった。

その途中、不意にナギは歩みを止め、振り向く。

視線は、ネプチューンに向けられる。

「せや、エディフィスが戻って来たら、伝えてやってくれや。裏切るつもりはなかった。これまでも、これから。だが、クレアの件を隠していたのはすまなかった、となあ」

確かに伝えたぞ。

そう言つて、ナギは部屋を出て行く。  
同時に扉は閉まり、残つた者達は視線を交わす。  
今は、それくらいしか彼らには出来なかった。

疑いを持ち始めたのは、いつ頃からだっただろう。  
客船内でフェンリルの会話を聞いた時から？  
合流した時、クレアと同行していたから？  
ティファという存在が、自分の中に居る事を隠していたから？  
小さな、しかし多くの疑いは、敵として現れた時に一つとなり、  
確信となつた。

躊躇無くレジスタンス兵を殺し、自分達に刃を向けた。

だが、それでも。

彼は、カイは僅かながらに信じようとしていた。

だから、ナギに伝言を頼んだのだ。

……答えはまだ聞いてないけど。

今は、それよりも重要な事がある。

「ちょ、ちよつと待つてよカイ！ は、速すぎ……！」

カイの後ろを行くシルクは、呼吸を荒くしつつも必死に走る。

時折、転びそうになりつつも、真実を知りたい一心でついて行く。

彼らはユウがどこに居るのかを知らない。

それでも走り続けるのは、いわゆる直感だ。

また、彼らは既に外に出ており、城に沿って石畳の道を進んで行く。  
く。

人気は全く無く、城と城壁に囲まれた景色が続く。  
暫く走り続け、カイの呼吸も乱れ始めた頃。

不意に景色が開け、そこには重鎧姿の兵士数十名の群が円を形作っていた。

まるで中心に居る誰かを隠すように。

カイはその群に駆け寄り、兵士を押し退けようとする。

「あ、こらお前、近寄るな！」

カイの接近に気付いた兵士達は彼を止めようとするが、それを避けて突っ込んで行く。

そして、彼は見た。

中央に両腕と一緒に身体中に魔法陣が絡み付き、まるで簀巻きのようになっているユウの姿が。

唯一、魔法陣が付いていないのは首から上と、腰から下だ。

目は虚ろで、歩調はフラつき、兵士に引かれてようやく歩けている、そんな感じだ。

完全に放心状態となっている。

「お、おい……ユ」

「邪魔だ、離れろ！」

言われたのと同じ時、カイは吹き飛ばされ、石畳に尻餅をつく。

だが、すぐに立ち上がり、もう一度割り込もうとした。

しかし、それをシルクが後ろから抱きつく形で止めようとする。

「駄目だよカイ！ そんな無茶しちゃいけないって！」

「ユウ！ ということなんだよ！？ なんで、なんでリリイさんを殺したんだ！」

必死に止め、説得するシルクなどお構い無しに、カイは彼女から離れようともがき、ユウの下へと向かおうとする。

片手を目一杯伸ばして彼を制止させるように。

大声を張り上げ、返ってくるはずの無い返事を求めて。

疑いなんて感情は、どうでもよくなっていた。

ただただ、真実が知りたいが為に、返事を求める。

そんな彼の願いと裏腹に、ユウを連れた兵士の群は遠ざかって行き、距離はどんどん空いて行く。

だが、それでもなお、カイはもがき、求め、叫ぶ。

しかし、兵士の群が見えなくなった頃、とうとう動きを止めた。

シルクはそれに気付き、腕を離すと、カイは膝から崩れ落ち、俯いてうな垂れる。

……なにも出来なかった。

そう、内心で嘆くように呟く。

彼が見た光景は、予想外だった。

いつもどこか余裕で、なにを考えているのか分からないユウ。

そして自分達を、理由はどうであれ裏切る形を取った彼が、放心状態になっていたからだ。

今までの彼を見ていて、想像も出来ない姿だ。

それほどまでに、リリーの死は彼に影響を与えたのだ。

「……っ！ だったら……！」

歯を噛み締め、吐き出したい言葉を堪える。

…… だったら、どうして殺したりなんかしたんだよ……！

自分は現場には居なかった。

故に、どうしてそうだったのかは分からない。

もしかしたら、他に誰か居たのかもしれない。

だが、現状での報告は、ユウが殺したという事。

これらを理解している上で、カイはユウに対して、敵意よりも疑いの意思の方が大きく膨れ上がった。

と、その時だ。

嘆き、震える彼の身体を、シルクが今度は正面から優しく抱きしめた。

額を胸元に押し付けさせ、頭を優しく撫でる。

まるで赤子をあやす母親のように、弟をなだめる姉のように。

カイはその行動に、なにが起きたのか理解が追いつかなかった。

だが彼女が、大丈夫だよ、と耳元で囁くと、彼は抑えていた感情を一気に爆発させた。

泣く。

シルクの体温を額で感じ取りながら、彼女の肩をしっかりと両手で掴みながら言葉にならない声を上げ、肩を震わせしゃくりあげる。彼は並の兵士よりも強い。

この旅で本格的な実戦は初であつたものの、十分な戦果を上げている。

しかし、彼はまだ十七歳の少年なのだ。

街や村では、普通に学校に通う少年少女達となんら変わらないのである。

それはシルクも同じであるが、戦闘による人への殺傷、仲間を疑い続けていた事に対する不安感と罪悪感、仲間の裏切り、仲間の死、世界を任される責任感。

これらがゆつくりと、だが確実に彼の心に重く押し掛かる。

そして、今。

全ての感情や思いが一気に落下し、彼の心を押し潰す。

それは涙と叫びに変換され、止まる事無く吐き出される。

シルクはそれを、全て受け止める。

拒否する事無く、嫌悪する事無く、彼が落ち着くまですっと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2520e/>

---

フラグメント・オブ・タイム

2011年11月24日13時46分発行